
特殊詐欺被害防止対策に関する 調査分析報告書

平成30年3月

警視庁

目次

1. 調査の目的	1
2. 調査の概要	2
2-1. 調査の全体設計	2
2-2. 高齢者層向け調査	3
2-3. 高齢者ジュニア層向け調査	5
2-4. 調査結果数値の前提について	6
2-5. 報告書内の項目定義について	7
2-6. 集計方法について	8
3. 高齢者層向け調査結果の概要	10
3-1. 高齢者の詐欺に対する意識	10
3-2. 高齢者の詐欺被害防止対策の認知・実施状況	17
3-3. 高齢者世帯の通信環境	21
3-4. 詐欺の遭遇実態	23
3-5. 高齢者層の意識・行動に対する高齢者ジュニア層の影響	45
3-6. 被害者・回避者・未経験者の差異分析	51
3-7. インターネットの利用頻度の違いによる差異分析	80
3-8. 高齢者向け調査結果のまとめ	94
4. 高齢者ジュニア層向け調査結果の概要	103
4-1. ジュニア層の詐欺に対する意識	103
4-2. ジュニア層の被害防止対策の認知・関与状況	109
4-3. 民間企業のサービスに対する意識	121
4-4. 対策行動実施者・未実施者の差異分析	123
4-5. 高齢者ジュニア層向け調査結果のまとめ	134

1. 調査の目的

2017 年の特殊詐欺被害状況は、前年と比較し、被害発生件数・被害額ともに増加し危機的状況にある。犯行グループのだましの手口は、年々多様化・巧妙化し被害の更なる増加が懸念されることから、正に都民の心に届く効果的な防犯対策を講ずることが喫緊の課題である。

そこで、本業務では、特殊詐欺の被害者・被害回避者に加え、無差別に抽出したサンプル対象者に対する危機回避に関する意識調査を実施し、被害者等の行動・心理状態を多角的見地からクロス分析を行い、被害に遭いやすい特徴又は被害に遭いにくい特徴等を明らかにし、広く都民に対する効果的な防犯対策を講じ特殊詐欺の根絶を図ることを目的として、調査及び分析を実施した。

2. 調査の概要

2-1. 調査の全体設計

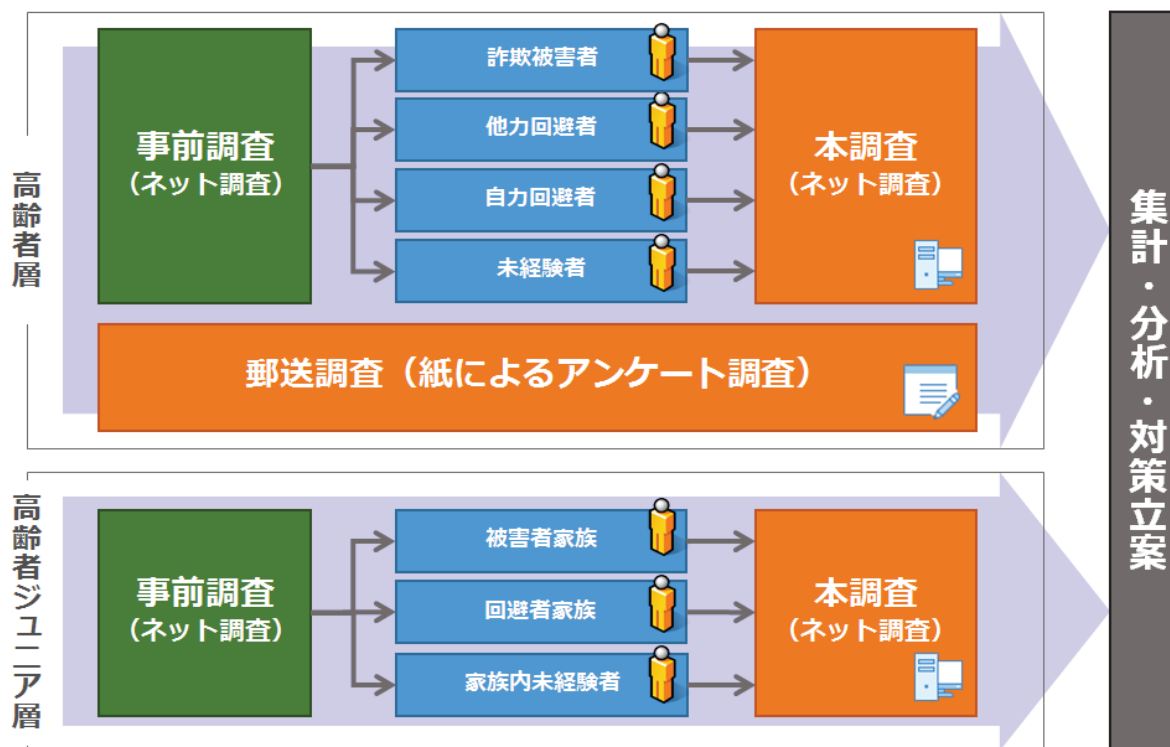
今回の調査分析では、特殊詐欺の主なターゲットとされる高齢者を対象として、実際に詐欺に遭遇した経験を問うことで詐欺の被害者・回避者・未経験者に分類し、詐欺に対するそれぞれの意識や行動を調査している。

調査手法はインターネット調査を採用しているが、高齢者のなかには普段インターネットをあまり利用していない層も存在していることから、これらの「インターネット低利用者」に対しても別に郵送調査を実施することで、特殊詐欺に対する一般高齢者との意識や実態の差異を比較・分析している。

また、高齢者の子供世代である高齢者ジュニア層は、親である高齢者に対して詐欺被害回避の有効な抑止力として考えられるため、この高齢者ジュニア層に対しても特殊詐欺に対する意識や行動実態について調査した。

このように今回の調査分析は合計で3種類の調査を実施しており、これらの調査結果をもとに集計・分析を行った結果を本報告書にまとめている。

図1 調査の全体設計



2-2. 高齢者層向け調査

高齢者層向け調査は、インターネット調査と郵送調査の2種類の調査を実施した。それぞれの調査仕様と調査サンプルの内訳については、以下の通りである。

(1) インターネット調査

インターネット調査は事前調査と本調査の二段階で実施した。

事前調査では、東京都の60歳以上の男女に対し、詐欺経験の有無を聴取した。そこで、詐欺経験者と未経験者の回答サンプルを抽出し、それらのサンプルに対して本調査を行った。また、詐欺経験者（詐欺被害者、他力回避者、自力回避者）の実態を把握する目的のため、詐欺経験者の割合が多くなるように回収をコントロールしている。

表1 高齢者層向け調査(インターネット)の調査仕様

調査対象地域	東京都
調査対象者	60歳以上の男女
対象者抽出方法	株式会社マクロミル保有のインターネットリサーチモニターより抽出
調査期間	【事前調査】2017年12月4日(月)～2017年12月18日(月) 【本調査】2017年12月12日(火)～2017年12月18日(月)
調査方法	インターネット調査
調査実施機関	株式会社マクロミル
回収数	1,011サンプル

表2 高齢者層向け調査(インターネット)の性別・年齢別回収内訳

	男性	女性	合計
60歳～64歳	157	122	279
65歳～69歳	162	102	264
70歳～74歳	123	120	243
75歳～79歳	86	71	157
80歳～84歳	31	26	57
85歳～89歳	9	2	11
合計	568	443	1,011

表3 高齢者層向け調査(インターネット)の詐欺経験別回収内訳

詐欺被害者	73
他力回避者	112
自力回避者	152
未経験者	674
合計	1,011

(2) 郵送調査

郵送調査もインターネット調査と同様に、東京都の60歳以上の男女に対して実施した。なお、郵送調査では事前調査は実施せず、郵送調査モニターから抽出した対象者に対して1回形式で調査を実施しているため、詐欺経験者の割合のコントロールは実施していない。

また、紙の調査票に回答を記入する方式のため、一部設問に対して無回答や回答矛盾が発生するが、無回答の割合が多い回答や明らかな回答矛盾のある回答については無効回答として分析対象から除外している。

表4 高齢者層向け調査(郵送)の調査仕様

調査対象地域	東京都(離島除く)
調査対象者	60歳以上の男女
対象者抽出方法	株式会社インテージ保有の郵送調査モニターより抽出
調査期間	2017年12月11日(月)～2018年1月5日(金)
調査方法	紙アンケートを使用した郵送調査
調査実施機関	株式会社インテージ
回収数	698サンプル(うち有効回答588サンプル)

表5 高齢者層向け調査(郵送)の性別・年齢別回収内訳

	男性	女性	合計
65歳～69歳	125	114	239
70歳～74歳	76	110	186
75歳～79歳	39	124	163
合計	240	348	588

表6 高齢者層向け調査(郵送)の回収内訳

詐欺被害者	13
他力回避者	58
自力回避者	165
未経験者	337
回答拒否	4
無回答	11
合計	588

2-3. 高齢者ジュニア層向け調査

高齢者ジュニア層向け調査はインターネット調査のみとして、事前調査と本調査の二段階で実施した。

事前調査では、自身の親が現在都内在住であるか、また親の詐欺経験を聴取した。そこで、詐欺経験者家族と家族内未経験者の回答サンプルを抽出し、それらのサンプルに対して本調査を行った。こちらも高齢者層向けインターネット調査と同様に、詐欺経験者家族の割合が多くなるように回収をコントロールしている。

表7 高齢者ジュニア層向け調査の詐欺経験別回収内訳

調査対象地域	東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県
調査対象者	30歳～59歳の男女
対象者条件	東京都在住の高齢者(60歳以上)の実子であること
対象者抽出方法	株式会社マクロミル保有のインターネットリサーチモニターにより抽出
調査期間	【事前調査】2017年12月18日(月)～2017年12月24日(日) 【本調査】2017年12月22日(金)～2017年12月26日(火)
調査方法	インターネット調査
調査実施機関	株式会社マクロミル
回収数	518サンプル

表8 高齢者ジュニア層向け調査の性別・年齢別回収内訳(有効回答のみ)

	男性	女性	合計
30歳～34歳	27	25	52
35歳～39歳	43	37	80
40歳～44歳	43	43	86
45歳～49歳	61	43	104
50歳～54歳	57	54	111
55歳～59歳	54	31	85
合計	285	233	518

表9 高齢者ジュニア層向け調査の詐欺経験別回収内訳(有効回答のみ)

被害者家族	83
回避者家族	154
家族内未経験者	281
合計	518

2-4. 調査結果数値の前提について

本報告書内に記載している数値は以下の前提に基づいている。

(1) 回答サンプル数(n数)について

n数は質問に対する回答者数を示しており、質問ごとのn数はそれぞれのグラフ、数表に記載している。

(2) 回答形式について

各グラフ、数表の見出しに記載している単一回答、複数回答はアンケートにおける回答形式を示す。

- ・単一回答:回答選択は1つのみの質問
- ・複数回答:2つ以上の回答が可能な質問

(3) 回答対象について

質問によっては、回答者を限定している場合がある。(例:詐欺遭遇時の状況については、詐欺経験者のみ聴取。)その場合、各グラフ、数表の見出しに回答対象者を記載している。特に記載がない場合は全員回答である。

(4) 回答率(%)の誤差について

回答率(%)は小数点第2位を四捨五入した数値を掲載している。そのため、単一回答における各回答率の合計が100%に一致しないことがある。

2-5. 報告書内の項目定義について

本報告書内に使用している項目定義は以下の通りである。

(1) 詐欺経験の定義について

詐欺被害者、他力回避者などの詐欺経験区分の定義は以下の通りである。

表10 詐欺経験区分の定義

高齢者層向け調査

詐欺経験者	詐欺被害者	過去に、「電話による詐欺」に遭遇し、金品を失うなどの実害があった人
	他力回避者	過去に、「電話による詐欺」に遭遇したが、 自分以外の誰かが 詐欺と気づき被害を未然に防ぐことができた人
	自力回避者	過去に、「電話による詐欺」に遭遇したが、 自分自身で 詐欺と気づき被害を未然に防ぐことができた人
未経験者	未経験者	過去に一度も、「電話による詐欺」に遭遇したことがない人

高齢者ジュニア層向け調査

詐欺経験者家族	被害者家族	自身の両親（父親または母親）が過去に、「電話による詐欺」に遭遇し、金品を失うなどの実害があった人
	回避者家族	自身の両親（父親または母親）が過去に、「電話による詐欺」に遭遇したが、被害を未然に防ぐことができた人
家族内未経験者	家族内未経験者	自身の両親（父親・母親共）が過去に一度も、「電話による詐欺」に遭遇したことがない人

(2) 地域区分について

使用している地域区分の定義は以下の通りである。

表11 地域区分の定義

北海道	北海道
東北	青森県, 岩手県, 宮城県, 秋田県, 山形県, 福島県
関東	茨城県, 栃木県, 群馬県, 埼玉県, 千葉県, 東京都, 神奈川県
中部	新潟県, 富山県, 石川県, 福井県, 山梨県, 長野県, 岐阜県, 静岡県, 愛知県, 三重県
関西	滋賀県, 京都府, 大阪府, 兵庫県, 奈良県, 和歌山県
中国	鳥取県, 島根県, 岡山県, 広島県, 山口県
四国	徳島県, 香川県, 愛媛県, 高知県
九州	福岡県, 佐賀県, 長崎県, 熊本県, 大分県, 宮崎県, 鹿児島県
沖縄県	沖縄県

2-6. 集計方法について

回答データの集計においては、実際の母集団の性別・年代別の人口や詐欺経験者・未経験者の構成比にできるだけ合うよう、基本的にウェイトバック集計を実施している。

また、性別、年齢別、詐欺経験別などの分析軸によるクロス集計を行い、それぞれの特徴や差異を分析している。

(1) ウェイトバック集計(WB集計)について

ウェイトバック集計(WB集計)とは、回収された標本(サンプル)を母集団の構成にあわせて集計する方法で、母集団と回収サンプル内訳の構成比が異なる場合に、その違いを補正し母集団構成比を復元する場合などに使用する。

今回の高齢者層向け調査においては、母集団は東京都の高齢者(60歳以上)である。その母集団の性及び年齢構成比と詐欺経験有無の構成比は、アンケート回収したサンプル内訳の構成比と異なっている。そのため、その構成比を近づけて分析をする必要がある場合に、この集計方法を用いる。

なお、一部のデータ集計において、WB集計をしないほうが適切な分析ができると考えられる場合はWBをせずに集計を行う場合がある。そのため、WB集計を行っている質問については各グラフ、数表の見出しに「WBあり」と記載している。

(2) 調査別のウェイトバック集計(WB集計)仕様について

ウェイトバック集計(WB集計)は、「人口分布割合によるWB」と「詐欺経験割合によるWB」の二種類を実施した。「人口分布割合によるWB」は、アンケート回収サンプルの性年齢別構成比を実際の人口分布に合わせて補正する方法である。また、「詐欺経験割合によるWB」では、詐欺経験区分の全体に対する割合をより実態に近づけている。

以下の表では、先の二種類のWB集計について、調査ごとにその実施の有無を記した。郵送調査については事前調査がなく詐欺経験割合によるWBの必要がないため、人口分布割合によるWBのみを行っている。また、高齢者ジュニア層向け調査のネット調査については、人口分布の指標が存在しないため(一都三県に在住かつ現在親が都内在住であるという条件の人口分布情報が公表されていない)、詐欺経験割合によるWBのみを行った。

表12 調査別のWB集計の仕様

対象調査		人口分布割合によるWB	詐欺経験割合によるWB
高齢者層	郵送調査	○	-
	ネット調査	○	○
高齢者ジュニア層	ネット調査	-	○

(3) ウェイトバック値(WB値)の算出について

ウェイトバック集計にはウェイトバックの重みづけのもとになる補正值(WB値)を使用するが、その算出にはそれぞれ以下の数値を使用した。

①人口分布によるWB

- ・住民基本台帳による東京都の世帯と人口(町丁別・年齢別)
／平成 29 年 1 月(第7表 年齢(5歳階級)、日本人、男女別人口、総数)(総務省統計局)

②詐欺経験割合によるWB

- ・高齢者層調査(インターネット調査)
今回の事前調査にて算出した詐欺経験別の出現率
- ・高齢者ジュニア層調査(ネット調査)
今回の事前調査にて算出した親の詐欺経験別の出現率

(4) クロス集計分析について

クロス集計分析とは、クロス集計による分析を指す。

通常、アンケート調査の集計は単純集計とクロス集計の2つの集計方法を行うが、単純集計はアンケート全体の回答を指しているため、例えば男女別の傾向の違いなどを読み取ることができない。これに対してクロス集計では、男女別や年齢別などの分析軸を設定し、それらの軸ごとに集計することで、分析軸での各層の数値傾向の違いを分析することを可能とする。

本業務では、性別、年齢別に加えて同居家族構成や詐欺経験の有無、また高齢者ジュニア層においてはさらに親との同居有無、対策行動実施の有無などさまざまな分析軸でクロス集計を行い、層別の回答傾向の違いを把握することで、今後の対策検討につなげるための分析を実施した。

3. 高齢者層向け調査結果の概要

3-1. 高齢者の詐欺に対する意識

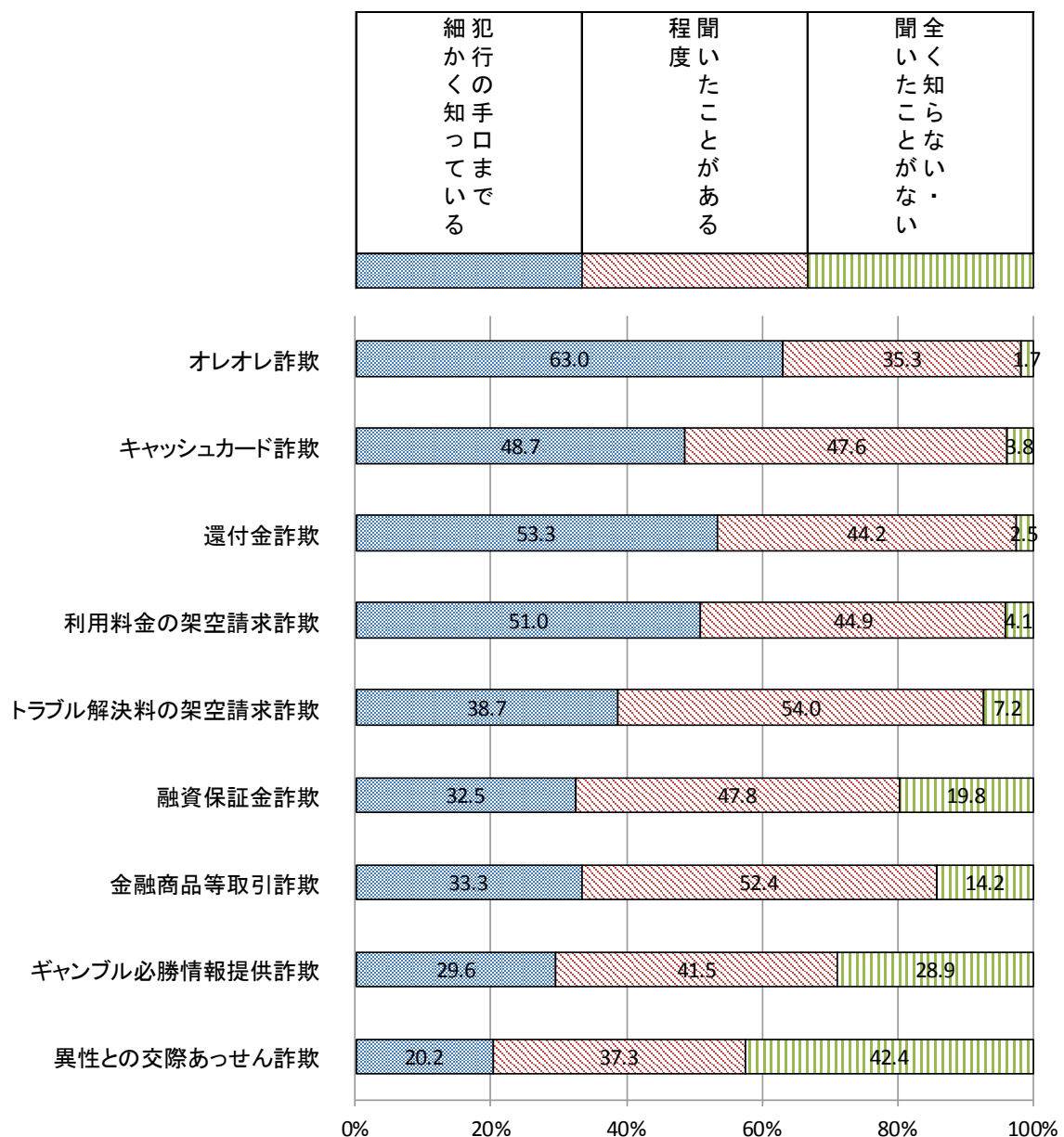
(1) 詐欺の手口別の認知状況

電話による詐欺の手口類型別での認知度について、「聞いたことがある程度」までを含めた詐欺名称認知率は「オレオレ詐欺」98.3%、「キャッシュカード詐欺」96.3%、「還付金詐欺」97.5%に達している。

しかし「犯行の手口まで細かく知っている」と回答した詳細認知率については、最も認知率の高い「オレオレ詐欺」でも 63.0%、「還付金詐欺」が 53.3%、「利用料金の架空請求詐欺」が 51.0%であり、「キャッシュカード詐欺」は 48.7%と過半数を割っている。

図2 詐欺の手口別認知状況(単一回答、WBあり)

(n=1,011)



※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

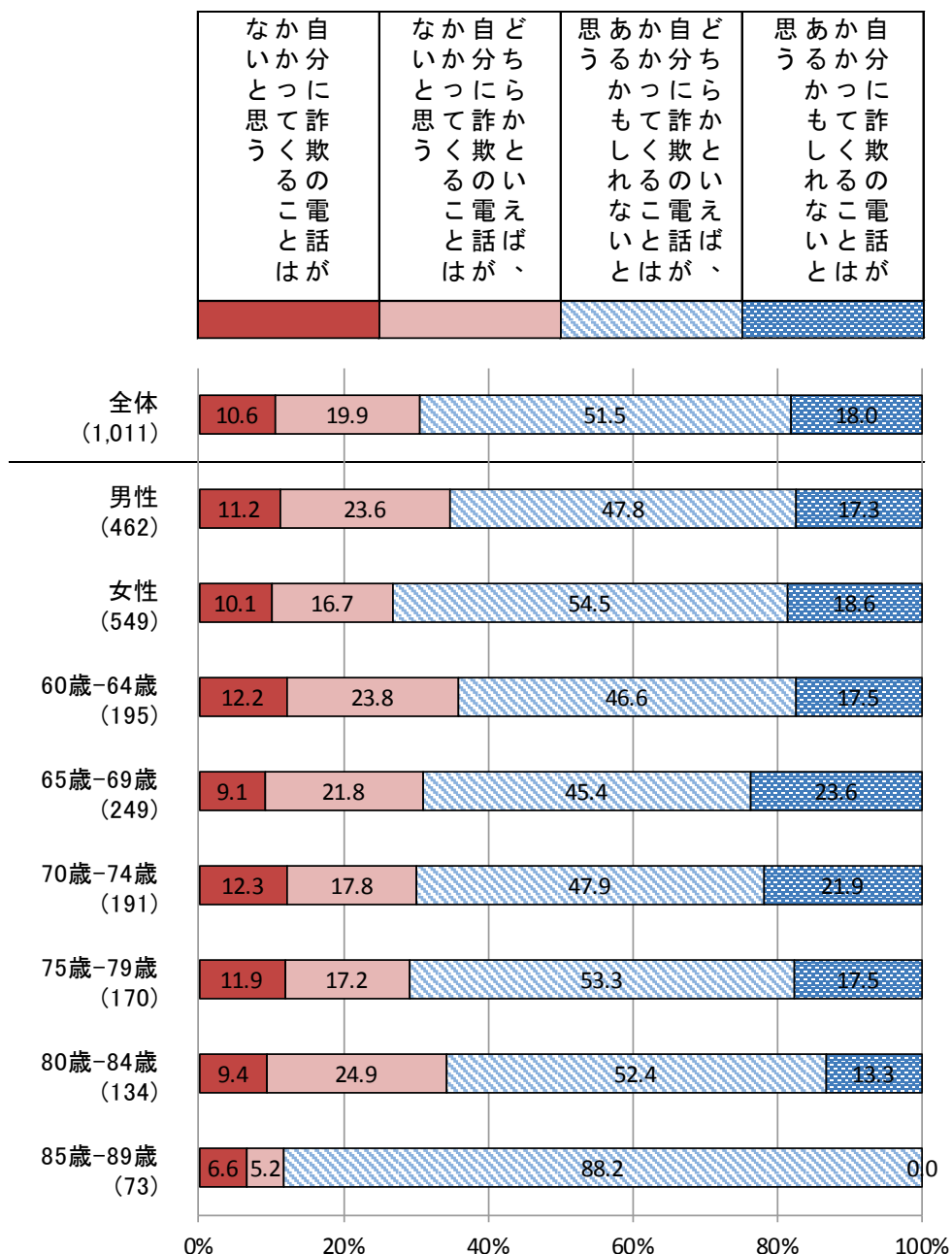
(2) 詐欺接触の可能性についての意識

自分に詐欺の接触があると思うかという意識について、「詐欺の電話がかかってくることはないと思う」「どちらかといえば詐欺の電話がかかってくることはないと思う」と答えた割合は合わせて 30.5%と、自分に詐欺の電話がかかってくることはないだろうと考えている高齢者は約3割という結果だった。

男女別で見ると、「どちらかといえば」まで含めた「詐欺の電話がかかってくることはないと思う」の合計は男性が女性に比べて高く、年齢別では 60 歳～64 歳が最も高くなっている。

図3 詐欺接触の可能性についての意識(単一回答、WBあり)

(n=1,011)



※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の意識について聴取している。

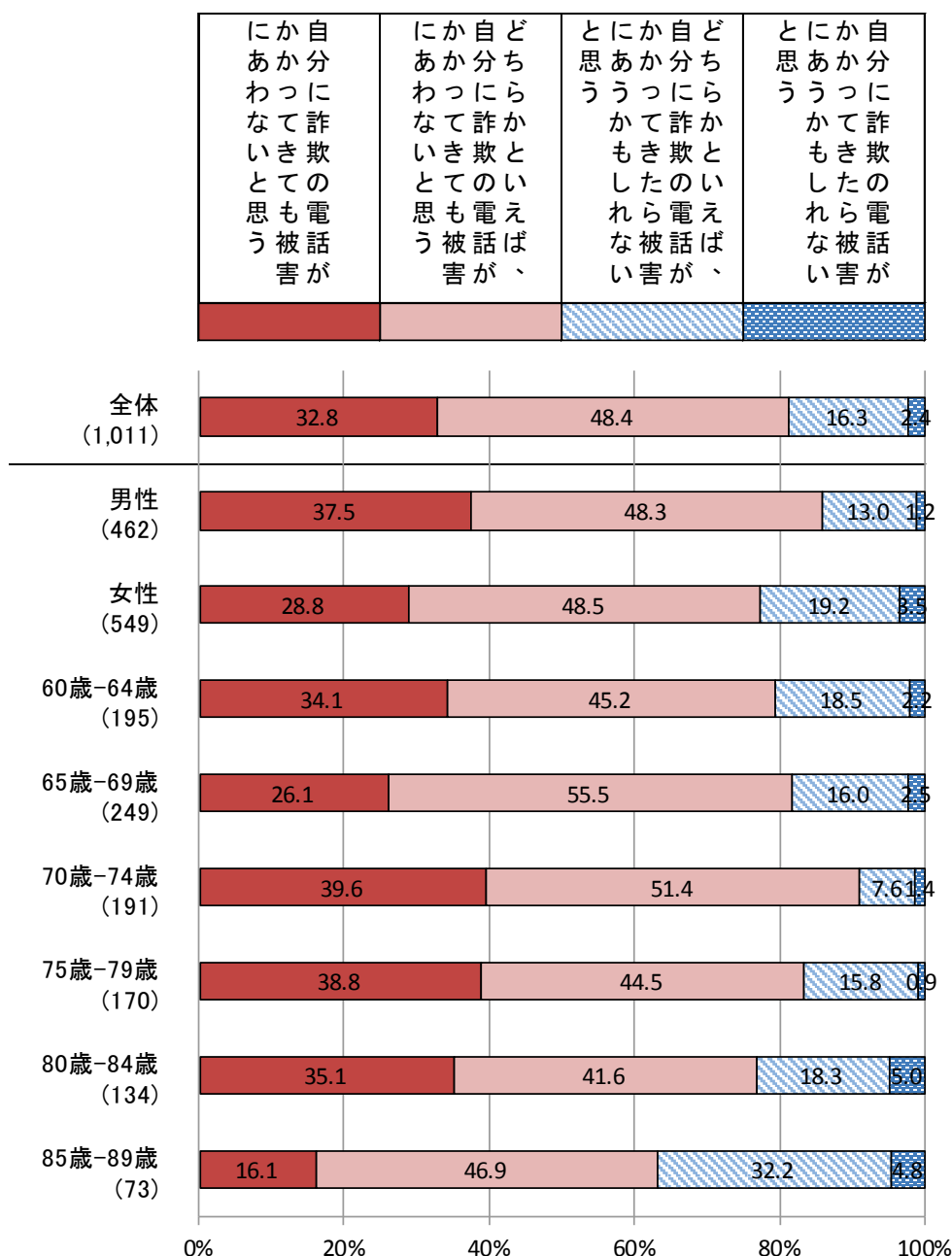
(3) 詐欺被害の可能性についての意識

詐欺の電話があった場合に被害にあう可能性があると思うかについて、全体では「詐欺の電話がかかってきて被害にあわないと思う」「どちらかといえば詐欺の電話がかかってきて被害にあわないと思う」と答えた割合が合わせて81.2%と、詐欺の電話がかかってきて被害にあわないだろうと考えている高齢者は約8割という結果だった。

男女別で見ると、「どちらかといえば」まで含めた「詐欺の電話がかかってきて被害にあわないと思う」の合計は男性85.8%、女性77.3%と男性の方が高い。また年齢別では、70～74歳までは年齢が高くなるほどこの割合が上がっているが、逆に75歳以上は割合が下がっていく傾向にあり、70代後半以上の年代にさしかかってくるに従い「自分はだまされてしまうかもしれない」という自覚が増してくることがうかがわれる。

図4 詐欺被害の可能性についての意識(単一回答、WBあり)

(n=1,011)



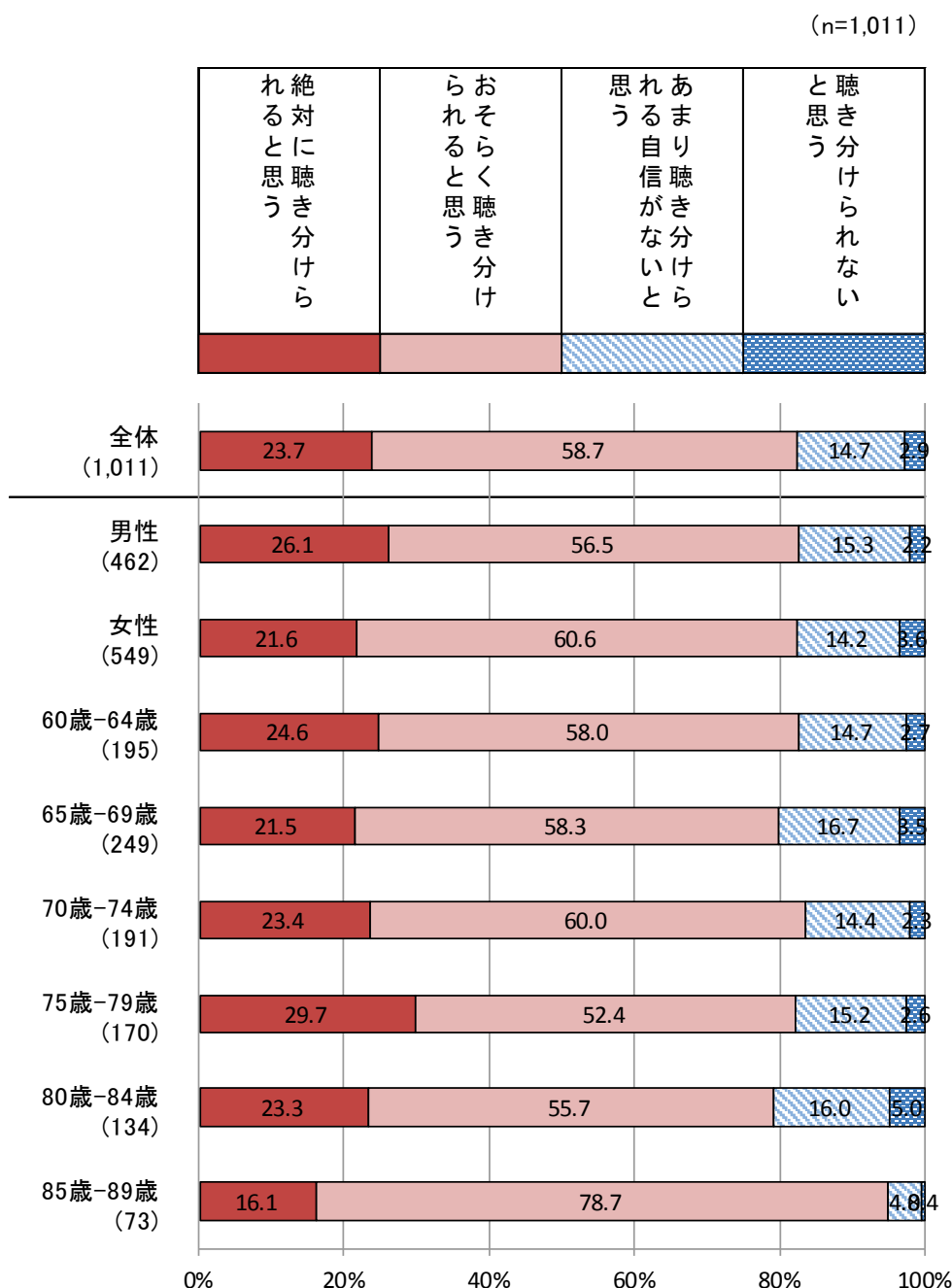
※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の意識について聴取している。

(4) 電話の声で本人を聞き分けられると思うか

詐欺の電話で相手が自分の子供や孫など家族・親族を名乗った場合、電話の声でそれが本人かどうか聞き分けられると思うかについて、「絶対に聞き分けられると思う」「おそらく聞き分けられると思う」と答えた割合は全体で82.4%と8割を超えている。

男女別では大きな差はみられないが、年齢別では85～89歳の層で「聞き分けられる」の割合が94.8%と特に高くなっている。

図5 電話の声で本人を聞き分けられると思うか(単一回答、WBあり)



※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の意識について聴取している。

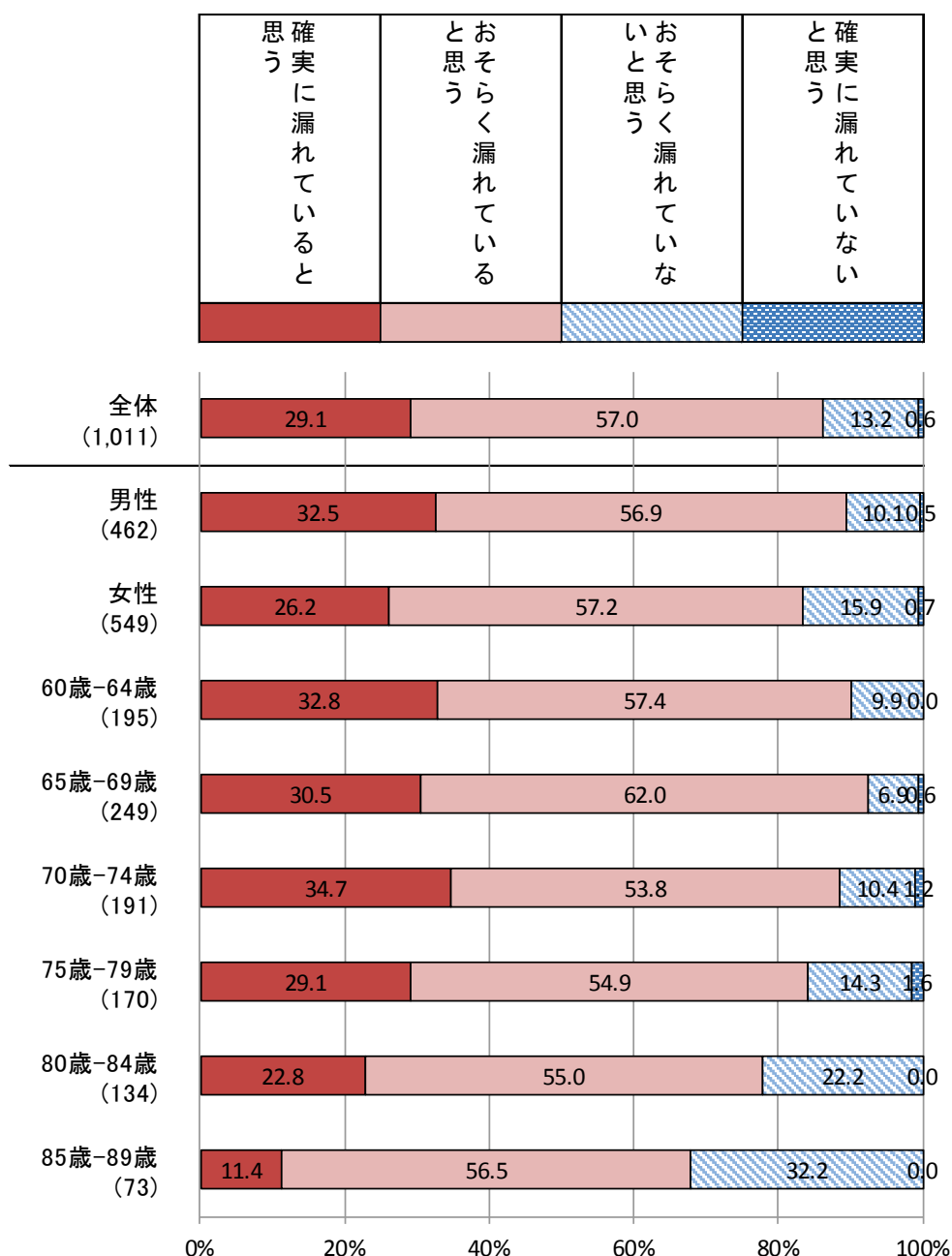
(5) 自分の個人情報が漏れている可能性に対する意識

自分の個人情報が漏れていると思うかについて、「確実に漏れていると思う」「おそらく漏れていると思う」と答えた割合の合計は全体で 86.1%と9割近くに達している。

男女別で見ると男性 89.4%、女性 83.4%と男性の方が高い。年齢別では 65 歳～69 歳が 92.5%と最も高く、それ以降年齢が高くなるにつれて割合が下がり、85 歳～89 歳では 67.9%と最も低い数値になっている。

図6 自分の個人情報が漏れている可能性に対する意識(単一回答、WBあり)

(n=1,011)



(6) 詐欺の情報受容手段

詐欺の情報受容手段について、全体では「テレビ」が 95.6%と最も高く、次いで「新聞」(56.5%)、「警察からの情報」(44.0%)となっている。

男女別で見ると、男性は「新聞」「インターネット」などが女性に比べて高く、女性は「友人・知人との話題」、「子供との話題」などが男性に比べて高い数値になっている。

年齢別では、年齢が高いほど「新聞」の割合が高くなる傾向が見られる。

図7 詐欺の情報受容手段(複数回答、WBあり)

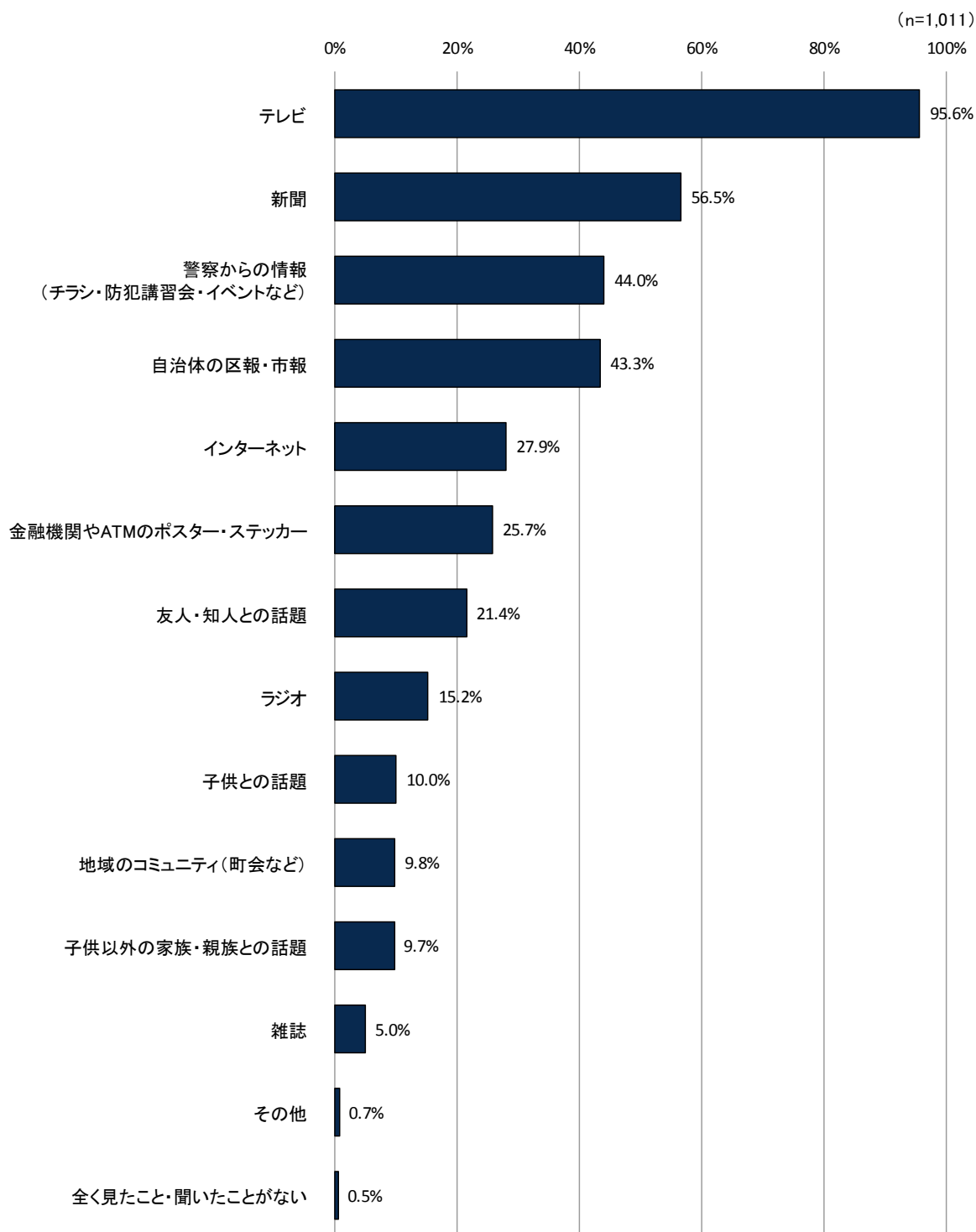


表13 詐欺の情報受容手段(複数回答、WBあり)

	テレビ	新聞	警察からの情報 (チラシ・防犯講習会・イベントなど)	自治体の区報・市報	インターネット	金融機関やATMの ポスター・ステッカー	友人・知人との話題	ラジオ	子供との話題	地域のコミュニティ (町会など)	子供以外の家族・親族との話題	雑誌	その他	全く見たこと・聞いたことがない
[比率の差] n=30以上の場合 全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント														
全体 (1,011)	95.6	56.5	44.0	43.3	27.9	25.7	21.4	15.2	10.0	9.8	9.7	5.0	0.7	0.5
男性 (462)	97.1	62.9	45.8	42.5	34.0	24.5	9.3	15.1	5.5	10.7	6.8	6.4	0.6	0.3
女性 (549)	94.3	51.1	42.5	44.0	22.8	26.7	31.6	15.3	13.7	9.0	12.0	3.8	0.8	0.6
60歳-64歳 (195)	94.4	43.1	25.2	31.0	30.7	26.4	14.3	11.5	3.8	6.8	7.4	3.9	1.1	1.7
65歳-69歳 (249)	94.9	49.6	44.8	42.8	27.0	27.1	21.0	9.1	9.9	7.1	12.1	6.2	0.5	0.0
70歳-74歳 (191)	96.6	57.6	50.4	52.3	32.4	29.6	27.0	14.7	14.4	10.7	15.0	5.7	0.0	0.0
75歳-79歳 (170)	93.8	58.3	52.6	49.9	30.6	26.0	27.7	17.9	12.4	9.9	9.0	5.0	0.2	0.9
80歳-84歳 (134)	96.8	63.9	62.3	59.2	28.7	27.4	25.6	35.0	12.5	20.5	7.0	6.2	2.5	0.0
85歳-89歳 (73)	100.0	94.8	20.9	10.0	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	0.0	0.0	0.0	0.0

3-2. 高齢者の詐欺被害防止対策の認知・実施状況

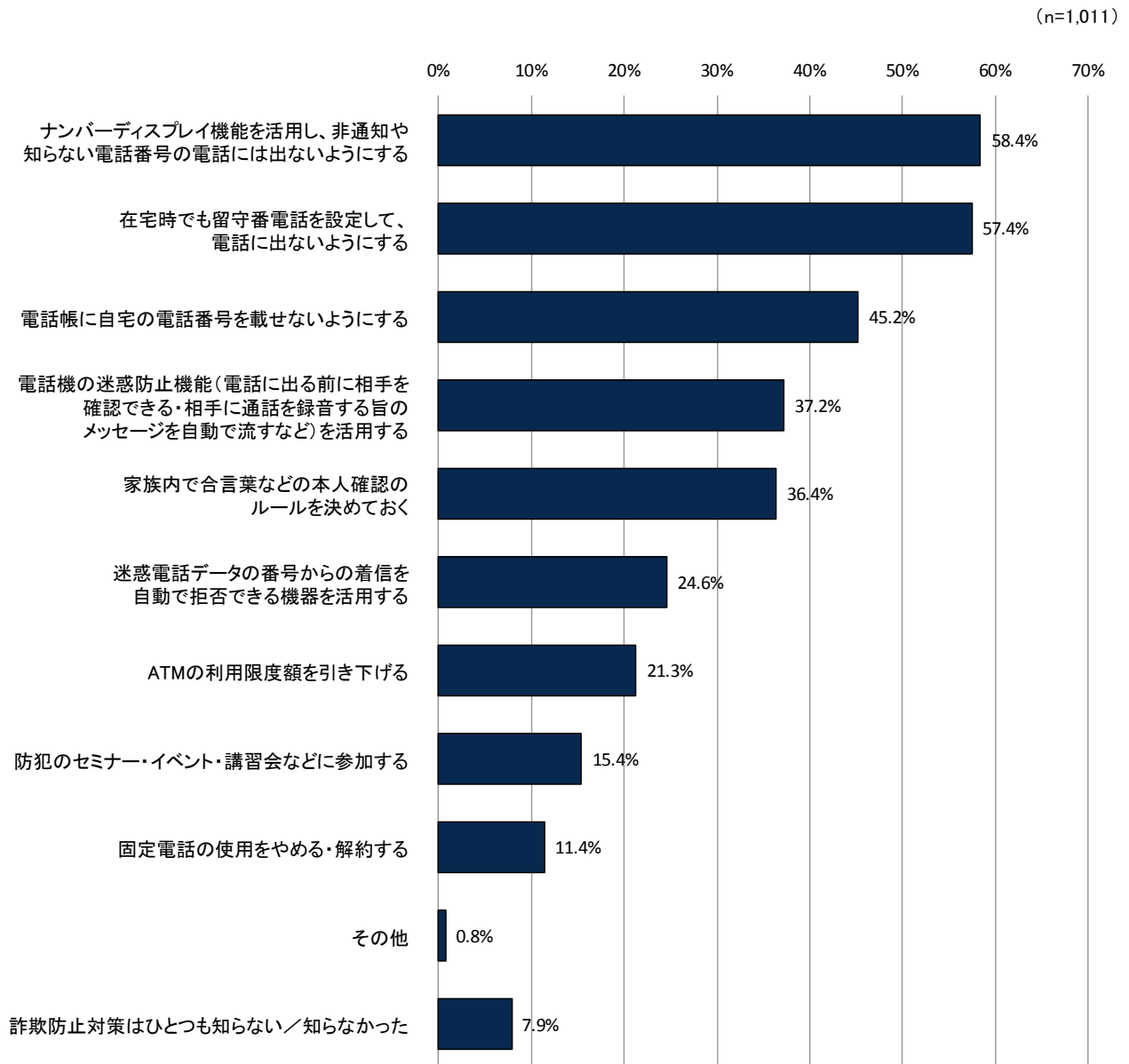
(1) 被害防止対策の認知状況

電話による詐欺の被害防止対策について、最も認知率が高いのは「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」(58.4%)であり、次いで「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」(57.4%)、「電話帳に自宅の電話番号を載せないようにする」(45.2%)が続いている。

このように最も認知率の高い対策でも6割弱にとどまっており、上記2項目以外は5割を切る認知率となっている。

なお、「詐欺防止対策はひとつも知らない」と回答した割合は7.9%だった。

図8 認知している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)

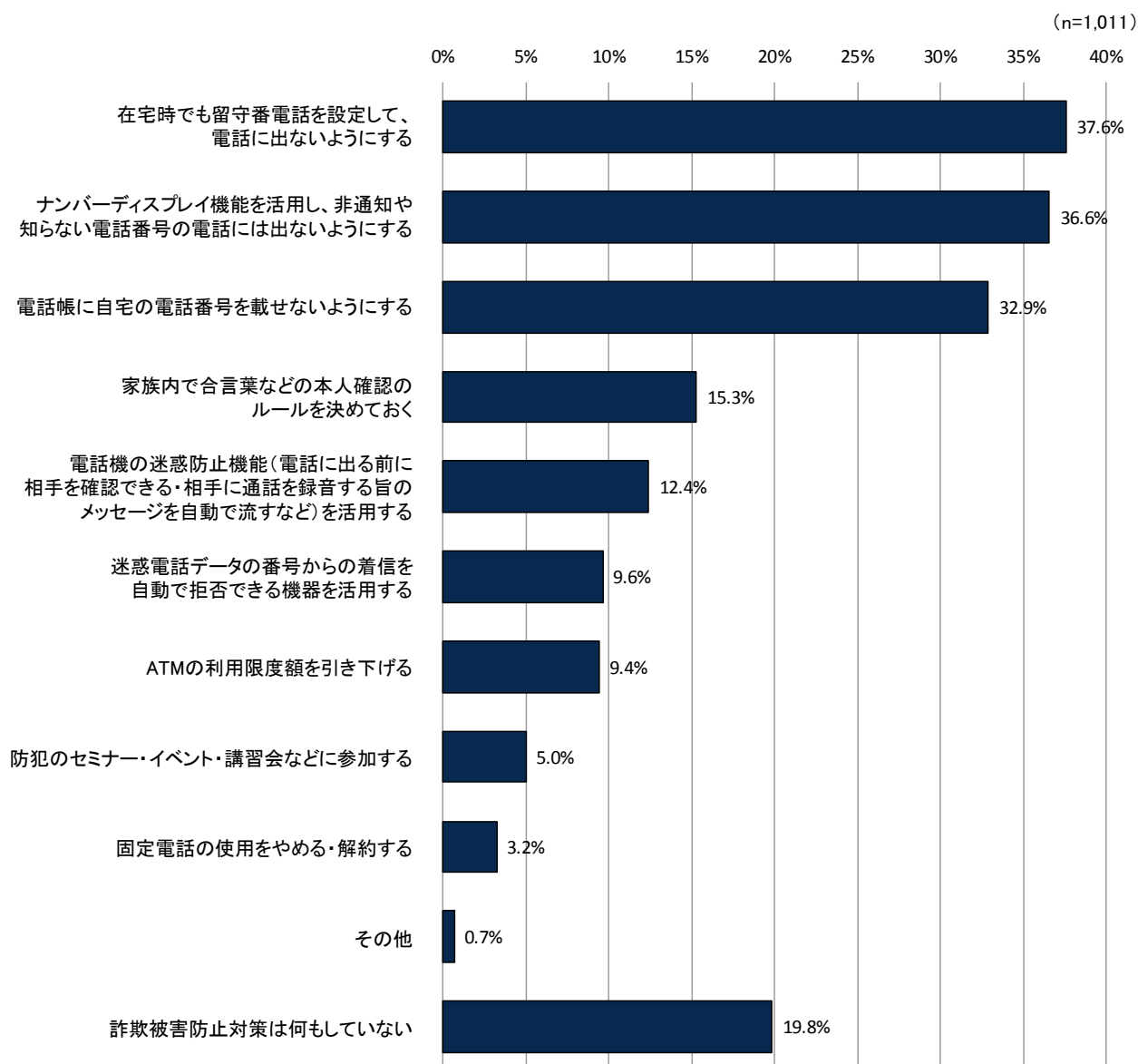


※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

(2) 被害防止対策の実施状況

被害防止対策の現在の実施状況について、「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」が最も高く(37.6%)、ほぼ同じ割合で「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」が続く(36.6%)。何らかの被害防止対策を実施していると回答した割合は約8割であり、逆に「詐欺被害防止対策は何もしていない」という回答は19.8%で約2割となっている。

図9 実施している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)

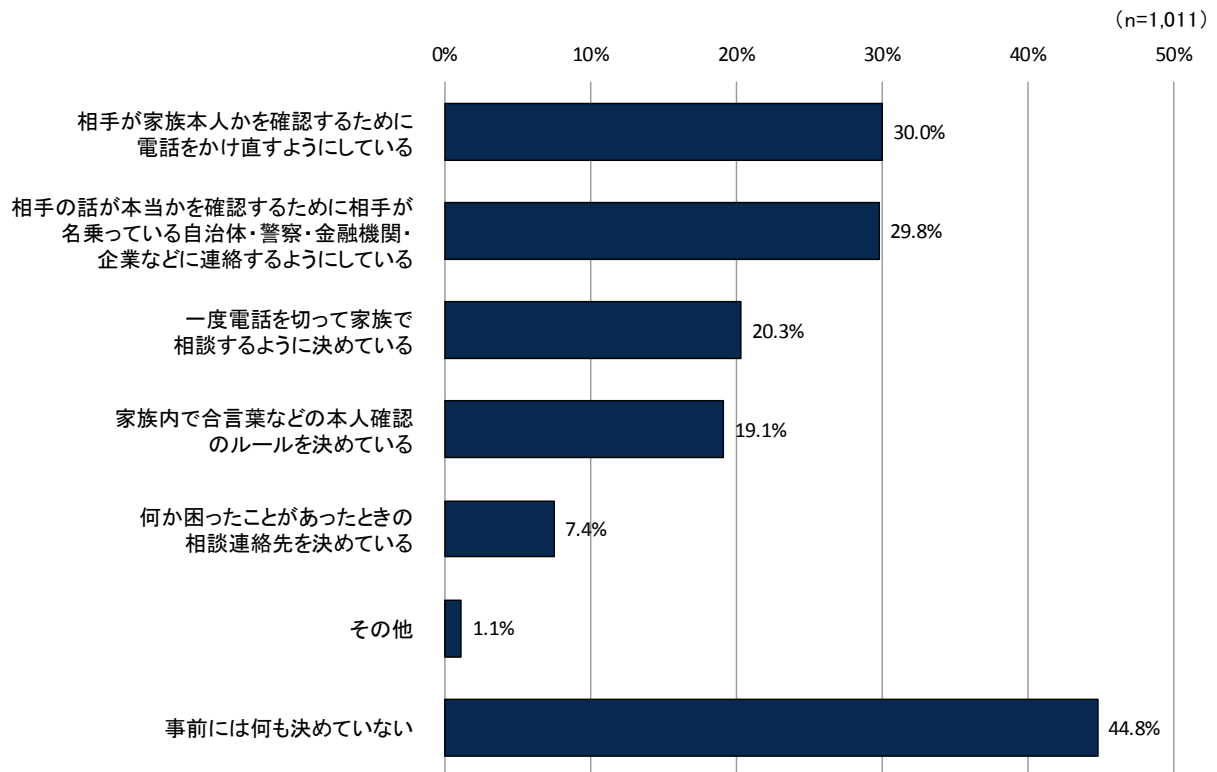


(3) 事前に決めている詐欺遭遇時の対応策

詐欺が疑われる電話がかかってきたときの対応策を事前に決めているかについて、「相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直すようにしている」が30.0%、「相手の話が本当かを確認するために相手が名乗っている自治体・警察・金融機関・企業などに連絡するようにしている」もほぼ同率の29.8%となっている。

何らかの対応策を事前に決めていると回答した割合は55.2%にとどまっており、逆に「事前には何も決めていない」という割合は44.8%と半数近くを占めている。

図10 事前に決めている詐欺遭遇時の対応策(複数回答、WBあり)

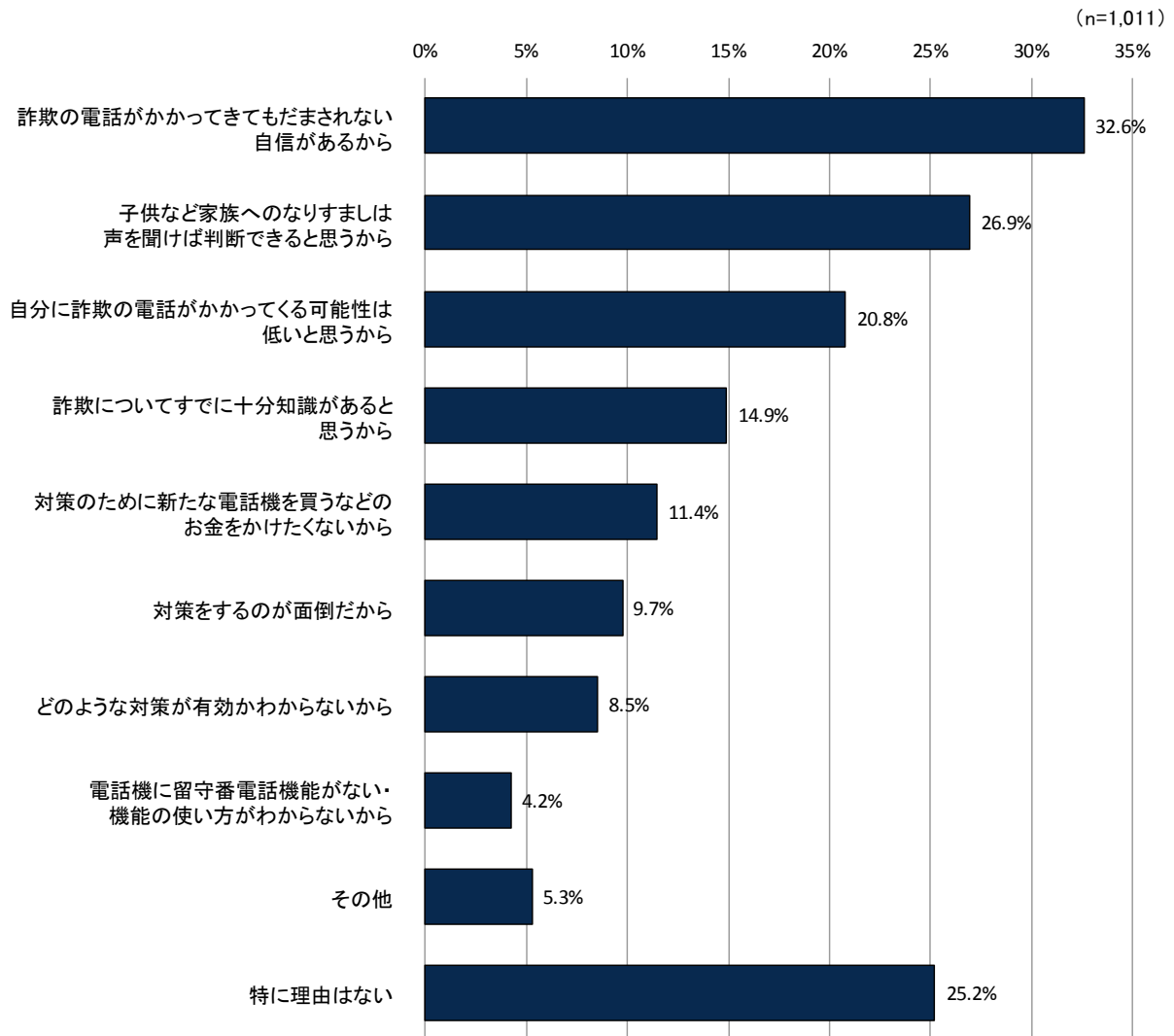


(4) 被害防止対策を実施しない理由

詐欺の被害防止対策を実施していない人の「被害防止対策を実施しない理由」については、「詐欺の電話がかかってきてもだまされない自信があるから」が 32.6%と最も高く、次いで「子供など家族へのなりすましは声を聞けば判断できると思うから」(26.9%)が続いており、自力で回避できるという自信から対策を実施しないという傾向がうかがわれる。

また、「特に理由はない」と回答した割合も 25.2%にのぼっており、この回答からは詐欺に対する危機意識の低さがうかがわれる。

図11 詐欺の被害防止対策を実施していない理由(未実施者のみ、複数回答、WBあり)



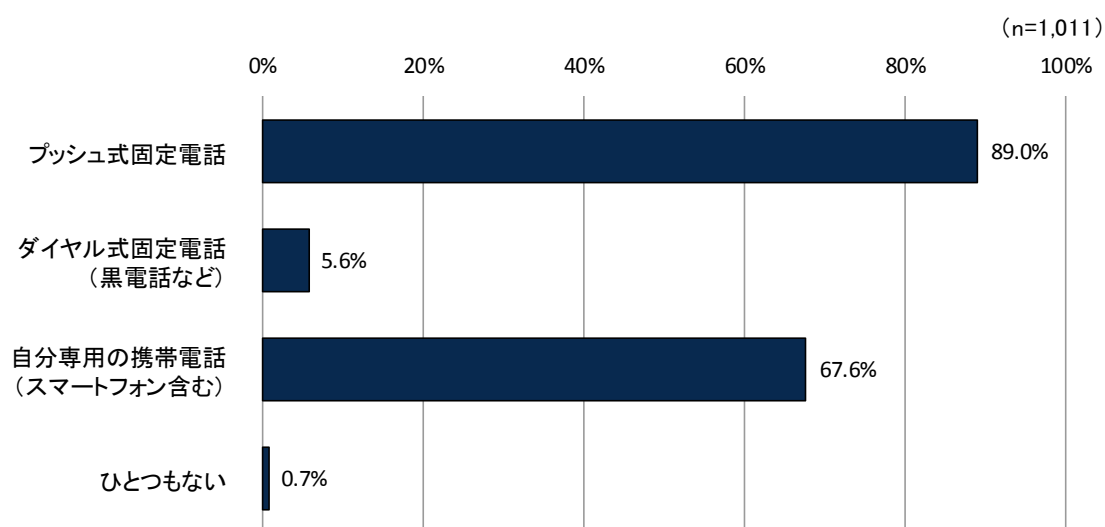
3-3. 高齢者世帯の通信環境

(1) 固定電話の有無

ここでは高齢者世帯の通信環境について聴取することで、電話による詐欺の増加に対して高齢者世帯の通信環境がどのような状況になっているかを確認した。

自宅の通信環境については「プッシュ式固定電話」(89.0%)と「ダイヤル式固定電話」(5.6%)を合わせた固定電話の利用率が94.6%となっており、「自分専用の携帯電話」の利用率(67.6%)を大きく超え、依然として高齢者世帯では固定電話の利用率が非常に高くなっている。

図12 自宅の通信環境(複数回答、WBあり)



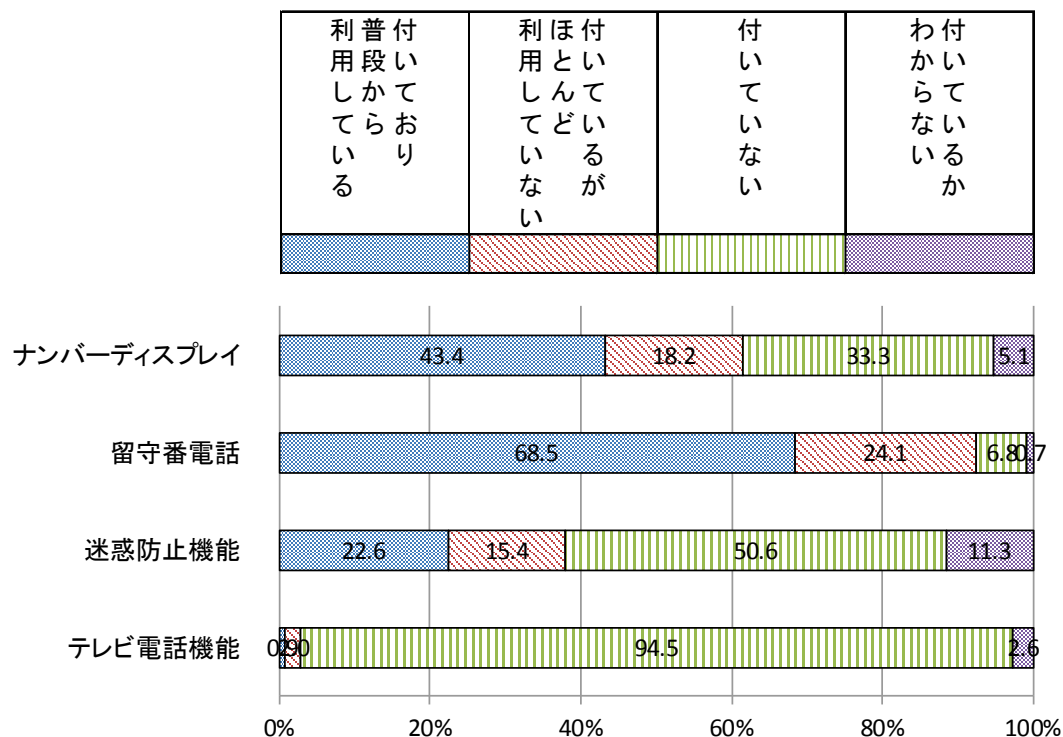
(2) 固定電話の各種機能および利用の有無

プッシュ式固定電話の利用者における各種機能の利用状況について、詐欺の被害防止対策となる3大機能の利用状況は「ナンバーディスプレイ」の利用率が 43.4%、「留守番電話」の利用率が 68.5%、「迷惑防止機能」の利用率が 22.6%となっている。

これらの機能についてはそれぞれ「電話機に機能は付いているがほとんど利用していない」という層が 15%～24%程度存在しており、このような「すぐにでも機能の利用が可能な層」に対しての啓蒙が特に有効と考えられる。

図13 固定電話の各種機能の有無および利用状況(プッシュ式利用者のみ、単一回答、WBあり)

(n=899)



3-4. 詐欺の遭遇実態

(1) 犯人からの初回電話時の心理状況

ここからは電話による詐欺の経験者に対して、詐欺に遭遇した時の状況を聴取している。

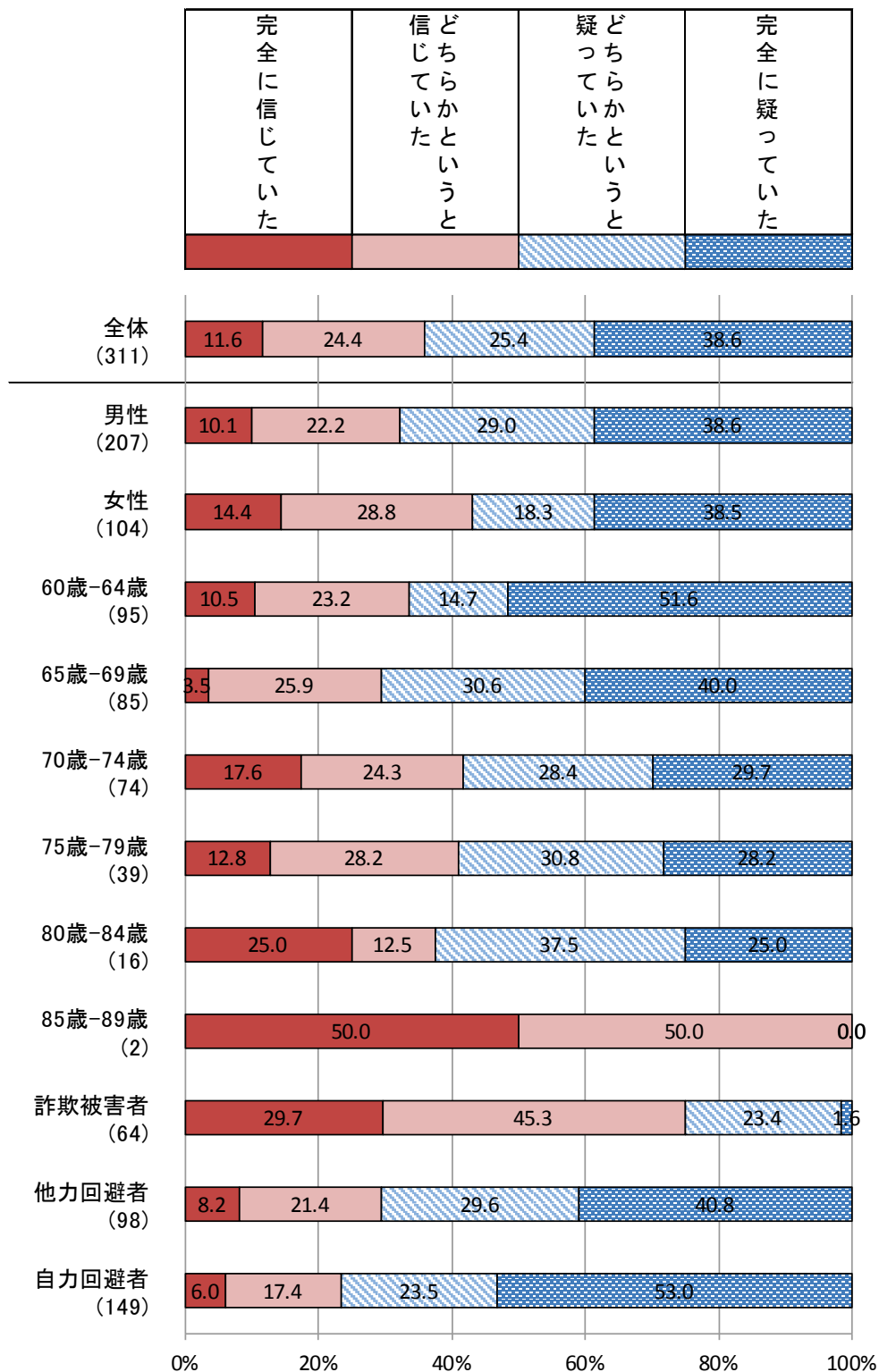
まず、犯人から最初に詐欺の電話があった時の心理状況について、経験者全体では「完全に信じていた」(11.6%)「どちらかという信じていた」(24.4%)の合計は 36.0%、逆に「完全に疑っていた」(38.6%)「どちらかという疑っていた」(25.4%)の合計は 64.0%となっている。

さらに被害者に絞ってみると、「完全に信じていた」(29.7%)「どちらかという信じていた」(45.3%)の合計は 75.0%、逆に「完全に疑っていた」(1.6%)「どちらかという疑っていた」(23.4%)の合計は 25.0%となっており、被害者のなかでも 25%の人は最初の段階では疑っているという結果になった。

逆に自力回避者については「完全に信じていた」(6.0%)「どちらかという信じていた」(17.4%)の合計は 23.4%となっており、被害者・自力回避者とも、最初の段階では一定の割合の層が信じるか疑うかの狭間で揺れ動いていることがうかがわれる。

図14 犯人からの初回電話時の心理状況(詐欺経験者のみ、単一回答)

(n=311)



(2) 犯人からの電話を信じた理由

犯人からの電話を信じてしまった理由として、オレオレ詐欺の手口では「声や話し方が本人のように感じたから」が66.7%と最も高く、回答率が7割近くまで達している。これに次いで「家族を早く助けなければいけないと思ったから」(31.5%)、「相手が家族の実名を名乗ったから」(27.8%)が続いている。(図 15-1 参照)

図15-1 オレオレ詐欺で犯人からの電話を信じた理由(信じた方のみ、複数回答)

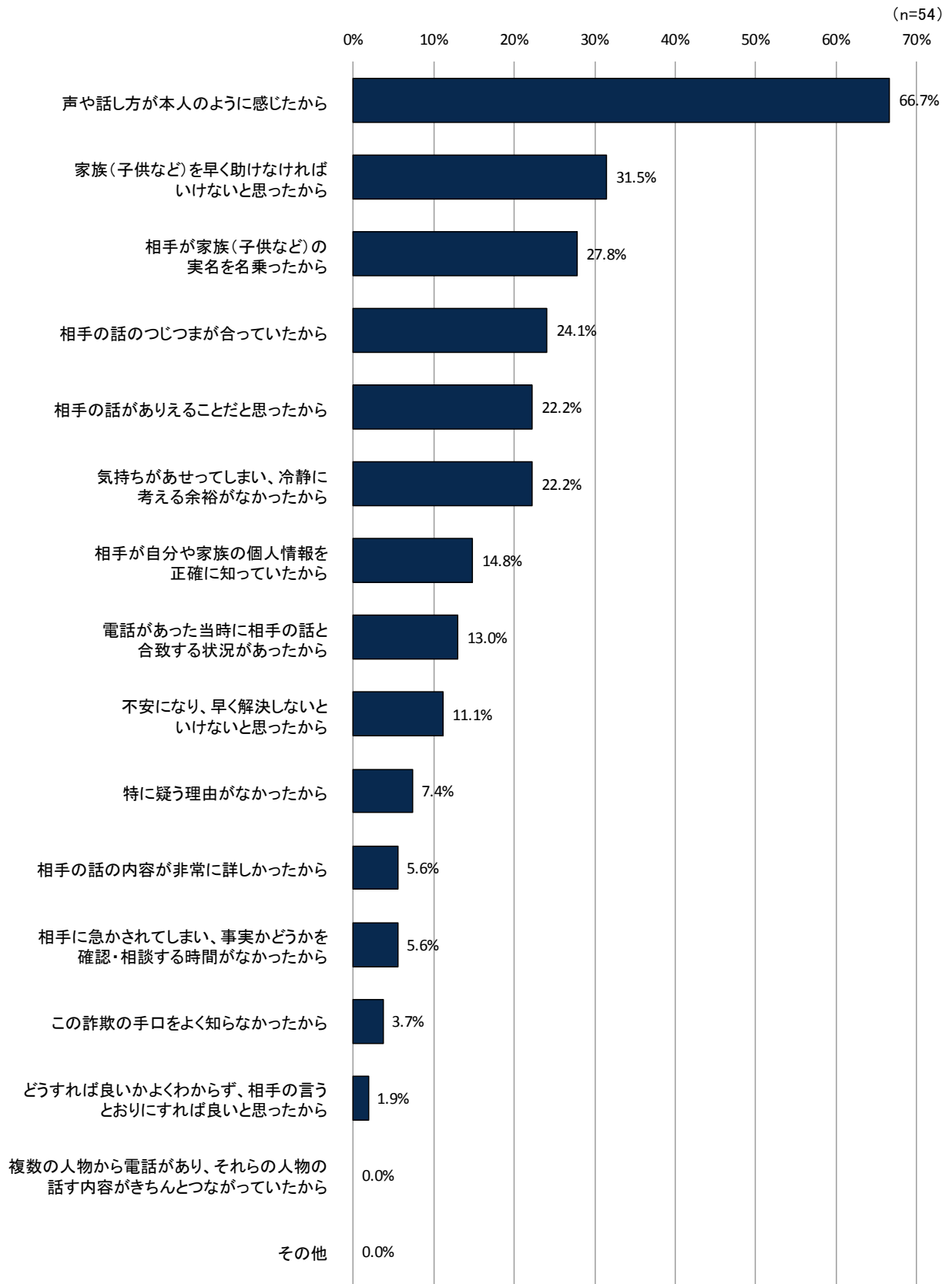


表14 オレオレ詐欺で犯人からの電話を信じた理由(信じた方のみ、複数回答)

			声や話し方が本人のように感じたから	家族（子供など）を早く助けなければいけないと思ったから	相手が家族（子供など）の実名を名乗ったから	相手の話のつじつまが合っていたから	相手の話がありえることだと思ったから	気持ちがあせてしまいい、冷静に考える余裕がなかったから	相手が自分や家族の個人情報 を正確に知っていたから	電話があったときに相手の話と合致する状況があったから	
		[比率の差] n=30以上の場合									
		全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント									
		全体	(54)	66.7	31.5	27.8	24.1	22.2	22.2	14.8	13.0
	性別	男性	(36)	63.9	27.8	27.8	25.0	19.4	19.4	16.7	13.9
5歳年齢 （刻み）		女性	(18)	72.2	38.9	27.8	22.2	27.8	27.8	11.1	11.1
		60歳-64歳	(9)	44.4	22.2	33.3	22.2	22.2	22.2	11.1	22.2
		65歳-69歳	(17)	70.6	29.4	35.3	29.4	23.5	23.5	17.6	11.8
		70歳-74歳	(12)	66.7	25.0	16.7	8.3	33.3	25.0	16.7	8.3
		75歳-79歳	(11)	72.7	45.5	27.3	36.4	9.1	9.1	18.2	9.1
		80歳-84歳	(4)	100.0	25.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0
		85歳-89歳	(1)	0.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0	0.0	100.0
同居家族形態		一人暮らし	(8)	62.5	37.5	37.5	25.0	12.5	12.5	25.0	25.0
		夫婦のみ世帯	(24)	75.0	29.2	25.0	29.2	25.0	25.0	20.8	8.3
		夫婦と子供世帯	(10)	40.0	20.0	40.0	30.0	30.0	20.0	0.0	20.0
		自分と子供 （配偶者離死別）	(6)	66.7	50.0	0.0	16.7	16.7	33.3	16.7	16.7
		3世代世帯 （夫婦+子供+孫）	(2)	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		その他の世帯	(4)	75.0	50.0	50.0	0.0	25.0	25.0	0.0	0.0
		詐欺被害者	(19)	68.4	57.9	21.1	42.1	26.3	47.4	21.1	15.8
経験		他力回避者	(19)	78.9	21.1	21.1	5.3	15.8	10.5	10.5	0.0
		自力回避者	(16)	50.0	12.5	43.8	25.0	25.0	6.3	12.5	25.0

		その他	複数の人物から電話があり、それらが人物の話す内容がきちんとつながつていたから	どうすれば良いかよくわからず、相手の言うとおりにすれば良いと思ったから	この詐欺の手口をよく知らなかったから	相手に急かされてしまい、事実かどうかを確認・相談する時間がなかったから	相手の話の内容が非常に詳しくなかったから	特に疑う理由がなかったから	不安になり、早く解決しないといけないと思ったから
	全体 (54)	0.0	0.0	1.9	3.7	5.6	5.6	7.4	11.1
性別	男性 (36)	0.0	0.0	2.8	2.8	5.6	5.6	11.1	13.9
	女性 (18)	0.0	0.0	0.0	5.6	5.6	11.1	0.0	5.6
5 歳 年 刻 齢 み	60歳-64歳 (9)	0.0	0.0	11.1	0.0	11.1	11.1	11.1	11.1
	65歳-69歳 (17)	0.0	0.0	0.0	0.0	11.8	0.0	11.8	23.5
	70歳-74歳 (12)	0.0	0.0	0.0	0.0	8.3	0.0	0.0	8.3
	75歳-79歳 (11)	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0
	80歳-84歳 (4)	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	85歳-89歳 (1)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	一人暮らし (8)	0.0	0.0	0.0	12.5	0.0	12.5	12.5	0.0
同居 家族 形態	夫婦のみ世帯 (24)	0.0	0.0	0.0	4.2	4.2	4.2	4.2	12.5
	夫婦と子供世帯 (10)	0.0	0.0	10.0	0.0	10.0	10.0	20.0	20.0
	自分と子供 (配偶者離死別) (6)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	3世代世帯 (夫婦+子供+孫) (2)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他の世帯 (4)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0
	詐欺被害者 (19)	0.0	0.0	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	26.3
経験 詐欺	他力回避者 (19)	0.0	0.0	5.3	0.0	5.3	0.0	0.0	5.3
	自力回避者 (16)	0.0	0.0	6.3	0.0	6.3	0.0	12.5	0.0

また、その他の詐欺では、「相手の話がありえることだと思ったから」が最も高く(36.2%)、次いで「相手の話のつじつまが合っていた」(27.6%)、「この詐欺の手口をよく知らなかったから」(25.9%)が続いている。(図 15-2 参照)

これらの結果から、詐欺の電話に遭遇した際に信じてしまった人の特徴として、オレオレ詐欺では「声や話し方が本人に聞こえるか」「相手が家族の実名を名乗ったか」など個人の声の特徴や名前の情報を手がかりに本当かどうかを判断しており、その他の詐欺では「相手の話がありえることだと思うか」「相手の話のつじつまが合っているか」などの論理性を手がかりに本当かどうかを判断しており、さらに人によっては「電話を受けたときに相手の話と合致する状況があった」などの外形的な情報が信じるかどうかの判断を補強していることがうかがわれる。

図15-2 その他の詐欺で犯人からの電話を信じた理由(信じた方のみ、複数回答)

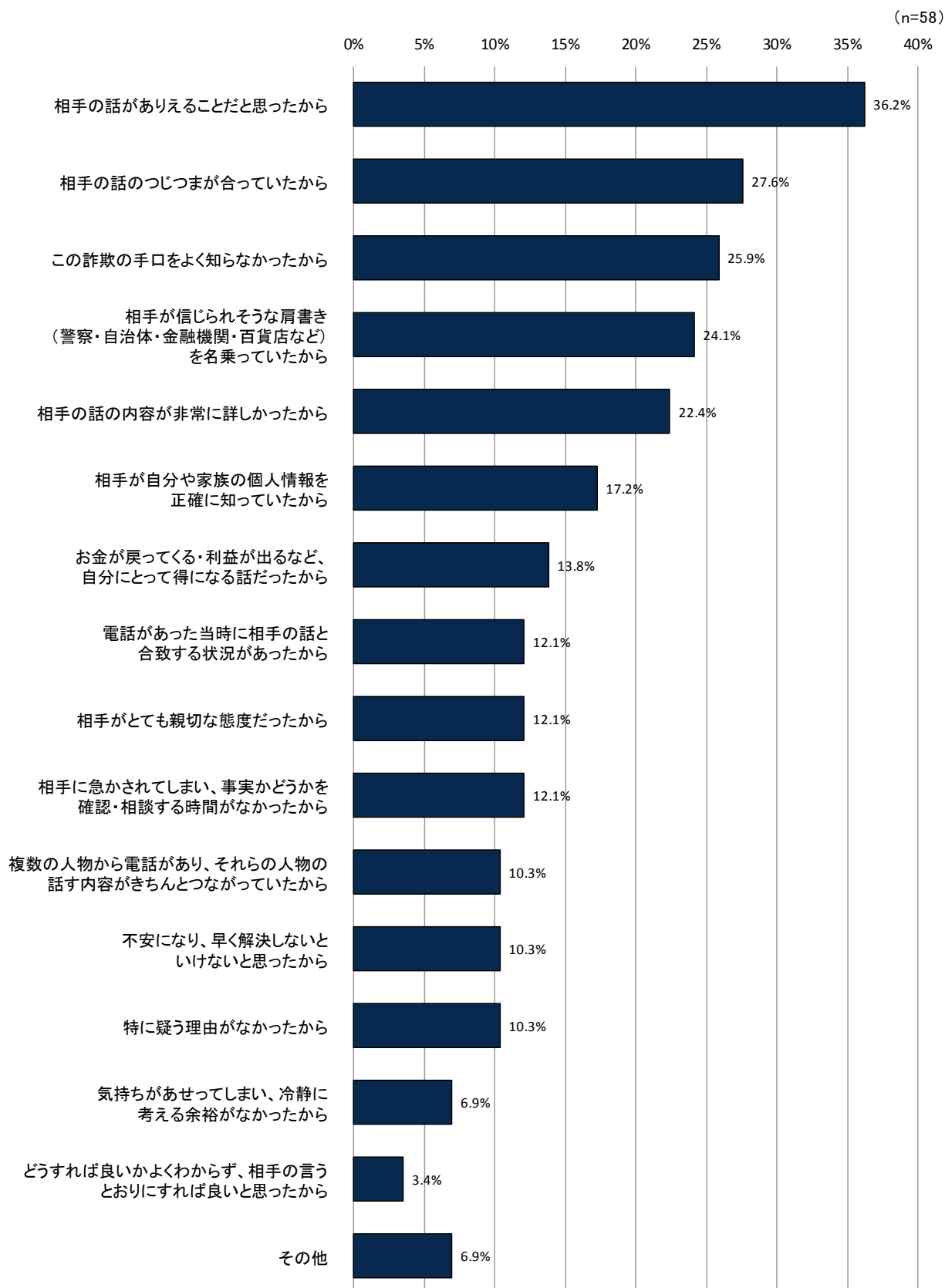


表15 その他の詐欺で犯人からの電話を信じた理由(信じた方のみ、複数回答)

			相手の話がありえることだと思っ	相手の話のつじつまが合っていた	この詐欺の手口をよく知らなかった	相手が信じられそうな肩書き(警察・自治体・金融機関・百貨店など)を名乗っていたから	相手の話の内容が非常に詳しくかつ	相手が自分や家族の個人情報を知っていたから	相手が自分とくると得になる話だっ	お金が戻ってくる・利益が出るなど、自分にとって得になる話だっ	電話があったときに相手の話と合
			[比率の差] n=30以上の場合								
			全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント								
性 別 (5 歳 年 刻 齢 み) 同 居 家 族 形 態 経 験 詐 欺	性 別	全体	(58)	36.2	27.6	25.9	24.1	22.4	17.2	13.8	12.1
		男性	(31)	38.7	22.6	19.4	22.6	25.8	16.1	12.9	9.7
	年 刻 齢 み	女性	(27)	33.3	33.3	33.3	25.9	18.5	18.5	14.8	14.8
		60歳-64歳	(23)	47.8	30.4	21.7	17.4	17.4	21.7	8.7	13.0
		65歳-69歳	(8)	25.0	37.5	25.0	25.0	12.5	0.0	25.0	12.5
		70歳-74歳	(19)	36.8	21.1	36.8	31.6	15.8	26.3	21.1	15.8
		75歳-79歳	(5)	20.0	40.0	0.0	40.0	60.0	0.0	0.0	0.0
		80歳-84歳	(2)	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0
		85歳-89歳	(1)	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	同 居 家 族 形 態	一人暮らし	(16)	37.5	37.5	31.3	37.5	18.8	12.5	25.0	18.8
		夫婦のみ世帯	(20)	40.0	20.0	25.0	15.0	20.0	15.0	15.0	10.0
		夫婦と子供世帯	(12)	33.3	16.7	33.3	25.0	33.3	25.0	8.3	0.0
		自分と子供 (配偶者離死別)	(4)	25.0	25.0	25.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0
		3世代世帯 (夫婦+子供+孫)	(0)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		その他の世帯	(6)	33.3	50.0	0.0	33.3	16.7	33.3	0.0	33.3
	経 験 詐 欺	詐欺被害者	(29)	44.8	34.5	34.5	24.1	27.6	13.8	17.2	17.2
		他力回避者	(10)	30.0	40.0	10.0	10.0	30.0	40.0	0.0	10.0
		自力回避者	(19)	26.3	10.5	21.1	31.6	10.5	10.5	15.8	5.3

			相手の話がありえることだと思っ	相手の話のつじつまが合っていた	この詐欺の手口をよく知らなかった	相手が信じられそうな肩書き(警察・自治体・金融機関・百貨店など)を名乗っていたから	相手の話の内容が非常に詳しくかつ	相手が自分や家族の個人情報を知っていたから	相手が自分とくると得になる話だっ	お金が戻ってくる・利益が出るなど、自分にとって得になる話だっ	電話があったときに相手の話と合
			[比率の差] n=30以上の場合								
			全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント								
性 別 (5 歳 年 刻 齢 み) 同 居 家 族 形 態 経 験 詐 欺	性 別	全体	(58)	12.1	12.1	10.3	10.3	10.3	6.9	3.4	6.9
		男性	(31)	6.5	3.2	3.2	6.5	6.5	6.5	0.0	6.5
	年 刻 齢 み	女性	(27)	18.5	22.2	18.5	14.8	14.8	7.4	7.4	7.4
		60歳-64歳	(23)	4.3	8.7	4.3	21.7	8.7	0.0	0.0	0.0
		65歳-69歳	(8)	12.5	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		70歳-74歳	(19)	26.3	21.1	15.8	5.3	21.1	15.8	10.5	15.8
		75歳-79歳	(5)	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0	20.0	0.0	0.0
		80歳-84歳	(2)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0
		85歳-89歳	(1)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	同 居 家 族 形 態	一人暮らし	(16)	18.8	18.8	25.0	6.3	18.8	12.5	12.5	6.3
		夫婦のみ世帯	(20)	5.0	10.0	5.0	15.0	0.0	5.0	0.0	5.0
		夫婦と子供世帯	(12)	25.0	16.7	8.3	8.3	16.7	8.3	0.0	8.3
		自分と子供 (配偶者離死別)	(4)	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	25.0
		3世代世帯 (夫婦+子供+孫)	(0)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		その他の世帯	(6)	0.0	0.0	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	経 験 詐 欺	詐欺被害者	(29)	20.7	20.7	13.8	10.3	10.3	13.8	6.9	10.3
		他力回避者	(10)	10.0	10.0	10.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0
		自力回避者	(19)	0.0	0.0	5.3	5.3	5.3	0.0	0.0	5.3

(3) 犯人からの電話を疑った理由

犯人からの初回電話で疑った理由として、オレオレ詐欺の手口では「声や話し方が明らかに本人と異なるから」(39.0%)が最も高く、次に「相手の話がありえない内容だと思ったから」(35.1%)「相手が家族の実名を名乗らないから」(29.9%)となっている。

図16-1 オレオレ詐欺で犯人からの電話を疑った理由(疑っていた方のみ、複数回答)

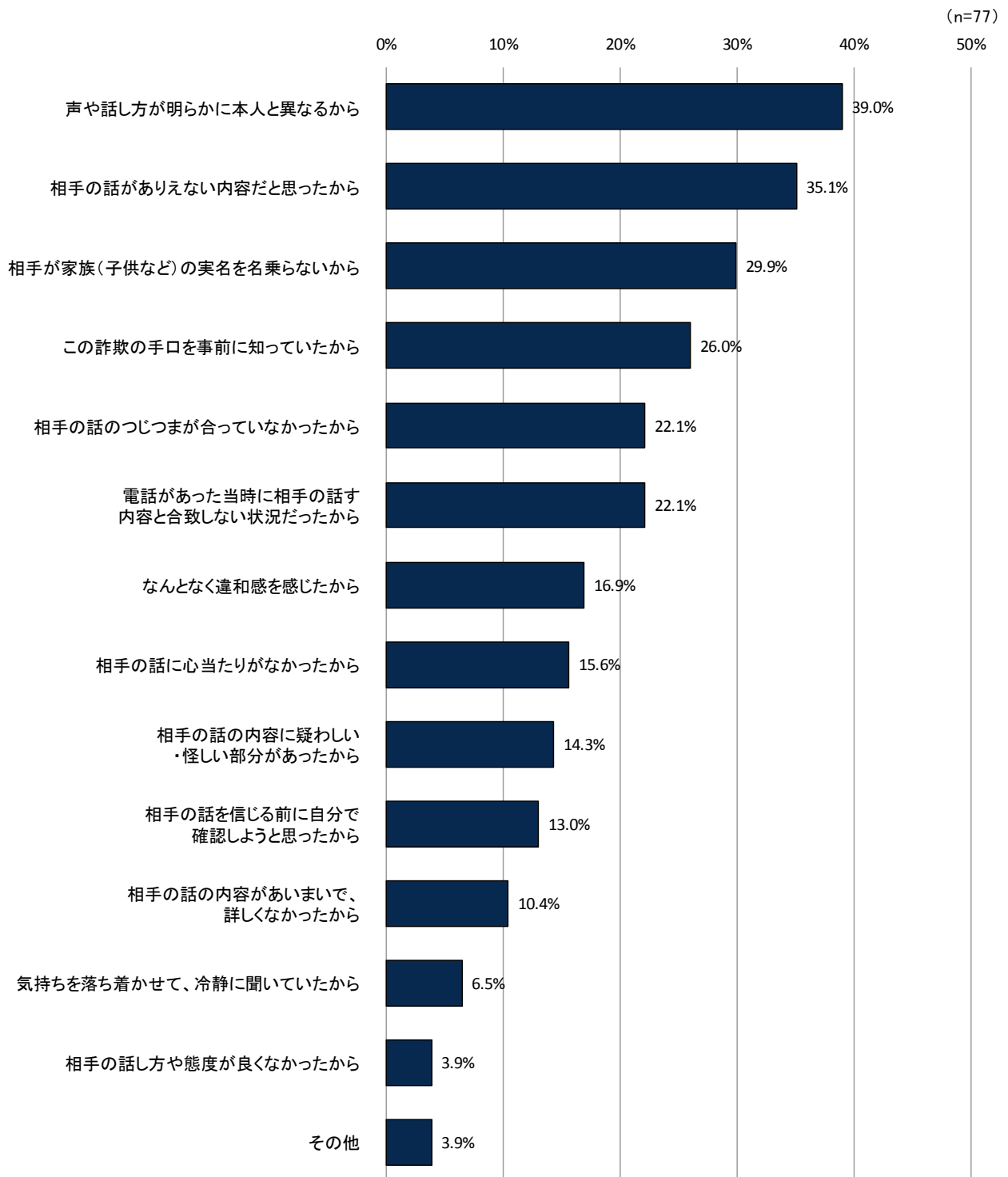


表16 オレオレ詐欺で犯人からの電話を疑った理由(疑っていた方のみ、複数回答)

			声や話し方が明らかに本人と異なるから	相手の話がありえない内容だと思ったから	相手が家族（子供など）の実名を名乗らないから	この詐欺の手口を事前に知っていたから	相手の話のつじつまが合っていなかったから	電話があったときに相手の話す内容と合致しない状況だったから	なんとなく違和感を感じたから	相手の話に心当たりがなかったから	相手の話の内容に疑わしい・怪しい部分があったから	相手の話を信じる前に自分で確認しようと思ったから	相手の話の内容があいまいで、詳しくなかったから	気持ちを落ち着かせて、冷静に聞いていたから	相手の話し方や態度が良くなかったから	その他
[比率の差] n=30以上の場合																
全体 +10 ポイント																
全体 +5 ポイント																
全体 -5 ポイント																
全体 -10 ポイント																
		全体 (77)	39.0	35.1	29.9	26.0	22.1	22.1	16.9	15.6	14.3	13.0	10.4	6.5	3.9	3.9
性別	男性	(55)	41.8	36.4	27.3	23.6	20.0	20.0	9.1	14.5	10.9	12.7	10.9	3.6	3.6	0.0
	女性	(22)	31.8	31.8	36.4	31.8	27.3	27.3	36.4	18.2	22.7	13.6	9.1	13.6	4.5	13.6
（5歳年刻み）	60歳-64歳	(26)	30.8	38.5	23.1	26.9	23.1	11.5	15.4	15.4	19.2	11.5	7.7	7.7	3.8	7.7
	65歳-69歳	(26)	57.7	38.5	26.9	30.8	26.9	30.8	19.2	19.2	11.5	7.7	19.2	7.7	3.8	0.0
	70歳-74歳	(16)	31.3	18.8	37.5	18.8	12.5	18.8	12.5	0.0	12.5	12.5	0.0	6.3	6.3	6.3
	75歳-79歳	(8)	25.0	50.0	37.5	25.0	25.0	37.5	25.0	37.5	12.5	37.5	12.5	0.0	0.0	0.0
	80歳-84歳	(1)	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	85歳-89歳	(0)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
同居家族形態	一人暮らし	(8)	37.5	12.5	12.5	50.0	12.5	37.5	12.5	0.0	12.5	12.5	12.5	12.5	0.0	0.0
	夫婦のみ世帯	(34)	35.3	47.1	35.3	29.4	20.6	29.4	23.5	20.6	17.6	11.8	11.8	2.9	5.9	5.9
	夫婦と子供世帯	(18)	50.0	16.7	27.8	27.8	16.7	11.1	11.1	11.1	11.1	22.2	11.1	11.1	0.0	0.0
	自分と子供 （配偶者離死別）	(2)	100.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	3世代世帯 （夫婦+子供+孫）	(2)	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	50.0	50.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他の世帯	(13)	30.8	53.8	15.4	7.7	38.5	7.7	0.0	15.4	7.7	7.7	7.7	0.0	7.7	7.7
	詐欺被害者	(3)	0.0	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0
経験	他力回避者	(29)	41.4	37.9	31.0	10.3	24.1	27.6	6.9	13.8	6.9	10.3	6.9	3.4	0.0	0.0
	自力回避者	(45)	40.0	35.6	31.1	33.3	22.2	20.0	24.4	15.6	20.0	13.3	13.3	8.9	6.7	6.7

また、その他の手口では「相手の話がありえない内容だと思ったから」(45.1%)が最も高く、次に「相手の話に心当たりがなかったから」(31.1%)、「相手の話のつじつまが合っていなかったから」(24.6%)となっている。(図 16-2 参照)

これらの結果から、詐欺の電話に遭遇した際に疑うことができた人の特徴として、オレオレ詐欺では「声や話し方が本人に聞こえるか」「相手が家族の実名を名乗ったか」など個人の声の特徴や名前の情報だけでなく、「話の内容がありえることだと思うか」などの論理性や「詐欺の手口を事前に知っていた」という予備知識なども加えて判断していることがうかがわれ、その他の手口では「相手の話のつじつまが合っているか」「相手の話がありえることだと思うか」などの論理性を主な手がかりに判断していることがうかがわれ、その他の手口については信じた人と疑った人の判断ポイントにあまり差が無い結果となっている。

図16-2 その他の詐欺で犯人からの電話を疑った理由(疑っていた方のみ、複数回答)

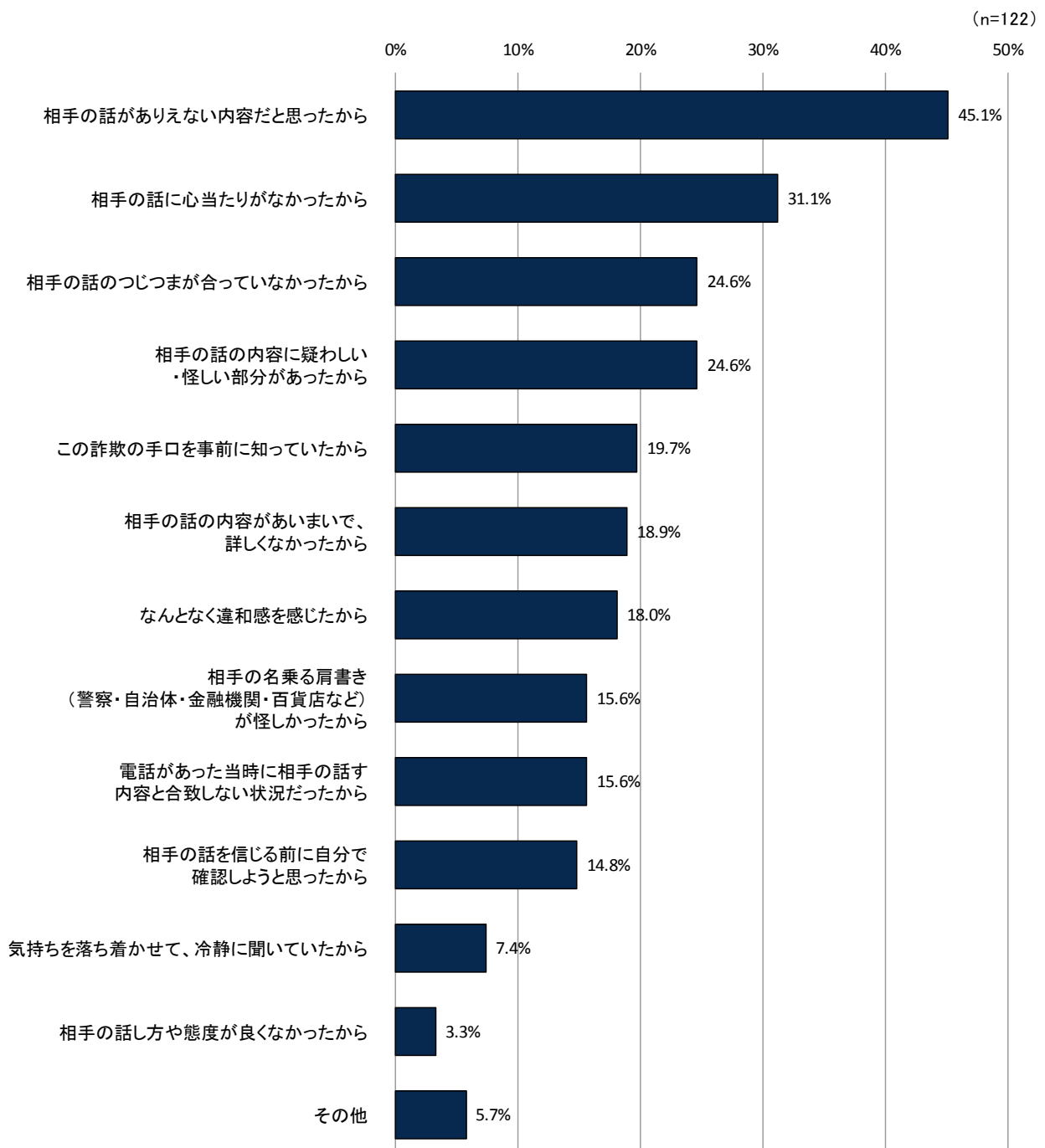


表17 その他の詐欺で犯人からの電話を疑った理由(疑っていた方のみ、複数回答)

		相手の話がありえない内容だと思ったから	相手の話に心当たりがなかったから	相手の話のつじつまが合っていなかったから	相手の話の内容に疑わしい・怪しい部分があったから	この詐欺の手口を事前に知っていたから	相手の話の内容があいまいで、詳しくなかったから	なんとなく違和感を感じたから	相手の話の内容が怪しかったから	相手の名乗る肩書き(警察・自治体・金融機関・百貨店など)が怪しかったから	電話があったときに相手の話す内容と合致しない状況だったから	相手の話を信じる前に自分で確認しようと思ったから	気持ちを落ち着かせて、冷静に聞いていたから	相手の話し方や態度が良くなかったから	その他
[比率の差] n=30以上の場合															
性別	全体	(122)	45.1	31.1	24.6	24.6	19.7	18.9	18.0	15.6	15.6	14.8	7.4	3.3	5.7
	男性	(85)	43.5	31.8	28.2	28.2	22.4	20.0	16.5	18.8	12.9	15.3	7.1	3.5	3.5
年齢	女性	(37)	48.6	29.7	16.2	16.2	13.5	16.2	21.6	8.1	21.6	13.5	8.1	2.7	10.8
	60歳-64歳	(37)	45.9	48.6	37.8	24.3	21.6	24.3	10.8	16.2	21.6	10.8	5.4	8.1	2.7
年齢	65歳-69歳	(34)	41.2	29.4	11.8	23.5	20.6	23.5	11.8	11.8	11.8	11.8	5.9	0.0	5.9
	70歳-74歳	(27)	44.4	22.2	29.6	14.8	3.7	18.5	29.6	14.8	18.5	25.9	7.4	0.0	11.1
年齢	75歳-79歳	(15)	53.3	26.7	20.0	46.7	46.7	0.0	26.7	33.3	6.7	13.3	20.0	6.7	0.0
	80歳-84歳	(9)	44.4	0.0	11.1	22.2	11.1	11.1	22.2	0.0	11.1	11.1	0.0	0.0	11.1
年齢	85歳-89歳	(0)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	一人暮らし	(22)	50.0	45.5	18.2	22.7	4.5	18.2	18.2	22.7	36.4	18.2	4.5	4.5	0.0
同居家族形態	夫婦のみ世帯	(44)	47.7	27.3	20.5	29.5	15.9	18.2	25.0	13.6	6.8	20.5	13.6	2.3	6.8
	夫婦と子供世帯 (配偶者離死別)	(30)	40.0	23.3	33.3	26.7	26.7	30.0	6.7	13.3	13.3	10.0	3.3	3.3	3.3
同居家族形態	3世代世帯 (夫婦+子供+孫)	(5)	40.0	40.0	20.0	0.0	60.0	0.0	40.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他の世帯	(16)	43.8	37.5	37.5	18.8	18.8	12.5	12.5	18.8	18.8	12.5	0.0	0.0	12.5
経験詐欺	詐欺被害者	(13)	46.2	15.4	0.0	23.1	7.7	23.1	15.4	15.4	15.4	23.1	7.7	0.0	0.0
	他力回避者	(40)	40.0	25.0	15.0	20.0	20.0	12.5	17.5	17.5	12.5	10.0	10.0	2.5	5.0
経験詐欺	自力回避者	(69)	47.8	37.7	34.8	27.5	21.7	21.7	18.8	14.5	17.4	15.9	5.8	4.3	7.2

(4) 詐欺遭遇時における相談の有無および相談相手

詐欺の遭遇時(犯人からの初回電話時または電話後)の他者への相談の有無について、相談した人は 66.6%、相談しなかった人は 33.4%となっている。

さらに相談した相手については「配偶者」が全体の 39.5%と最も高く、次いで「自分の子供」(14.1%)、「警察」(12.2%)が続いている。

また、男女別で見ると男性は「配偶者」が 45.9%と最も高いが、女性では「誰にも相談しなかった」が最も高く、40.4%となっている。

年齢別で見ると、「配偶者」は 75 歳以上で特に割合が高くなっている。

同居家族形態別で見ると、一人暮らしの場合「誰にも相談しなかった」が 55.6%と最も高く、2番目に高いのは「警察」(14.8%)だった。

詐欺経験別で見ると、詐欺被害者は「誰にも相談しなかった」が 62.5%と6割を超えており、逆に他力回避者は 13.3%と低い。また、他力回避者の相談相手は「配偶者」が 59.2%と最も高く、「自分の子供」が 18.4%が続いている。

図17 犯人からの電話時・電話後の相談相手(詐欺経験者のみ、複数回答)

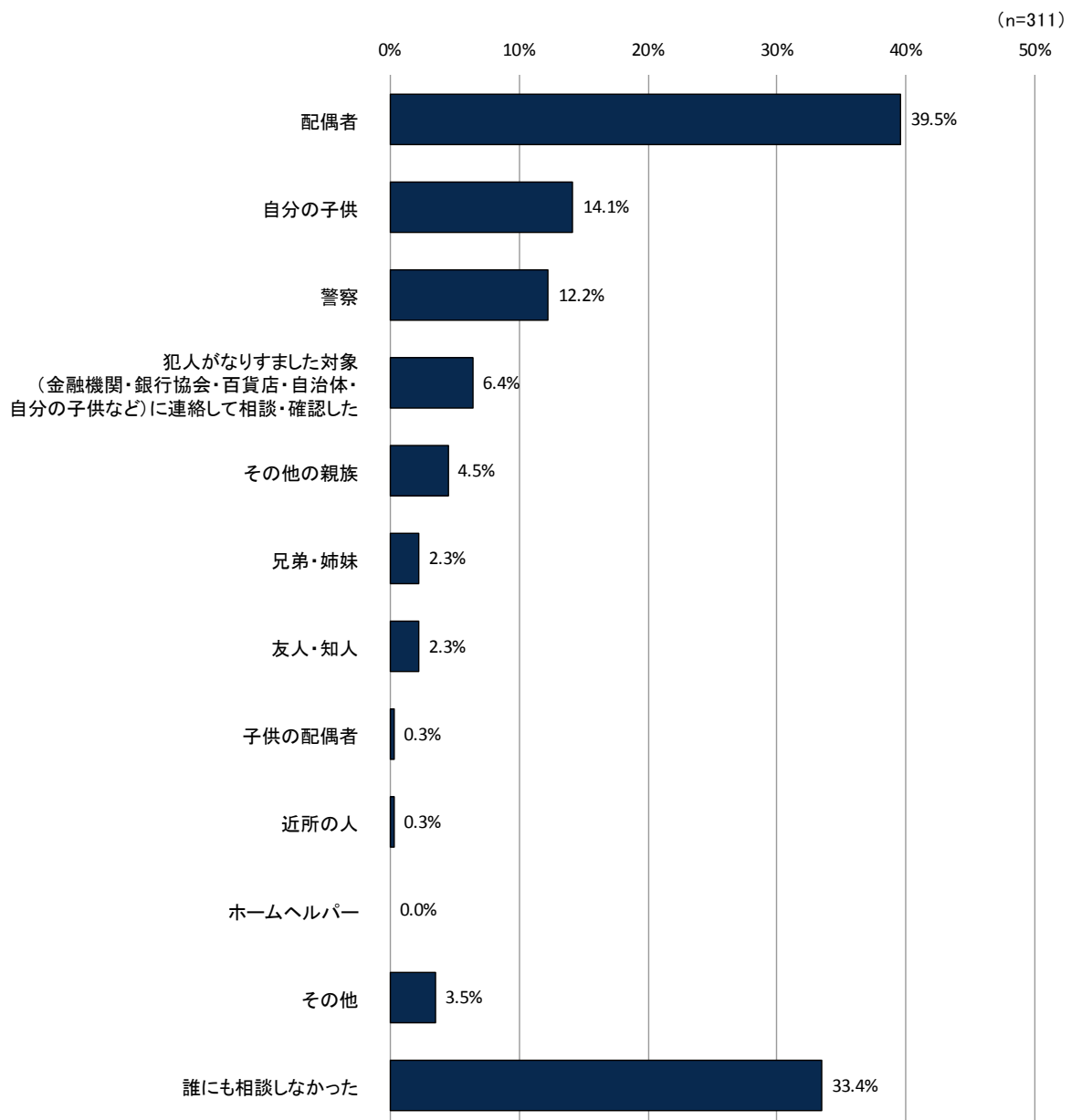


表18 犯人からの電話時・電話後の相談相手(詐欺経験者のみ、複数回答)

			配偶者	自分の子供	警察	犯人がなりすました対象（自治体・自分の子供など）に連絡して相談・確認した	その他の親族	兄弟・姉妹	友人・知人	子供の配偶者	近所の人	ホームヘルパー	その他	誰にも相談しなかった	
[比率の差] n=30以上の場合															
			全体 +10 ポイント												
			全体 +5 ポイント												
			全体 -5 ポイント												
			全体 -10 ポイント												
			全体 (311)	39.5	14.1	12.2	6.4	4.5	2.3	2.3	0.3	0.3	0.0	3.5	33.4
性別	男性	(207)	45.9	11.1	12.6	9.2	3.4	1.9	2.4	0.5	0.5	0.0	2.4	30.0	
	女性	(104)	26.9	20.2	11.5	1.0	6.7	2.9	1.9	0.0	0.0	0.0	5.8	40.4	
（5歳年齢刻み）	60歳-64歳	(95)	34.7	11.6	11.6	2.1	6.3	2.1	3.2	0.0	0.0	0.0	6.3	34.7	
	65歳-69歳	(85)	38.8	18.8	18.8	12.9	3.5	3.5	2.4	0.0	0.0	0.0	1.2	31.8	
	70歳-74歳	(74)	39.2	12.2	4.1	4.1	4.1	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	4.1	37.8	
	75歳-79歳	(39)	48.7	10.3	15.4	7.7	2.6	0.0	5.1	0.0	0.0	0.0	2.6	25.6	
	80歳-84歳	(16)	50.0	18.8	12.5	0.0	6.3	0.0	0.0	6.3	6.3	0.0	0.0	31.3	
	85歳-89歳	(2)	50.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	
同居家族形態	一人暮らし	(54)	7.4	9.3	14.8	3.7	9.3	7.4	1.9	0.0	0.0	0.0	1.9	55.6	
	夫婦のみ世帯	(122)	50.8	12.3	9.8	8.2	2.5	0.8	2.5	0.8	0.8	0.0	4.9	28.7	
	夫婦と子供世帯	(70)	51.4	14.3	8.6	8.6	1.4	2.9	1.4	0.0	0.0	0.0	2.9	32.9	
	自分と子供 （配偶者離死別）	(17)	11.8	47.1	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.4	
	3世代世帯 （夫婦+子供+孫）	(9)	55.6	22.2	11.1	0.0	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	
	その他の世帯	(39)	35.9	10.3	23.1	5.1	10.3	0.0	5.1	0.0	0.0	0.0	5.1	20.5	
経詐欺	詐欺被害者	(64)	18.8	10.9	6.3	0.0	1.6	0.0	4.7	0.0	0.0	0.0	1.6	62.5	
	他力回避者	(98)	59.2	18.4	11.2	6.1	8.2	5.1	1.0	1.0	1.0	0.0	5.1	13.3	
	自力回避者	(149)	35.6	12.8	15.4	9.4	3.4	1.3	2.0	0.0	0.0	0.0	3.4	34.2	

(5) 詐欺の遭遇時に誰にも相談しなかった理由

詐欺の遭遇時(犯人からの初回電話時または電話後)に他者へ相談しなかった人にその理由を聴取したところ、「自分の判断に自信があったから」が39.4%と最も高く、「そのときに自宅に自分以外の人がいなかったから」(38.5%)、「相談しようという発想がなかったから」(23.1%)が続いている。

図18 誰にも相談しなかった理由(相談しなかった方のみ、複数回答)

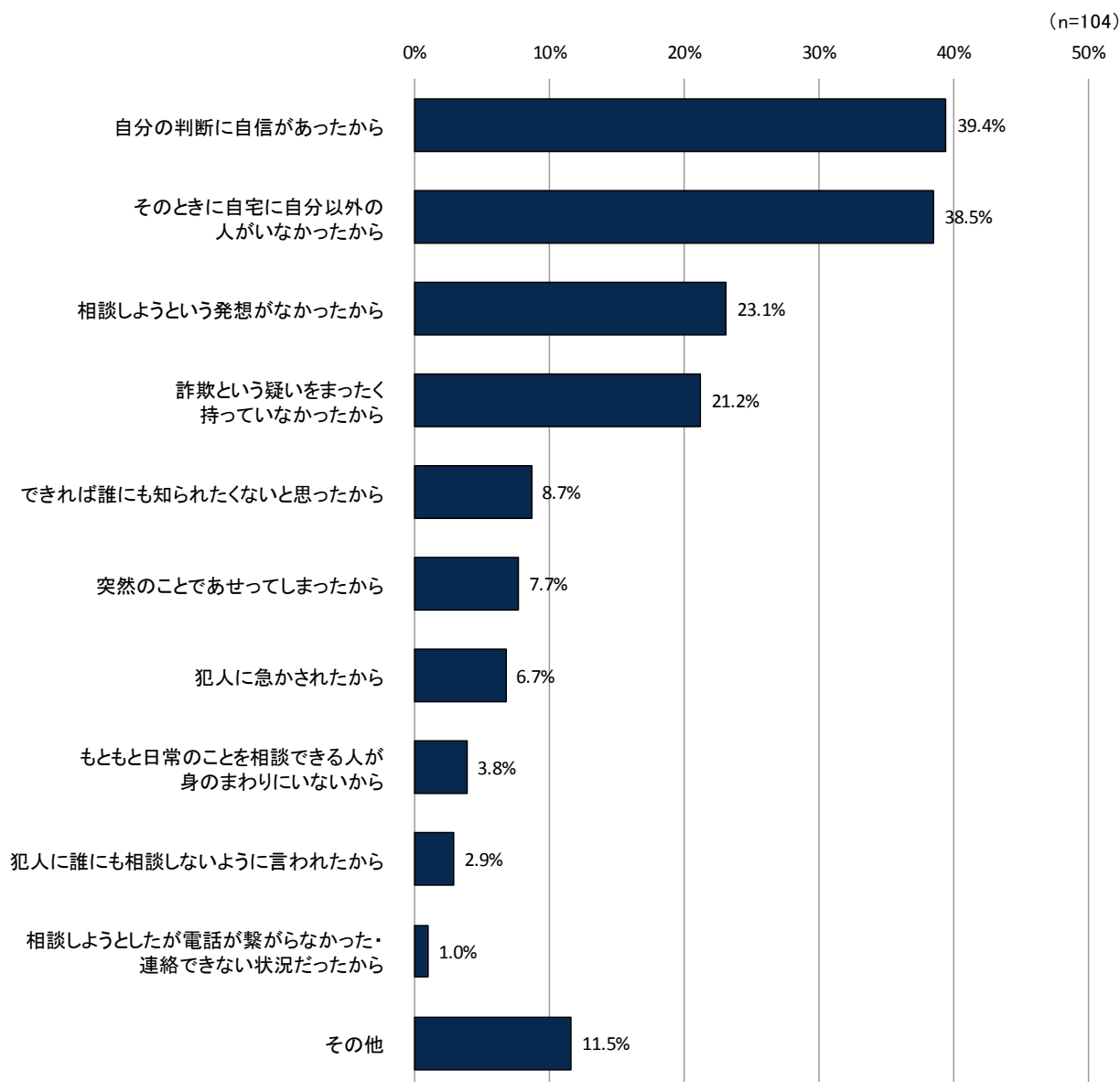


表19 誰にも相談しなかった理由(相談しなかった方のみ、複数回答)

			自分の判断に自信があったから	そのときに自宅に自分以外の人がいなかったから	相談しようという発想がなかったから	詐欺という疑いをまったく持っていなかったから	できれば誰にも知られたくないと思ったから	突然のことであせってしまったから	犯人に急かされたから	もともと日常のことを相談できる人が身のまわり にいないから	犯人に誰にも相談しないように言われたから	相談しようとしたが電話が繋がらなかった・連絡 できない状況だったから	その他
[比率の差] n=30以上の場合													
全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント													

(6) 他者からの指摘の有無および相手

詐欺の遭遇後(犯人からの電話後)に他者から「それは詐欺ではないか」との指摘があったかについて、指摘された人は51.8%、誰からも指摘されなかった人は48.2%となっている。

また、指摘があった場合に誰に指摘されたかについては、「配偶者」(22.2%)が最も高く、次いで「自分の子供」(15.1%)「犯人がなりすました対象」(10.3%)が続いている。

さらに、誰に指摘されたかを男女別で見ると、男性では「配偶者」が27.5%と最も高いが、女性では「自分の子供」が21.2%で最も高く、「配偶者」は11.5%と男性に比べて低い。

図19 詐欺の疑いを指摘した人(詐欺経験者のみ、複数回答)

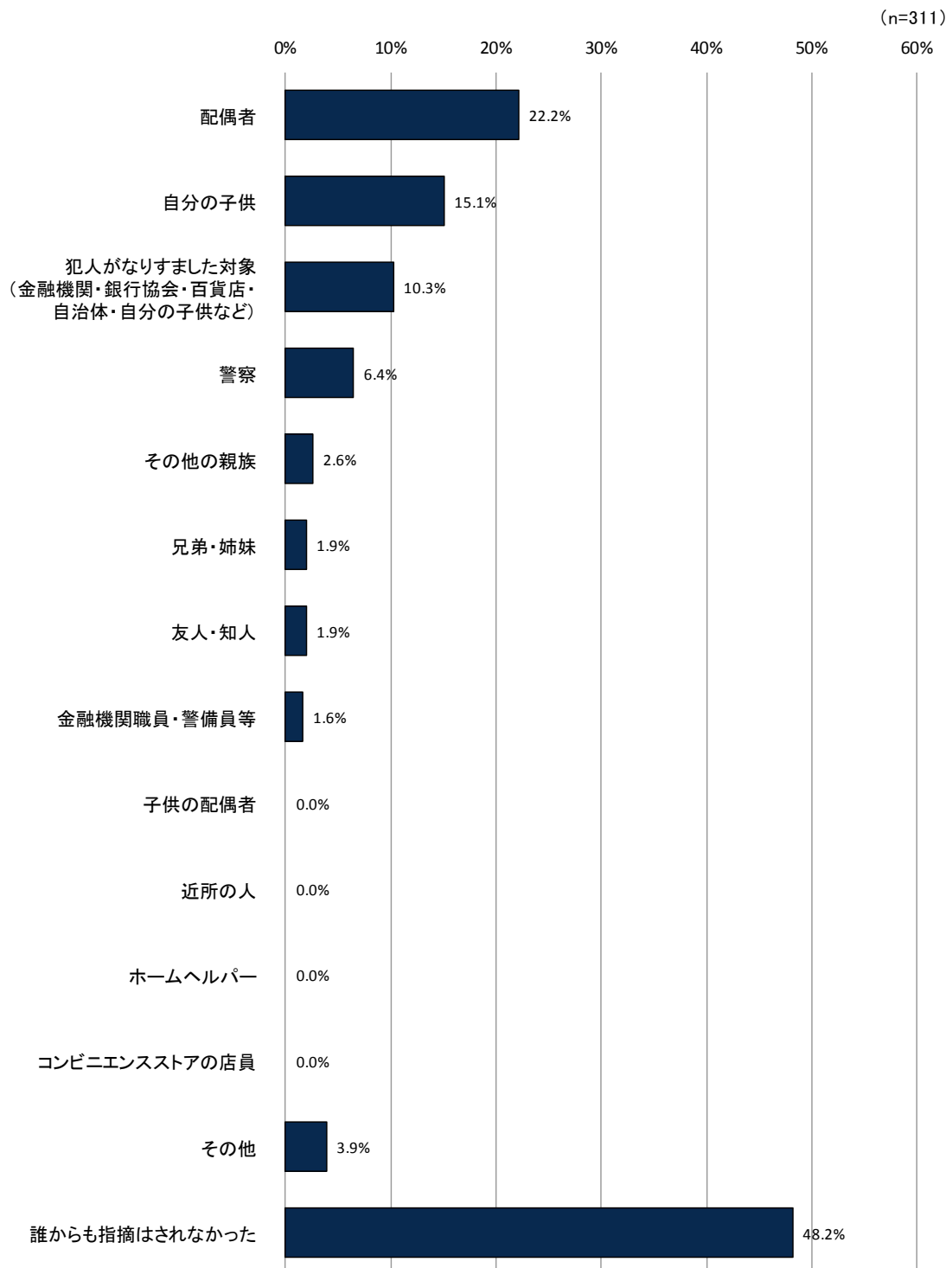


表20 詐欺の疑いを指摘した人(詐欺経験者のみ、複数回答)

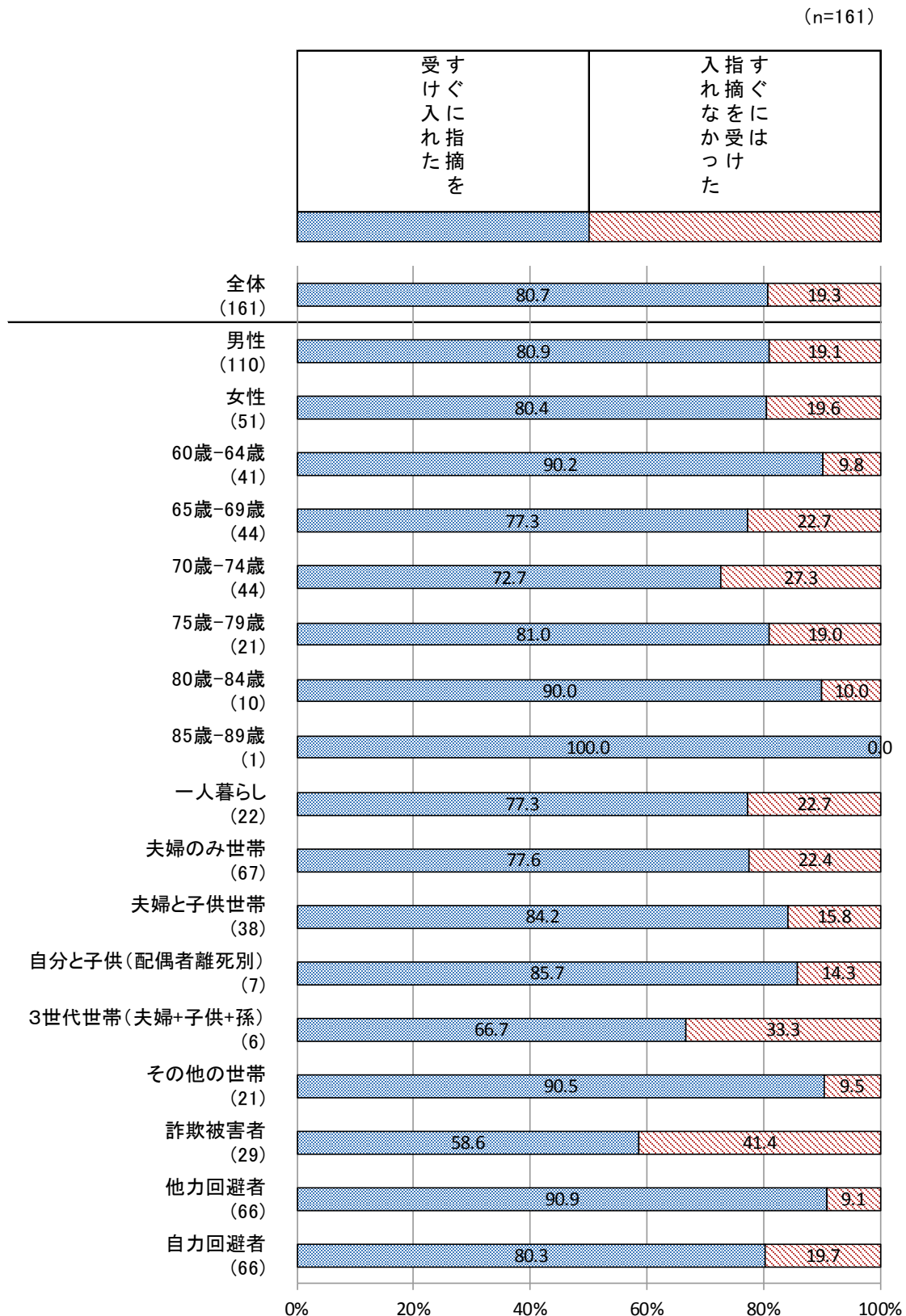
			配偶者	自分の子供	犯人がなりすました対象（金融機関・銀行協会・百貨店・自治体・自分の子供など）	警察	その他の親族	兄弟・姉妹	友人・知人	金融機関職員・警備員等	子供の配偶者	近所の人	ホームヘルパー	コンビニエンスストアの店員	その他	誰からも指摘はされなかった
[比率の差] n=30以上の場合																
全体 +10 ポイント																
全体 +5 ポイント																
全体 -5 ポイント																
全体 -10 ポイント																
全体 (311)			22.2	15.1	10.3	6.4	2.6	1.9	1.9	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	3.9	48.2
性別	男性 (207)	27.5	12.1	13.0	6.8	1.4	1.0	1.4	1.9	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.9	46.9
	女性 (104)	11.5	21.2	4.8	5.8	4.8	3.8	2.9	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	51.0
（5歳年刻み）	60歳-64歳 (95)	20.0	13.7	3.2	6.3	2.1	2.1	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	56.8
	65歳-69歳 (85)	27.1	18.8	14.1	9.4	2.4	1.2	1.2	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7	48.2
	70歳-74歳 (74)	24.3	12.2	9.5	2.7	4.1	2.7	2.7	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.4	40.5
	75歳-79歳 (39)	12.8	20.5	17.9	7.7	2.6	2.6	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	46.2
	80歳-84歳 (16)	25.0	6.3	12.5	6.3	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3	37.5
	85歳-89歳 (2)	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0
同居家族形態	一人暮らし (54)	1.9	9.3	11.1	5.6	3.7	5.6	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	59.3
	夫婦のみ世帯 (122)	25.4	10.7	14.8	7.4	1.6	0.8	2.5	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.1	45.1
	夫婦と子供世帯 (70)	35.7	17.1	11.4	5.7	0.0	1.4	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3	45.7
	自分と子供（配偶者離死別） (17)	0.0	35.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	58.8
	3世代世帯（夫婦+子供+孫） (9)	33.3	44.4	0.0	11.1	11.1	0.0	0.0	0.0	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3
	その他の世帯 (39)	23.1	17.9	0.0	7.7	7.7	2.6	2.6	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	46.2
経詐欺	詐欺被害者 (64)	12.5	12.5	9.4	4.7	1.6	1.6	3.1	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7	54.7
	他力回避者 (98)	37.8	22.4	5.1	8.2	4.1	5.1	3.1	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	32.7
	自力回避者 (149)	16.1	11.4	14.1	6.0	2.0	0.0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	55.7

(7) 他者からの指摘を受け入れたか

詐欺の遭遇後(犯人からの電話後)に他者から「それは詐欺ではないか」との指摘があった場合に、その指摘をすぐに受け入れることができたかについて、すぐに指摘を受け入れた人は 80.7%、すぐには指摘を受け入れなかった人は 19.3%となっている。

また、年齢別で見ると、すぐに指摘を受け入れた人は 70～74 歳が最も低くなっている。

図20 詐欺の指摘をすぐに受け入れたか(詐欺を指摘された方のみ、単一回答)



(8) 他者からの指摘を受け入れなかった理由

詐欺の遭遇後(犯人からの電話後)に他者から「それは詐欺ではないか」との指摘があった場合に、その指摘をすぐに受け入れることができなかった人の理由について、「詐欺という疑いをまったく持っていなかったから」が 29.0%と最も高く、次いで「家族を早く助けなければいけないと思ったから」(25.8%)「犯人に急かされていたから」(25.8%)が続いている。

図21 詐欺の指摘を受け入れなかった理由(指摘をすぐに受け入れなかった方のみ、複数回答)

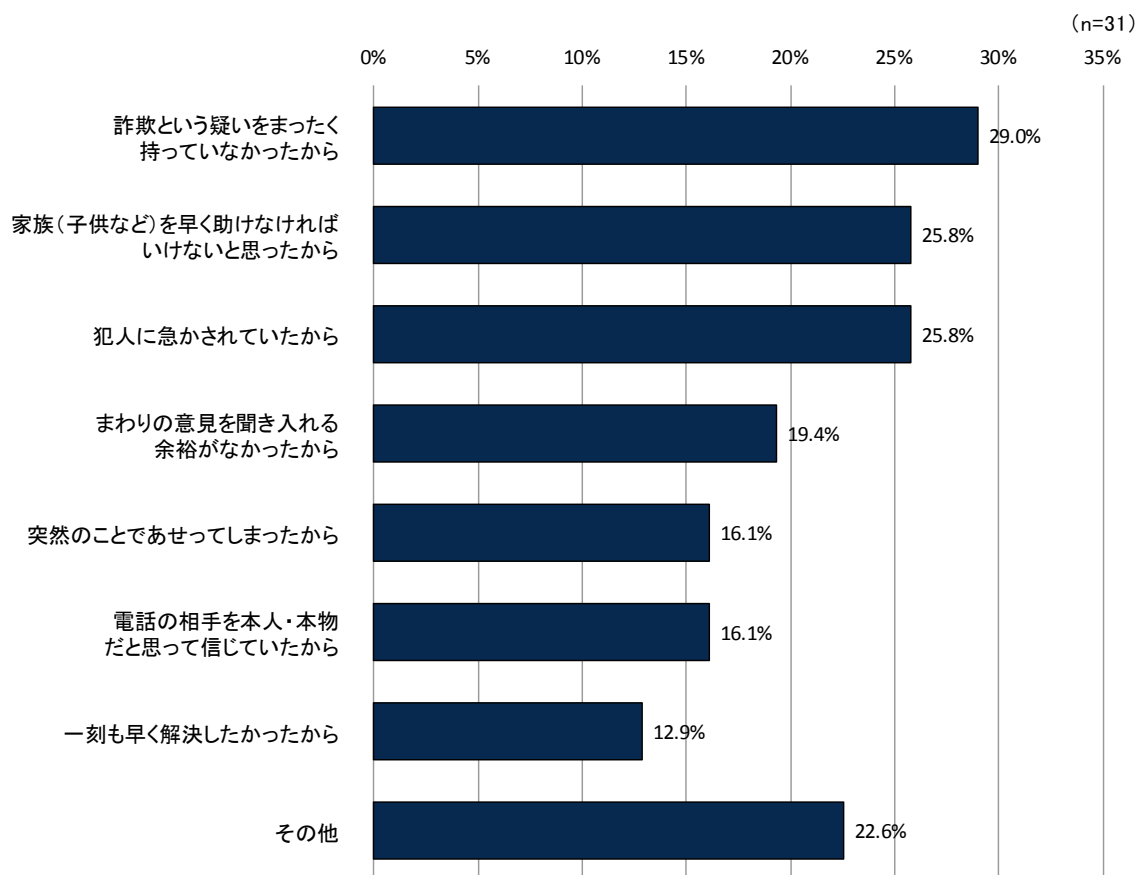


表21 詐欺の指摘を受け入れなかった理由(指摘をすぐに受け入れなかった方のみ、複数回答)

			詐欺 なかつたから	家族（子供など）を早く助けなければいけないと思ったから	犯人に急かされていたから	まわりの意見を聞き入れる余裕がなかったから	突然のことであせってしまったから	電話の相手を本人・本物だと思って信じていたから	一刻も早く解決したかったから	その他
[比率の差] n=30以上の場合										
全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント										
全体 (31)			29.0	25.8	25.8	19.4	16.1	16.1	12.9	22.6
性別	男性 (21)		28.6	33.3	33.3	19.0	14.3	23.8	9.5	23.8
	女性 (10)		30.0	10.0	10.0	20.0	20.0	0.0	20.0	20.0
（5歳年齢刻み）	60歳-64歳 (4)		0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0
	65歳-69歳 (10)		40.0	20.0	20.0	30.0	20.0	20.0	10.0	20.0
	70歳-74歳 (12)		33.3	16.7	16.7	16.7	0.0	8.3	25.0	25.0
	75歳-79歳 (4)		25.0	50.0	50.0	25.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	80歳-84歳 (1)		0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	85歳-89歳 (0)		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
同居家族形態	一人暮らし (5)		80.0	0.0	20.0	20.0	20.0	0.0	20.0	20.0
	夫婦のみ世帯 (15)		20.0	33.3	40.0	20.0	13.3	26.7	6.7	26.7
	夫婦と子供世帯 (6)		16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	16.7	33.3
	自分と子供（配偶者離死別） (1)		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	3世代世帯（夫婦+子供+孫） (2)		0.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0
	その他の世帯 (2)		50.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0
詐欺経験	詐欺被害者 (12)		66.7	33.3	33.3	41.7	16.7	25.0	0.0	16.7
	他力回避者 (6)		0.0	33.3	33.3	16.7	16.7	16.7	16.7	0.0
	自力回避者 (13)		7.7	15.4	15.4	0.0	15.4	7.7	23.1	38.5

(9) 自分が詐欺と気付いた理由

自力回避者が「自ら詐欺と気付いた理由」としては、「相手の話の内容に明らかにおかしい点があった」が 39.5%と最も高く、次いで「この詐欺の手口を事前に知っていた」(36.2%)「相手の話のつじつまが合っていなかった」(26.3%)が高い。ここでも、詐欺であるかどうかを判断するポイントとして、相手の話の論理性をもとに判断しているほか、詐欺の手口の事前知識が判断の役に立っていることがうかがわれる。

図22 自分が詐欺と気付いた理由(自力回避者のみ、複数回答)

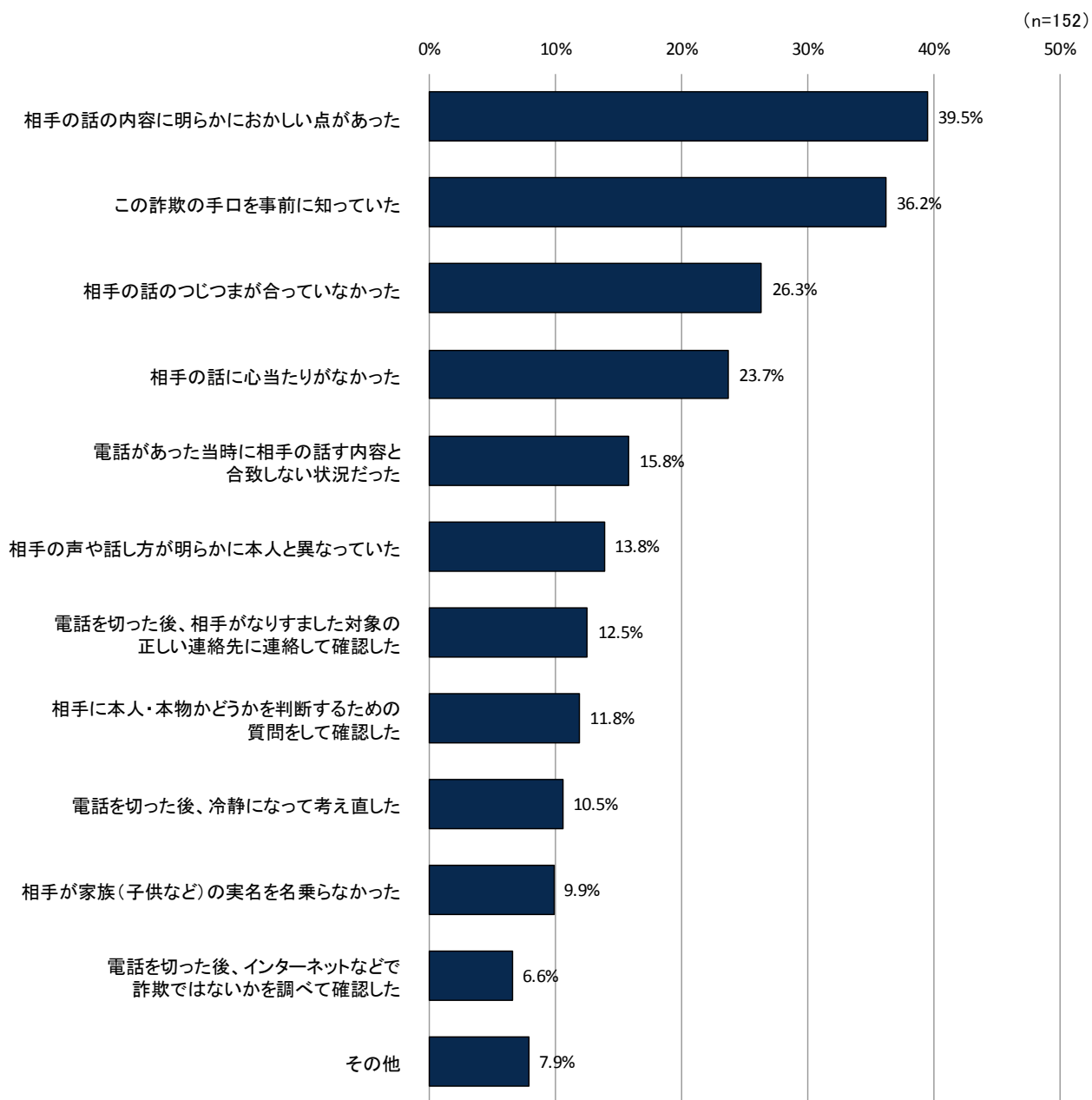


表22 自分が詐欺と気付いた理由(自力回避者のみ、複数回答)

			相手の話の内容に明らかにおかしい点があった	この詐欺の手口を事前に知っていた	相手の話のつじつまが合っていなかった	相手の話に心当たりがなかった	電話があったときに相手に話す内容と合致しない状況だった	相手の声や話し方が明らかに本人と異なっていた	電話を切った後、相手がなりすました対象の正しい連絡先に連絡して確認した	相手に本人・本物かどうかを判断するための質問をして確認した	電話を切った後、冷静になって考え直した	相手が家族（子供など）の実名を名乗らなかった	電話を切った後、インターネットなどで詐欺ではないかを調べて確認した	その他
		全体 (152)	39.5	36.2	26.3	23.7	15.8	13.8	12.5	11.8	10.5	9.9	6.6	7.9
性別	男性	(100)	38.0	36.0	26.0	24.0	13.0	13.0	16.0	11.0	13.0	9.0	6.0	6.0
	女性	(52)	42.3	36.5	26.9	23.1	21.2	15.4	5.8	13.5	5.8	11.5	7.7	11.5
（5歳年齢刻み）	60歳～64歳	(47)	38.3	40.4	31.9	17.0	12.8	14.9	4.3	10.6	10.6	10.6	10.6	4.3
	65歳～69歳	(45)	37.8	37.8	24.4	35.6	17.8	13.3	11.1	20.0	13.3	8.9	2.2	6.7
	70歳～74歳	(34)	35.3	32.4	29.4	20.6	17.6	11.8	17.6	2.9	8.8	8.8	2.9	8.8
	75歳～79歳	(18)	44.4	27.8	5.6	22.2	16.7	16.7	22.2	16.7	11.1	16.7	11.1	16.7
	80歳～84歳	(7)	71.4	28.6	42.9	14.3	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0	14.3	14.3
	85歳～89歳	(1)	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
同居家族形態	一人暮らし	(27)	37.0	37.0	22.2	25.9	22.2	18.5	14.8	7.4	22.2	3.7	7.4	7.4
	夫婦のみ世帯	(58)	50.0	31.0	29.3	20.7	13.8	10.3	13.8	13.8	3.4	13.8	8.6	8.6
	夫婦と子供世帯	(37)	32.4	37.8	32.4	21.6	13.5	16.2	13.5	13.5	13.5	10.8	5.4	8.1
	自分と子供（配偶者離死別）	(11)	45.5	27.3	18.2	45.5	27.3	18.2	0.0	9.1	9.1	9.1	0.0	0.0
	3世代世帯（夫婦+子供+孫）	(3)	0.0	66.7	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0
	その他の世帯	(16)	25.0	50.0	18.8	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	6.3	0.0	12.5
経験詐欺	詐欺被害者	(0)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	他力回避者	(0)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	自力回避者	(152)	39.5	36.2	26.3	23.7	15.8	13.8	12.5	11.8	10.5	9.9	6.6	7.9

3-5. 高齢者層の意識・行動に対する高齢者ジュニア層の影響

ここからは高齢者層の詐欺に対する意識・行動における、高齢者層の子供(＝高齢者ジュニア層)による影響の有無について分析した。

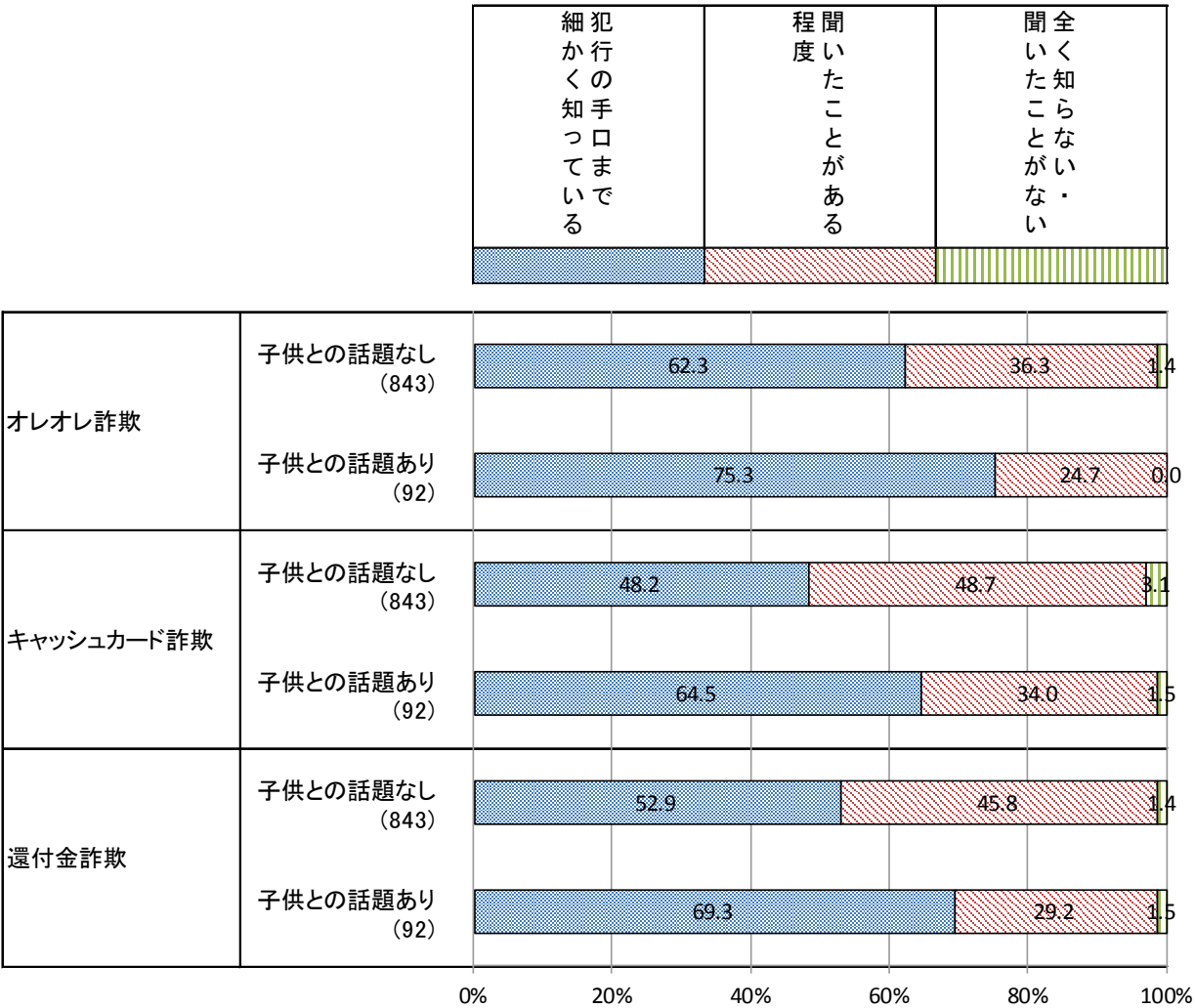
詐欺の遭遇経験者は実際に詐欺に遭遇したことがきっかけとなって意識や行動が変化していることが考えられることから、ここでは詐欺未経験者に限定して、子供の関与による詐欺に対する意識・行動の違いを分析することとした。

子供の関与については、詐欺の情報受容手段の設問で「子供との話題」を回答している人を「子供との話題あり(子供からの詐欺情報受容者)」、回答していない人を「子供との話題なし(子供からの詐欺情報の非受容者)」として層別に分類したうえで、詐欺に対する意識・行動の設問とのクロス分析を実施した。

(1) 詐欺の手口別認知状況

特殊詐欺の主要な3つの手口(オレオレ詐欺、キャッシュカード詐欺、還付金詐欺)について、「犯行の手口まで細かく知っている」と答えた割合を比較すると、「子供との話題あり」の人はオレオレ詐欺では 75.3%、キャッシュカード詐欺では 64.5%、還付金詐欺では 69.3%といずれも「子供との話題なし」の人と比較して 10 ポイント以上も高い。子供と詐欺に関するコミュニケーションを取っていることで、詐欺手口の詳細認知度が高まっていることが考えられる。

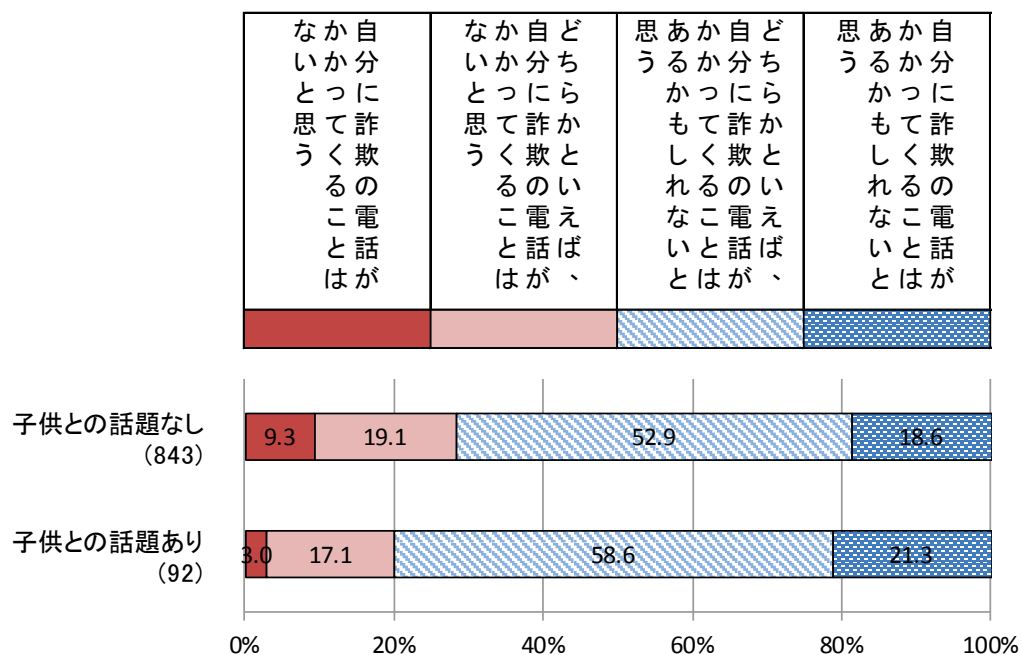
図23 詐欺の手口別認知状況(単一回答、WBあり)



(2) 詐欺接触の可能性についての意識

詐欺接触の可能性についての意識では、「子供との話題あり」の人は「自分に詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」「どちらかといえば、自分に詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」と答えた割合の合計が約 80%であり、「子供との話題なし」の人よりも 10 ポイント近く高くなっている。

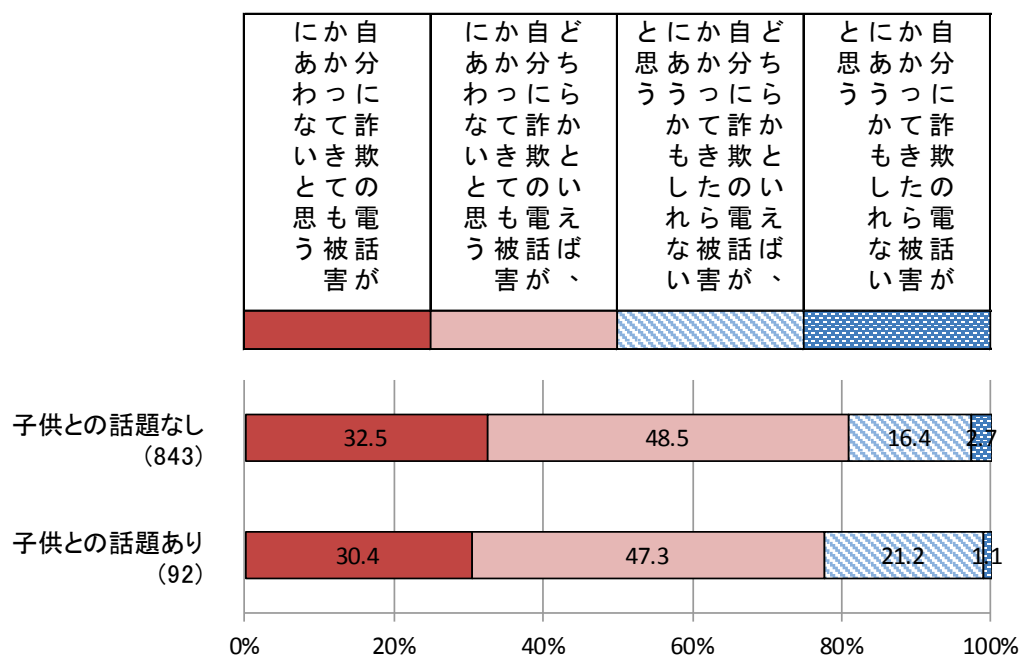
図24 詐欺接触の可能性についての意識(単一回答、WBあり)



(3) 詐欺被害の可能性についての意識

詐欺被害の可能性についての意識では、「子供との話題あり」「子供との話題なし」の間に大きな差は見られないが、「自分に詐欺の電話がかかってきたら被害にあうかもしれないと思う」「どちらかといえば、自分に詐欺の電話がかかってきたら被害にあうかもしれないと思う」と答えた割合の合計は「子供との話題あり」のほうがわずかに高い。

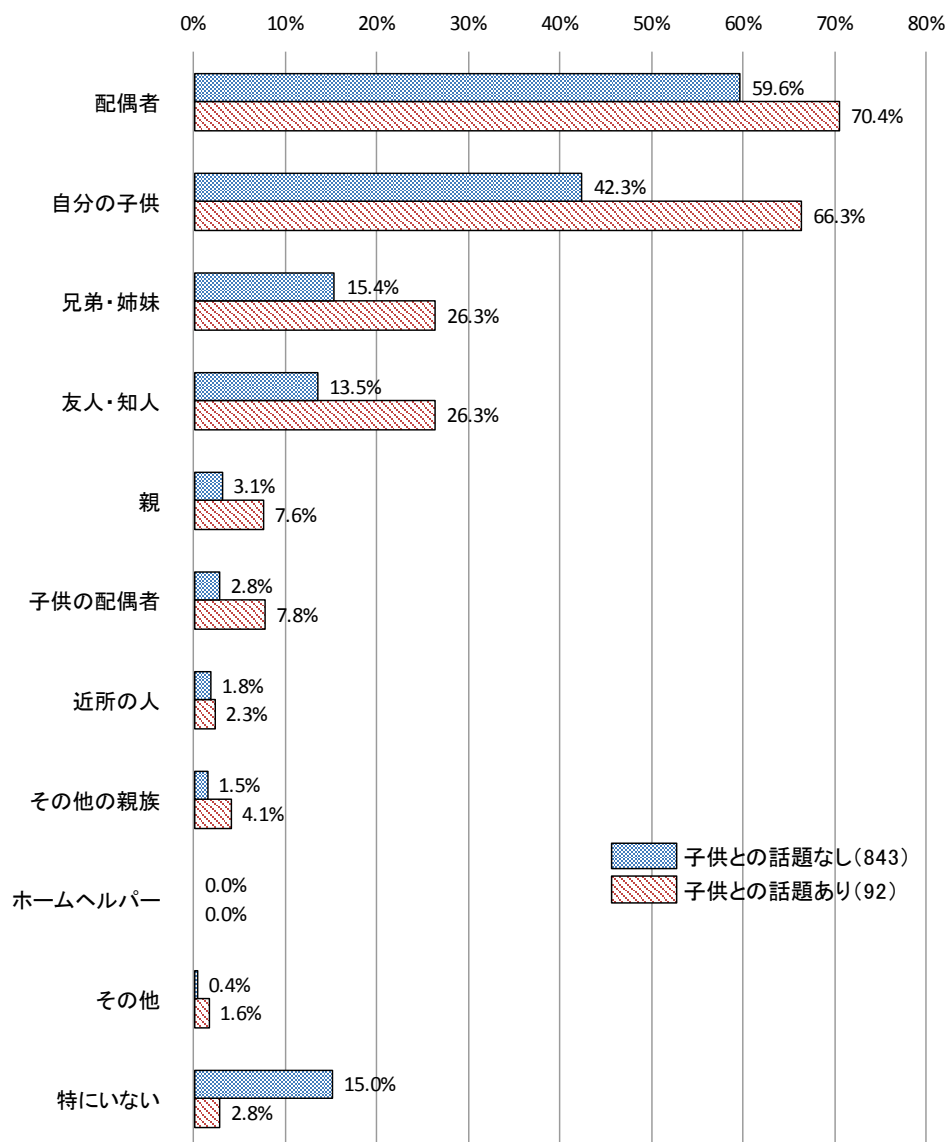
図25 詐欺被害の可能性についての意識(単一回答、WBあり)



(4) プライベートな問題があった場合の相談相手

プライベートな問題があった場合の相談相手については、全体的に「子供との話題あり」の方が高く、特に上位の「配偶者」「自分の子供」「兄弟・姉妹」「友人・知人」は10～20ポイント以上高い。また、「特にいない」と答えた割合は「子供との話題なし」(15.0%)「子供との話題あり」(2.8%)となっており、こちらも大きく差が見られる。

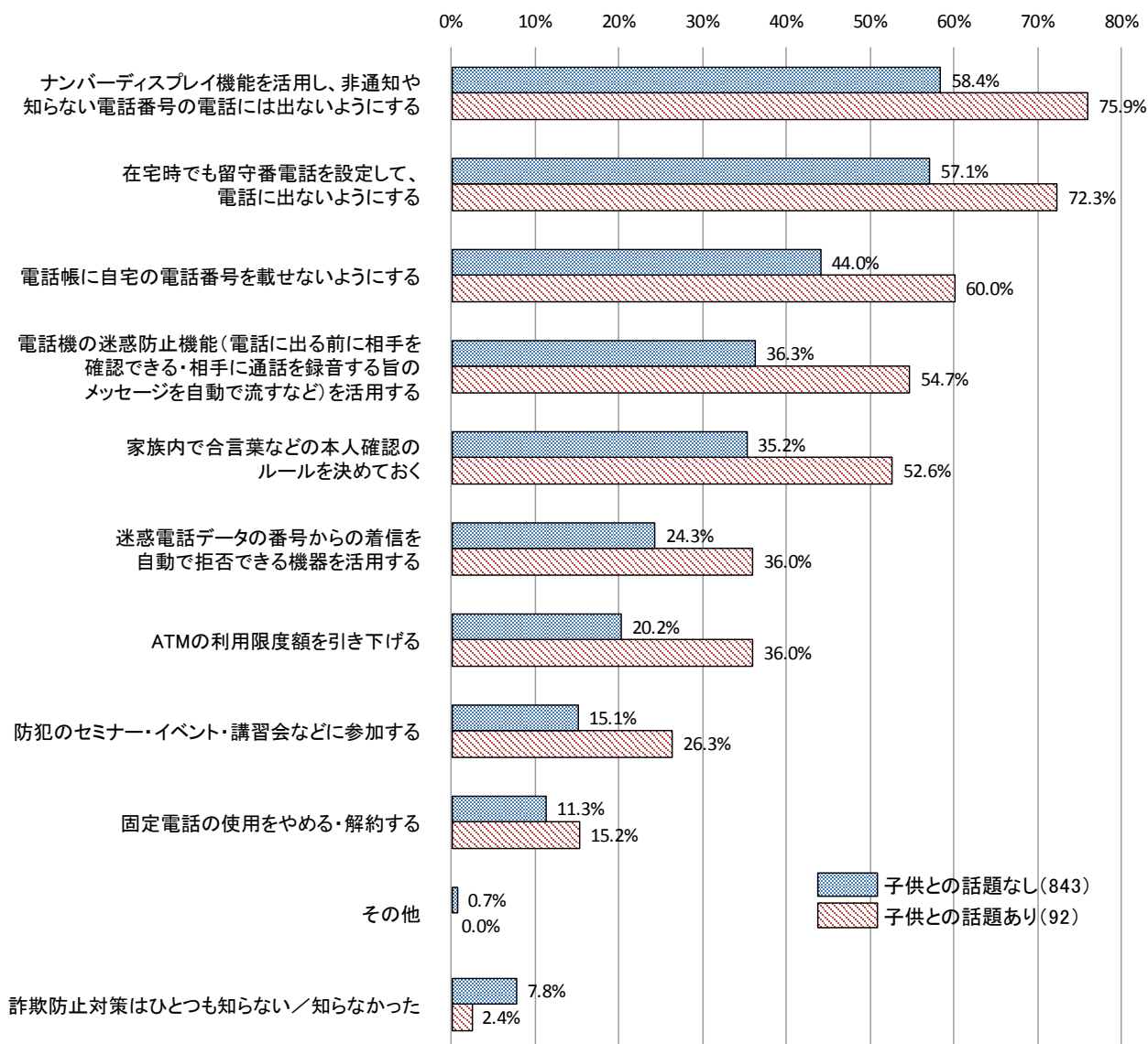
図26 プライベートな問題があった場合の相談相手(複数回答、WBあり)



(5) 詐欺防止対策の認知状況

詐欺防止対策の認知状況については、「子供との話題あり」のほうが「子供との話題なし」に比べて「その他」を除くすべての項目で概ね 10～20 ポイント近く高くなっている。

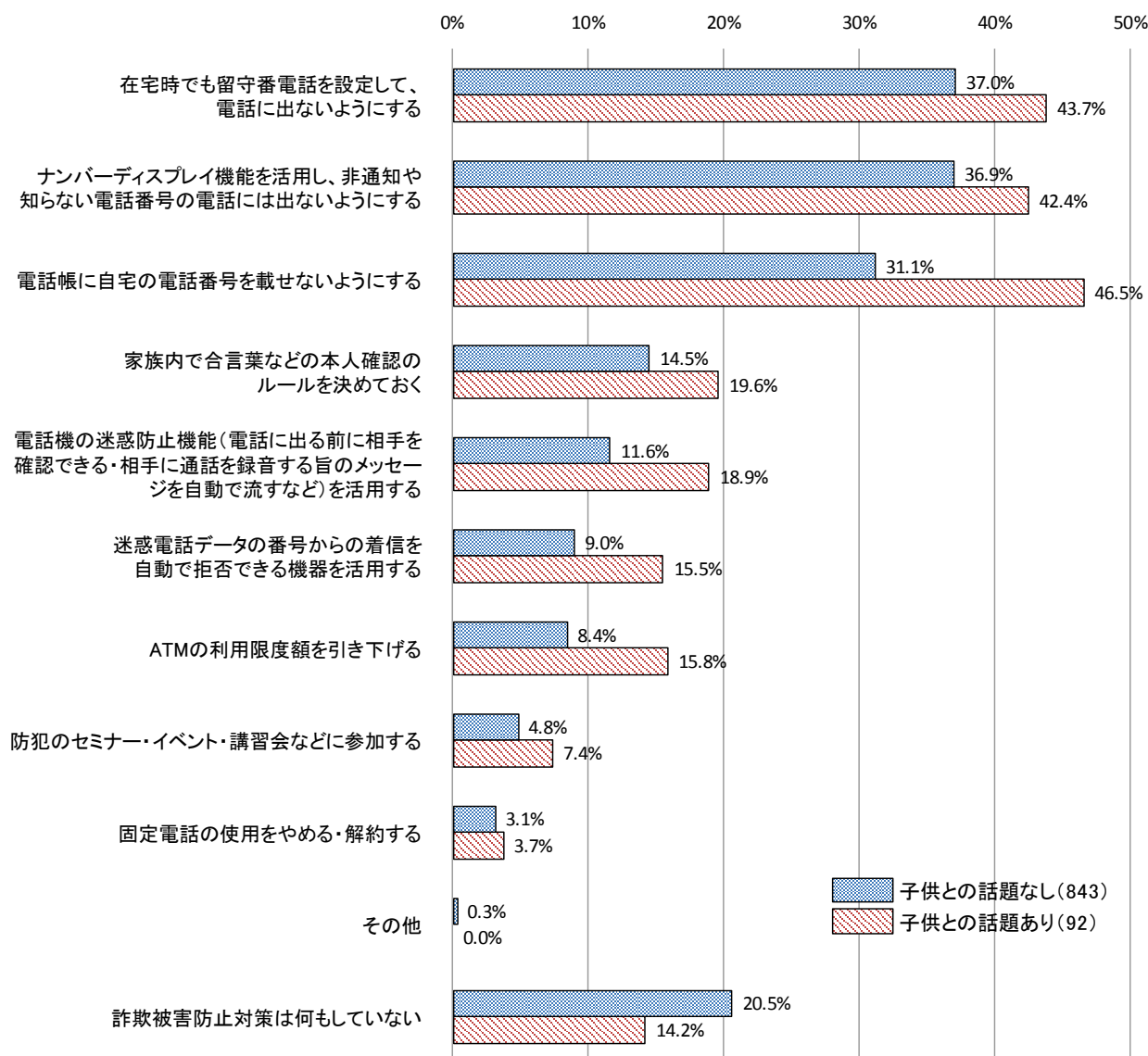
図27 認知している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)



(6) 詐欺防止対策の実施状況

詐欺防止対策の実施状況についても、「子供との話題あり」のほうが「子供との話題なし」に比べて「その他」を除くすべての項目で実施率が高くなっている。また、「詐欺被害防止対策は何もしていない」と答えた割合は「子供との話題あり」が 14.2%、「子供との話題なし」は 20.5%となっており、こちらも 5 ポイント以上の差が見られる。

図28 実施している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)



3-6. 被害者・回避者・未経験者の差異分析

(1) 外的要因・環境要因

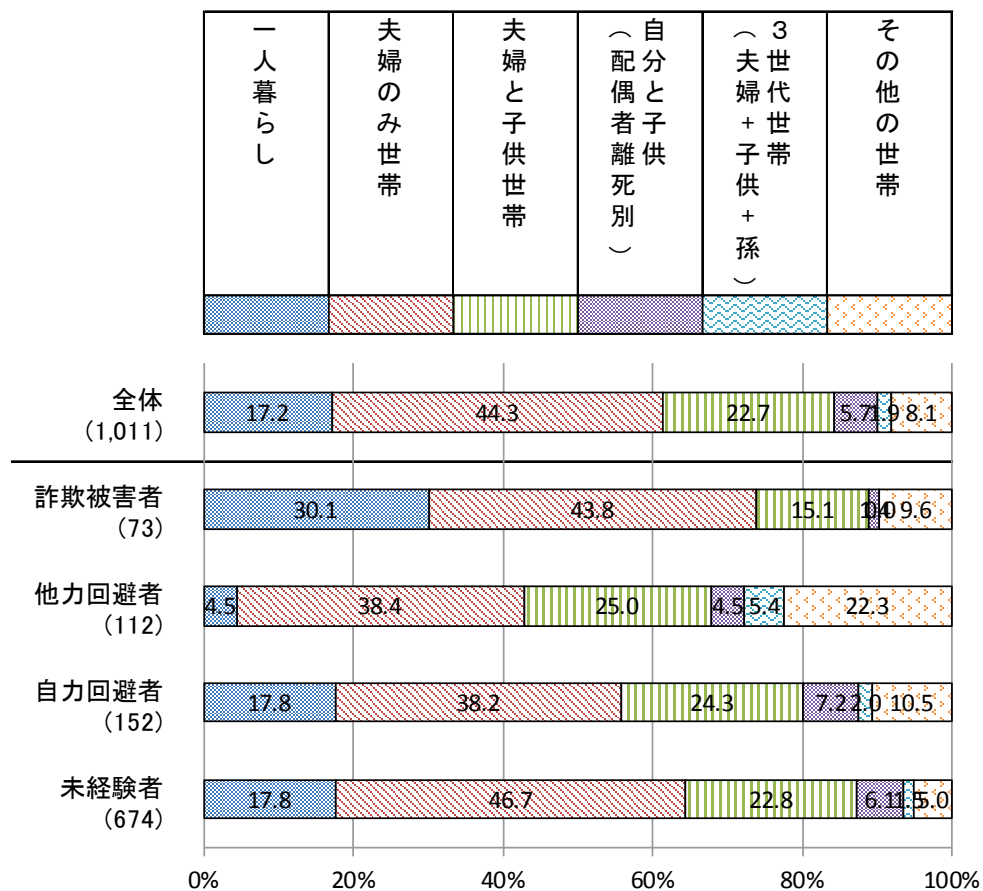
① 同居家族構成

ここからは、詐欺の遭遇経験別に分類された、詐欺被害者・他力回避者・自力回避者・未経験者の4グループを対象として、グループ間にどのような差異があるかを分析した。

まず、高齢者自身を取り巻く外的要因・環境要因のひとつである同居家族構成での差異を比較したところ、詐欺被害者は「一人暮らし」の割合が比較的高いが(30.1%)、逆に他力回避者は「夫婦と子供世帯」「自分と子供」「3世代世帯」「その他の世帯」など、誰かと一緒に暮らしている世帯の割合が高くなっており、同居家族の存在が詐欺被害の抑止力になっていることがうかがわれる。また、自力回避者は目立った特徴は見られなかった。

図29 同居家族構成(単一回答)

(n=1,011)



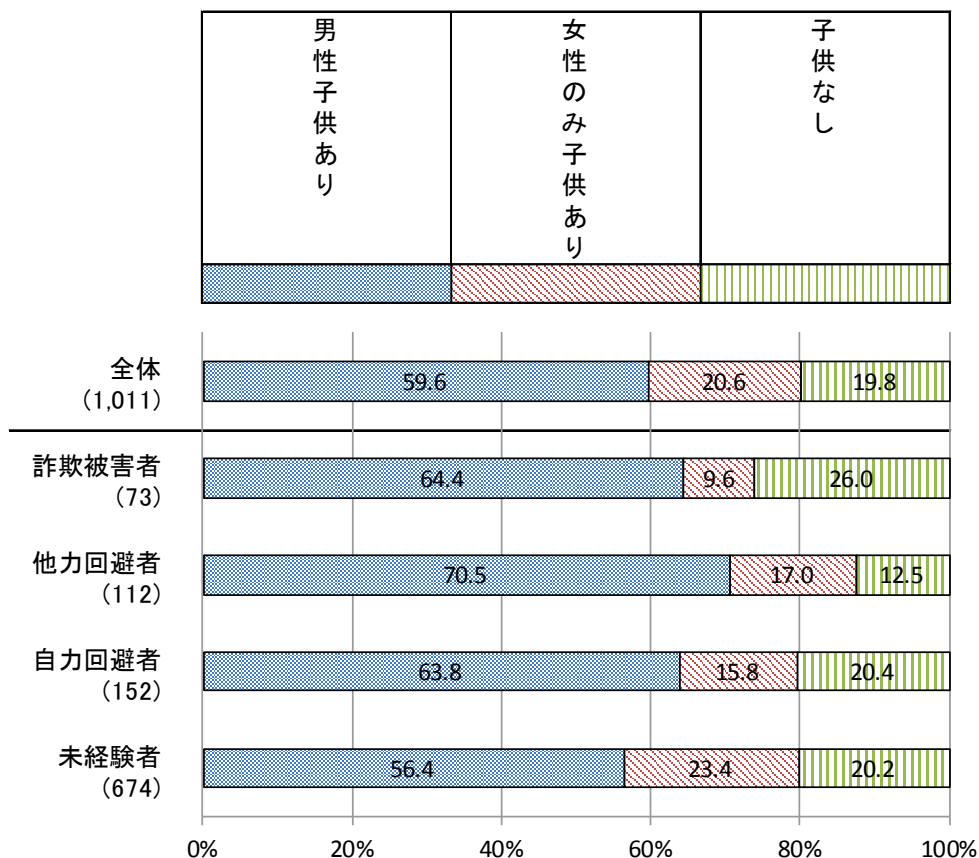
② 子供の有無と性別

子供の有無および性別での差異を比較したところ、男性子供ありの割合は詐欺被害者 64.4%、他力回避者 70.5%、自力回避者 63.8%となっており、詐欺被害者と自力回避者の間には大きな差異は見られない。

このことから、男性の子供または孫がいることはオレオレ詐欺の対象としての前提条件にはなるものの、逆に男性の子供または孫がいなくてもその他の手口の対象にはなりうることから、被害者になる確率が大きく下がるわけではない(安心はできない)という示唆がうかがわれる。

図30 子供の有無と性別(単一回答)

(n=1,011)

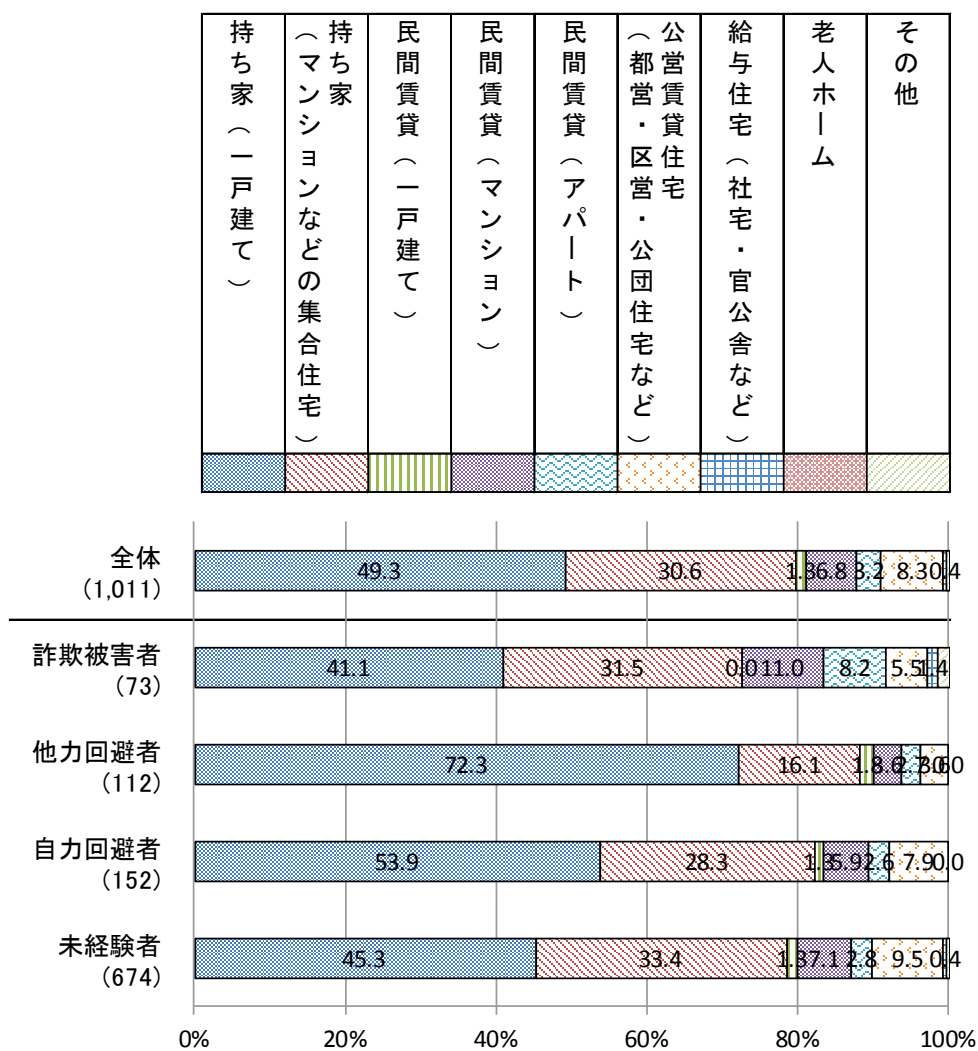


③ 住居形態

住居形態での差異を比較したところ、詐欺被害者はその他のグループに比べて「持ち家（一戸建て）」の割合が低く（41.1%）、他力回避者と自力回避者は「持ち家（一戸建て）」がそれぞれ 72.3%、53.9%と詐欺被害者より高くなっている。

図31 住居形態（単一回答）

（n=1,011）



④ 周囲とのコミュニケーション

周囲とのコミュニケーションを比較したところ、「直接会う」において、詐欺被害者は他力回避者・自力回避者に比べて1ヶ月に1回以上の割合が低く、直接会う頻度が低い傾向がみられる。

また、「電話」「メール・SNS」において、詐欺被害者は他力回避者・自力回避者に比べて週に1回以上の割合ではやや低い傾向がみられるが、1ヶ月に1回以上の割合で比較すると逆にやや高くなっている。

図32 子供とのコミュニケーション(直接会う)(最も頻度の低い子供について、子供ありのみ、単一回答)

(n=811)

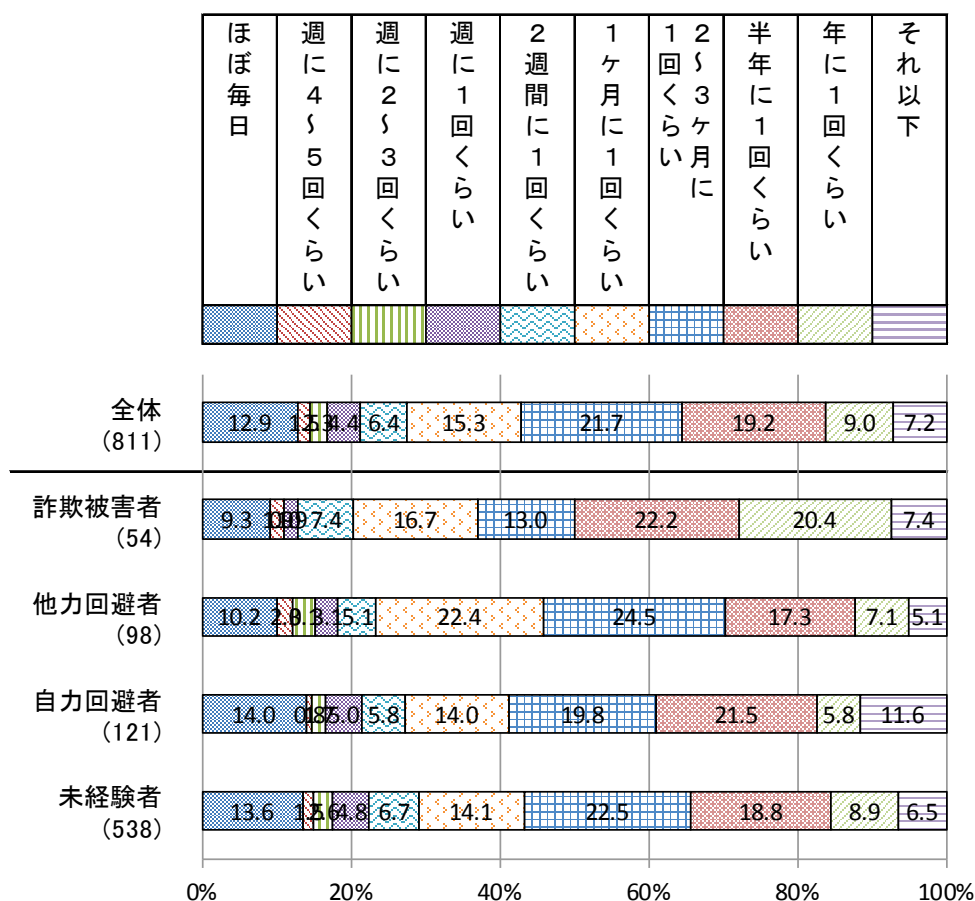


図33 子供とのコミュニケーション(電話)(最も頻度の低い子供について、同居以外のみ、単一回答)

(n=693)

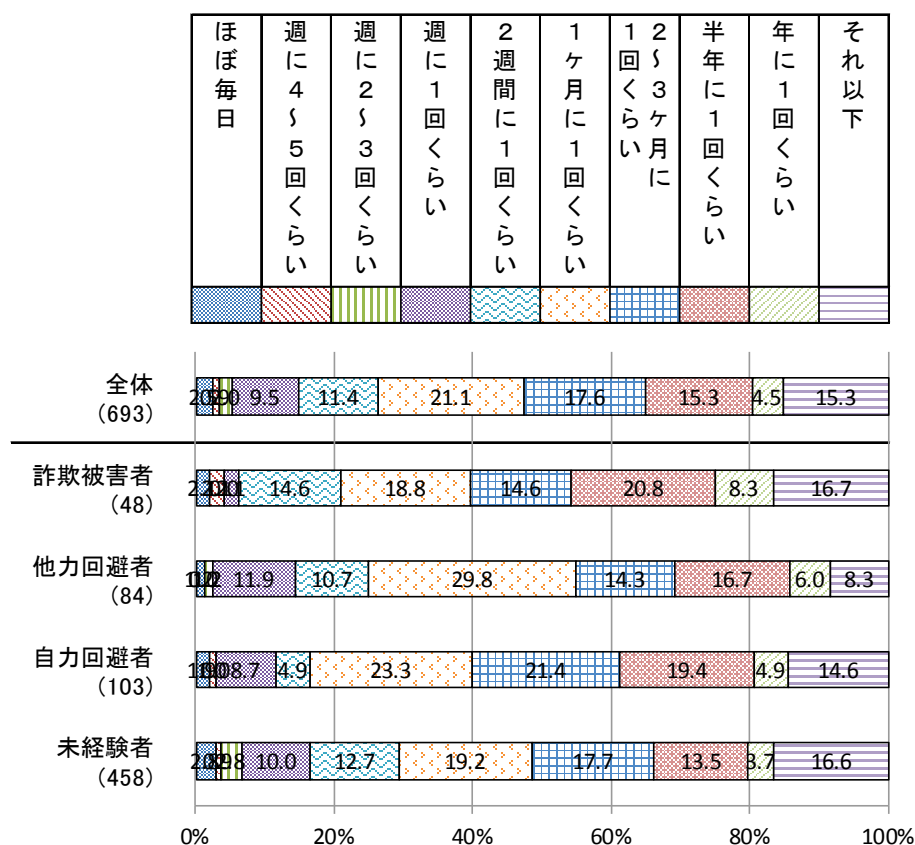


図34 子供とのコミュニケーション(メール・SNS)(最も頻度の低い子供について、同居以外のみ、単一回答)

(n=693)

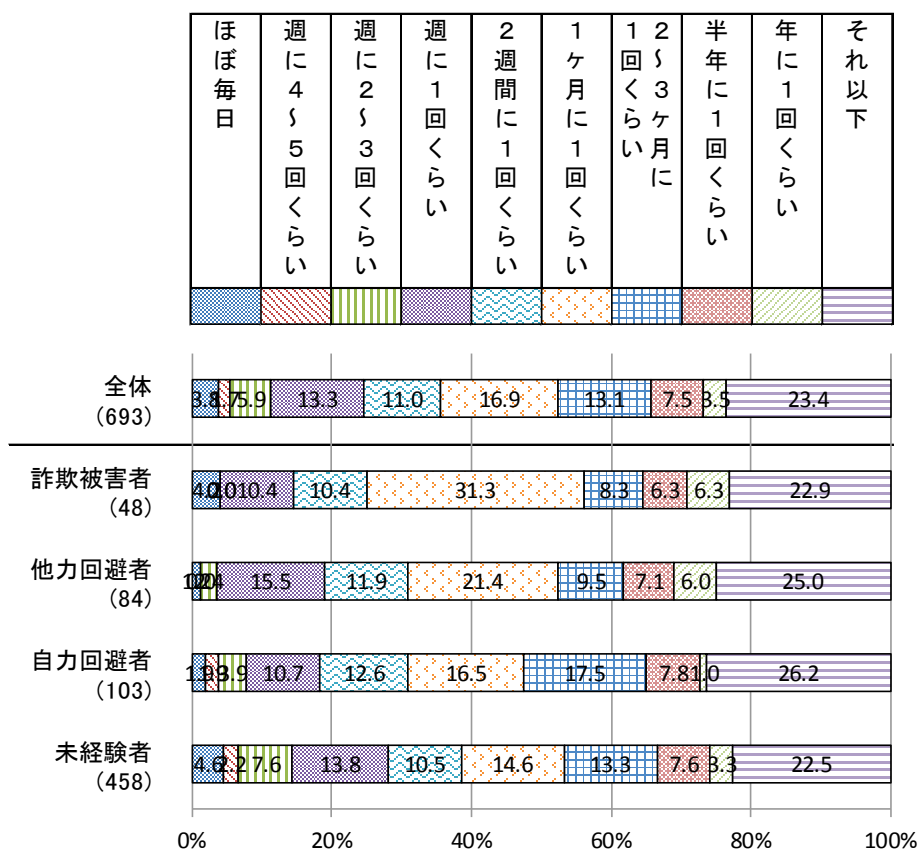
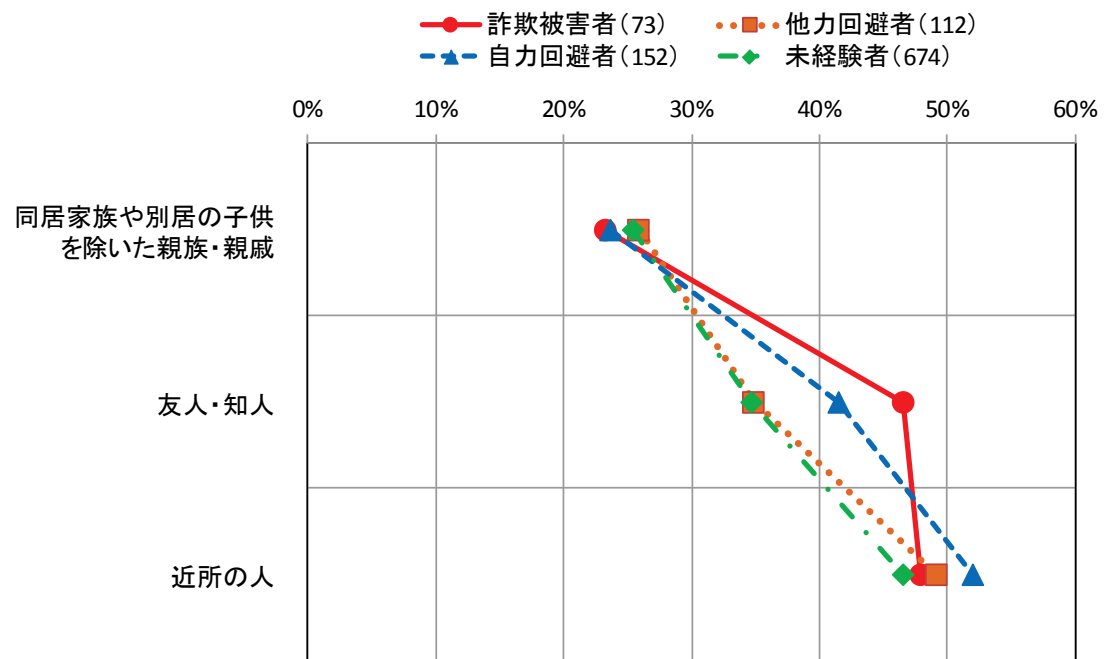


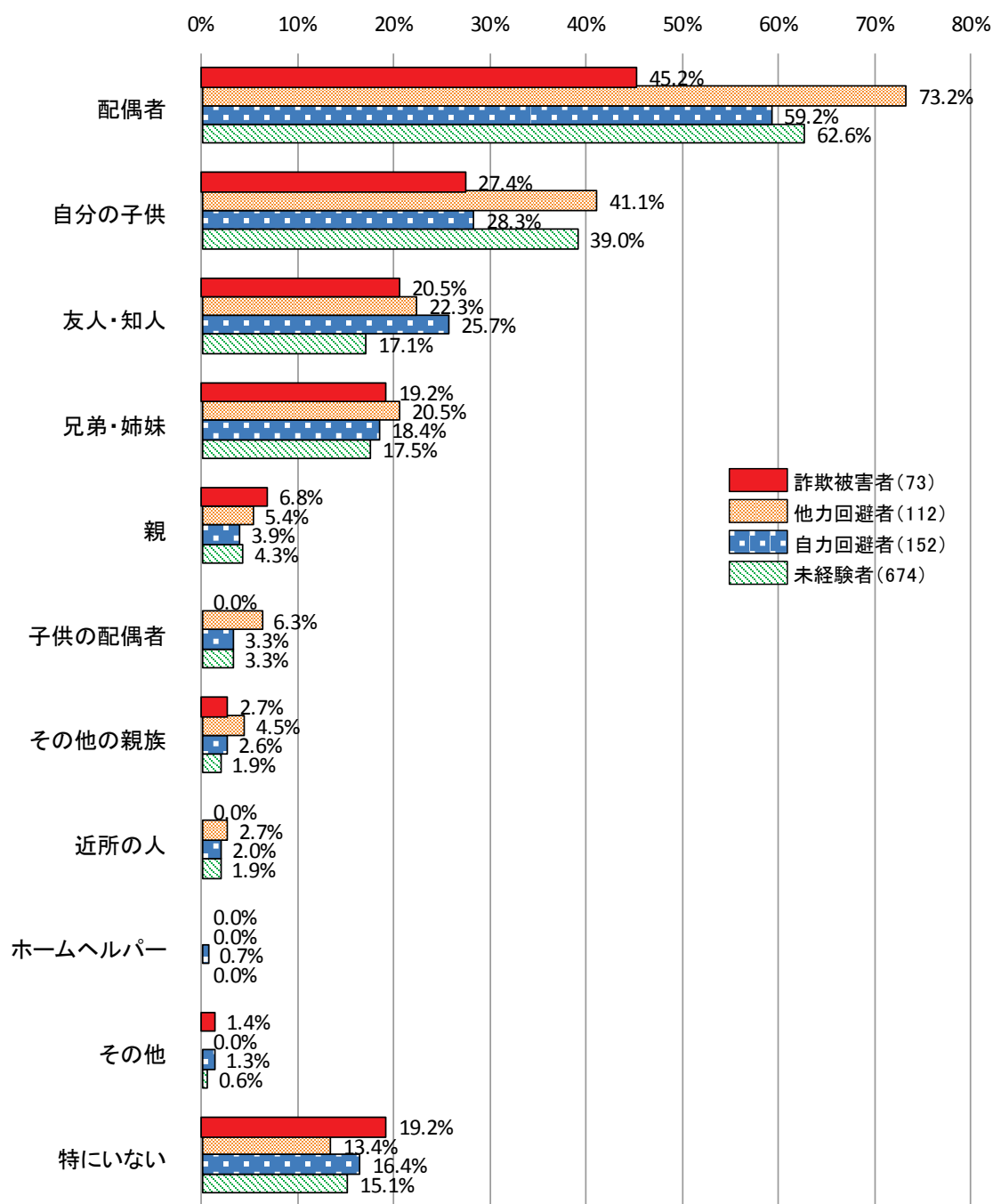
図35 親族・友人知人・近所とのコミュニケーション(連絡を取る頻度が週1回以上、単一回答)



⑤ プライベートな問題の相談相手

プライベートな問題の相談相手について、詐欺被害者では「配偶者」(45.2%)、「自分の子供」(27.4%)が他と比べて低くなっているほか、「特にいない」が19.2%と他と比べて若干高くなっており、概して詐欺被害者は、何か問題が起きた場合の相談相手が他のグループに比べて少ないという傾向が見られる。

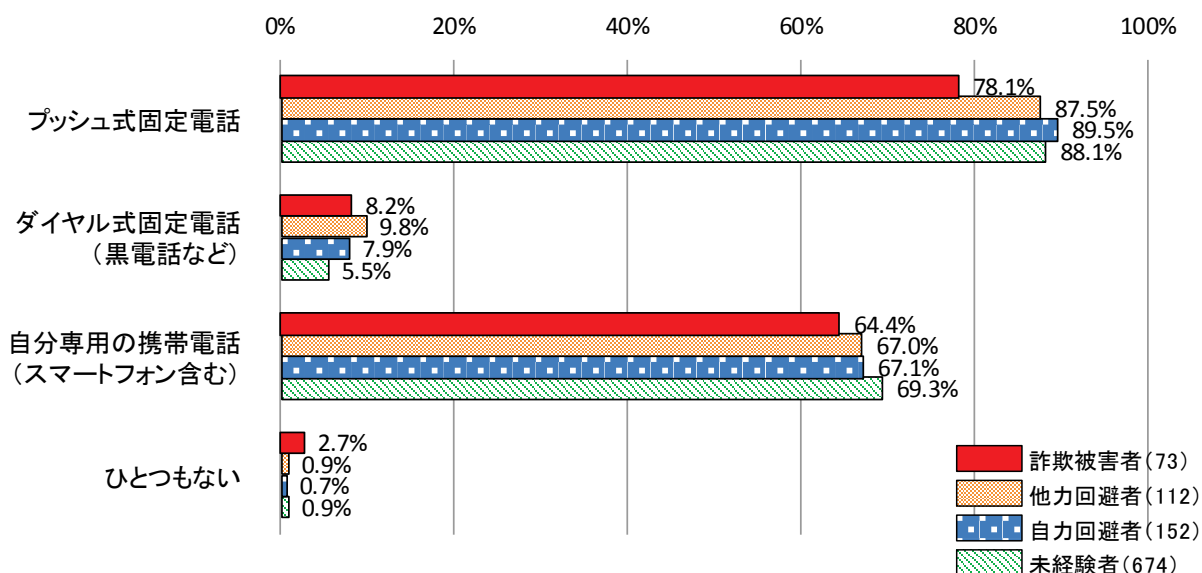
図36 プライベートな問題があった場合の相談相手(複数回答)



⑥ 自宅の通信環境

自宅の通信環境を比較したところ、詐欺被害者は「プッシュ式固定電話」「ダイヤル式固定電話」の合計が 86.3% となっており、固定電話の保有率が他のグループに比べてやや低い。ただしこの数値は詐欺の遭遇前ではなく現在の通信環境を聞いたものであり、詐欺被害者の固定電話保有率がやや低いのは詐欺の被害に遭った後、被害防止対策として固定電話をやめた人がいるためと考えられる。

図37 自宅の通信環境(複数回答)



⑦ ナンバーディスプレイ機能の有無と利用状況

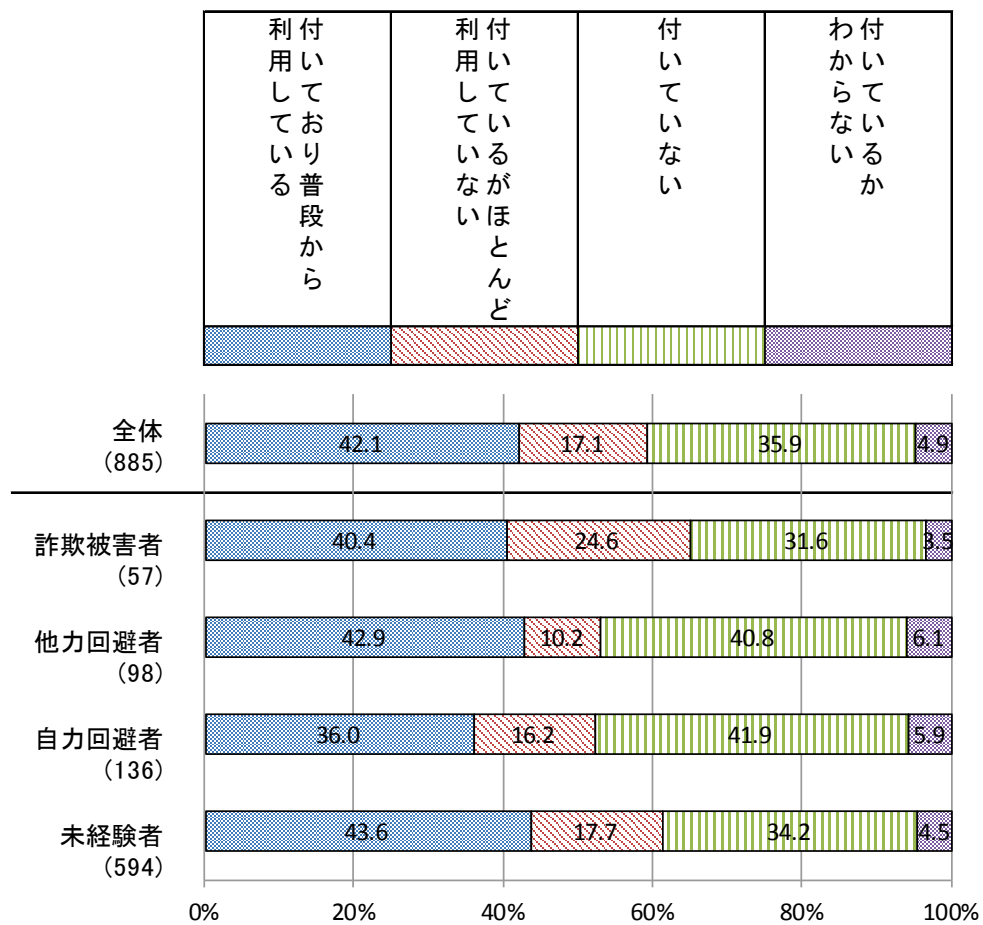
プッシュ式固定電話の利用者における各種機能の利用状況を比較したところ、ナンバーディスプレイについては未経験者の利用率が4グループのなかで最も高くなっている(43.6%)。

また、詐欺被害者と他力回避者は自力回避者に比べて利用率がやや高くなっている。

これについても詐欺の遭遇前ではなく現在の通信環境を聞いたものであるため、詐欺被害者・他力回避者の利用率が高いのは、詐欺に遭遇した後に被害防止対策としてナンバーディスプレイ機能を活用する人が増えたためと考えられる。

図38 ナンバーディスプレイ機能の有無と利用状況(プッシュ式利用者のみ、単一回答)

(n=885)



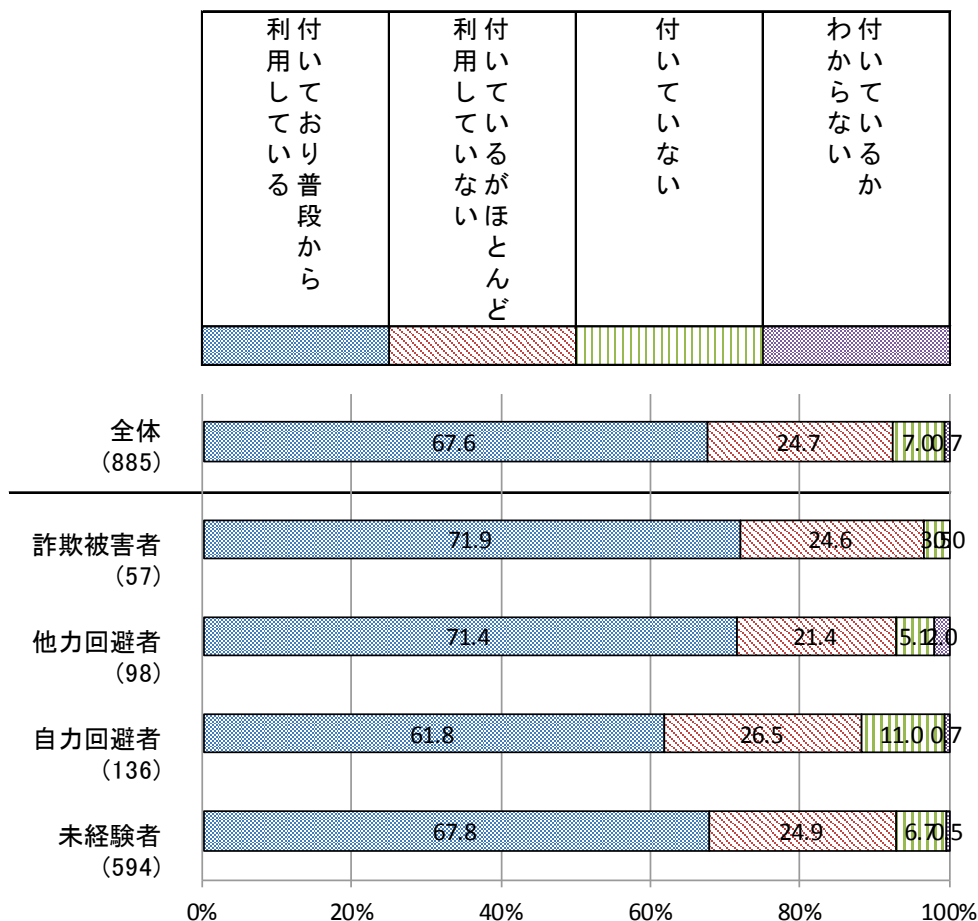
⑧ 留守番電話機能の有無と利用状況

同じく各種機能の利用状況について、留守番電話機能についても詐欺被害者および他力回避者の利用率が自力回避者に比べて高くなっている(各 71.9%、71.4%)。

これについても、詐欺被害者・他力回避者の利用率が高いのは、詐欺に遭遇した後に被害防止対策として留守番電話機能を活用する人が増えたためと考えられる。

図39 留守番電話機能の有無と利用状況(プッシュ式保有者のみ、単一回答)

(n=885)



⑨ 迷惑防止機能の有無と利用状況

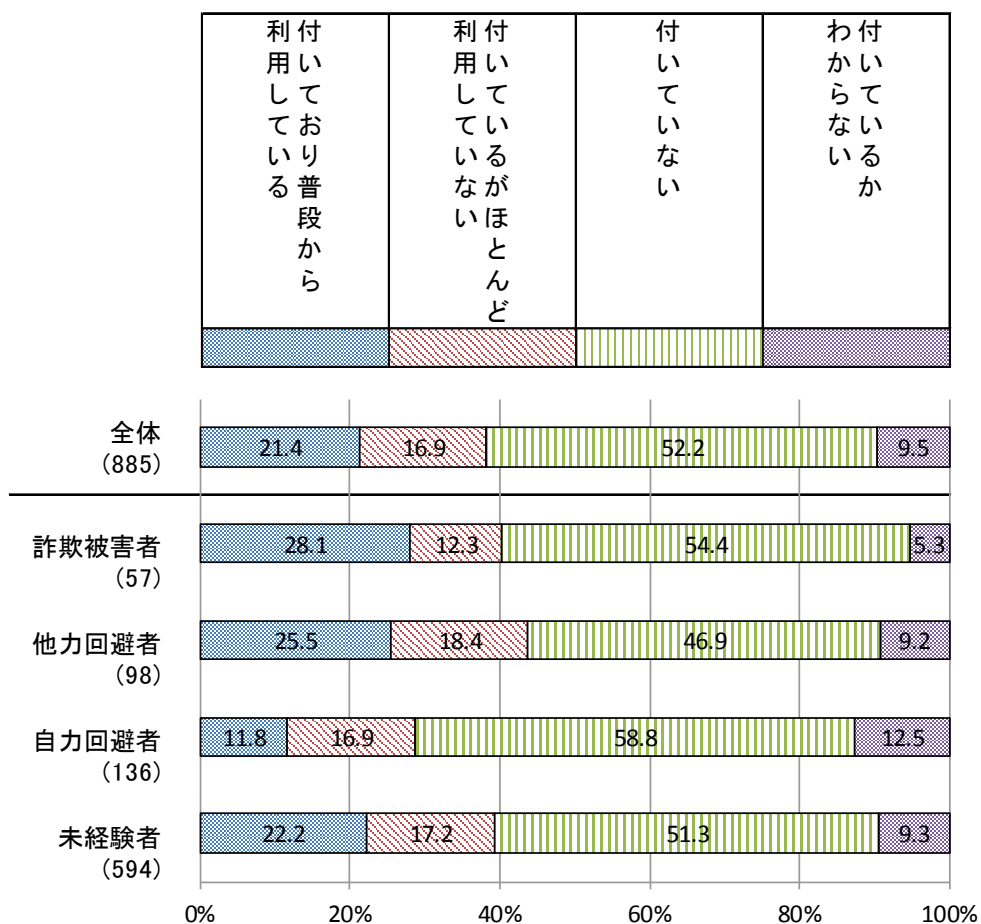
同じく各種機能の利用状況について、迷惑防止機能についても詐欺被害者、他力回避者の利用率が自力回避者に比べて高くなっている(各 28.1%、25.5%)。

これについても、詐欺被害者・他力回避者の利用率が高いのは、詐欺に遭遇した後に被害防止対策として迷惑防止機能を活用する人が増えたためと考えられる。

また、自力回避者の利用率は4グループのなかで 10 ポイント以上低くなっているが、これは自力で回避できた経験から、迷惑防止機能の必要性に対する認識が薄れてしまった可能性も考えられる。

図40 迷惑防止機能の有無と利用状況(プッシュ式利用者のみ、単一回答)

(n=885)



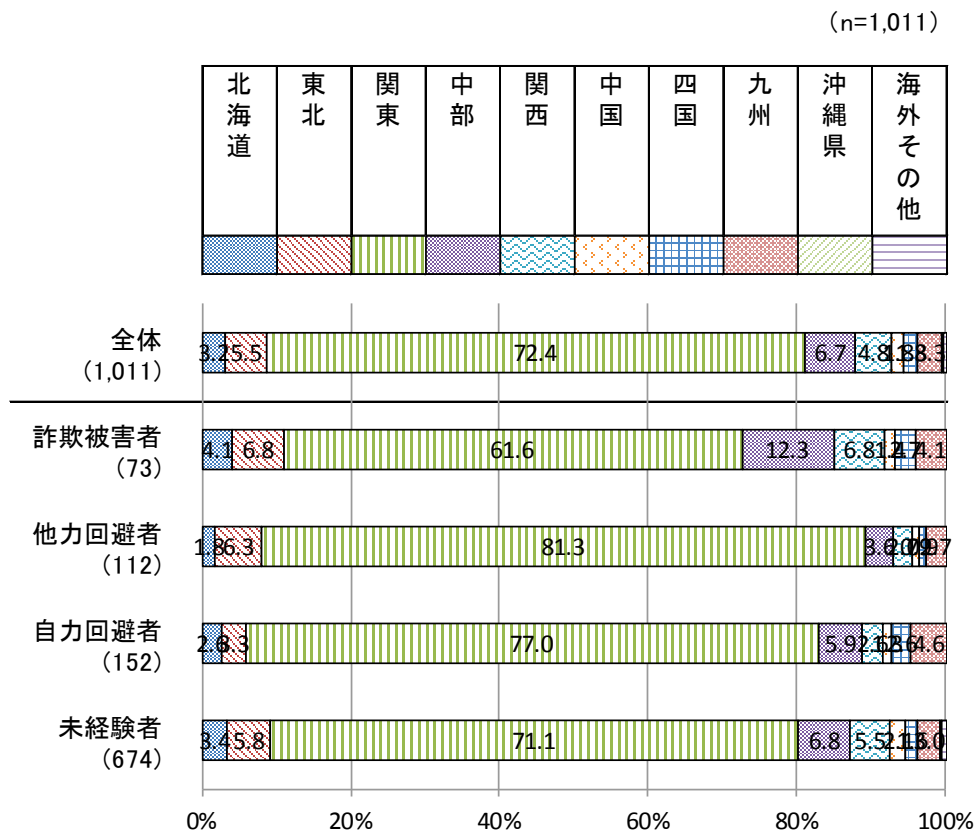
(2) 内的要因(個人属性・性格類型・行動パターン)

① 出身地域

ここからは、高齢者本人の個人属性や性格類型・行動パターンなどの内的要因における4グループ間の差異について比較している。

まず出身地については、詐欺被害者は「関東」が61.6%と他のグループに比べて低く、「中部」(12.3%)の地域が比較的高くなっている。

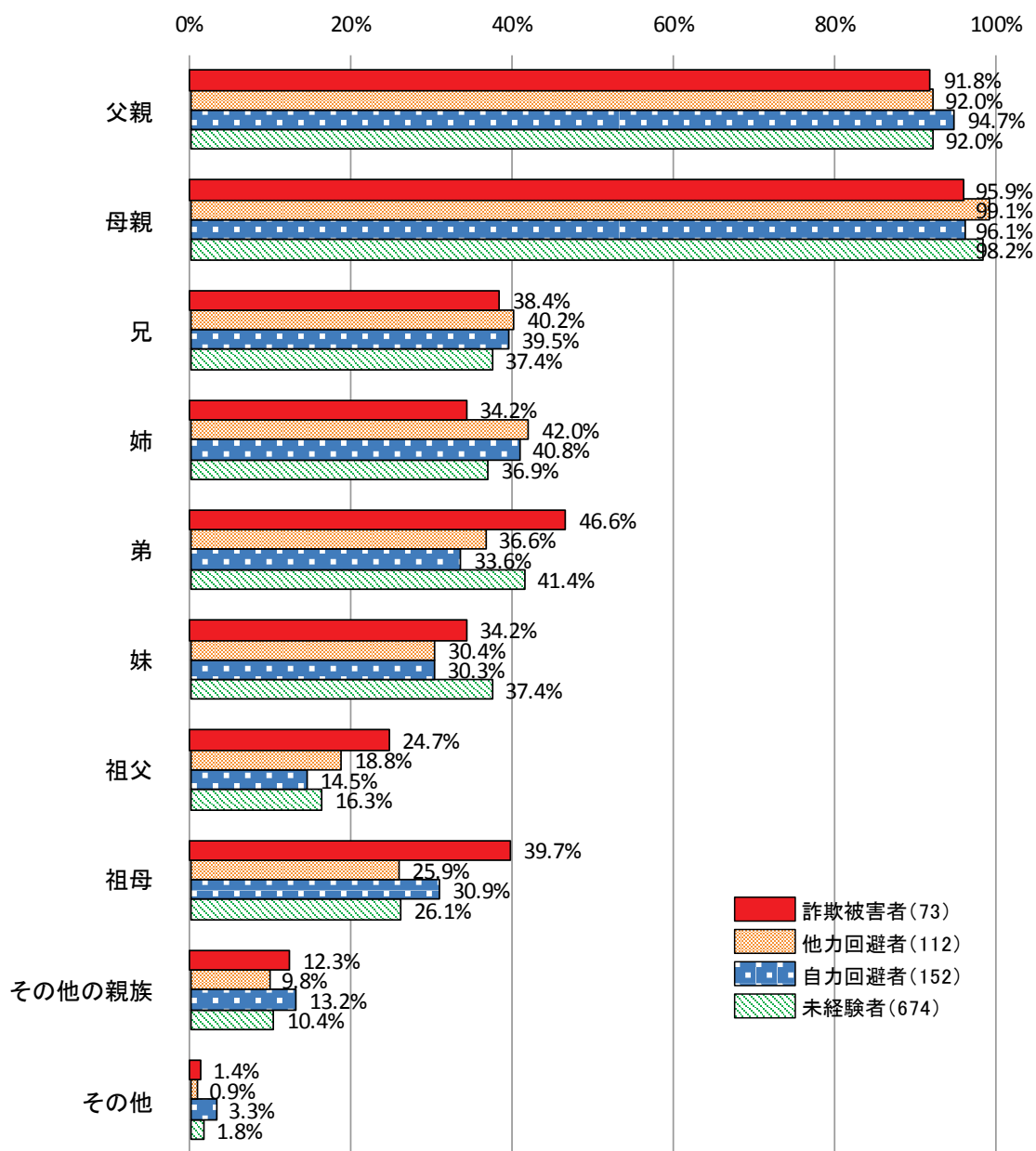
図41 出身地域(単一回答)



② 子供の頃の同居家族

子供の頃の同居家族については、詐欺被害者は「祖父」「祖母」がそれぞれ 24.7%、39.7%、「弟」が 46.6%と比較的高いが、そのほかは大きな差異は見られない。

図42 子供の頃の同居家族(複数回答)

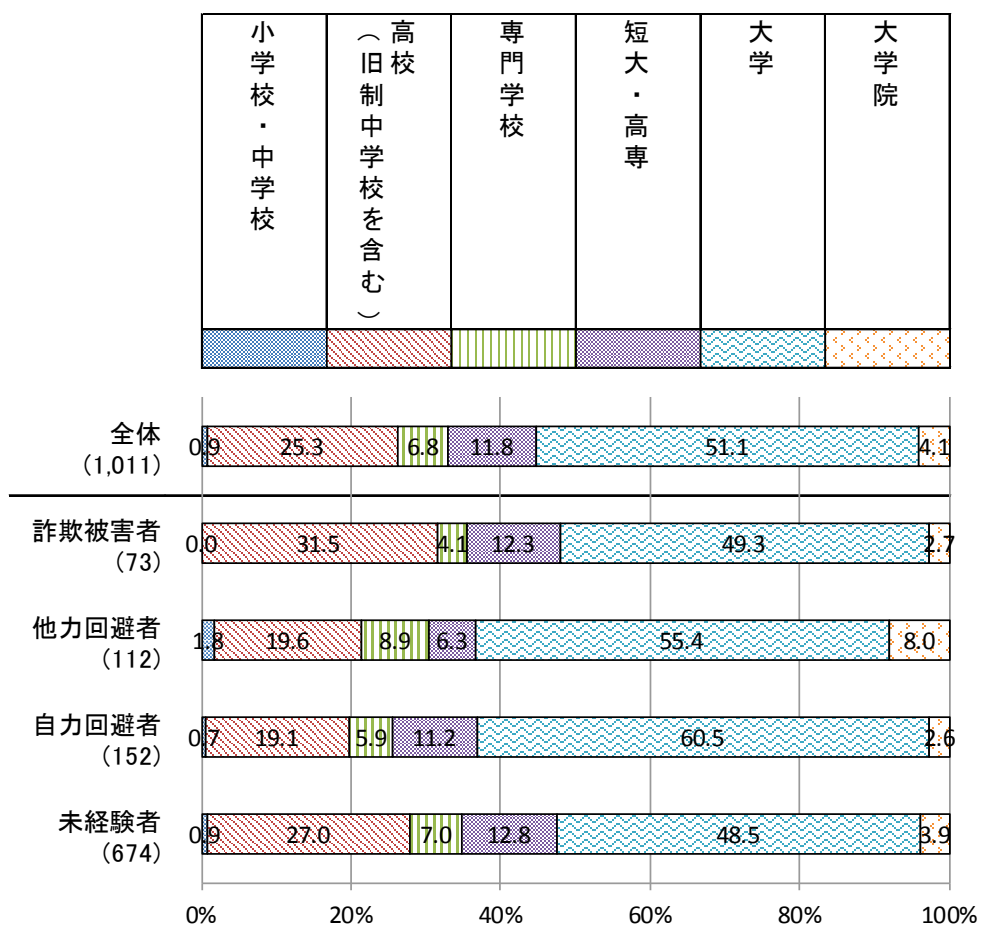


③ 最終学歴

最終学歴については、他力回避者・自力回避者は詐欺被害者に比べて大学以上の割合が高くなっている。

図43 最終学歴(単一回答)

(n=1,011)

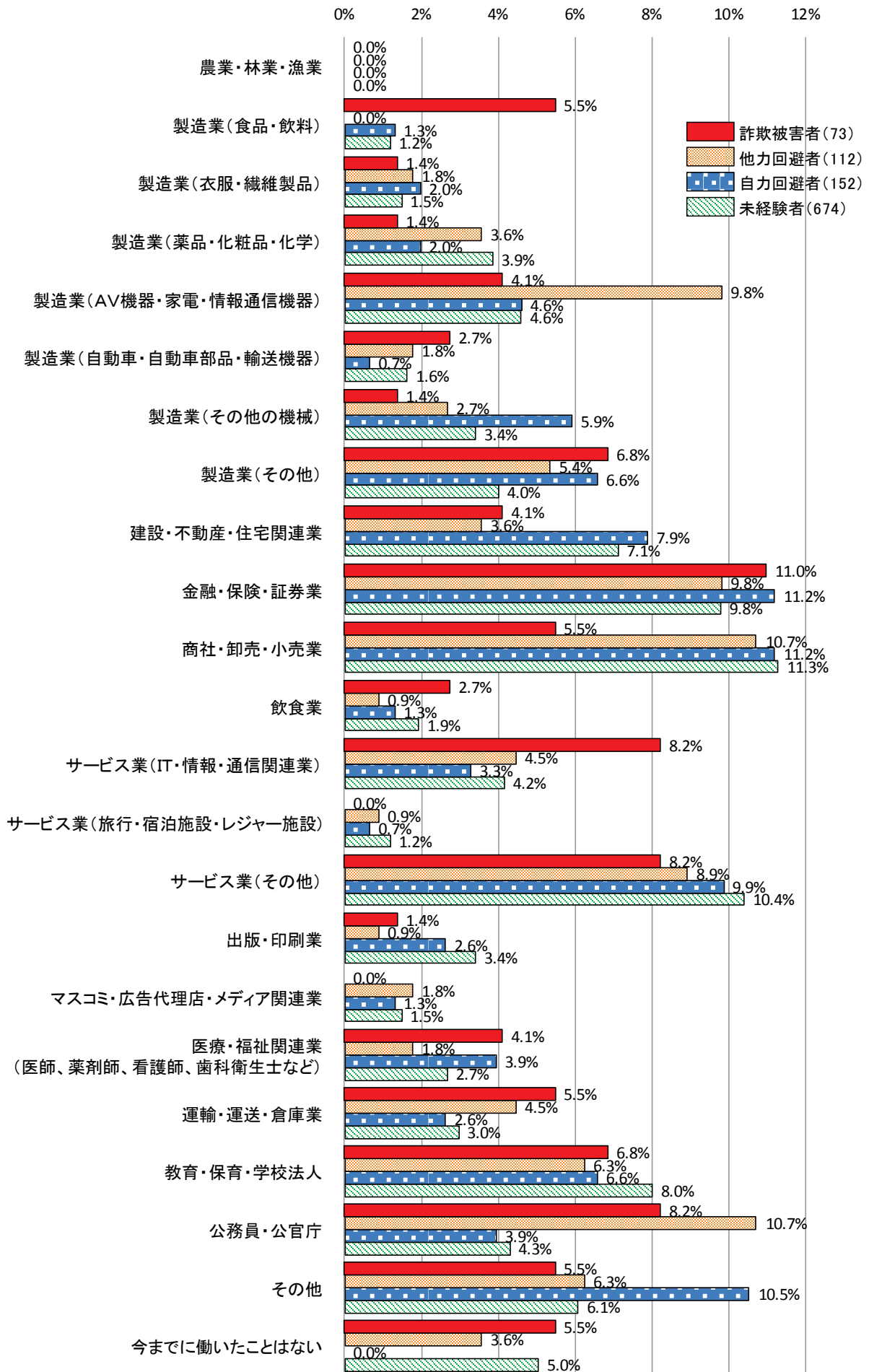


④ 最長職歴(業種)

最も長く働いた職歴の業種について、被害者は「製造業(食品・飲料)」「サービス業(IT・情報・通信関連業)」などが他のグループに比べて高い。また、詐欺被害者、他力回避者は「今までに働いたことはない」の割合が 5.5%、3.6%だが、自力回避者はこの割合が 0%となっている。

(次ページの図44を参照)

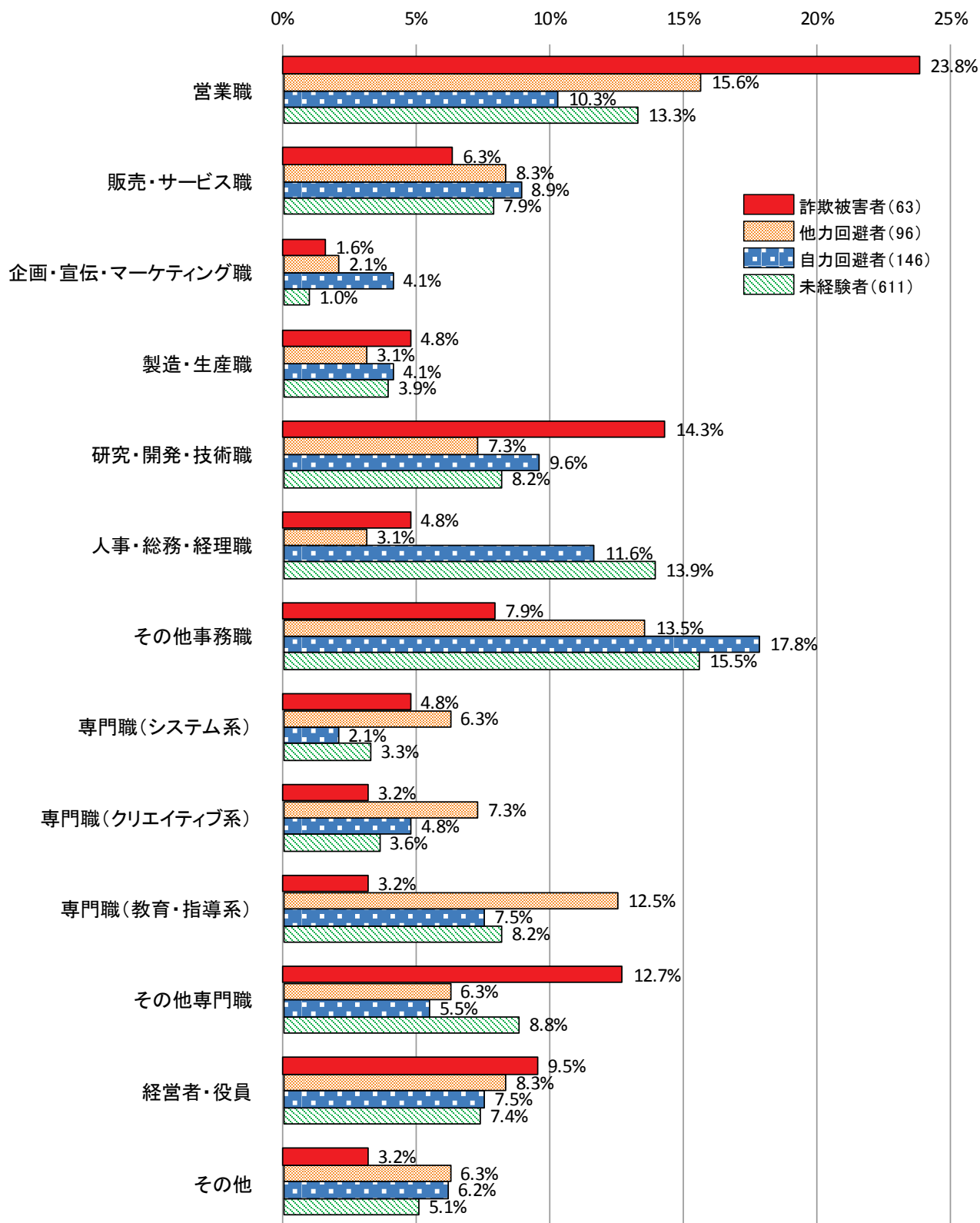
図44 最も長く働いた職歴(業種)(単一回答)



⑤ 最長職歴(職種)

最も長く働いた職歴の職種について、詐欺被害者は「営業職」(23.8%)「研究・開発・技術職」(14.3%)「その他専門職」(12.7%)などが比較的高く、自力回避者はその他事務職(17.8%)が比較的高い。

図45 職歴(最も長く働いた職種)(公務員・公官庁除く働いた経験のある方のみ、単一回答)



⑥ 性格類型・行動パターン

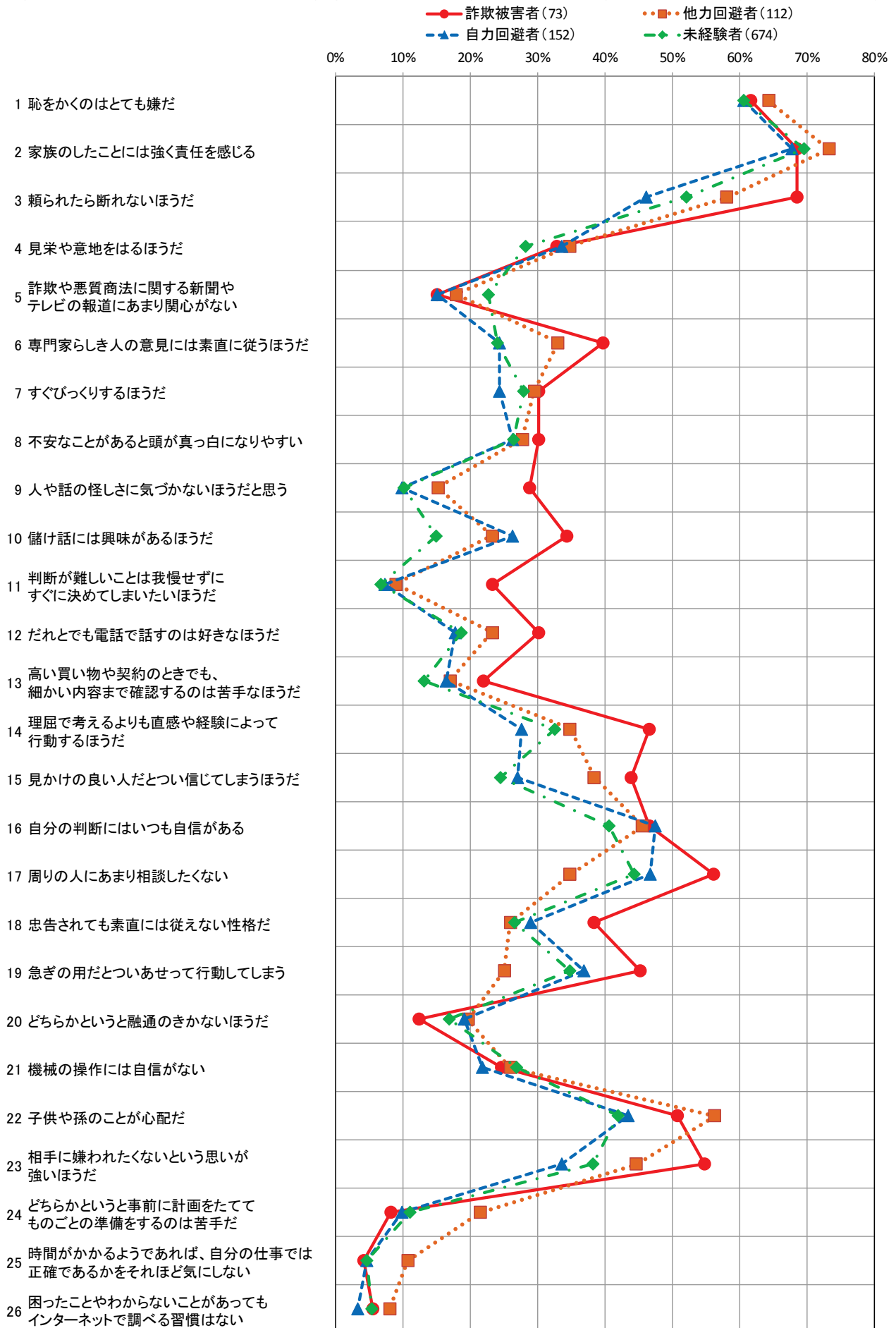
今回の調査分析のために設定した26項目の性格類型・行動パターンについて、「近い」「やや近い」と回答した割合を詐欺経験別に比較した。

26項目のうち、詐欺被害者と自力回避者の差異が特に大きい項目は「3.頼られたら断れないほうだ」「6.専門家らしき人の意見には素直に従うほうだ」「9.人や話の怪しさに気づかないほうだと思う」「11.判断が難しいことは我慢せずにすぐに決めてしまいたいほうだ」「14.理屈で考えるよりも直感や経験によって行動するほうだ」「15.見かけの良い人だつて信じてしまうほうだ」「23.相手に嫌われたくないという思いが強いほうだ」などとなっており、いずれの項目も詐欺被害者が他のグループに比べて「自分に近い」と回答した割合が高くなっている。

これらの回答結果から、詐欺被害者に見られる傾向として、①論理的よりも直感的に判断してしまう傾向が強いこと、②周囲のペースに合わせてしまう同調性の傾向が強いこと、そして次項「肩書きの信用影響度」の回答結果でも挙げられている、③見た目や肩書きなどのわかりやすい基準で相手を信じてしまう傾向が強いことなどが挙げられる。

(次ページの図46を参照)

図46 性格類型・行動パターン(単一回答)



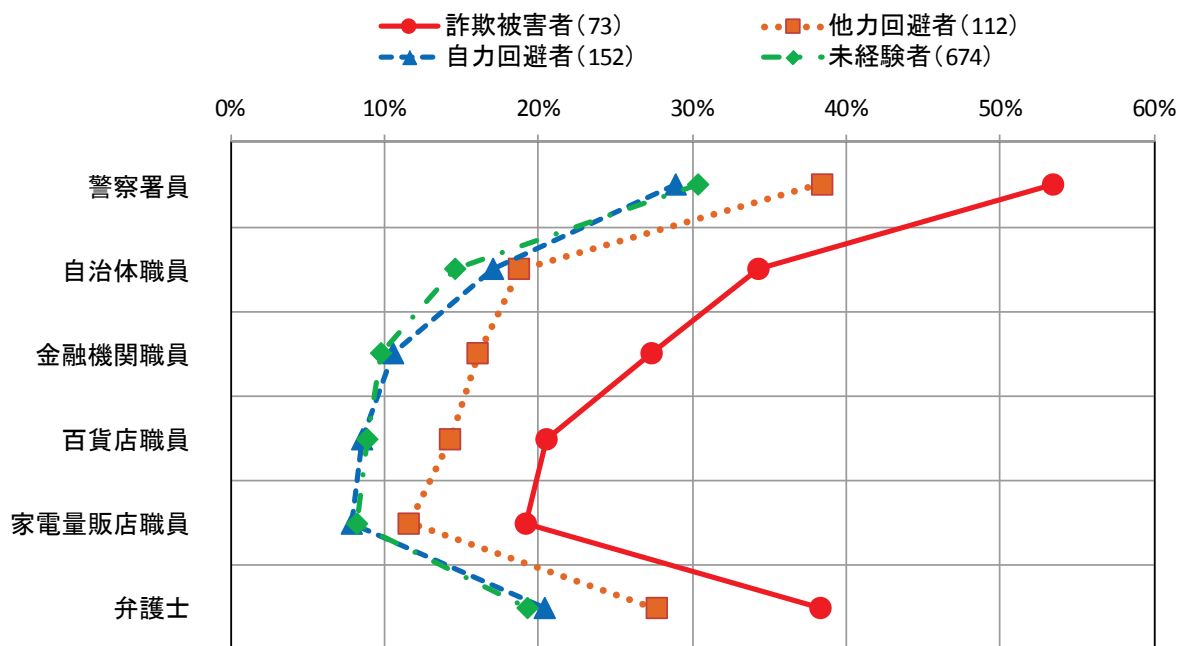
⑦ 肩書きの信用影響度

下図に記載の6種類の肩書きを名乗る人から電話が来た場合、その人の話を信用すると思うかについて、「信用すると思う」「どちらかといえば信用すると思う」と回答した割合を詐欺経験別に比較した。

この結果、6種類の肩書きの全てにおいて、詐欺被害者と自力回避者・未経験者との間に大きな差異が見られ、いずれの肩書きも詐欺被害者は「信用すると思う」の合計割合が高くなっている。

なお、4グループとも特に「信用すると思う」の合計割合が高いのは「警察署員」であり、詐欺被害者では回答率が5割を超える結果となっている。これに次いで「弁護士」「自治体職員」が続いている。

図47 肩書きの信用影響度(単一回答)



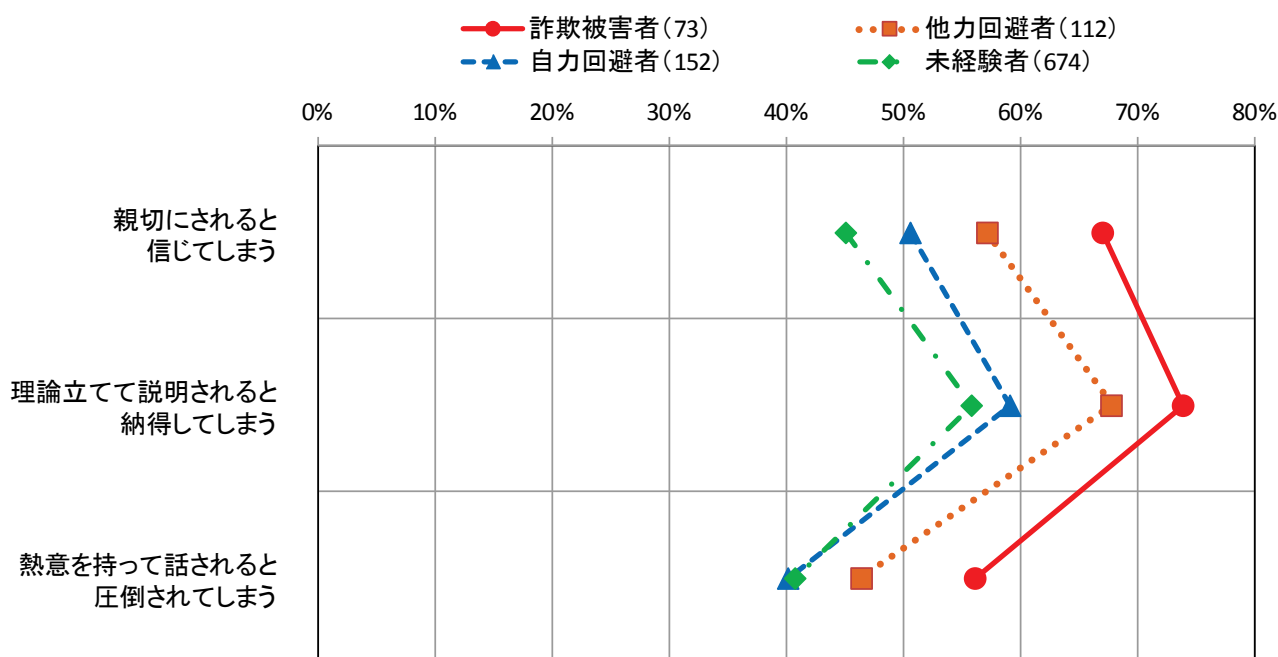
⑧ 電話コミュニケーション手法による信用影響度

知らない人物から電話があった場合の、下図に記載された3種類の反応について、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と回答した割合を詐欺経験別に分析した。

この結果、3種類の反応の全てにおいて、詐欺被害者と自力回避者・未経験者との間に大きな差異が見られ、いずれの反応も詐欺被害者は「あてはまる」の合計割合が高くなっている。

なお、詐欺被害者で特に「あてはまる」の合計割合が高いのは「理論立てて説明されると納得してしまう」であり、詐欺被害者では回答率が7割を超える結果となっている。このほか「親切にされると信じてしまう」「熱意を持って話されると圧倒されてしまう」も詐欺被害者では5割を超える結果となっている。

図48 電話コミュニケーション手法による信用影響度(単一回答)



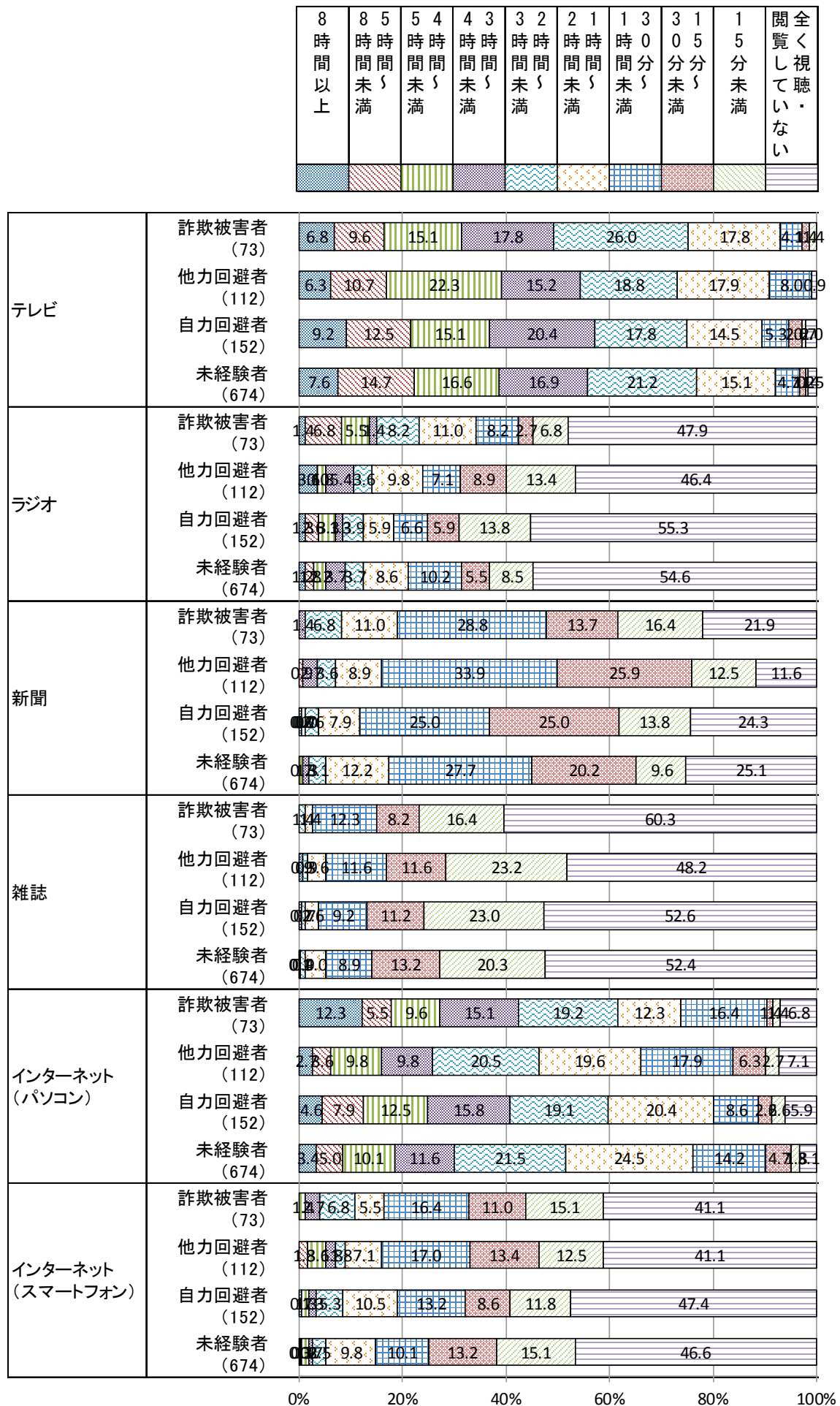
⑨ メディア接触頻度

各メディア(情報媒体)の1日あたり視聴・閲覧時間について、詐欺経験別に比較した。

この結果、それぞれ3時間以上視聴・閲覧している人の割合は、「テレビ」において詐欺被害者が他のグループと比べて5ポイント以上低くなっており、逆に「インターネット(PC)」においては詐欺被害者が最も高くなっている。

しかし「テレビ」「インターネット(PC)」以外のメディアについては他のグループと大きな差異は見られない。
(次ページの図49を参照)

図49 各メディアの接触頻度(単一回答)



(3) 詐欺に対する意識

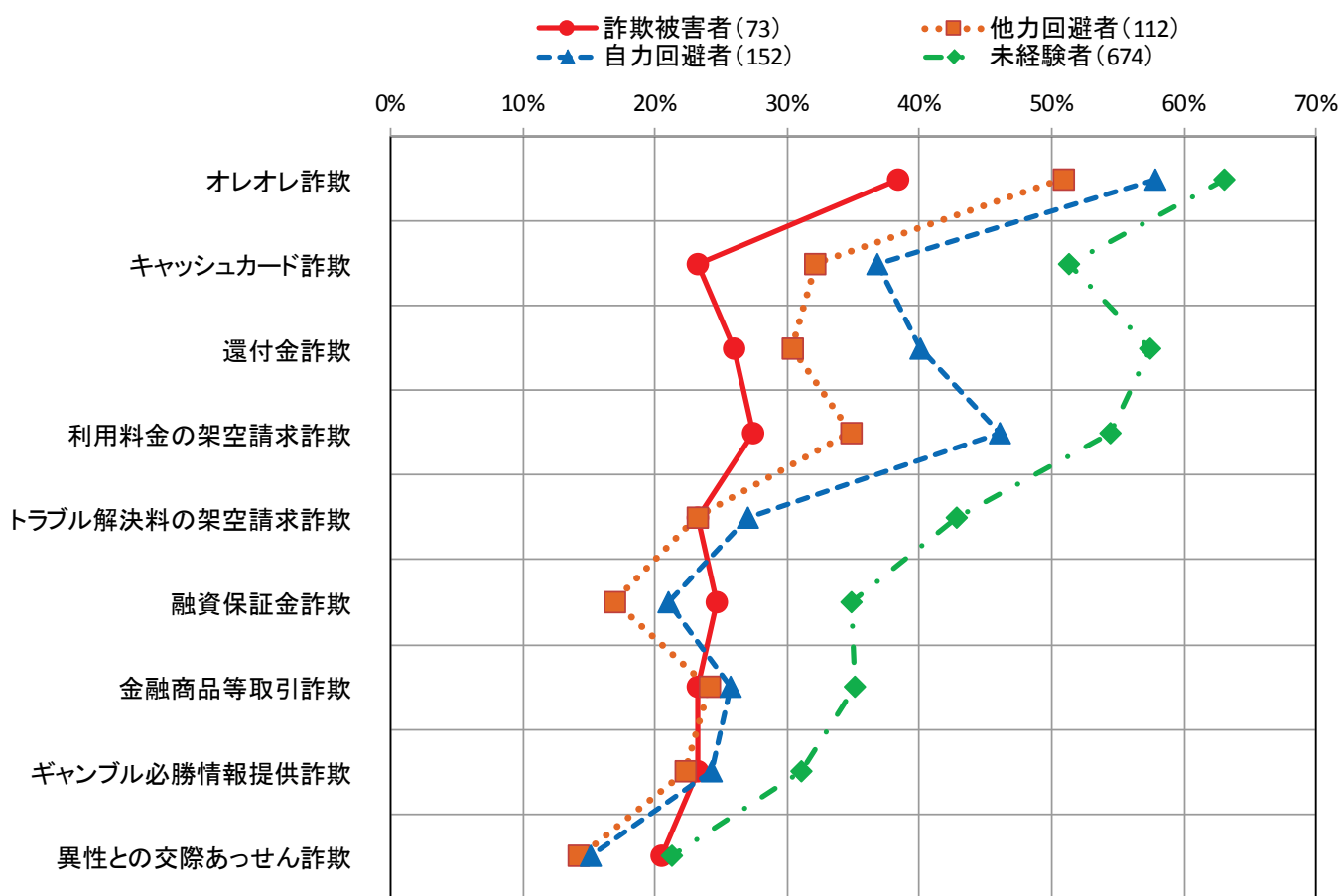
① 詐欺の手口別認知状況

ここからは、詐欺に対する意識における4グループ間の差異について比較している。

まず、詐欺の手口別の認知状況について、「犯行の手口まで細かく知っていた」と答えた詳細認知度の割合を詐欺経験別に比較した。

この結果、「オレオレ詐欺」「キャッシュカード詐欺」「還付金詐欺」の主要な3手口において詐欺被害者は最も詳細認知度が低く、未経験者や自力回避者と大きな差異がみられるほか、「利用料金の架空請求詐欺」についても最も詳細認知率が低いという結果になっている。

図50 (詐欺に遭遇する前の)詐欺手口別の詳細認知度(単一回答)



※未経験者については現在の状況について聴取している。

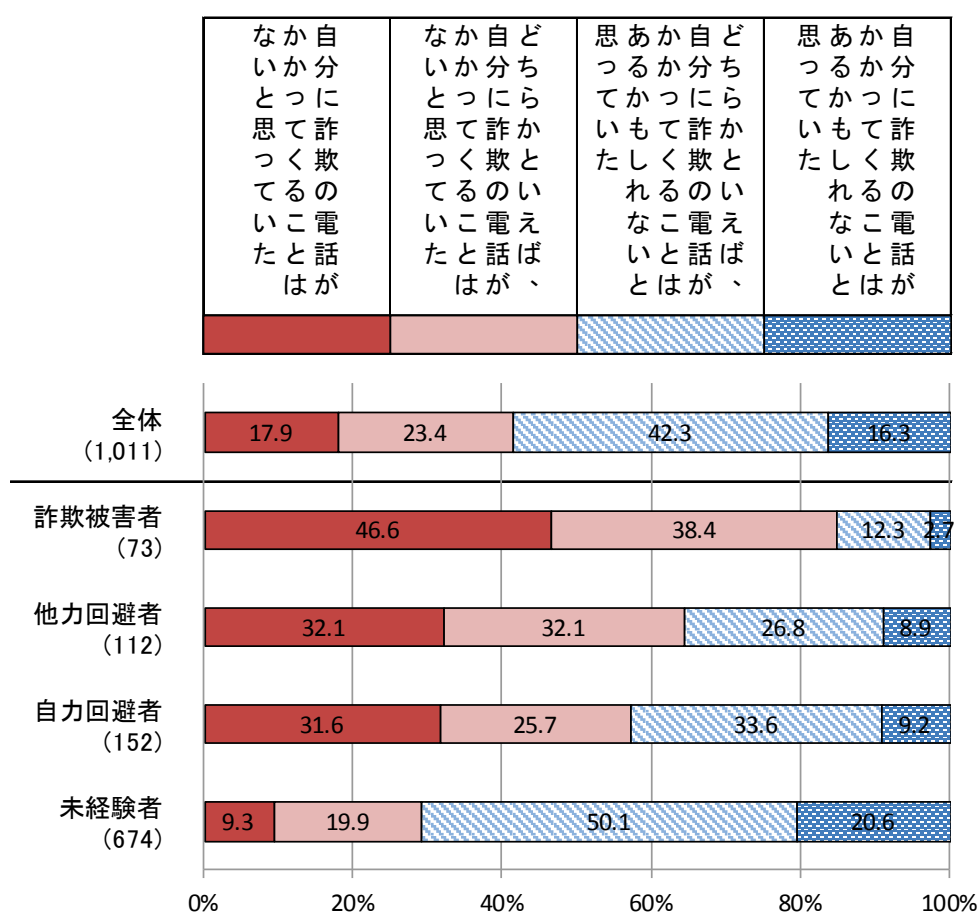
② 詐欺接触の可能性についての意識

自分に詐欺の接触があると思うかという意識について、「詐欺の電話がかかってくることはないと思っていた」「どちらかといえば詐欺の電話がかかってくることはないと思っていた」と答えた割合の合計は、詐欺被害者では 85.0%と他のグループに比べて非常に高く、次いで他力回避者が 64.2%で続いている。逆に自力回避者は 57.3%と、詐欺被害者との間に約 28 ポイントの開きがある。

この結果から、詐欺接触の可能性に対する意識の高さが、実際に詐欺に遭遇した時の被害または回避に影響している可能性がうかがわれる。

図51 (詐欺に遭遇する前の)詐欺接触の可能性についての意識(単一回答)

(n=1,011)



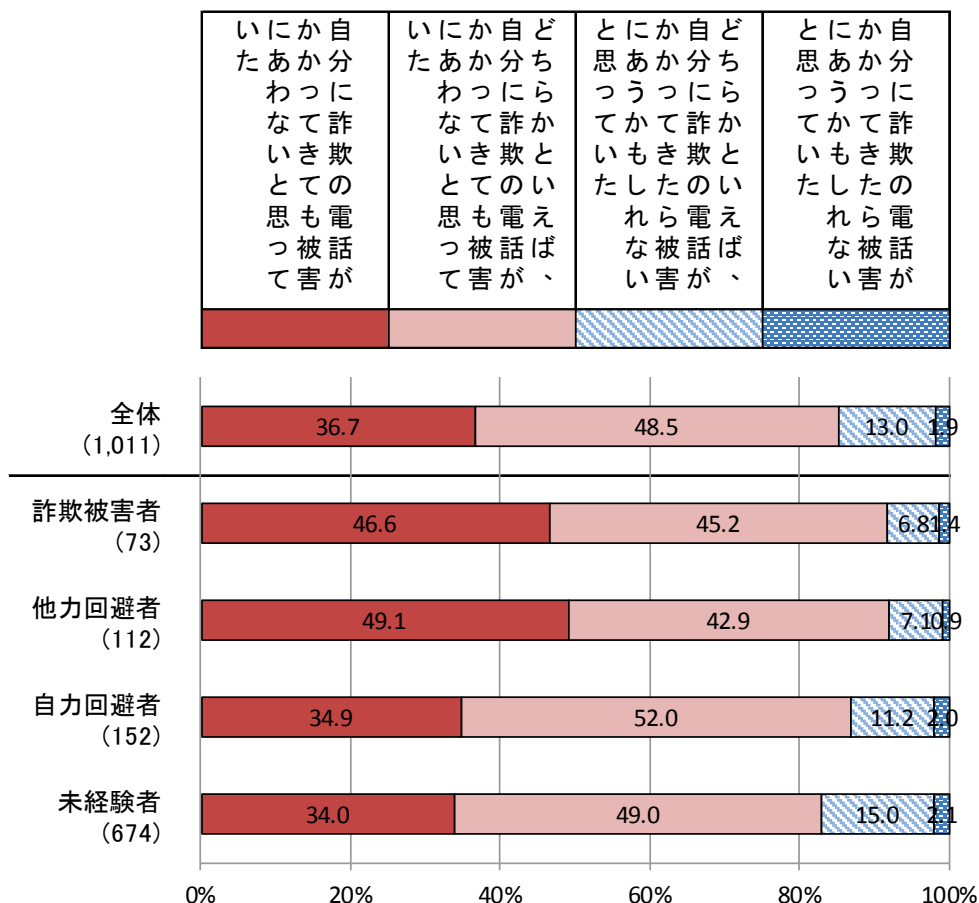
※未経験者については現在の状況について聴取している。

③ 詐欺被害の可能性についての意識

詐欺の電話があった場合に被害にあう可能性があると思うかについて、「詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思っていた」「どちらかといえば詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思っていた」と答えた割合の合計は、詐欺被害者で91.8%、他力回避者でも92.0%と、両グループとも9割以上が「被害にあわないと思っていた」と回答している。また、自力回避者では86.9%、未経験者では83.0%となっており、特に未経験者については詐欺被害者や他力回避者との間に差異が見られる。

図52 (詐欺に遭遇する前の)詐欺被害の可能性についての意識(単一回答)

(n=1,011)



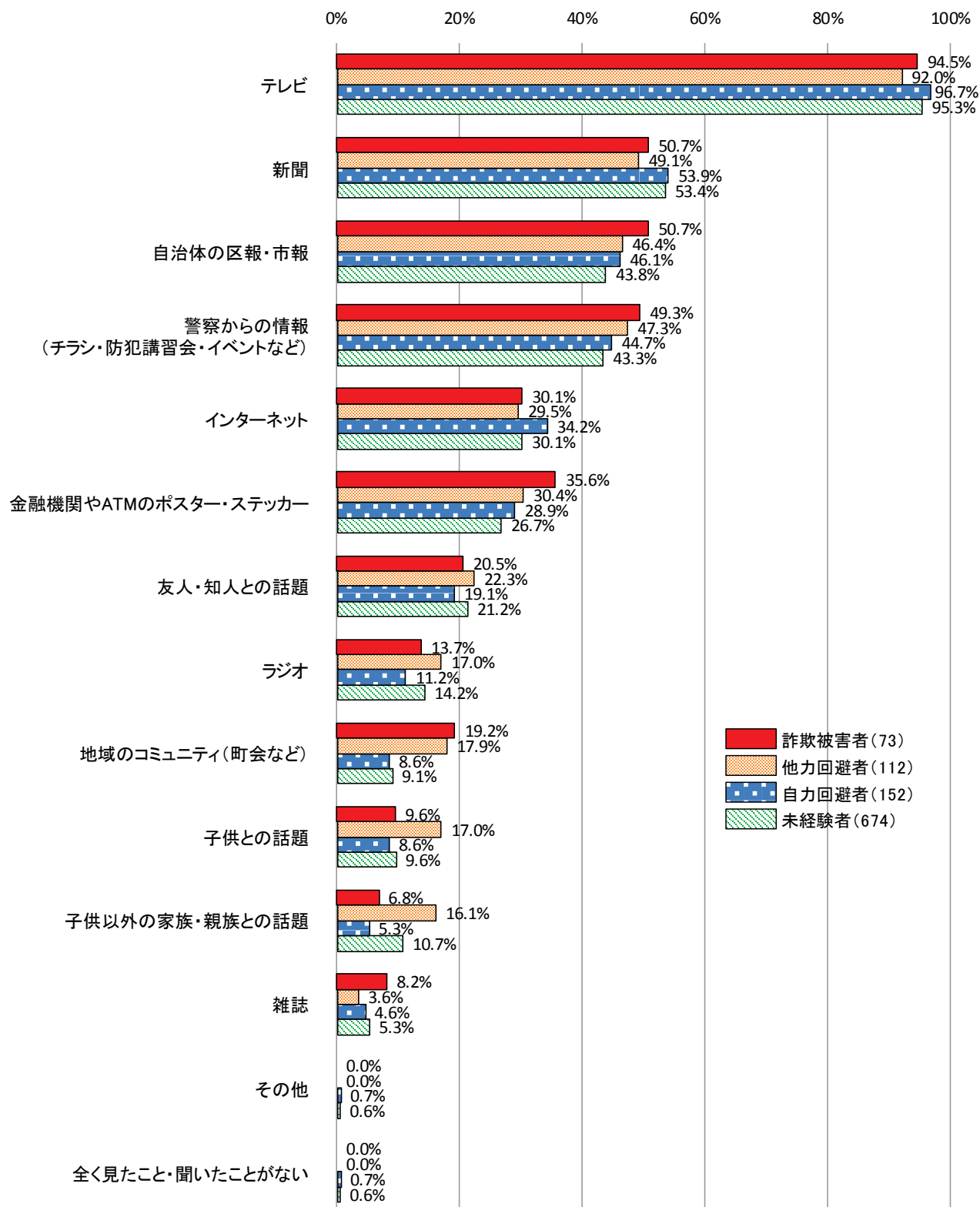
※未経験者については現在の状況について聴取している。

④ 詐欺の情報受容手段

詐欺の情報受容手段について、全てのグループで「テレビ」が9割を超えて最も高く、4グループともに「新聞」「自治体からの区報・市報」「警察からの情報」が続いている。

詐欺被害者と他のグループを比べてみても情報受容手段に大きな違いは見られない。また、「子供との話題」「子供以外の家族・親族との話題」は他力回避者が高くなっている。

図53 詐欺の情報受容手段(複数回答)



(4) 被害防止対策の認知・実施状況

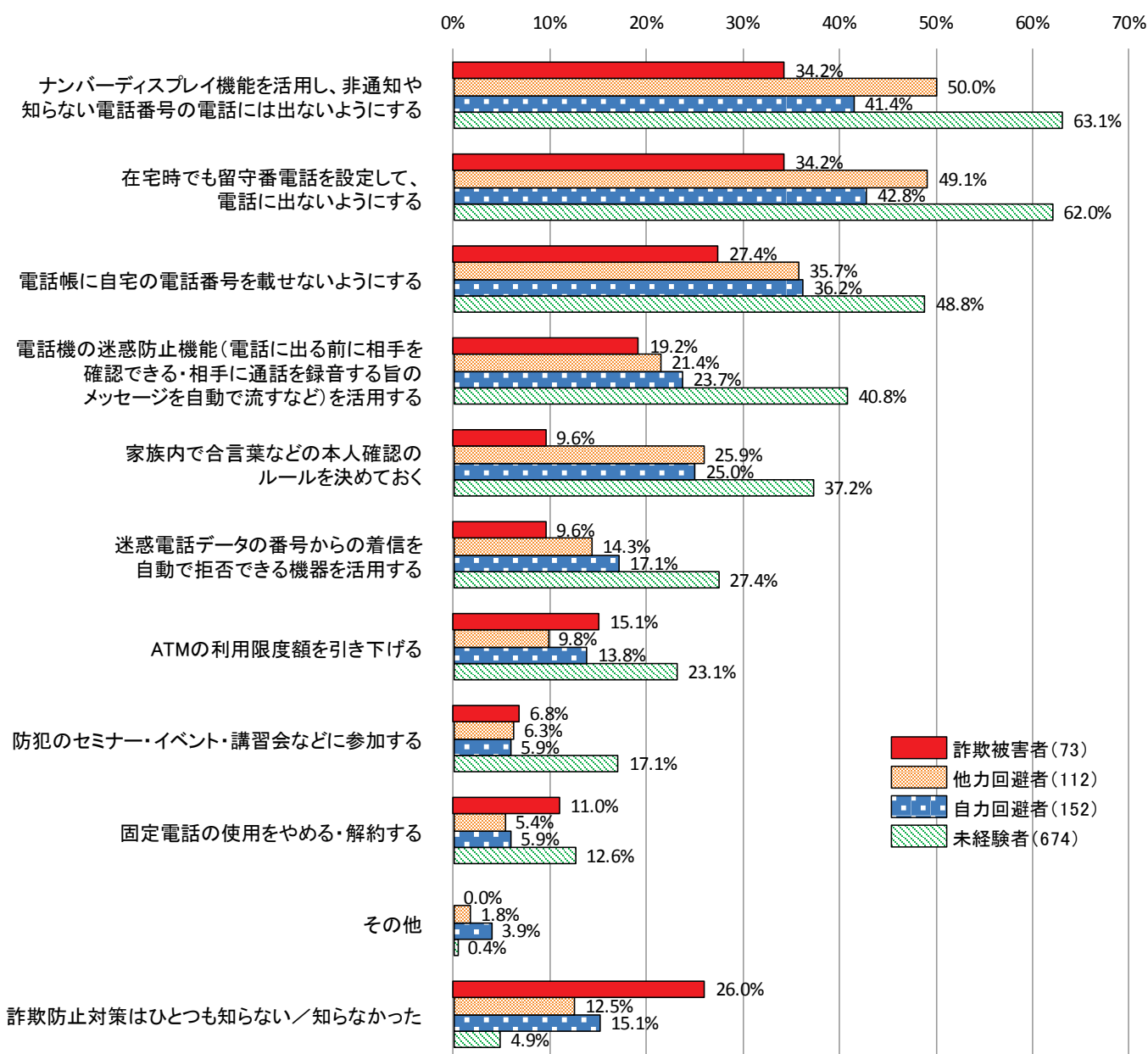
① 被害防止対策の認知状況

電話による詐欺の被害防止対策の認知状況について、ほぼ全ての項目で未経験者が最も認知率が高くなっている。さらに詐欺経験者の3グループで比較すると、多くの項目で詐欺被害者は最も認知率が低くなっており、自力回避者や他力回避者との間に認知率の差異が見られる。

特に詐欺被害者と自力回避者との間で認知率の差が大きいのは「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」(約15ポイント差)、「電話帳に自宅の電話番号を載せないようにする」(約9ポイント差)などであり、さらに「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」などは他力回避者との間でも大きな差が見られる。

なお、「詐欺防止対策はひとつも知らない／知らなかった」と回答した割合は詐欺被害者で26.0%、自力回避者で15.1%だった。

図54 (経験者は詐欺遭遇前について)認知している詐欺の被害防止対策(複数回答)



② 被害防止対策の実施状況

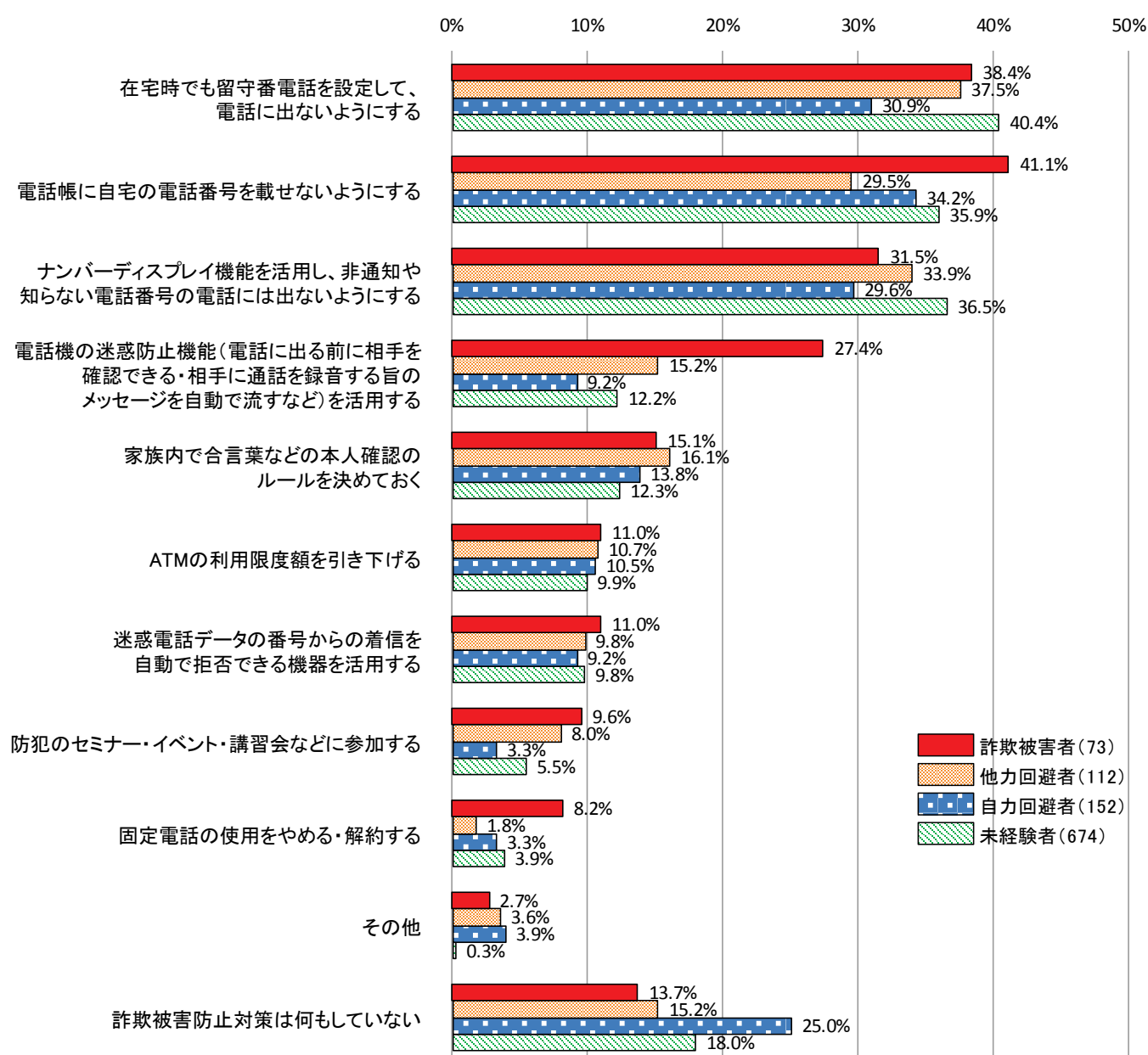
現在の被害防止対策の実施状況について詐欺経験別に比較したところ、詐欺被害者は多くの項目で他のグループよりも実施率が高くなっている。特に「電話機の迷惑防止機能を活用する」については、他のグループに比べて約 12 ポイントから 18 ポイント程度高くなっている。

これは詐欺被害を経験したことにより、今後同様の被害を繰り返さないように各対策の実施率が高まったためと考えられる。

また、未経験者についても「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」などは他力回避者・自力回避者に比べてやや高くなっている。

「詐欺被害防止対策は何もしていない」については自力回避者が最も高く 25.0%となっている。これは詐欺の接触を自力で回避できたことにより、今後も詐欺の接触があっても大丈夫という自信を持ってしまっていることが原因と考えられる。

図55 現在実施している詐欺の被害防止対策(複数回答)



3-7. インターネットの利用頻度の違いによる差異分析

(1) インターネット低利用者の定義について

今回の調査は「2. 調査の概要」に記載しているとおり、高齢者層に対してインターネットにより回答を収集する調査手段を用いているが、高齢者のなかには普段インターネットをあまり利用していない、いわゆる情報感度が低いと考えられる層も一定の割合で存在していることから、これらの「インターネット低利用者」に対しても別に調査を実施することで、特殊詐欺に対する一般高齢者との意識や実態の差異を比較・分析することとした。

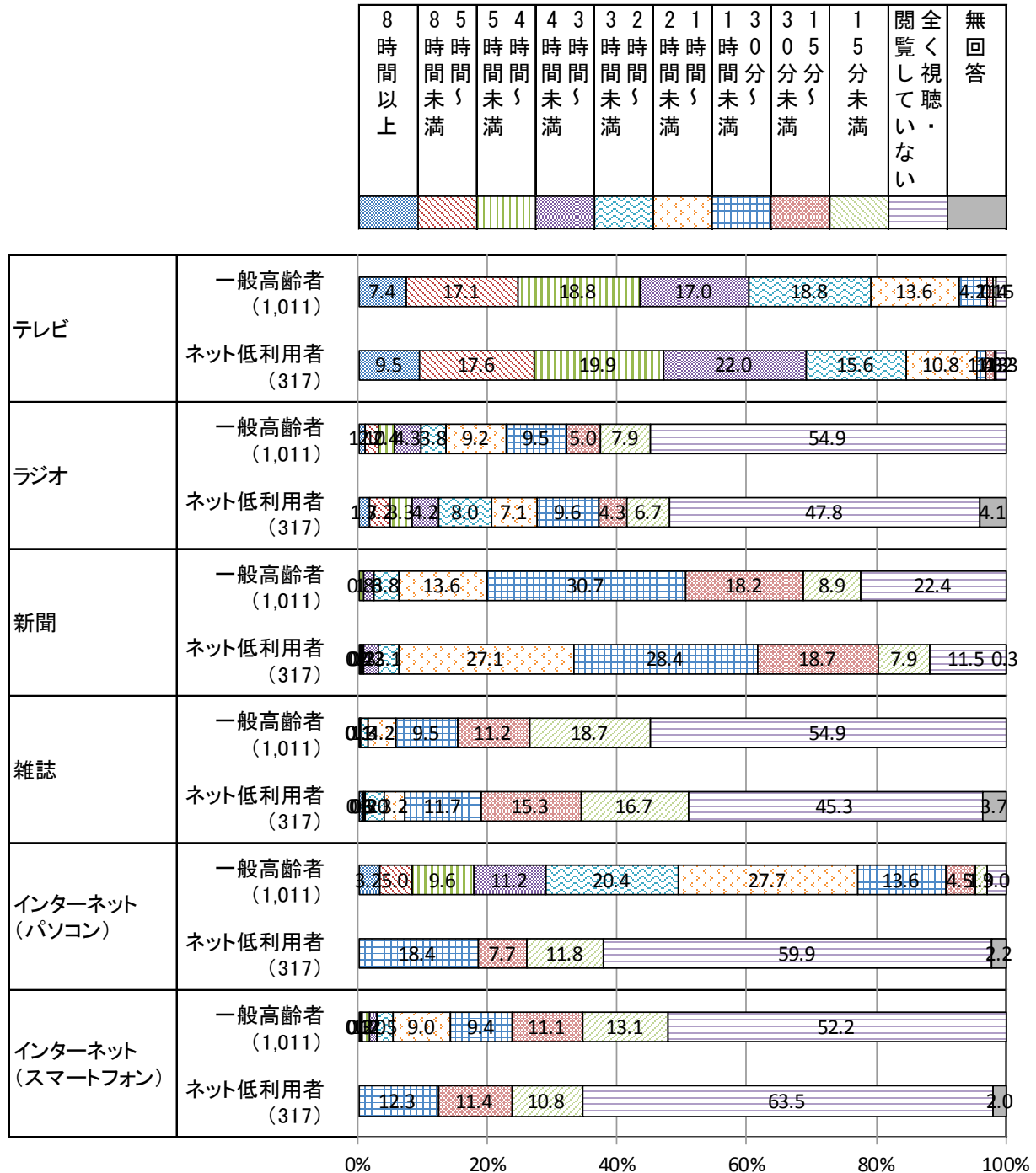
インターネット低利用層への調査手段としては郵送による調査を採用しており、この郵送調査に回答頂いた調査サンプルのうち、インターネットの利用頻度の回答結果をもとに、PC とスマートフォン両方によるインターネット利用時間の合計が1日あたり1時間未満の方を「インターネット低利用者」として定義した。

ここからは上述した定義に基づき、インターネット調査の回答サンプルである「一般高齢者」と、郵送調査の回答サンプルからさらにインターネット利用頻度の低い高齢者を抽出した「ネット低利用者」の2グループを対象として、グループ間にどのような差異があるかを比較・分析した。

(2) メディアの接触頻度

一般高齢者とネット低利用者の1日あたりの視聴・閲覧時間について比較すると、ネット低利用者はインターネット以外の各メディアの接触頻度が比較的高く、特に新聞を1時間以上閲覧している人の割合は3割を超えている。

図56 各メディアの接触頻度(単一回答、WBあり)



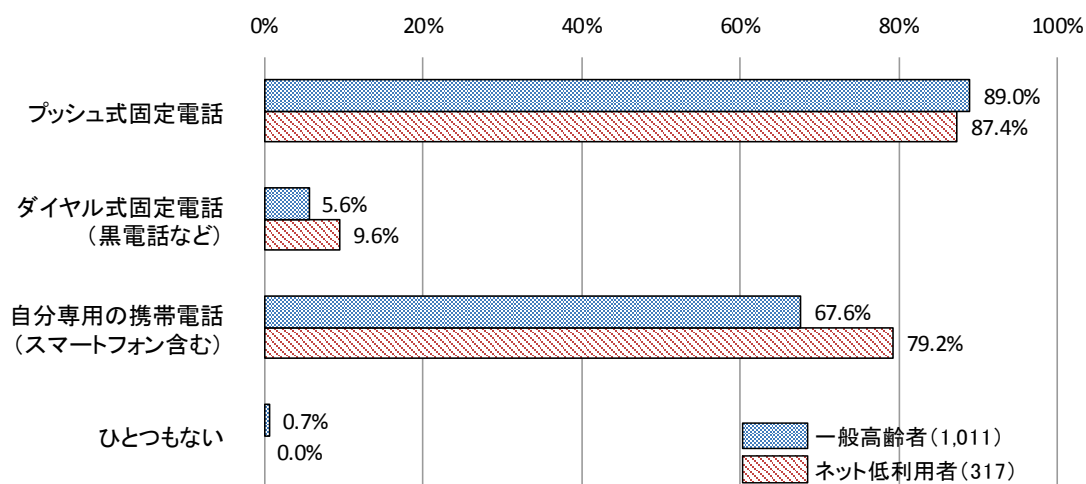
(3) 通信環境

① 固定電話の有無

自宅の通信環境について、一般高齢者とネット低利用者でプッシュ式固定電話の利用率に大きな差異は見られない。

そのほか、ダイヤル式固定電話はネット低利用者のほうが 4 ポイント高く、自分専用の携帯電話でもネット低利用者のほうが約 12 ポイント高い。

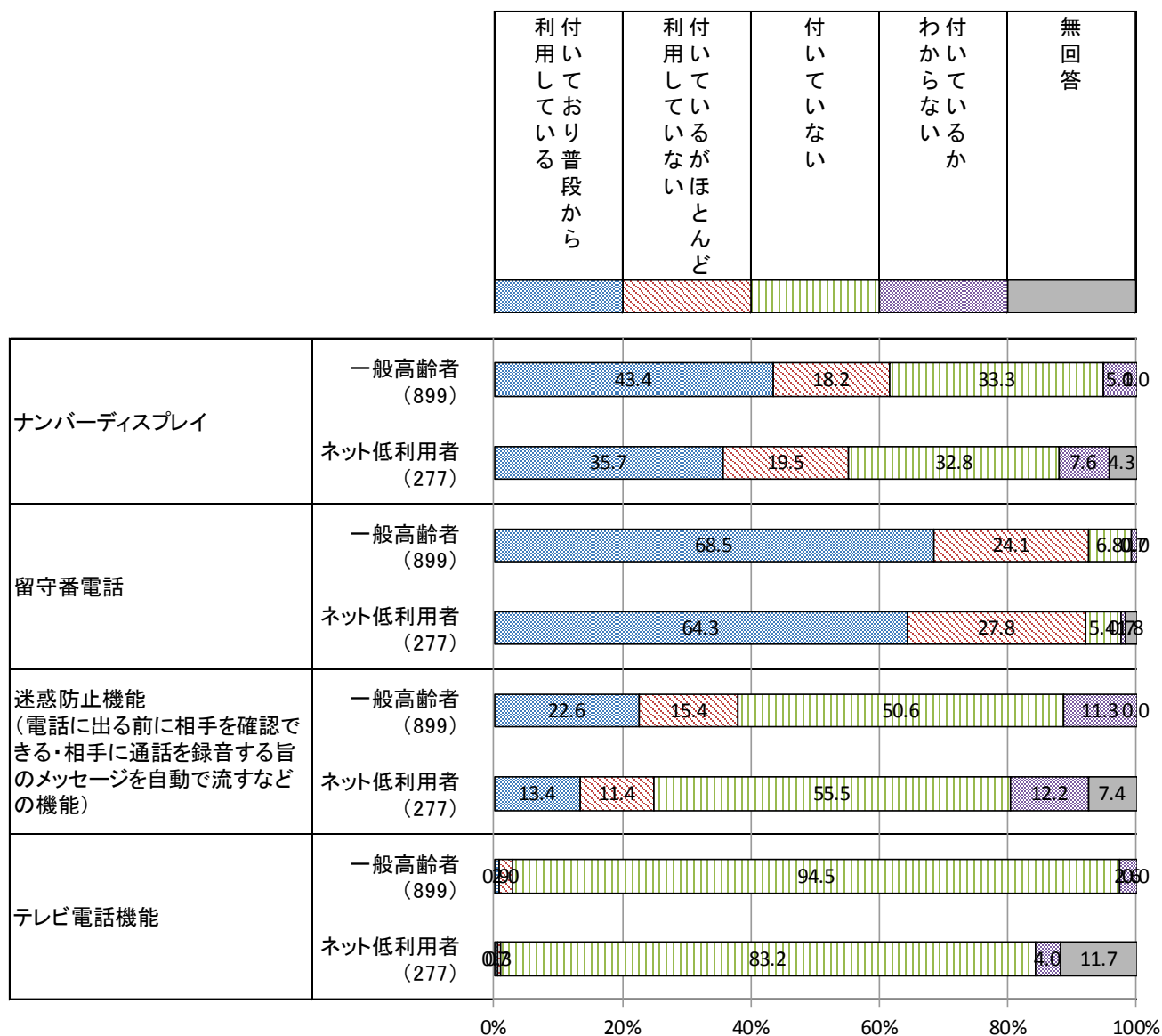
図57 自宅の通信環境(複数回答、WBあり)



② 固定電話の各種機能および利用の有無

プッシュ式固定電話の各種機能の利用状況について、詐欺の被害防止対策となる「ナンバーディスプレイ」「留守番電話」「迷惑防止機能」の利用率は、いずれも一般高齢者よりネット低利用者のほうが4ポイントから9ポイント程度低くなっている。

図58 固定電話の各種機能の有無および利用状況(プッシュ式保有者のみ、単一回答、WBあり)

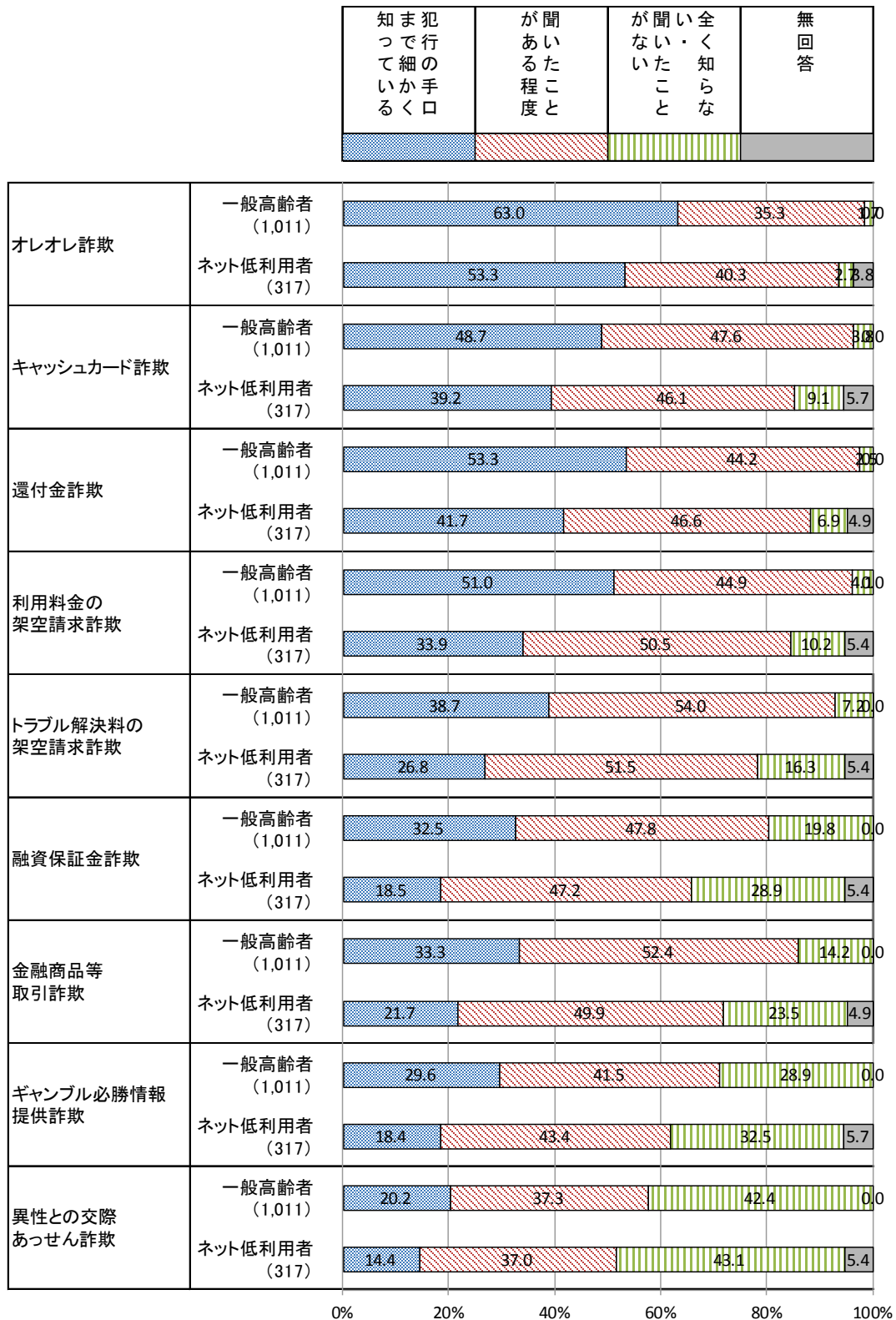


(4) 詐欺に対する意識

① 詐欺の手口別認知状況

詐欺の手口別認知状況について、「オレオレ詐欺」「キャッシュカード詐欺」「還付金詐欺」の主要3手口を含めたすべての手口類型において、ネット低利用者は一般高齢者に比べて詳細認知率が低くなっており、主要3手口についてはいずれも詳細認知率に約10ポイントから12ポイント程度の差異がみられる。

図59 詐欺の手口別認知状況(単一回答、WBあり)

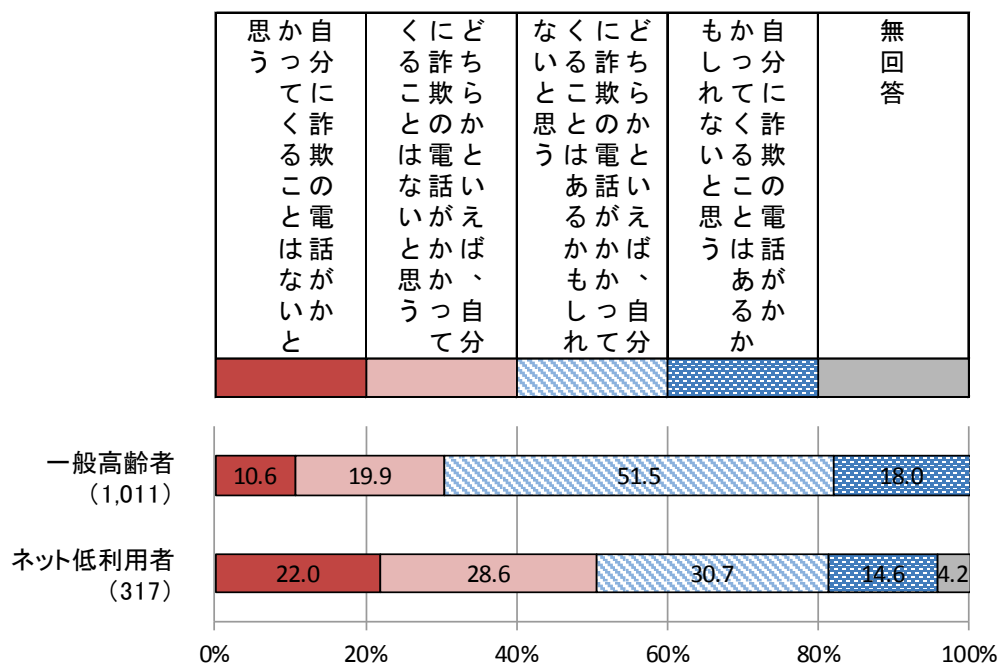


※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

② 詐欺接触の可能性についての意識

自分に詐欺の接触があると思うかという意識について、「詐欺の電話がかかってくることはない」「どちらかといえば詐欺の電話がかかってくることはない」と答えた割合の合計は一般高齢者で 30.5%、ネット低利用者で 50.6%と、ネット低利用者のほうが約 20 ポイント高くなっている。

図60 詐欺接触の可能性についての意識(単一回答、WBあり)

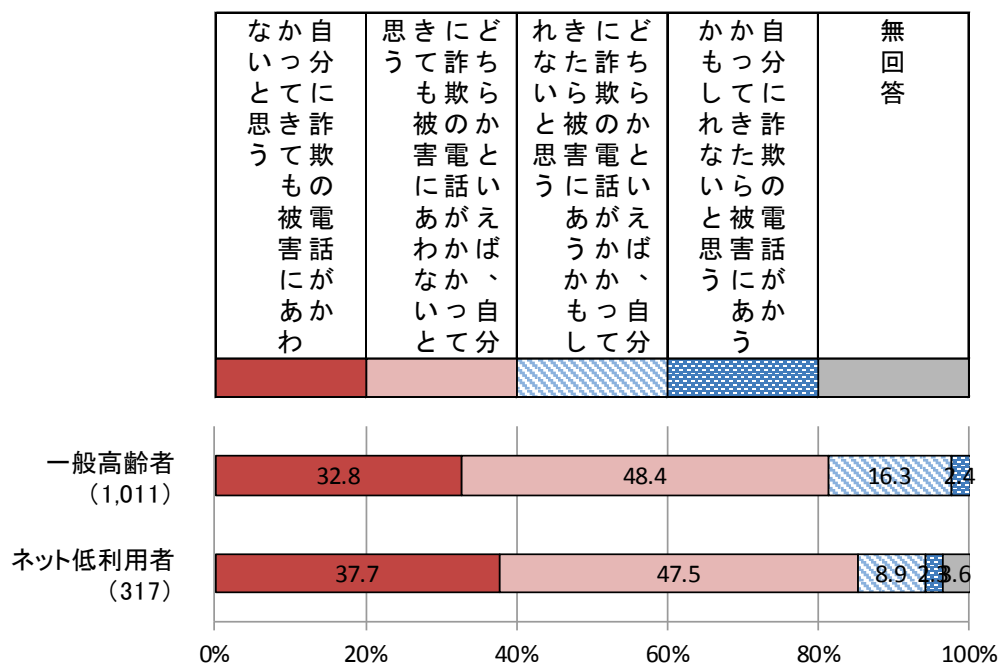


※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

③ 詐欺被害の可能性についての意識

詐欺の電話があった場合に被害にあう可能性があると思うかについて、「詐欺の電話がかかってきても被害にあわない」「おそらく詐欺の電話がかかってきても被害にあわない」と答えた割合の合計は一般高齢者で81.2%、ネット低利用者で85.2%と、ネット低利用者のほうが約4ポイント高くなっている。

図61 詐欺被害の可能性についての意識(単一回答、WBあり)

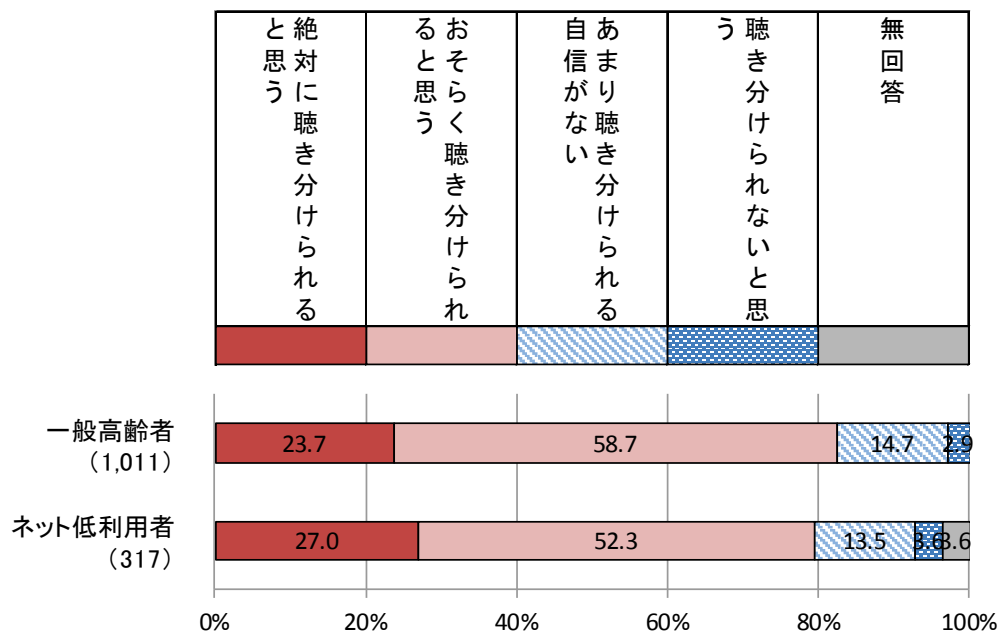


※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

④ 電話の声で本人を聴き分けられると思うか

詐欺の電話で相手が自分の子供や孫など家族・親族を名乗った場合、電話の声でそれが本人かどうか聴き分けられると思うかについて、「絶対に聴き分けられる」「おそらく聴き分けられる」と答えた割合の合計は一般高齢者で82.4%、ネット低利用者で79.3%と、わずかに一般高齢者のほうが高い結果となっている。

図62 電話の声で本人を聴き分けられると思うか(単一回答、WBあり)

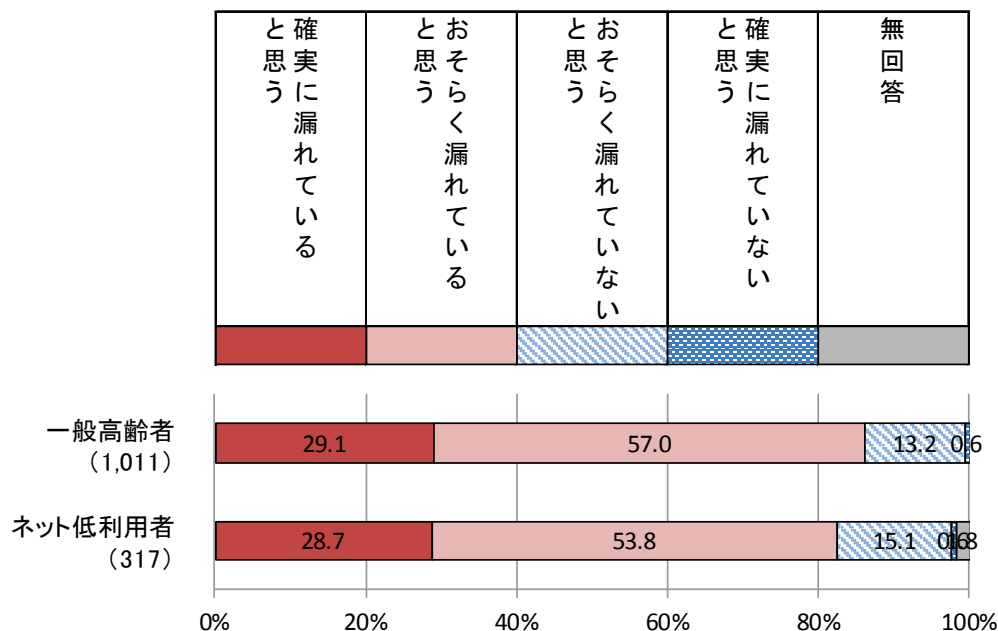


※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

⑤ 自分の個人情報が漏れている可能性に対する意識

自分の個人情報が漏れていると思うかについて、「確実に漏れていると思う」「おそらく漏れていると思う」と答えた割合の合計は一般高齢者で 86.1%、ネット低利用者で 82.5%と、わずかに一般高齢者のほうが高い結果となっている。

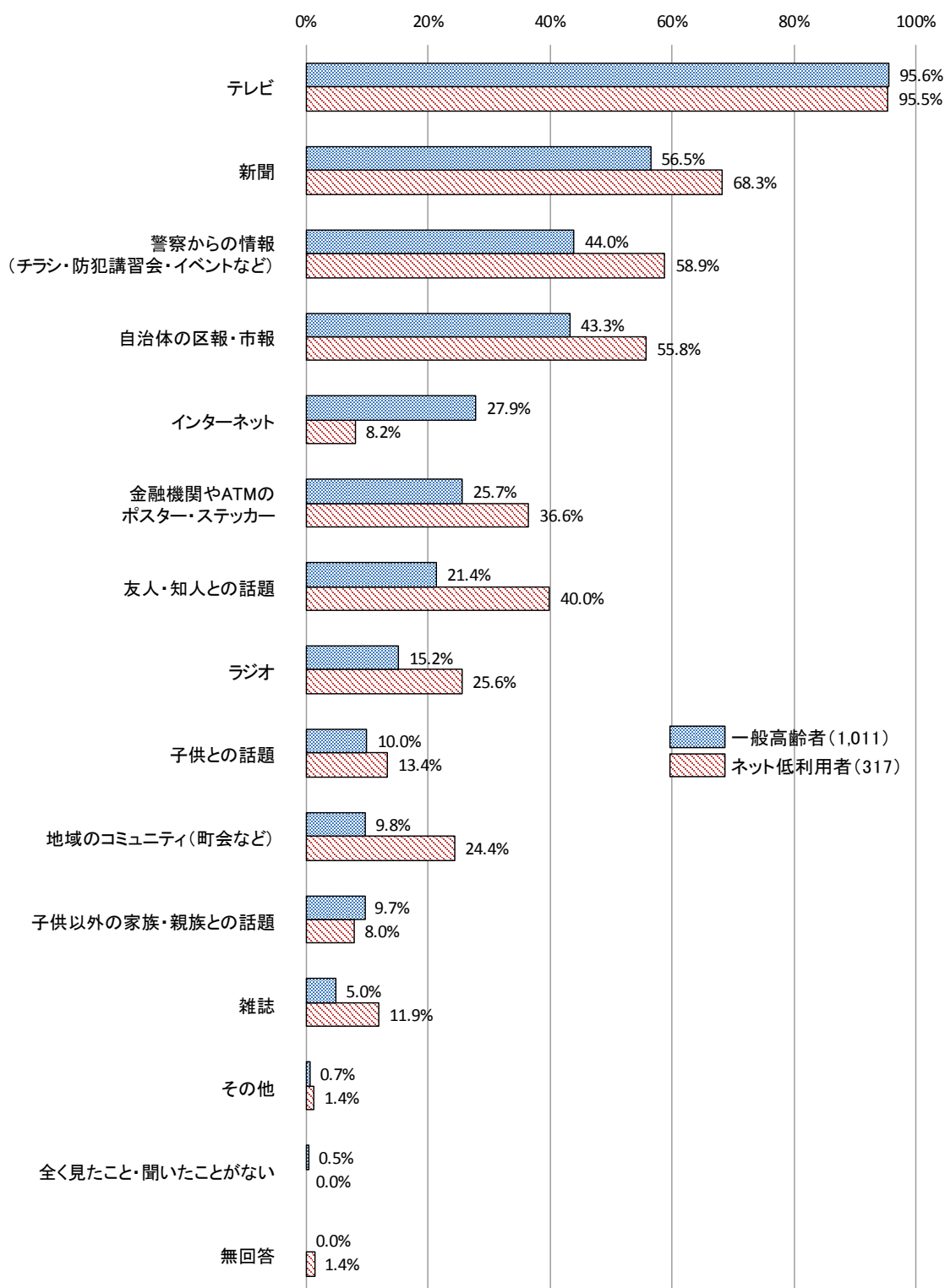
図63 自分の個人情報が漏れている可能性に対する意識(単一回答、WBあり)



⑥ 詐欺の情報受容手段

詐欺の情報受容手段について、一般高齢者、ネット低利用者ともに「テレビ」が最も高く、いずれも95%を超えている。2位から4位までは同じく「新聞」「警察からの情報」「自治体の区報・市報」が続いているが、「インターネット」「子供以外の家族・親族との話題」を除く多くの項目でネット低利用者の回答率が一般高齢者よりも高くなっており、インターネットをあまり利用しない層についても、詐欺の情報受容手段としてはインターネット以外の多くの媒体から情報を得ていることがうかがわれる。

図64 詐欺の情報受容手段(複数回答、WBあり)

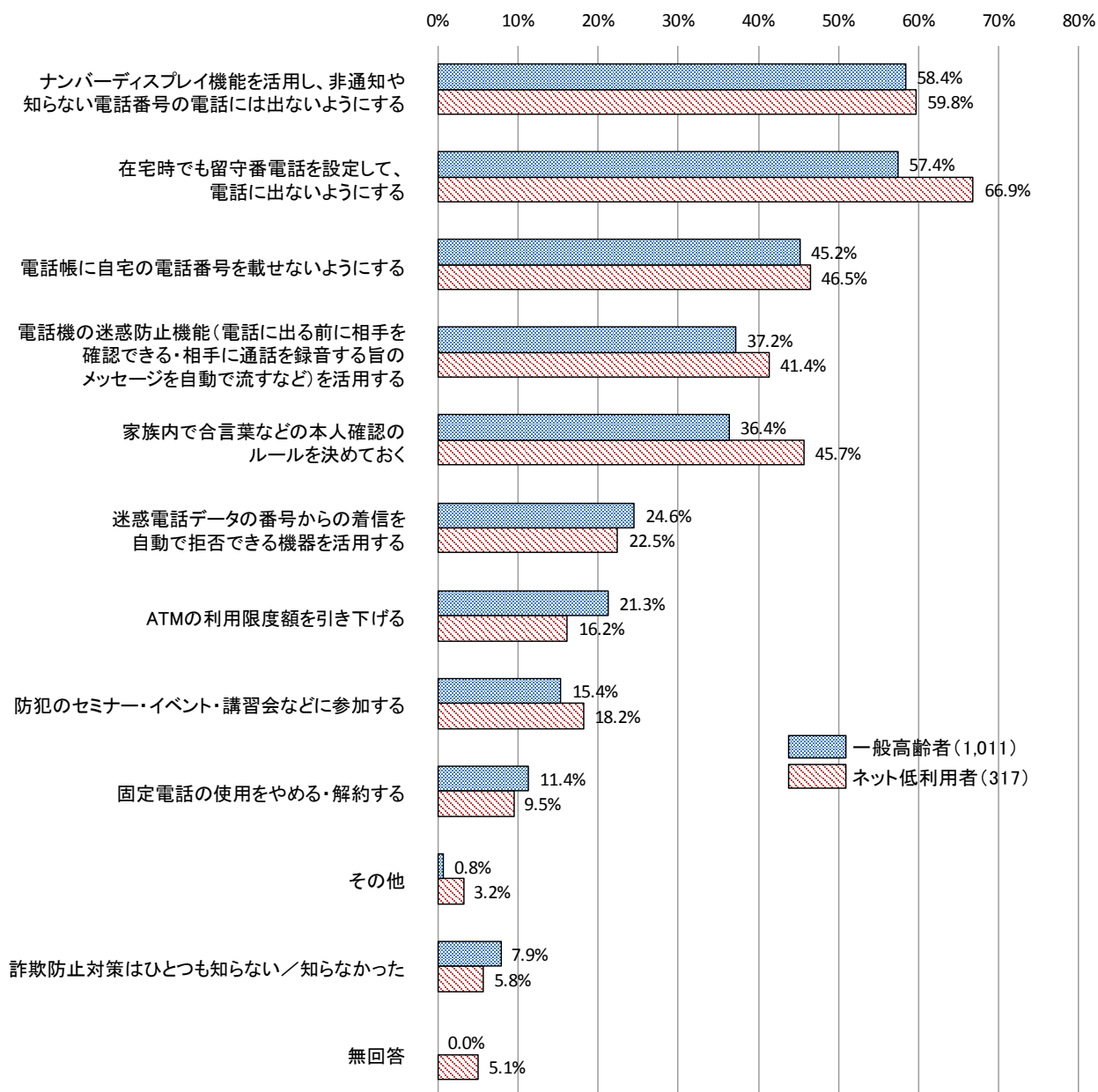


(5) 被害防止対策の実施状況

① 被害防止対策の認知状況

電話による詐欺の被害防止対策について、一般高齢者で最も認知率が高いのは「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」(58.4%)だが、ネット低利用者では「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」(66.9%)が最も高くなっており、順位および認知率に違いが見られる。また、「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」についても、2グループ間で認知率に10ポイント近い差が見られる。

図65 認知している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)



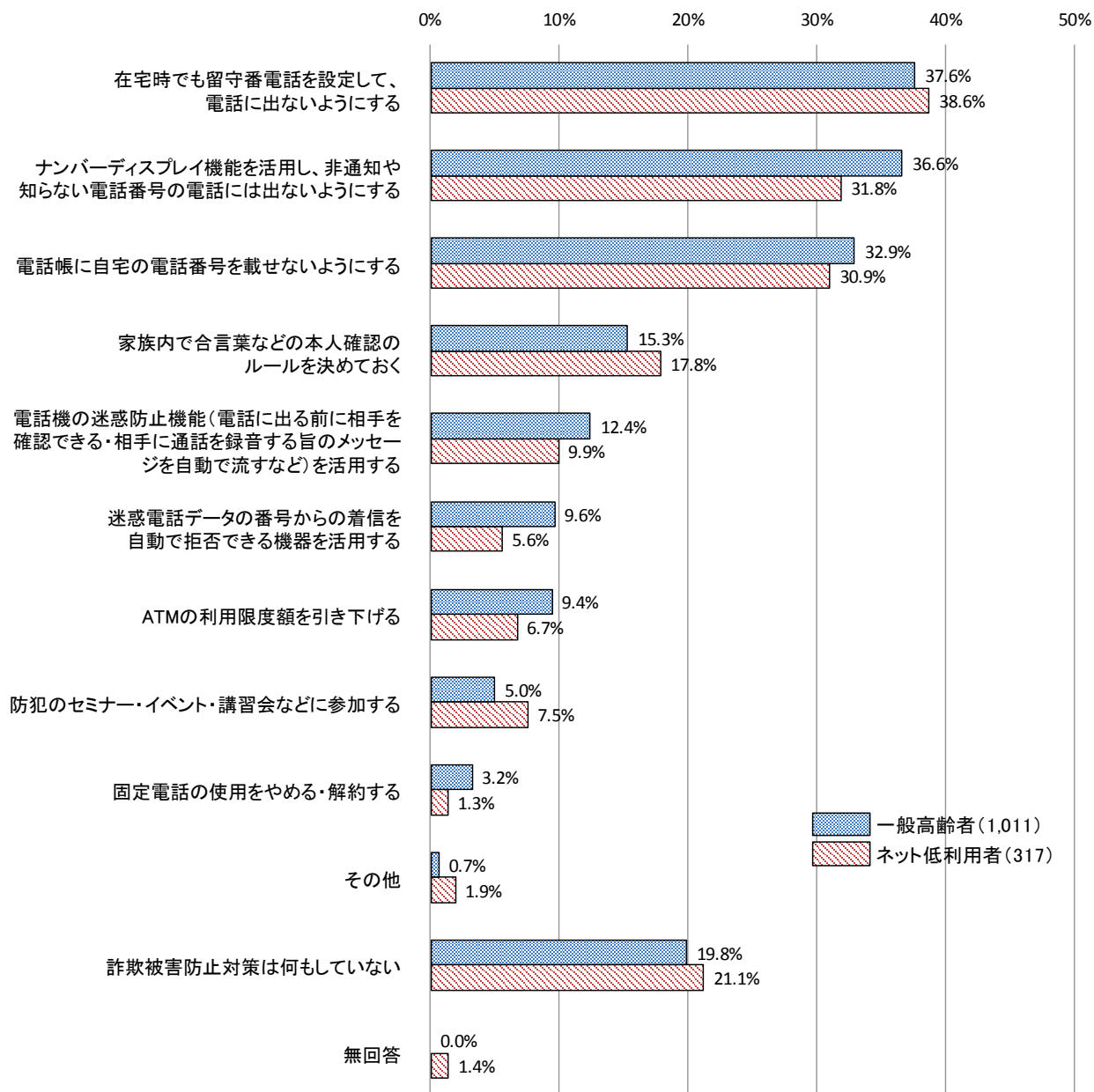
※詐欺経験者については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

② 被害防止対策の実施状況

現在の被害防止対策の実施状況について、1位「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」以降、2グループ間でほとんどの順位に違いは見られない。

また、各対策の実施率についても、「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」で一般高齢者に比べてネット低利用者が約5ポイント低いほかは、実施率にも大きな差異は見られない。また、「詐欺被害防止対策は何もしていない」の割合は2グループともに約2割程度となっている。

図66 現在実施している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)

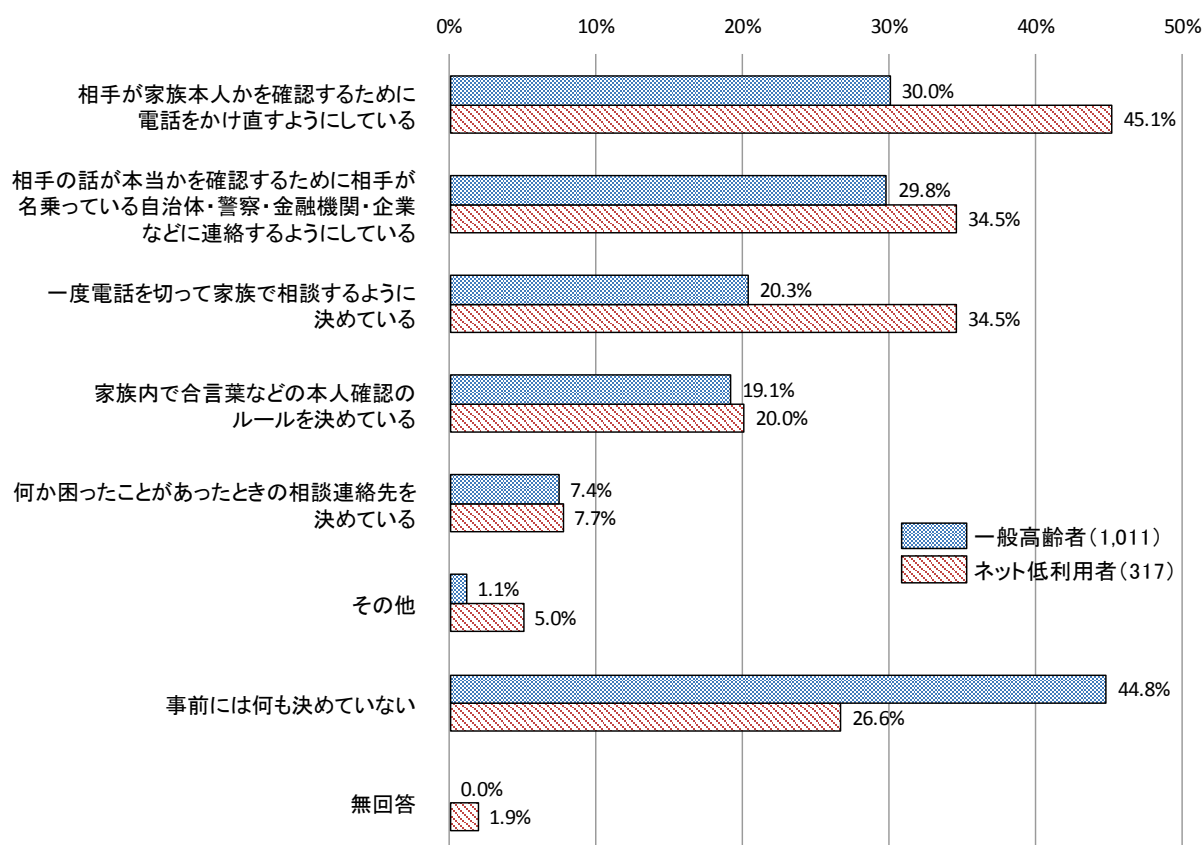


③ 事前に決めている詐欺遭遇時の対応策

もし詐欺が疑われる電話がかかってきたときの対応策を事前に決めているかについて、一般高齢者とネット低利用者で実施率に大きな差異がみられる。特に1位の「相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直すようにしている」については一般高齢者 30.0%に対してネット低利用者は 45.1%と、ネット低利用者のほうが約 15 ポイント高く、その他のすべての対応策でもネット低利用者のほうが実施率が高い結果となっている。

何らかの対応策を事前に決めていると回答した割合は一般高齢者では約 55%だが、ネット低利用者では約 73%に達している。

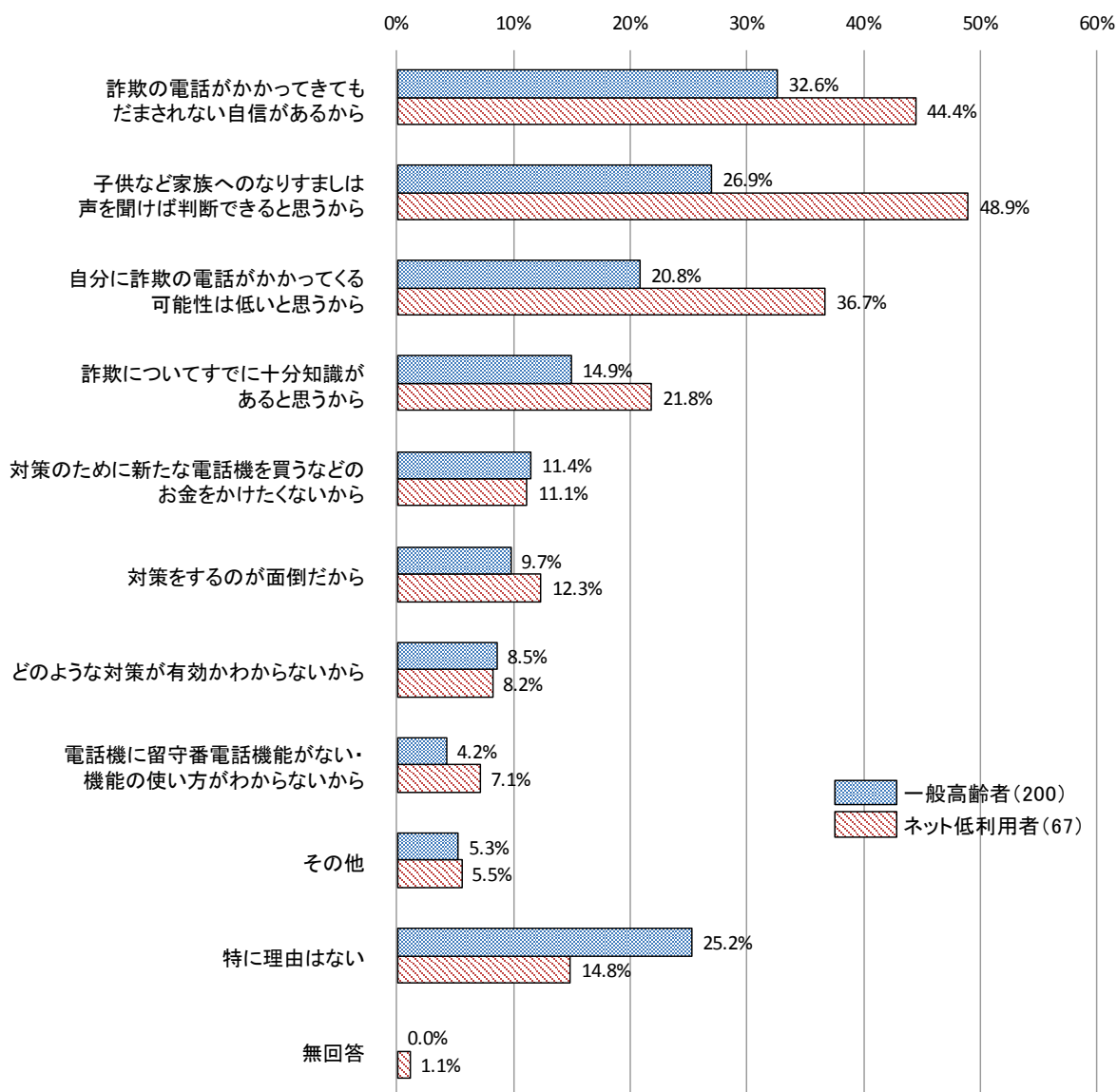
図67 事前に決めている詐欺遭遇時の対応策(複数回答、WBあり)



④ 被害防止対策を実施しない理由

詐欺の被害防止対策を実施していない人の「被害防止対策を実施していない理由」について、一般高齢者では「詐欺の電話がかかってきてもだまされない自信があるから」が32.6%で最も高いが、ネット低利用者では「子供など家族へのなりすましは声を聞けば判断できると思うから」が最も高く(48.9%)、上位4項目まではいずれもネット低利用者のほうが理由の回答率が高くなっており、回答傾向に違いが見られる。

図68 詐欺の被害防止対策を実施していない理由(未実施者のみ、複数回答、WBあり)



3-8. 高齢者向け調査結果のまとめ

(1) 詐欺に対する意識および対策の認知・実施状況

高齢者の詐欺に対する意識および対策の認知・実施状況について、調査結果を下表の通りまとめた。

表23 高齢者の詐欺に対する意識および対策の認知・実施状況まとめ

詐欺に対する意識	詐欺の手口別の認知状況	・詐欺名称認知率は「オレオレ詐欺」98%、「キャッシュカード詐欺」96%、「還付金詐欺」98% ・詳細認知率は「オレオレ詐欺」63%、「還付金詐欺」53%、「キャッシュカード詐欺」49%であり、手口の詳細まで含めた認知率は名称認知率に比べて大きく下がっている
	詐欺接触の可能性についての意識	・自分に詐欺の電話がかかってくることはないだろうと考える高齢者は約3割 ・男女別では男性のほうが「かかってくることはないだろう」の割合が高く、年齢別では60歳～64歳が最も高い
	詐欺被害の可能性についての意識	・詐欺の電話がかかってくるまでも被害にあわないだろうと考えている高齢者は約8割 ・男女別では男性の方が「被害にあわないだろう」の割合が高く、年齢別では70～74歳までは年齢が高くなるほど上がるが、逆に75歳以上は下がる傾向
	電話の声で本人の声を聞き分けられると思うか	・聞き分けられると思うと回答した割合は約8割 ・男女別では大きな差はみられないが、年齢別では85～89歳で特に高い
	自分の個人情報が漏れている可能性に対する意識	・漏れていると思うと回答した割合は9割近い ・男女別では男性の方が高く、年齢別では65歳～69歳が最も高く、それ以降年齢が高くなるにつれて割合が下がる傾向
	詐欺の情報受容手段	・「テレビ」96%、「新聞」57%、「警察からの情報」44% ・男性は「新聞」「インターネット」が女性に比べて高く、女性は「友人・知人との話題」が高い ・年齢が高いほど「新聞」の割合が高い
被害防止対策の認知・実施状況	被害防止対策の認知状況	・認知率が高いのは「ナンバーディスプレイ機能の活用」58%、「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」57%、「電話帳に自宅の電話番号を載せないようにする」45%⇒最も認知率の高い対策でも6割弱にとどまる ・「詐欺防止対策はひとつも知らない」は8%
	被害防止対策の実施状況	・実施率が高いのは「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」38%、「ナンバーディスプレイ機能の活用」37%、「電話帳に自分の電話番号を載せない」33% ・何らかの被害防止対策を実施している割合は約8割、「詐欺被害防止対策は何もしていない」は約2割
	事前に決めている詐欺遭遇時の対応策	・「相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直す」30%、「相手の話が本当かを確認するために相手が名乗っている自治体・警察・金融機関などに連絡する」30% ・何らかの対応策を事前に決めている割合は55%、事前には何も決めていない割合は45%
	被害防止対策を実施しない理由	・「詐欺の電話がかかってくるまでもだまされない自信があるから」33%、「子供など家族へのなりすましは声を聞けば判断できると思うから」27%、自力で回避できる自信から対策を実施しない傾向が見られる ・「特に理由はない」は25%、詐欺に対する危機意識の低さがうかがわれる

前ページのまとめの結果から、高齢者の詐欺に対する意識および対策の認知・実施状況における課題をさらに下記の通り要約した。

■詐欺の手口に関する詳細認知率向上の必要

詐欺手口の実態知識である認知状況について、手口の詳細まで知っていなければ日々進化する詐欺手口に騙されてしまう可能性があり、さらなる詳細認知率の向上が必要と考えられる。

(例:オレオレ詐欺を名称レベル・概要レベルでは知っていても、最近の手口のひとつである事前の連絡先変更の電話で騙されたら被害に遭ってしまう。)

■詐欺に対する危機意識向上の必要性

詐欺の電話がかかってきても騙されないだろうと思う人が約8割であり、その理由として、自分が見破れると思う自信があるから、声で本人を判断できるからとの回答が高くなっている。高齢者に被害防止対策を実行して頂くには、まず詐欺に対する危機意識を持って頂くことが重要であり、この危機意識をさらに向上させることが必要と考える。

■被害防止対策の認知率向上の必要性

被害防止対策として最も有効な対策として推奨している留守番電話の設定・活用についても、認知率は6割弱と決して高いとはいえない状況であり、さらなる認知率向上が必要と考える。

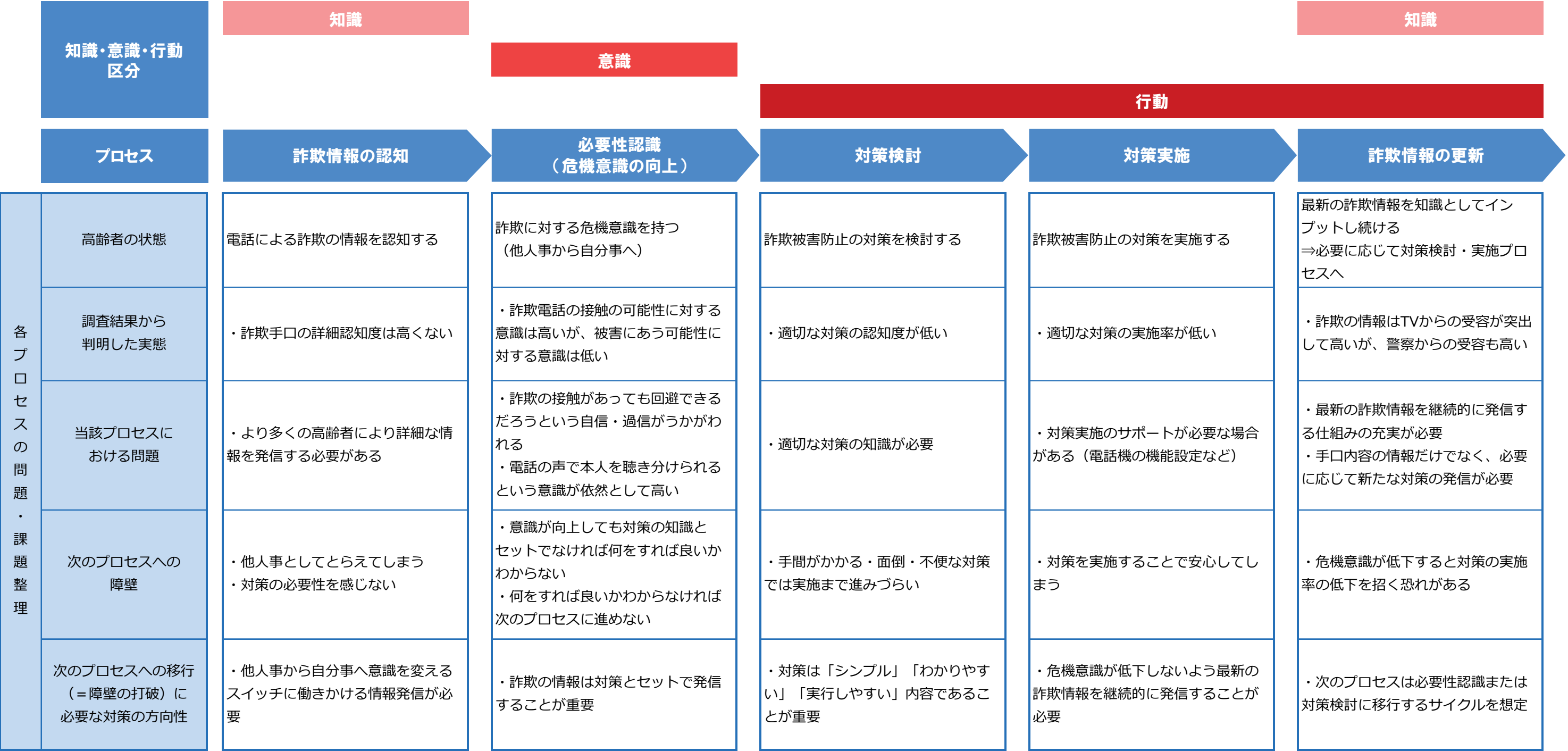
■被害防止対策の実施率向上の必要性

さらに被害防止対策の実施状況についても、留守番電話の設定・活用の実施率は4割弱であり、これも実施率の向上が必要と考える。

被害防止対策の実施については危機意識を向上させることが必要であり、危機意識の向上のためには危機感を持つための前提となる詐欺の手口や実態の知識が必要と考える。

このような、「知識⇒意識⇒行動」に至るプロセスを「詐欺被害防止行動プロセス」として、次ページの図にて整理した。

図69 高齢者の詐欺被害防止行動プロセス



(2) 詐欺の遭遇フローおよびフロー別の問題・課題

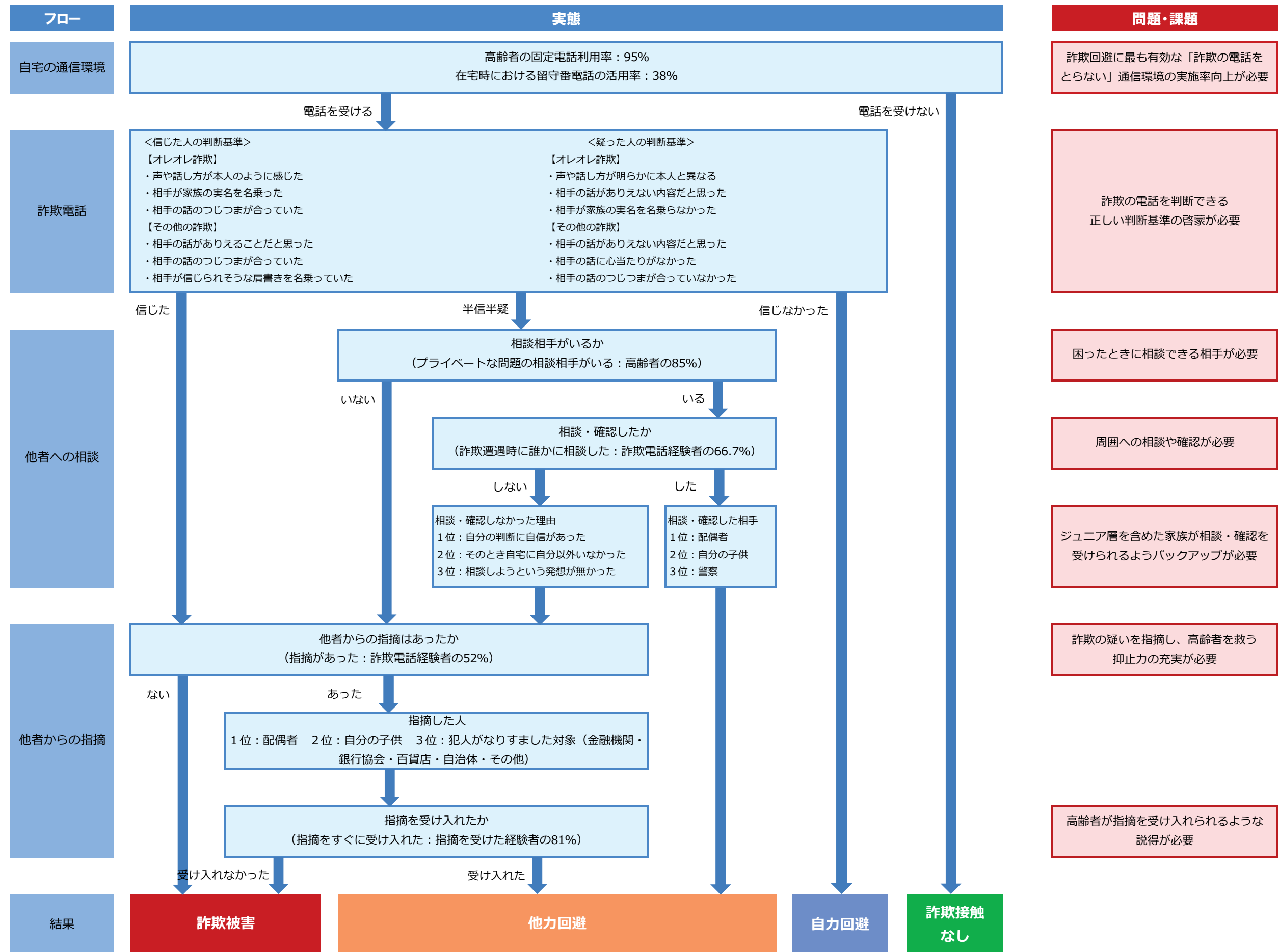
詐欺被害の防止対策として、まずは「留守番電話機能、迷惑防止機能の活用により発信者不明の電話に出ない」という対策が最優先ではあるが、なお一部の高齢者についてはさまざまな理由によりその対策の実施徹底が困難であることが想定される。(例:友人・知人からの電話に留守番電話で対応するのは失礼と考えるなど)

そこで次の備えとして、詐欺に遭遇してしまった場合の被害回避対策が必要となる。

この対策の検討にあたっては、詐欺遭遇の実態をフローに分解・整理したうえで、フロー別の対策を検討するのが有効と考える。

この目的のため、詐欺の遭遇フローとフロー別の問題点・課題を次ページの図の通りに整理した。

図70 詐欺の遭遇フローおよびフロー別の問題・課題



(3) 詐欺の被害者・回避者の差異分析

実際に詐欺に遭遇した経験者は被害者と回避者に分かれるが、この2つのグループにはどのような違いがあるのか、どのような要因が被害者・回避者を分けるキーとなっているのかを明らかにするため、被害者・回避者の差異分析を実施した。(詳細は「3-6.被害者・回避者・未経験者の差異分析」を参照)

その結果、被害者と回避者を分けるキーとして、外的要因・内的要因・詐欺関連要因(詐欺に対する意識および対策実施状況)の3つの要因が浮かび上がってきた。そこで、この被害者・回避者の差異分析の結果を次ページの表にて整理した。

図71 詐欺被害者・回避者の差異分析まとめ

詐欺被害者			他力回避者			自力回避者			被害者と回避者を分けるキー		
外的要因 (自分を取り巻く 人間関係や 環境の要因)	同居家族構成	図29	一人暮らし世帯の割合が高い (30.1%) ⇒家庭内に相談相手がない	二人以上の世帯の割合が高い (95.5%) ⇒家族が抑止力になっている		目立った特徴は見られない			外的要因 (自分を取り巻く 人間関係や 環境の要因)	同居家族構成	・一人暮らし世帯はすぐに連絡がとれる相談者がいるか ・二人以上の世帯は家族が相談者＝抑止力となっているか
	子供の有無および性別	図30	オレオレ詐欺の対象となる「男性の子供あり」の割合は自力回避者と大差ない (64.4%)	「男性の子供あり」の割合は被害者と大差ない (70.5%)		「男性の子供あり」の割合は詐欺被害者と大差ない (63.8%)				子供の有無および性別	男性の子供がいる世帯はオレオレ詐欺の条件に合致⇒事前の連絡先変更など、オレオレ詐欺の詳細手口を認知しているか
	子供とのコミュニケーション	図32,33	直接会う・電話で話すコミュニケーションの頻度が回避者に比べて低い傾向 (直接会う9.3%、電話で話す2.1%)	直接会う・電話で話すコミュニケーションの頻度が被害者に比べてやや高い傾向 (直接会う10.2%、電話で話す1.2%)		直接会う・電話で話すコミュニケーションの頻度が被害者に比べてやや高い傾向 (直接会う14.0%、電話で話す1.9%)				子供とのコミュニケーション	普段から子供と密接なコミュニケーションをとっているか⇒オレオレ詐欺などの被害防止に有効
	親族・友人知人・近所とのコミュニケーション	図35	友人知人とのコミュニケーション頻度は回避者よりも高い傾向 (46.6%) ⇒家庭外でのコミュニケーション頻度は低くない			友人知人とのコミュニケーション頻度は被害者に次いで高い傾向 (41.4%)				親族・友人知人・近所とのコミュニケーション	家族以外とのコミュニケーションは詐欺被害・回避との相関が見られない⇒特殊詐欺は「周囲から孤立した独居老人」だけが被害に遭うわけではない、家庭外とのコミュニケーションが多い人でも被害に遭う可能性を認識する必要あり
	プライベート問題の相談者の有無および対象	図36	配偶者・自分の子供などの割合が回避者よりも低く、相談相手がない割合が回避者よりも高い (自分の子供27.4%、特にいない19.2%)	配偶者・自分の子供などの割合が被害者よりも高く、相談相手がない割合が自力回避者よりも低い (自分の子供73.2%、特にいない13.4%)		自分の子供の割合は被害者と同じ程度に低い (自分の子供59.2%)				プライベート問題の相談者の有無および対象	身近に困ったときの相談相手がいるか・いつでも連絡がとれるか
	固定電話・携帯電話の利用状況	図37	詐欺被害の経験後、現在の固定電話利用率は全体に比べて低い (86.3%)	全体と比べて固定電話の利用率に大きな差異は見られない		全体と比べて固定電話の利用率に大きな差異は見られない				固定電話の利用状況 各種機能の利用状況	・固定電話を解約しているか ・在宅時でも留守番電話機能を活用して、電話に出ないようにしているか ・電話機の迷惑電話防止機能を活用しているか
内的要因 (自分自身に 起因する 個人特性要因)	固定電話の各種機能および利用の有無	図38,39,40	詐欺被害の経験後、現在は留守番電話など各機能において自力回避者よりも利用率が高い (ナンバーディスプレイ40.4%、留守番電話71.9%、迷惑防止28.1%)	留守番電話など各機能において自力回避者よりも利用率が高い (ナンバーディスプレイ42.9%、留守番電話71.4%、迷惑防止25.5%)		留守番電話など各機能において最も利用率が低い (ナンバーディスプレイ36.0%、留守番電話61.8%、迷惑防止11.8%) ⇒自力回避の成功体験から必要性の意識が薄れている可能性			内的要因 (自分自身に 起因する 個人特性要因)	最終学歴	最終学歴と詐欺被害・回避の相関はある程度見られる
	最終学歴	図43	回避者に比べて高校卒業の割合が高い (31.5%)	被害者に比べて専門学校・短大・大学以上の割合が高い (78.6%)		専門学校・短大・大学以上の割合が最も高い (80.2%)				性格類型・行動パターン	下記の性格類型にあてはまると詐欺被害に遭いやすい ①論理的よりも直感的に判断してしまう傾向が強いこと ②周囲のペースに合わせてしまう傾向が強いこと ③見た目や肩書きなどのわかりやすい基準で相手を信じてしまう傾向が強いこと
	性格類型・行動パターン	図46	「頼られたら断れないほうだ」「人や話の怪しさに気づかないほうだと思う」「判断が難しいことは我慢せずにすぐに決めてしまいたいほうだ」「理屈で考えるよりも直感や経験によって行動するほうだ」「見かけの良い人だ」とつい信じてしまうほうだ」などが自力回避者に比べて高い (「頼られたら断れないほうだ」68.5%「人や話の怪しさに気づかないほうだと思う」28.8%「判断が難しいことは我慢せずにすぐに決めてしまいたいほうだ」23.3%「理屈で考えるよりも直感や経験によって行動するほうだ」46.6%「見かけの良い人だ」とつい信じてしまうほうだ」43.8%)	・詐欺被害者と自力回避者の中間に位置している項目が多い ・「子供や孫のことが心配だ」が3グループで最も高い (「子供や孫のことが心配だ」56.6%)		「頼られたら断れないほうだ」「人や話の怪しさに気づかないほうだと思う」「判断が難しいことは我慢せずにすぐに決めてしまいたいほうだ」「理屈で考えるよりも直感や経験によって行動するほうだ」「見かけの良い人だ」とつい信じてしまうほうだ」などが被害者に比べて低い (「頼られたら断れないほうだ」46.1%「人や話の怪しさに気づかないほうだと思う」9.9%「判断が難しいことは我慢せずにすぐに決めてしまいたいほうだ」7.2%「理屈で考えるよりも直感や経験によって行動するほうだ」27.7%「見かけの良い人だ」とつい信じてしまうほうだ」27.0%)				肩書の信用影響度	安易に相手の名乗る肩書きを信用しないようにしているか
	肩書の信用影響度	図47	6種類全ての肩書きに対して信用影響度が最も高い (警察署員53.4%、自治体職員34.2%、金融機関職員27.4%、百貨店職員20.5%、家電量販店職員19.2%、弁護士38.4%) ⇒相手の名乗る肩書きを信用してしまう傾向	6種類全ての肩書きに対して詐欺被害者と自力回避者の中間に位置している (警察署員38.4%、自治体職員18.8%、金融機関職員16.1%、百貨店職員14.3%、家電量販店職員11.6%、弁護士27.7%)		6種類全ての肩書きに対して信用影響度が最も低い (警察署員28.9%、自治体職員17.1%、金融機関職員10.5%、百貨店職員8.6%、家電量販店職員7.9%、弁護士20.4%) ⇒安易に相手の名乗る肩書きを信用しない傾向				電話コミュニケーション 手法の信用影響度	安易に相手のコミュニケーション手法に影響されないようにしているか
	電話コミュニケーション手法の信用影響度	図48	3種類全てのコミュニケーション手法に対して信用影響度が最も高い⇒相手のコミュニケーション手法に影響されてしまう傾向 (親切にされると信じてしまう67.1%、論理立てて説明されると納得してしまう74.0%、熱意を持って話されると圧倒されてしまう56.2%)	3種類全てのコミュニケーション手法に対して詐欺被害者と自力回避者の中間に位置している (親切にされると信じてしまう57.1%、論理立てて説明されると納得してしまう67.9%、熱意を持って話されると圧倒されてしまう46.4%)		3種類全てのコミュニケーション手法に対して信用影響度が最も低い (親切にされると信じてしまう50.7%、論理立てて説明されると納得してしまう59.2%、熱意を持って話されると圧倒されてしまう40.1%) ⇒安易に相手のコミュニケーション手法に影響されない傾向				メディア接触頻度	テレビなどのメディアで最新の詐欺情報をキャッチアップできているか
詐欺に対する意識	メディア接触頻度	図49	テレビの接触頻度が低く、インターネット (PC) の接触頻度は高い (テレビ3時間以上49.3%、インターネット (PC) 3時間以上42.5%)	テレビの接触頻度が高く、インターネット (PC) の接触頻度は最も低い (テレビ3時間以上54.5%、インターネット (PC) 3時間以上25.9%)		テレビの接触頻度が高く、インターネット (PC) の接触頻度は被害者と同程度 (テレビ3時間以上57.2%、インターネット (PC) 3時間以上40.8%)			詐欺に対する意識	詐欺の手口別認知状況	詐欺の名称だけでなく手口の詳細まで認知できているか
	詐欺の手口別認知状況	図50	主要な3手口において最も詳細認知度が低い (オレオレ詐欺38.4%、キャッシュカード詐欺23.3%、還付金詐欺26.0%)	主要な3手口において詐欺被害者と自力回避者の中間に位置している (オレオレ詐欺50.9%、キャッシュカード詐欺32.1%、還付金詐欺30.4%)		主要な3手口において3グループのうち最も詳細認知度が高い (オレオレ詐欺57.9%、キャッシュカード詐欺36.8%、還付金詐欺40.1%)				詐欺の接触があるか 思っているか (思っていたか)	自分が詐欺に遭遇するかもしれないという危機意識を持っているか
	詐欺の接触があるか 思っているか (思っていたか)	図51	「詐欺の電話がかかってくることはないと思っていた」が3グループのうち最も高い (46.6%) ⇒詐欺に対する意識が低い	「詐欺の電話がかかってくることはないと思っていた」は詐欺被害者・自力回避者の中間 (32.1%)		「詐欺の電話がかかってくることはないと思っていた」が3グループのうち最も低い (31.6%) ⇒詐欺に対する意識が高い				騙されるかもしれないか 思っているか (思っていたか)	自分も詐欺に騙されるかもしれないという危機意識を持っているか
	騙されるかもしれないか 思っているか (思っていたか)	図52	「詐欺の電話がかかってくるまでも被害にあわないと思っていた」の割合は回避者と大きな差異は見られない (46.6%)	他のグループと大きな差異は見られない		他のグループと大きな差異は見られない				詐欺の情報受容手段	様々な媒体から最新の詐欺情報を受容しているか
被害防止対策の認知・実施状況	詐欺の情報受容手段	図53	他のグループと大きな違いは見られない	他のグループと大きな差異は見られない		他のグループと大きな差異は見られない			被害防止対策の認知・実施状況	被害防止対策の認知度 (詐欺遭遇前)	正しい被害防止対策を認知しているか (例：留守番電話機能を活用していても、電話に出てしまっでは有効ではない)
	被害防止対策の認知度 (詐欺遭遇前)	図54	多くの防止対策で被害者よりも認知率が低く、「防止対策をひとつも知らなかった」の割合は3グループで最も高い (26.0%)	多くの防止対策で被害者よりも認知率が高く、特に「ナンバーディスプレイの活用」「留守番電話の活用」などの認知率は3グループのなかで最も高い (ナンバーディスプレイ50.0%、留守番電話の活用49.1%)		多くの防止対策で被害者よりも認知率が高い				被害防止対策の実施状況 (現在)	正しい被害防止対策を実施しているか
被害防止対策の実施状況	被害防止対策の実施状況 (現在)	図55	多くの防止対策で他のグループより実施率が高い	「ナンバーディスプレイの活用」は3グループで最も実施率が高く、「留守番電話の活用」も被害者に次いで実施率が高い (ナンバーディスプレイ37.5%、留守番電話の活用33.9%)		多くの防止対策で被害者より実施率が低く、「防止対策は何もしていない」の割合は3グループ中最も高い (25.0%)					

(4) インターネットの利用頻度の違いによる差異分析

インターネットの利用頻度の違いによる一般高齢者とネット低利用者の詐欺に関する差異について、調査分析結果を下表の通りまとめた。

表24 インターネットの利用頻度の違いによる差異分析まとめ

詐欺に対する意識	詐欺の手口別の認知状況	「オレオレ詐欺」「キャッシュカード詐欺」「還付金詐欺」の主要3手口を含めた全ての手口類型において、ネット低利用者は一般高齢者に比べて詳細認知率が低い
	詐欺接触の可能性についての意識	自分に詐欺の電話がかかってくることはないという回答した割合は一般高齢者31%、ネット低利用者51% ⇒ネット低利用者のほうが詐欺に対する危機意識は低い
	詐欺被害の可能性についての意識	詐欺の電話がかかってきても被害にあわないだろうと回答した割合は一般高齢者81%、ネット低利用者85% ⇒詐欺被害を回避できる自信度はネット低利用者のほうが若干高い
	電話の声で本人の声を聞き分けられると思うか	聴き分けられると回答した割合は一般高齢者82%、ネット低利用者79% ⇒一般高齢者とネット低利用者に大きな差異は見られない
	自分の個人情報が漏れている可能性に対する意識	確実に漏れていると思うと回答した割合は一般高齢者86%、ネット低利用者83% ⇒一般高齢者とネット低利用者に大きな差異は見られない
	詐欺の情報受容手段	・一般高齢者、ネット低利用者とも「テレビ」が最も高く95%を超えている ・2位から4位までは同じく「新聞」「警察からの情報」「自治体の区報・市報」が続く ・「インターネット」などを除く多くの項目でネット低利用者の回答率が一般高齢者よりも高い⇒ネット低利用者も詐欺の情報についてはインターネット以外の多くの媒体から情報を得ている
被害防止対策の認知・実施状況	被害防止対策の認知状況	・認知率上位の防止対策はいずれもネット低利用者のほうが認知率が高い ・一般高齢者で最も認知率が高いのは「ナンバーディスプレイ機能の活用」(58%)、ネット低利用者では「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」(67%)が最も高い ・「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」についても、ネット低利用者のほうが10ポイント程度認知率が高い
	被害防止対策の実施状況	・各対策の実施率および順位について一般高齢者とネット低利用者に大きな差異は見られない ・何らかの被害防止対策を実施している割合は2グループとも約8割
	事前に決めている詐欺遭遇時の対応策	・一般高齢者とネット低利用者で実施率に大きな差異がみられる ・特に1位の「相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直す」は一般高齢者30%、ネット低利用者は45%、その他の全ての項目でもネット低利用者のほうが実施率が高い ・何らかの対応策を事前に決めている割合は一般高齢者55%、ネット低利用者73%
	被害防止対策を実施しない理由	・一般高齢者では「詐欺の電話がかかってきてもだまされない自信があるから」が最も高い(33%)が、ネット低利用者では「子供など家族へのなりすましは声を聞けば判断できると思うから」が最も高く(48.9%)、上位4項目まではいずれもネット低利用者のほうが理由の回答率が高い

前ページのまとめの結果から、一般高齢者とネット低利用者の差異分析によって明らかになったことと今後の課題を下記の通り要約した。

■ 詐欺に対する意識関連の数値は一般高齢者よりもネット低利用者のほうが低い

詐欺手口の詳細認知率、詐欺接触の可能性の意識、詐欺被害の可能性の意識とも、ネット低利用者は一般高齢者に比べて数値が低くなっている。

■ ネット低利用者は一般高齢者に比べて多くの媒体から詐欺の情報を受容している

インターネットを除く多くの媒体で、ネット低利用者のほうが一般高齢者よりも詐欺の情報受容率が高くなっており、詐欺の情報に関してはより多くのさまざまな媒体から情報を受容している。

また、詐欺の情報受容手段として最も利用率の高いテレビについては、一般高齢者以上に1日あたり接触率が高くなっている。

■ ネット低利用者と一般高齢者で被害防止対策の認知率・実施率に大きな差異は無い

インターネットを除く多くの情報媒体から一般高齢者と同等以上に詐欺の情報を得ていることから、詐欺手口の認知率や被害防止対策の実施率については一般高齢者とネット低利用者で大きな差異は見られない。

これらの結果から、ネット低利用者は詐欺関連の情報については情報感度が低いとはいえないこと、そして高齢者に適応した情報媒体(テレビ、新聞や折込チラシ、行政からの市報などのいわゆるペーパーメディア、警察からの直接的な発信など)を通じた詐欺情報の発信を充実させることにより、インターネットの利用頻度が低い高齢者に対しても詐欺情報を受容して頂き、被害防止対策の認知および実施につなげていける可能性が高いと考えられる。

4. 高齢者ジュニア層向け調査結果の概要

「2. 調査の概要」にて記載したとおり、今回の調査では高齢者の子供にあたる 30～50 代の男女を高齢者ジュニア層と定義して、この高齢者ジュニア層に対しても調査を実施しており、本章ではその調査結果の概要をまとめている。

4-1. ジュニア層の詐欺に対する意識

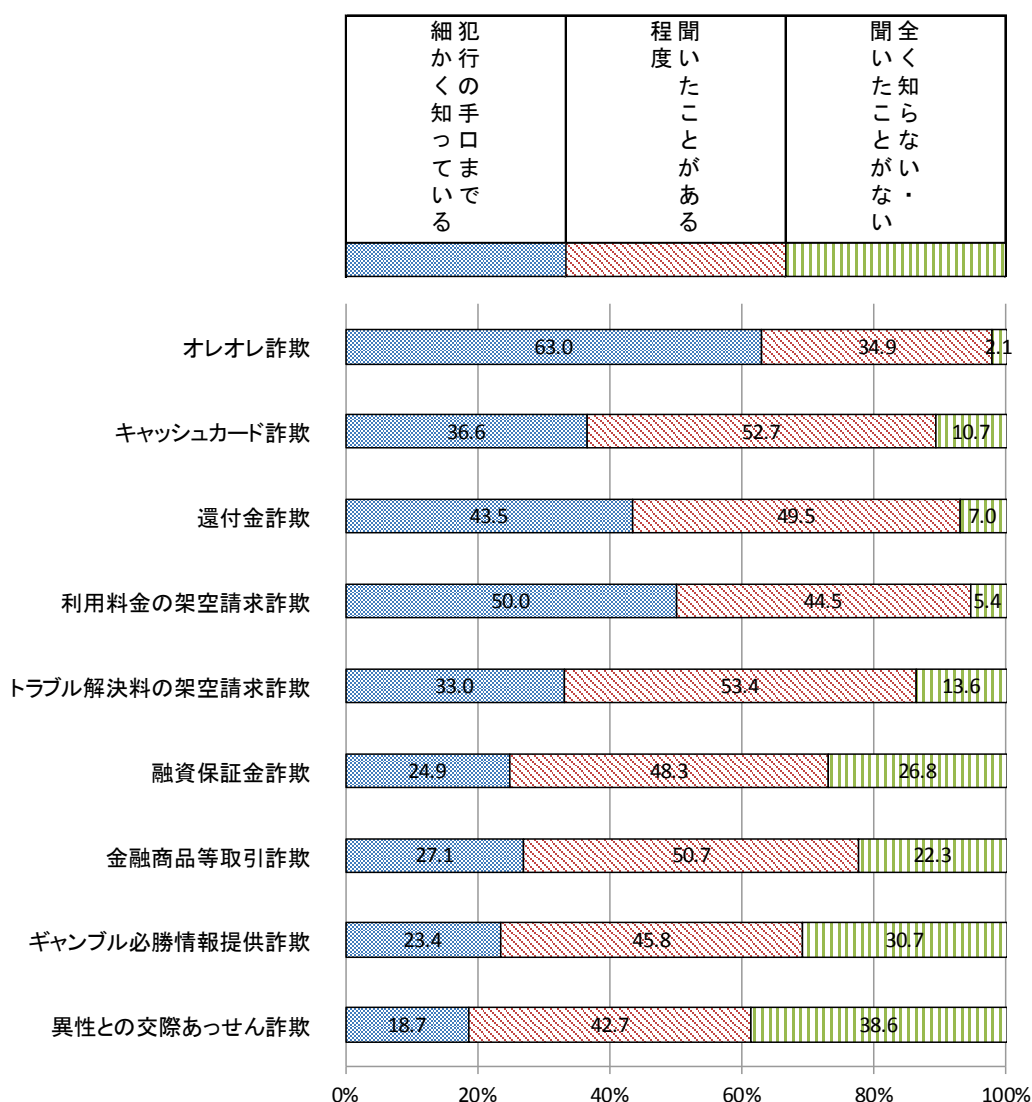
(1) 詐欺の手口別の認知状況

電話による詐欺の手口別での認知度について、「聞いたことがある程度」までを含めた詐欺名称認知率は「オレオレ詐欺」97.9%、「キャッシュカード詐欺」89.3%、「還付金詐欺」93.0%に達している。

しかし「犯行の手口まで細かく知っている」と回答した詳細認知率については、最も認知率の高い「オレオレ詐欺」でも 63.0%、「利用料金の架空請求詐欺」が 50.0%であり、「還付金詐欺」では 43.5%、「キャッシュカード詐欺」は 36.6%と過半数を割っている。

図72 詐欺の手口別認知状況(単一回答、WBあり)

(n=518)



※詐欺経験者の家族については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

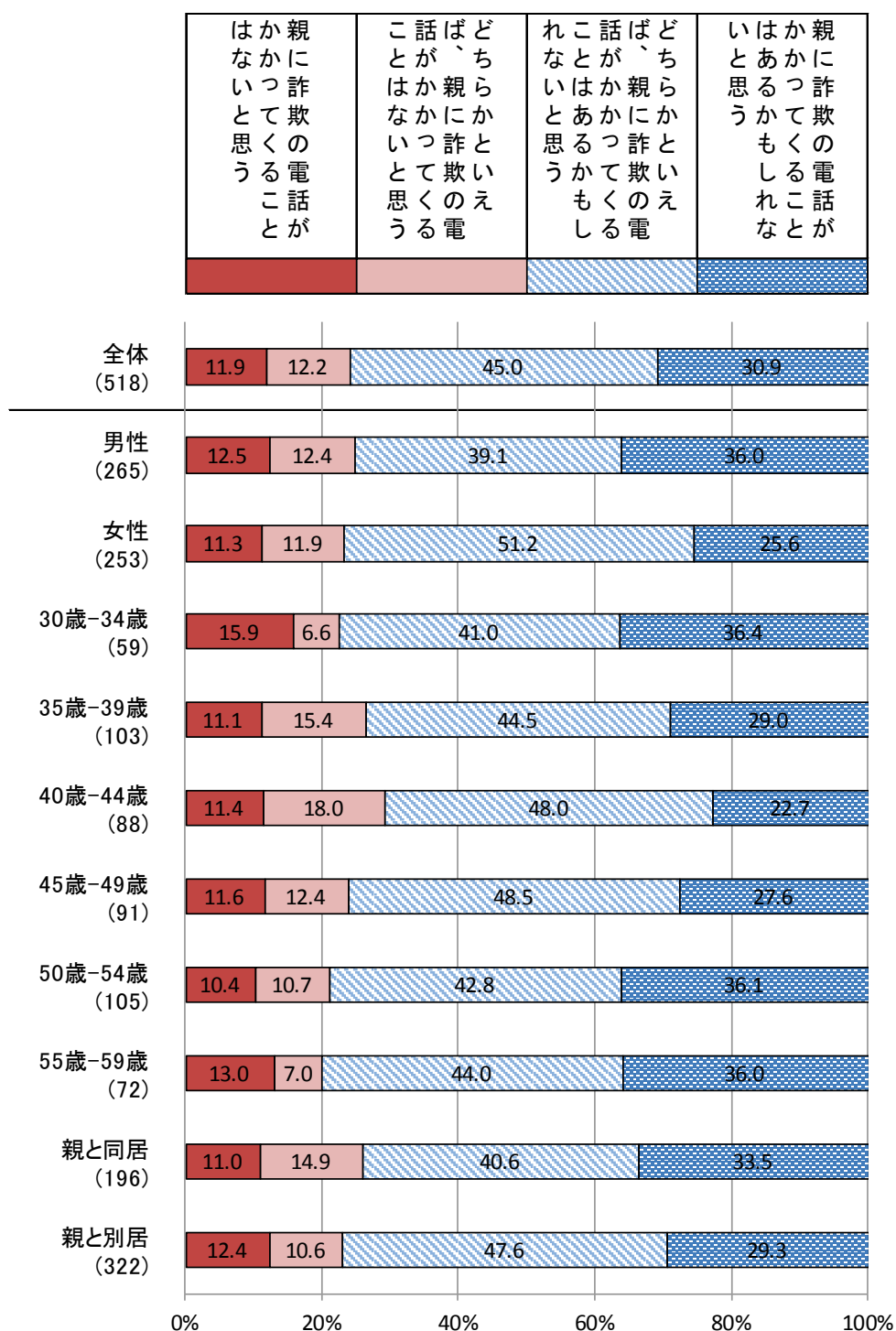
(2) 親への詐欺接触の可能性に対する意識

自分の親への詐欺接触の可能性に対する意識について、「親に詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」「どちらかといえば、親に詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」と回答した割合は合わせて75.9%であり、逆に「親に詐欺の電話がかかってくることはないと思う」「どちらかといえば、親に詐欺の電話がかかってくることはないと思う」と回答した割合は24.1%にとどまっている。

男女別で見ると、「詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」の割合は男性が女性に比べて高く、年齢別では30歳～34歳および50代が高くなっている。

図73 親への詐欺接触の可能性に対する意識(単一回答、WBあり)

(n=518)



※詐欺経験者の家族については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

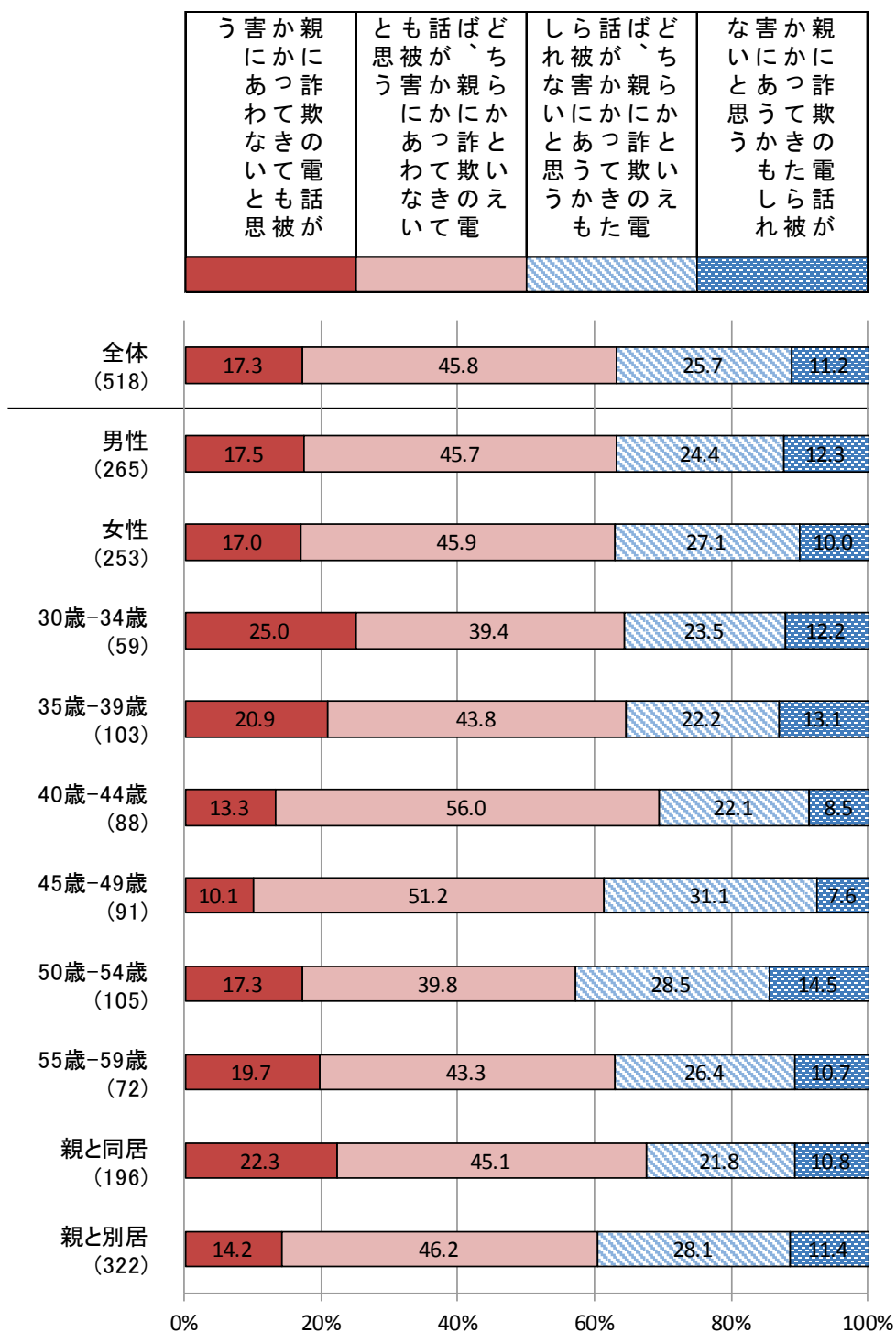
(3) 親の詐欺被害の可能性に対する意識

親の詐欺被害の可能性に対する意識について、「親に詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思う」「どちらかといえば、親に詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思う」と回答した割合をあわせて 63.1%と6割を超えており、詐欺接触の可能性の割合とは大きく異なる結果となっている。

男女別では大きな差異は見られないが、年齢別で見ると 40 歳～44 歳が「被害にあわない」の合計の割合が最も高くなっている(69.3%)。また、親との同居有無別では、親と同居のほうが「被害にあわない」の合計の割合が高い(67.4%)。

図74 親の詐欺被害の可能性に対する意識(単一回答、WBあり)

(n=518)



※詐欺経験者の家族については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

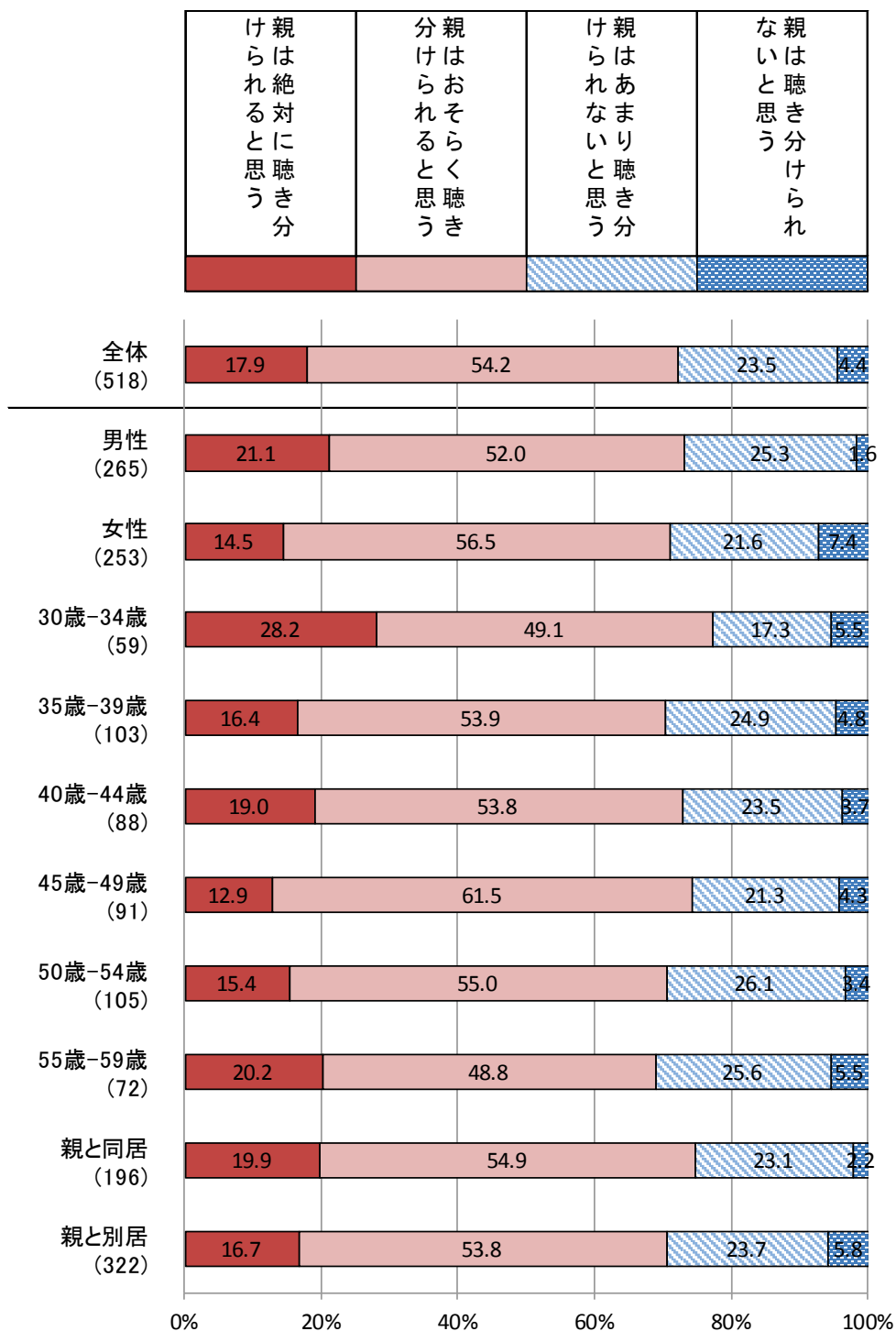
(4) 親が電話の声で本人かどうかを聴き分けられると思うか

親が電話の声で自分かどうかを聴き分けられると思うかについて、「親は絶対に聴き分けられると思う」「親はおそらく聴き分けられると思う」の合計は72.1%となっている。

男女別では大きな差異は見られないが、年齢別で見ると30～34歳が「親は聴き分けられると思う」の合計の割合が最も高くなっている(77.3%)。また、親との同居有無別では、親と同居のほうが「親は聴き分けられると思う」の割合が高い(74.8%)。

図75 (親が詐欺に遭遇する前)親が電話の声で自分かどうかを聴き分けられると思うか(単一回答、WBあり)

(n=518)



※詐欺経験者の家族については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

(5) 詐欺の情報受容手段

詐欺の情報受容手段については、「テレビ」(88.1%)、「インターネット」(44.5%)、「新聞」(31.2%)の順に高い。

図76 詐欺の情報受容手段(複数回答、WBあり)

(n=518)

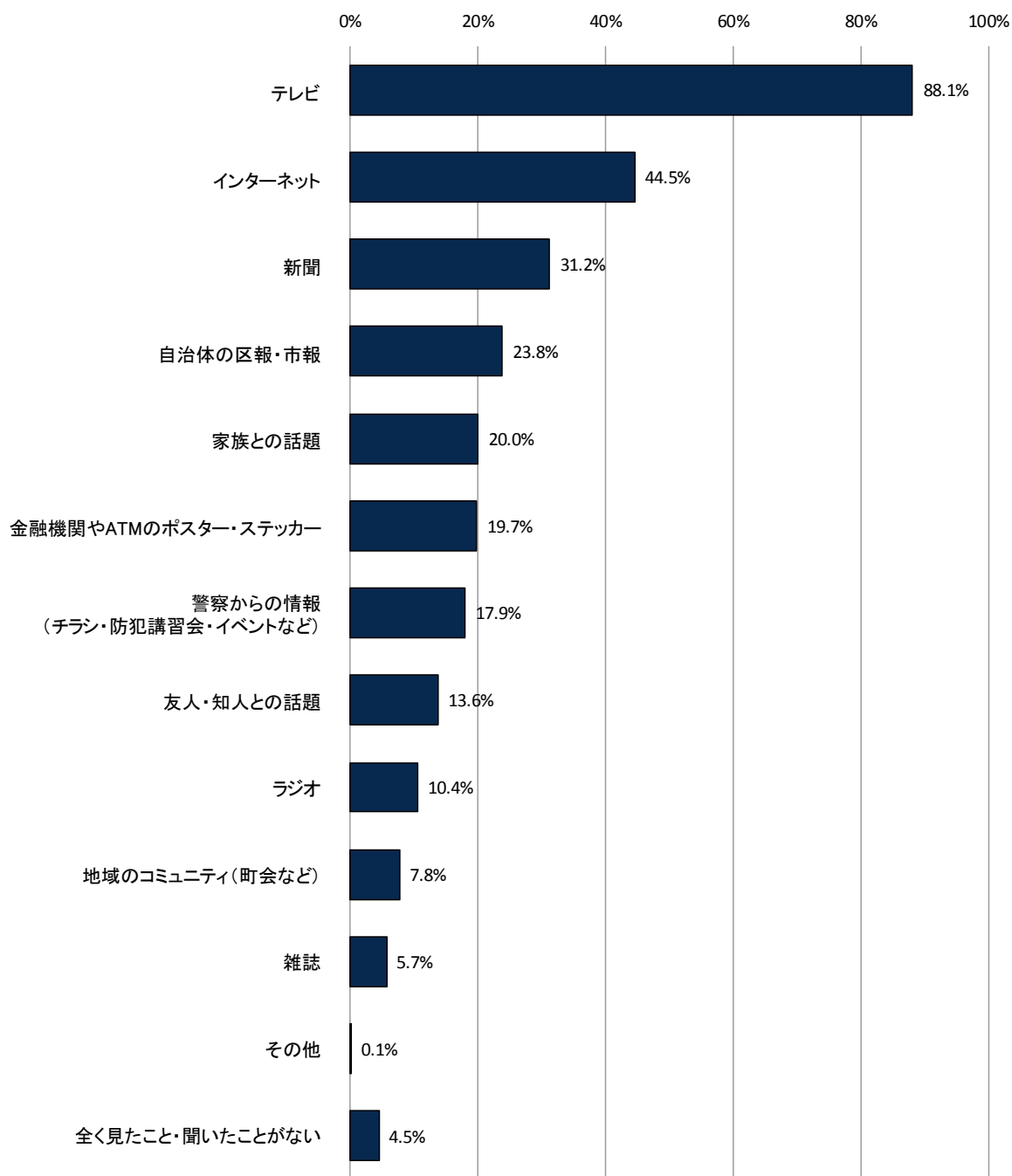


表25 詐欺の情報受容手段(複数回答、WBあり)

			テレビ	インターネット	新聞	自治体の区報・市報	家族との話題	金融機関やＡＴＭのポスター・ステッカー	警察からの情報 (チラシ・防犯講習会・イベントなど)	友人・知人との話題	ラジオ	地域のコミュニティ(町会など)	雑誌	その他	全く見たこと・聞いたことがない
[比率の差] n=30以上の場合															
			全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント												
性別	全体	(518)	88.1	44.5	31.2	23.8	20.0	19.7	17.9	13.6	10.4	7.8	5.7	0.1	4.5
	男性	(265)	84.1	45.7	34.8	20.5	13.2	17.8	15.4	9.5	9.4	7.6	8.6	0.3	6.2
	女性	(253)	92.1	43.2	27.3	27.1	27.0	21.8	20.6	18.0	11.5	8.0	2.6	0.0	2.6
(5歳年刻齢み)	30歳-34歳	(59)	88.3	56.2	17.2	33.6	24.6	27.5	28.3	6.1	9.4	8.3	8.8	0.0	8.3
	35歳-39歳	(103)	79.3	48.6	23.3	16.8	16.2	11.5	10.9	14.7	4.0	5.4	5.1	0.3	7.9
	40歳-44歳	(88)	90.9	50.9	28.5	23.4	18.2	16.3	12.3	7.5	10.2	4.1	8.4	0.0	2.1
	45歳-49歳	(91)	88.7	40.4	37.8	25.2	25.0	22.4	21.4	20.4	7.9	8.6	4.8	0.4	7.2
	50歳-54歳	(105)	92.0	32.1	34.6	26.0	21.3	17.2	18.5	16.1	11.7	13.2	1.1	0.1	0.0
	55歳-59歳	(72)	90.4	44.0	43.9	20.9	15.4	29.9	21.1	13.8	22.3	6.1	8.3	0.0	2.3
同居有無	親と同居	(196)	85.2	41.7	35.7	22.9	20.3	16.7	16.5	12.2	11.7	8.2	8.6	0.2	8.4
	親と別居	(322)	89.8	46.1	28.4	24.3	19.8	21.6	18.8	14.5	9.7	7.4	3.9	0.1	2.1

4-2. ジュニア層の被害防止対策の認知・関与状況

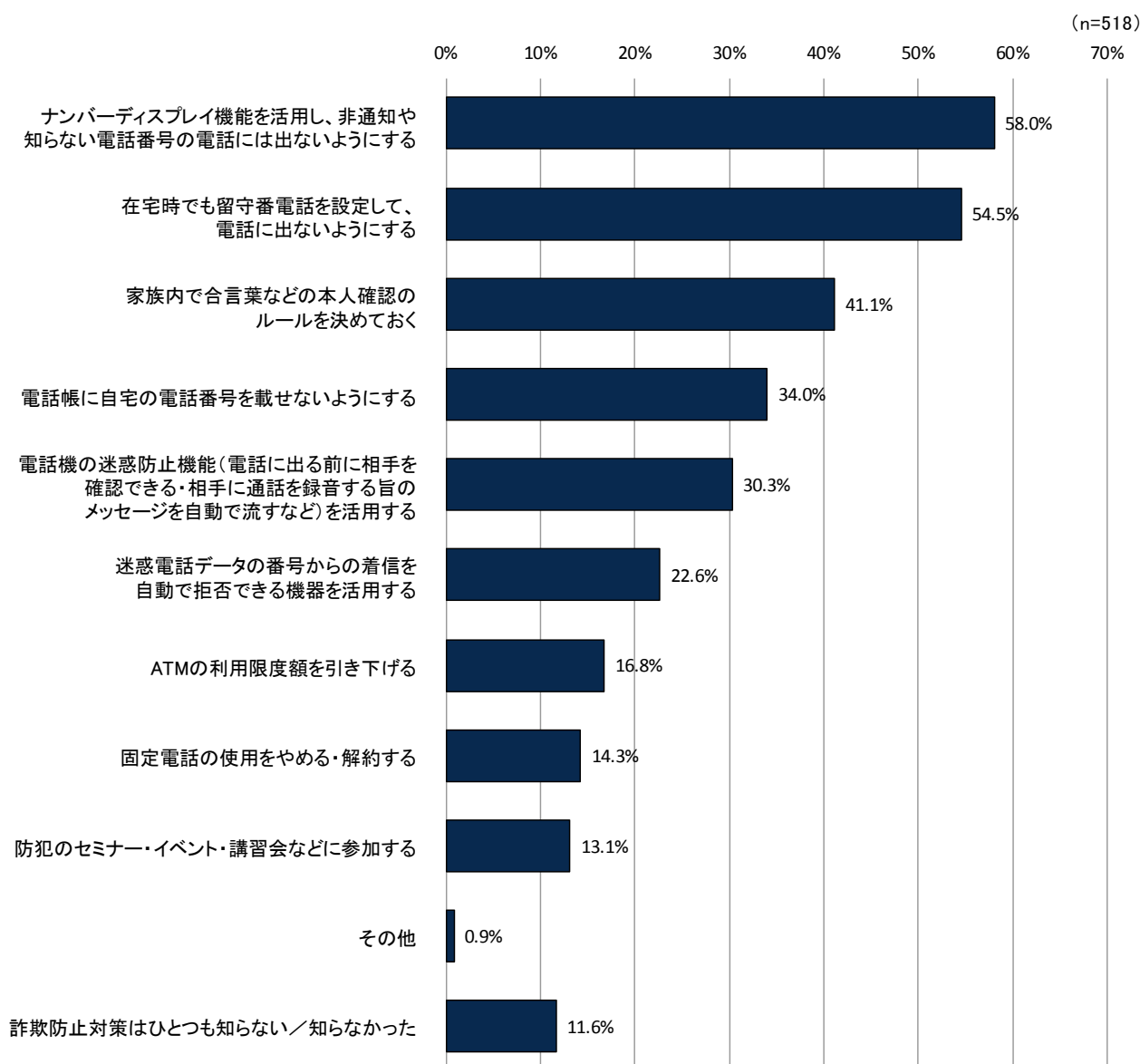
(1) 被害防止対策の認知状況

電話による詐欺の被害防止対策について、最も認知率が高いのは「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」(58.0%)であり、次いで「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」(54.5%)、「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」(41.1%)が続いている。

このように最も認知率の高い対策でも6割弱にとどまっており、また現在警視庁が被害防止対策として特に啓蒙している「留守番電話機能の活用」についても5割強の認知率となっている。

なお、「詐欺防止対策はひとつも知らない」と回答した割合は11.6%だった。

図77 認知している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)



※詐欺経験者の家族については詐欺に遭遇する前の状況について聴取している。

表26 認知している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)

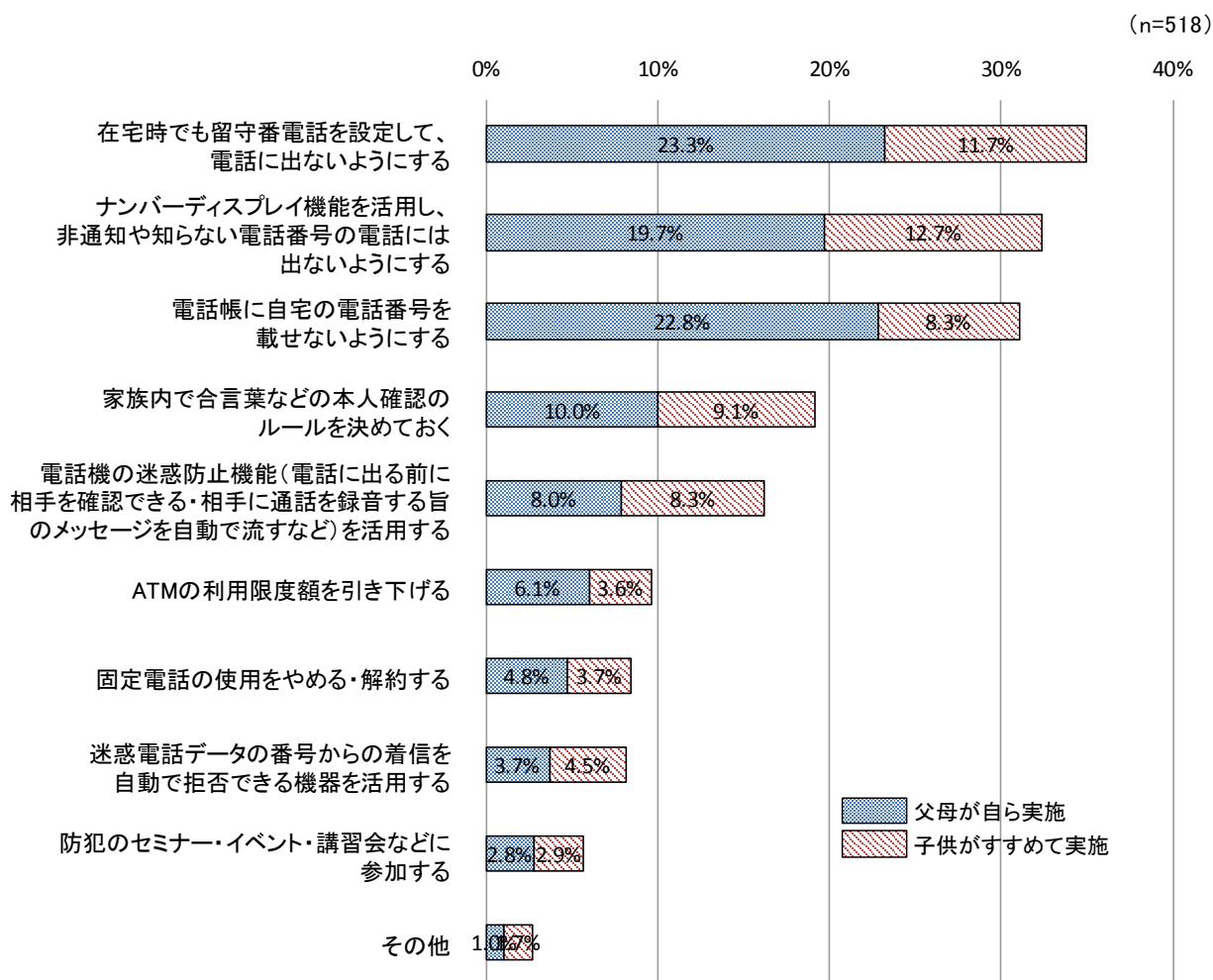
			ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする	在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする	家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく	電話帳に自宅の電話番号を載せないようにする	電話機の迷惑防止機能(電話に出る前に相手を確認できる・相手に通話を録音する旨のメッセージを自動で流すなど)を活用する	迷惑電話データの番号からの着信を自動で拒否できる機器を活用する	ATMの利用限度額を引き下げる	固定電話の使用をやめる・解約する	防犯のセミナー・イベント・講習会などに参加する	その他	詐欺防止対策はひとつも知らない／知らなかった
			[比率の差] n=30以上の場合										
			全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント										
性別	全体	(518)	58.0	54.5	41.1	34.0	30.3	22.6	16.8	14.3	13.1	0.9	11.6
	男性	(265)	51.9	50.2	33.5	27.5	26.6	19.2	17.6	12.2	13.0	1.5	14.3
	女性	(253)	64.4	59.0	49.1	40.8	34.2	26.2	15.9	16.4	13.3	0.3	8.8
(5歳年刻齢み)	30歳-34歳	(59)	56.1	54.4	51.1	23.7	31.2	21.0	11.6	20.4	19.3	0.0	12.9
	35歳-39歳	(103)	53.5	36.9	29.0	19.1	18.4	16.5	12.7	12.1	8.0	0.0	16.3
	40歳-44歳	(88)	63.0	57.3	44.6	32.5	33.7	21.7	28.4	15.0	18.7	0.4	10.6
	45歳-49歳	(91)	43.8	61.8	31.9	34.7	20.0	15.9	17.7	12.4	13.3	4.3	10.9
	50歳-54歳	(105)	70.6	62.8	47.6	39.7	41.0	31.2	10.2	9.1	10.3	0.0	5.8
	55歳-59歳	(72)	59.8	55.1	48.5	56.8	39.9	30.0	21.0	21.3	12.5	0.5	14.6
有同居無居	親と同居	(196)	56.3	56.1	40.3	34.2	25.6	21.8	21.3	14.9	12.8	1.8	11.6
	親と別居	(322)	59.1	53.6	41.6	33.9	33.1	23.2	14.0	13.9	13.3	0.3	11.6

(2) 親の被害防止対策の実施状況

親の被害防止対策の実施状況について、聴取した全ての対策において「子供がすすめて実施している」の割合が一定程度存在しており、詐欺被害防止対策の実施に高齢者ジュニア層が関与していることがうかがわれる。

全体の実施率では「在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする」が最も高く(35.0%)、次いで「ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする」(32.4%)が続いているが、「子供がすすめて実施している」の割合もこの2つの対策の回答率が最も高い(それぞれ 11.7%、12.7%)。

図78 親が実施している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)



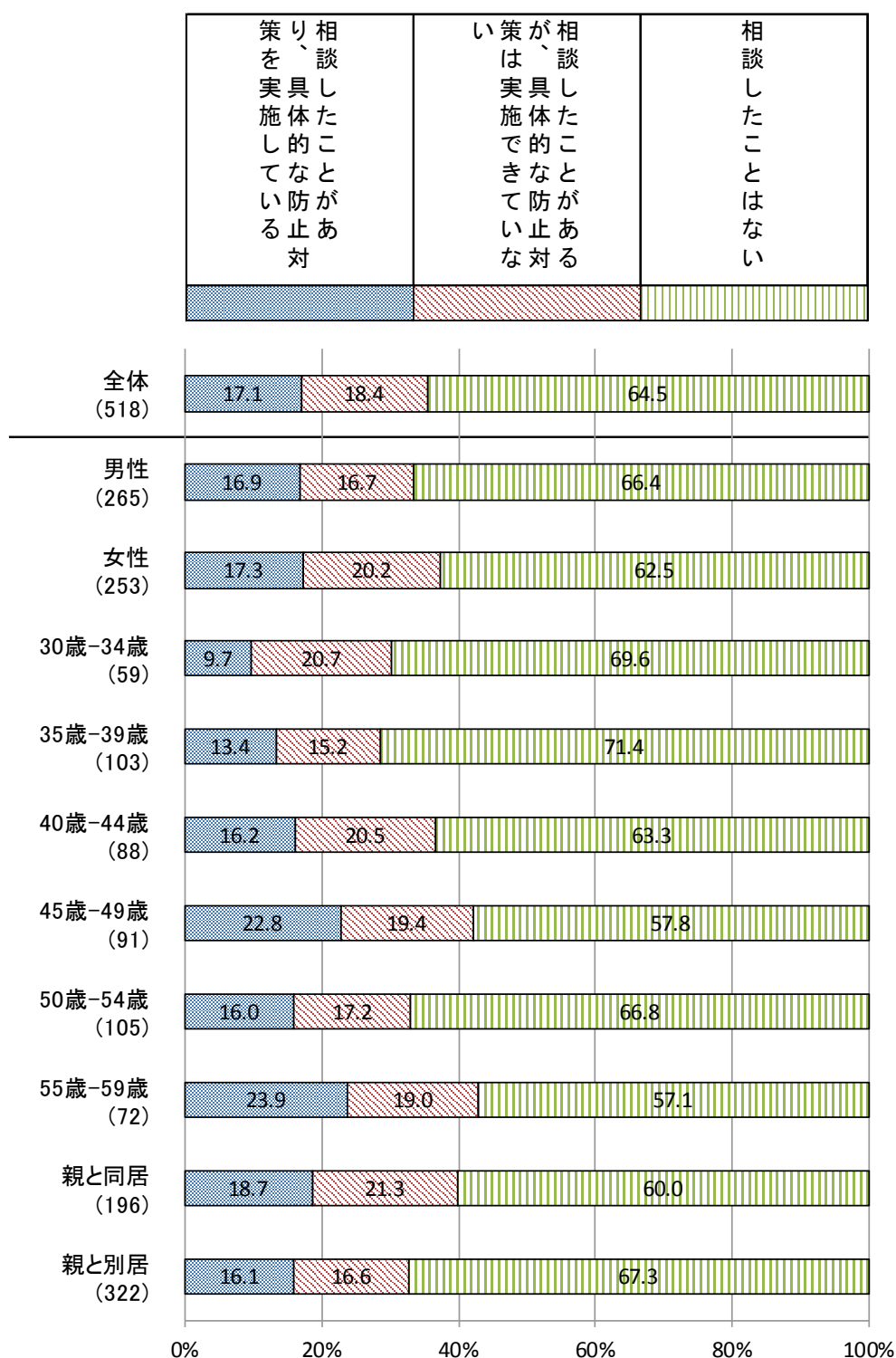
(3) 親との被害防止対策の相談状況

親との詐欺被害防止対策の相談の経験について、「相談したことがある」の合計は 35.5%だが、そのうち「具体的な防止対策を実施している」の割合は 17.1%にとどまっている。

男女別では、「相談したことがある」の合計の割合は女性の方が高い(男性 33.6%、女性 37.5%)。また、年齢別では概して 30 代では「相談したことがある」の割合が低く、40 代以上になるにつれて高くなる傾向がみられる。

図79 親との詐欺被害防止対策の相談状況(複数回答、WBあり)

(n=518)



(4) 親と相談したが対策を実施できていない理由

親と相談したが対策を実施できていない理由について、最も高いのは「どのような対策をすれば良いかよくわからなかったから」(44.2%)であり、次いで「具体的な対策までは必要ないだろうという結論になったから」(39.5%)が続く。

男女別では、男性は「具体的な対策を実施するのは手間がかかるから・面倒そうだから」が16.3%に対して女性は3.9%と10ポイント以上の差が見られた。また、親との同居の有無で比較すると、「具体的な対策までは必要ないだろうという結論になったから」は別居している方が高く、逆に「具体的な対策に新たな電話機を買うなどのお金をかけたくなかったから」は同居している方が高い。

図80 親と相談したが対策を実施できていない理由(相談したことはあるが対策未実施の方のみ、複数回答、WBあり)

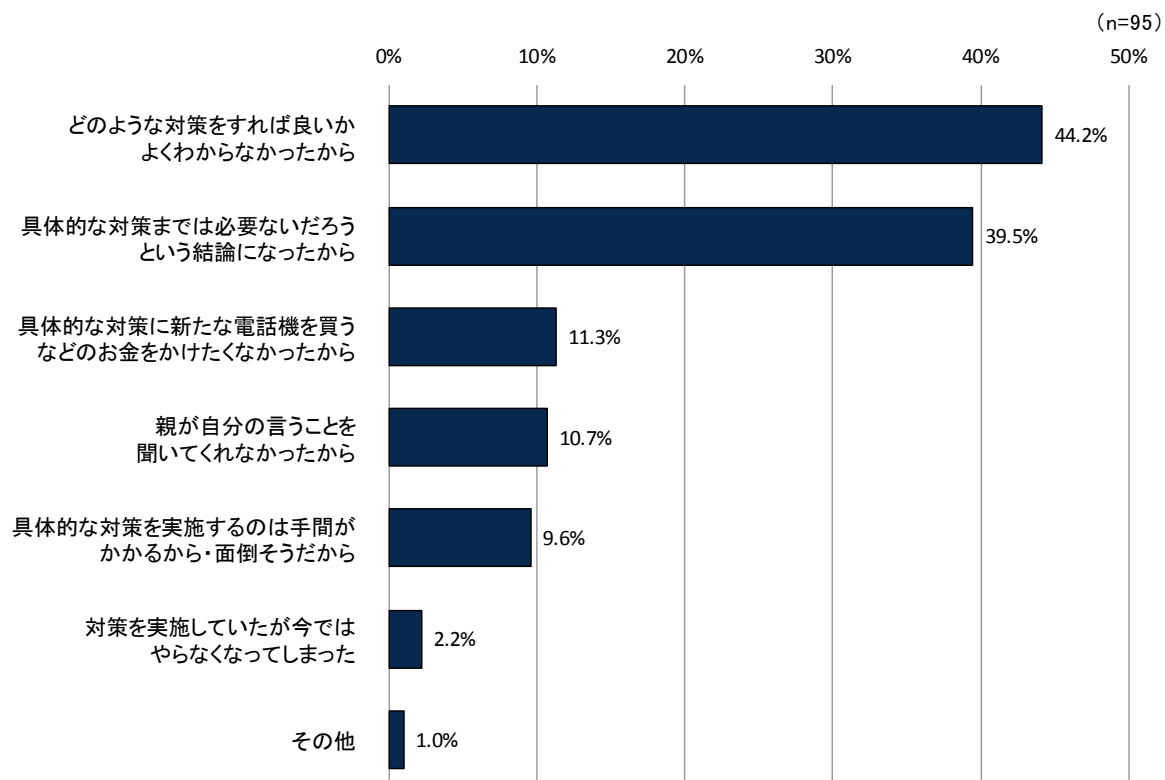


表27 親と相談したが対策を実施できていない理由(相談したことはあるが対策未実施の方のみ、複数回答、WBあり)

			らいど かの よく な か ら 策 な か す つ た ば か 良	たい か ら う な と い う 結 論 に な っ	機 を 買 な か っ た か ら お 金 を か け 話	具 体 的 な 対 策 に お 金 を か け 話	て 親 が 自 分 の 言 う こ と を 聞 い	そ は 手 間 だ か ら か か る か ら ・ 面 倒 の	は 対 策 を 実 施 し て い た が 今 た で	そ の 他
[比率の差] n=30以上の場合										
性 別	全体	(95)	44.2	39.5	11.3	10.7	9.6	2.2	1.0	
	男性	(44)	42.2	35.8	11.3	9.3	16.3	3.9	0.7	
	女性	(51)	45.9	42.7	11.2	11.9	3.9	0.8	1.3	
(5 歳 年 刻 齢 み)	30歳-34歳	(12)	51.3	40.0	16.7	18.7	5.3	13.3	0.0	
	35歳-39歳	(16)	55.0	41.8	0.0	2.7	10.5	0.6	0.0	
	40歳-44歳	(18)	7.3	63.8	9.0	28.9	9.0	0.0	0.0	
	45歳-49歳	(18)	63.7	24.7	11.6	9.8	0.0	1.9	0.0	
	50歳-54歳	(18)	40.2	35.1	18.2	2.8	20.0	0.5	1.8	
	55歳-59歳	(14)	54.3	28.9	12.7	0.0	12.0	0.0	4.8	
有 同 無 居	親と同居	(42)	46.5	34.2	17.5	10.4	8.6	0.2	1.6	
	親と別居	(54)	42.3	43.6	6.4	10.9	10.4	3.8	0.6	

(5) 親と被害防止対策を相談していない理由

親と詐欺被害防止対策を相談していない理由について、最も高いのは「親に詐欺の接触があってもだまされないだろうと思うから」(25.5%)であり、次いで「親は詐欺について十分知識があるだろうと思うから」(17.5%)が続く。

年齢別で見ると、30～34歳でこの2項目の割合が高い傾向が見られ、逆に年代が高い55～59歳では「特に理由がない」(24.9%)が最も高くなっている。

また、親との同居有無別では、親と同居の人は「親に詐欺の電話がかかってくる可能性は低いと思うから」が高くなっている。

図81 親と詐欺被害防止対策を相談していない理由(相談していない方のみ、複数回答、WBあり)

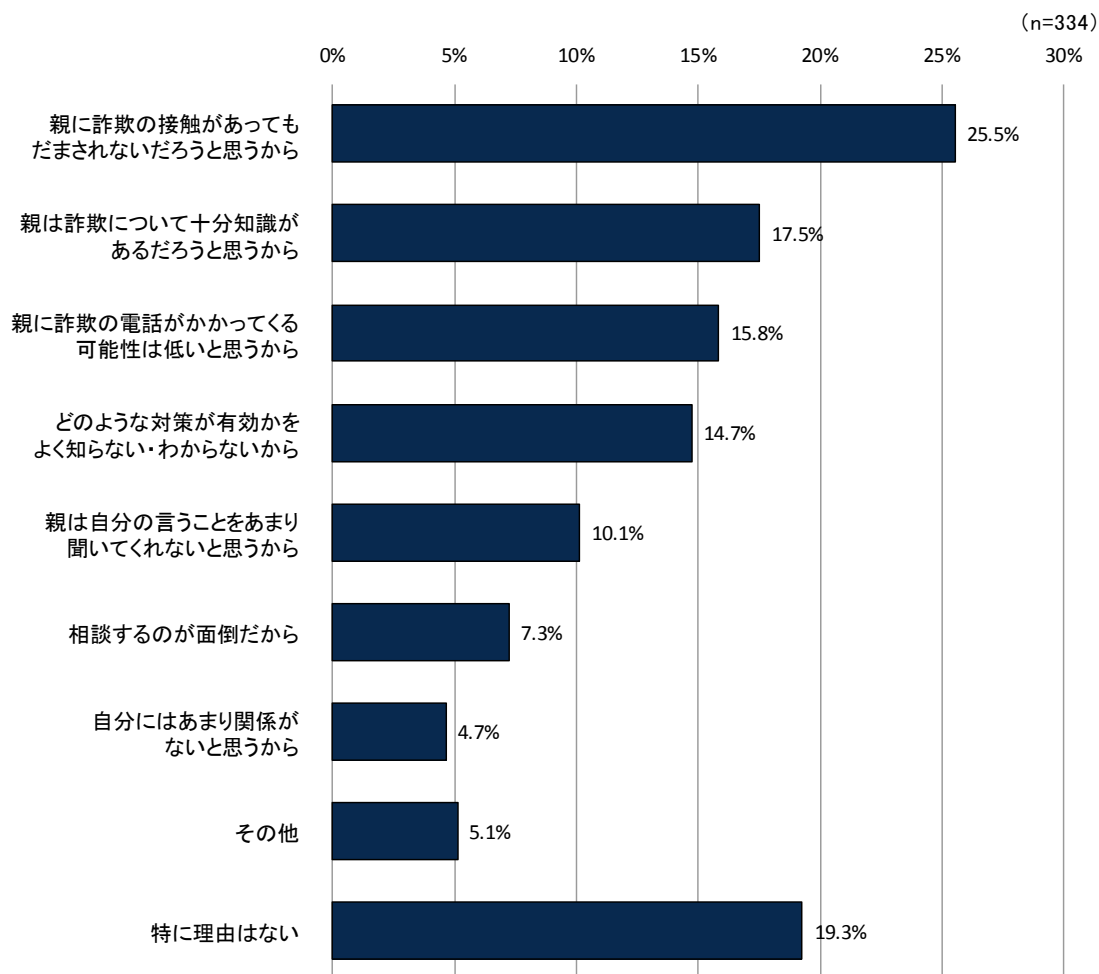


表28 親と詐欺被害防止対策を相談していない理由(相談していない方のみ、複数回答、WBあり)

			親に詐欺の電話がかかってくる可能性は低いと思うから	親は詐欺について十分知識があるだろうと思うから	知らない・わからないから	どのようない対策が有効かをよく知	親は自分の言うことをあまり聞い	てくれないうから	相談するのが面倒だから	自分にはあまり関係がないと思う	その他	特に理由はない
[比率の差] n=30以上の場合												
性別	全体	(334)	25.5	17.5	15.8	14.7	10.1	7.3	4.7	5.1	19.3	
	男性	(176)	26.1	19.1	15.1	13.9	7.7	9.9	3.9	4.1	21.4	
（5歳年齢刻み）	女性	(158)	24.9	15.8	16.6	15.6	12.8	4.3	5.5	6.3	17.0	
	30歳-34歳	(41)	39.7	30.2	12.7	7.9	4.0	7.9	4.0	4.0	20.6	
	35歳-39歳	(74)	29.9	20.9	20.0	16.1	4.6	4.9	4.9	2.2	20.0	
	40歳-44歳	(56)	14.6	13.7	12.6	24.7	12.3	12.3	8.8	2.9	17.9	
	45歳-49歳	(53)	25.6	8.7	21.8	23.8	7.5	6.9	0.2	6.2	14.3	
	50歳-54歳	(70)	32.4	21.2	12.6	5.1	18.7	7.5	0.5	7.1	19.2	
有同居無居	55歳-59歳	(41)	6.4	8.8	13.6	10.1	12.0	4.0	12.3	9.6	24.9	
	親と同居	(117)	27.6	15.9	21.8	6.1	8.6	8.4	4.2	5.6	18.6	
	親と別居	(217)	24.4	18.4	12.6	19.4	10.9	6.7	4.9	4.9	19.7	

(6) ジュニア層からすすめて決めている詐欺遭遇時の対応策

高齢者ジュニア層が自分または兄弟姉妹からすすめて決めている詐欺遭遇時の対応策について、何らかの対策を決めていると回答した割合は41.7%と、高齢者ジュニア層の約4割が事前の対応策に関与しているという結果だった。

事前に決めている対応策のなかでは「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めている」(20.5%)「一度電話を切って家族で相談するように決めている」(20.0%)「相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直すようにしている(19.3%)」がほぼ同率で高い結果となっている。

しかし「自分や兄弟姉妹からすすめて決めていることはない」という割合は約6割と過半数を超えている。

図82 自分や兄弟姉妹からすすめて決めている詐欺遭遇時の対応策(複数回答、WBあり)

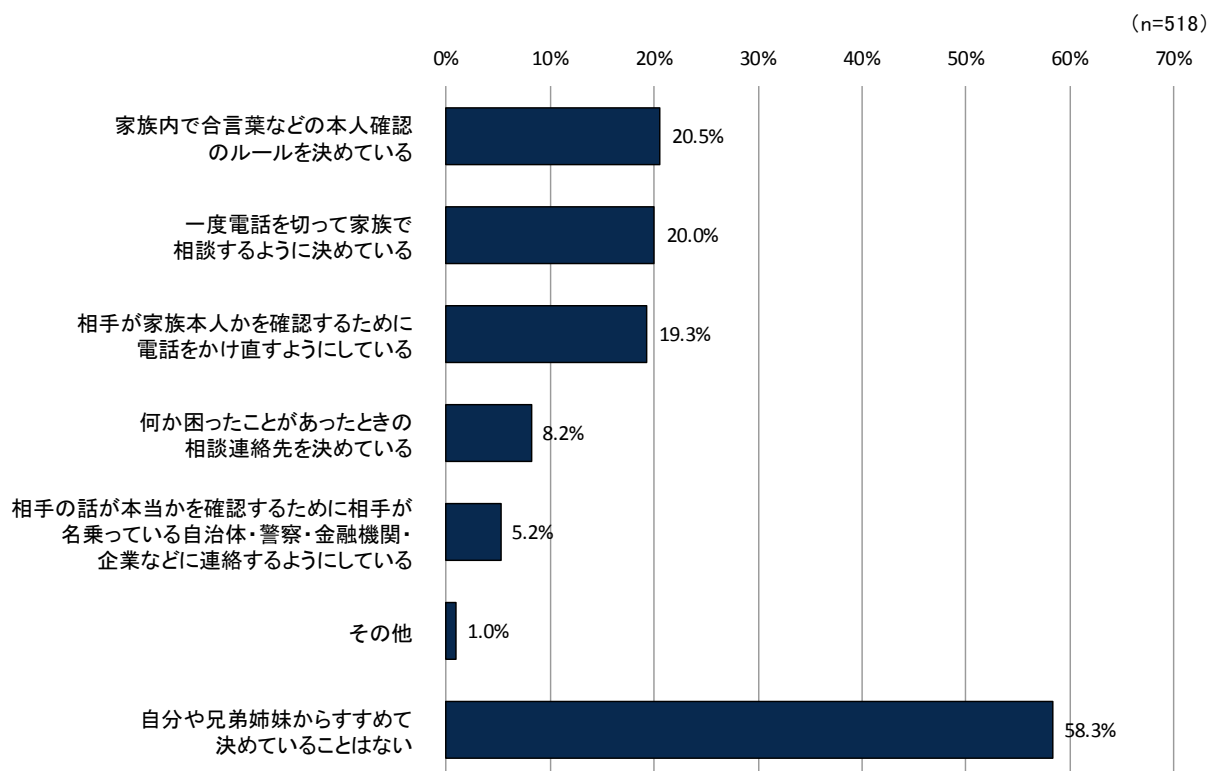


表29 自分や兄弟姉妹からすすめて決めている詐欺遭遇時の対応策(複数回答、WBあり)

			家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めている	一度電話を切って家族で相談するように決めている	相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直すようにしている	何か困ったことがあったときの相談連絡先を決めている	相手の話が本当かを確認するために相手に企業などに連絡するようになっている	その他	自分や兄弟姉妹からすすめて決めていることはない
[比率の差] n=30以上の場合									
性別	全体	(518)	20.5	20.0	19.3	8.2	5.2	1.0	58.3
	男性	(265)	19.6	20.6	17.6	9.1	4.5	0.5	59.8
	女性	(253)	21.6	19.4	21.0	7.2	6.0	1.5	56.8
(5歳年刻齢み)	30歳-34歳	(59)	14.4	16.5	22.5	7.3	15.6	0.0	64.6
	35歳-39歳	(103)	19.2	18.9	16.1	8.0	3.3	0.0	61.2
	40歳-44歳	(88)	20.4	19.4	14.2	15.4	6.3	0.0	54.1
	45歳-49歳	(91)	13.8	24.0	20.5	3.6	3.1	0.1	62.9
	50歳-54歳	(105)	25.2	13.8	22.2	8.6	2.7	2.4	55.8
	55歳-59歳	(72)	29.5	29.4	21.8	5.2	4.5	3.2	51.8
有同居無居	親と同居	(196)	18.9	20.6	21.0	7.0	6.1	0.2	56.6
	親と別居	(322)	21.5	19.7	18.3	8.8	4.7	1.4	59.3

(7) 今後親にすすめたい被害防止対策

今後親にすすめたい詐欺被害防止対策について、最も高いのは「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」(26.1%)であり、次いで「電話機の迷惑防止機能を活用する」(17.8%)、「迷惑電話データの番号からの着信を自動で拒否できる機器を活用する」(16.3%)が続く。

また、「特にすすめたい対策はない」が 38.6%となっているが、これはすでに親が対策を実施している(させている)層も含めた数値となっている。

男女別では、男性は女性に比べて全体的に数値が低く、「特にすすめたい対策はない」が 47.9%と約半数となっているのに対し、女性は 28.8%となっている。また、親との同居有無別では、親と同居している人は「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」が 17.3%と別居の人に比べて低く、逆に「特にすすめたい対策はない」が 44.1%と別居の人より高くなっている。

図83 今後親にすすめたい詐欺被害防止対策(複数回答、WBあり)

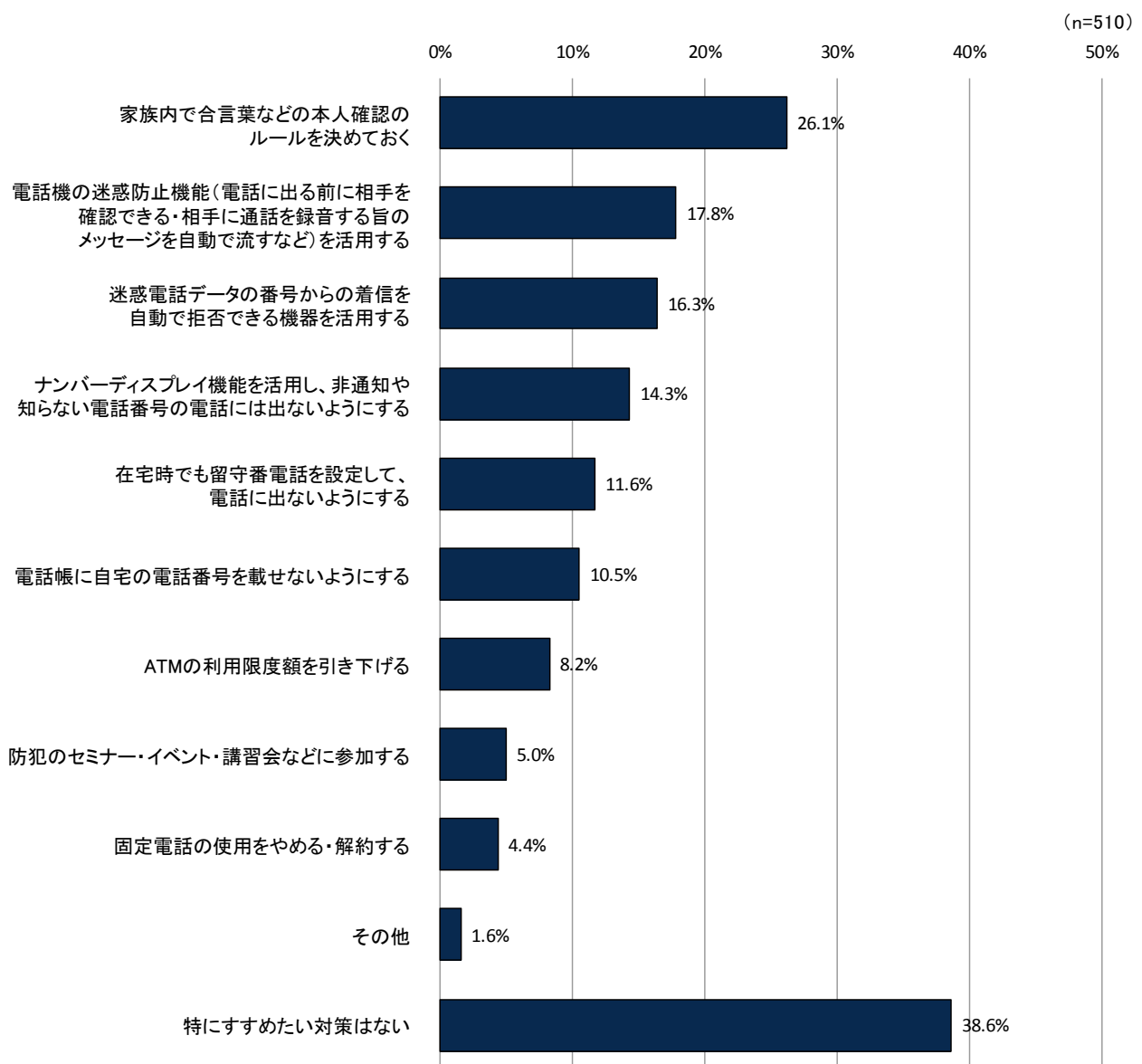


表30 今後親にすすめたい詐欺被害防止対策(複数回答、WBあり)

			家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく	電話機の迷惑防止機能(電話に出る前に相手を確認できる・相手に通話を録音する旨のメッセージを自動で流すなど)を活用する	迷惑電話データの番号からの着信を自動で拒否できる機器を活用する	ナンバーディスプレイ機能を活用し、非通知や知らない電話番号の電話には出ないようにする	在宅時でも留守番電話を設定して、電話に出ないようにする	電話帳に自宅の電話番号を載せないようにする	ATMの利用限度額を引き下げる	防犯のセミナー・イベント・講習会などに参加する	固定電話の使用をやめる・解約する	その他	特にすすめたい対策はない
			[比率の差] n=30以上の場合										
			全体 +10 ポイント 全体 +5 ポイント 全体 -5 ポイント 全体 -10 ポイント										
性別	全体	(510)	26.1	17.8	16.3	14.3	11.6	10.5	8.2	5.0	4.4	1.6	38.6
	男性	(261)	18.9	12.3	10.9	8.3	9.1	7.5	6.8	3.0	5.8	2.3	47.9
	女性	(249)	33.7	23.6	22.0	20.5	14.3	13.5	9.8	7.1	2.8	0.8	28.8
(5歳年刻齢み)	30歳-34歳	(59)	24.0	25.9	19.9	6.7	8.9	4.6	2.8	3.1	8.9	2.8	38.0
	35歳-39歳	(102)	28.4	15.5	20.1	12.3	11.5	6.8	8.4	3.5	3.5	0.0	39.4
	40歳-44歳	(86)	34.1	21.4	18.4	14.2	15.4	13.0	14.1	12.2	5.8	0.0	38.9
	45歳-49歳	(91)	25.2	15.3	7.5	15.8	5.7	12.7	7.2	5.5	6.0	4.3	45.0
	50歳-54歳	(103)	19.9	18.8	17.7	19.5	16.4	7.6	7.0	1.6	0.8	0.6	36.1
	55歳-59歳	(69)	25.1	11.6	14.6	13.8	10.0	18.8	8.5	4.2	3.1	2.5	32.6
有同居無居	親と同居	(194)	17.3	18.2	14.0	10.2	9.0	9.2	8.1	3.6	6.1	2.9	44.1
	親と別居	(317)	31.5	17.6	17.7	16.7	13.2	11.2	8.3	5.8	3.3	0.7	35.2

4-3. 民間企業のサービスに対する意識

(1) 民間企業のサービス提供に対する利用意向

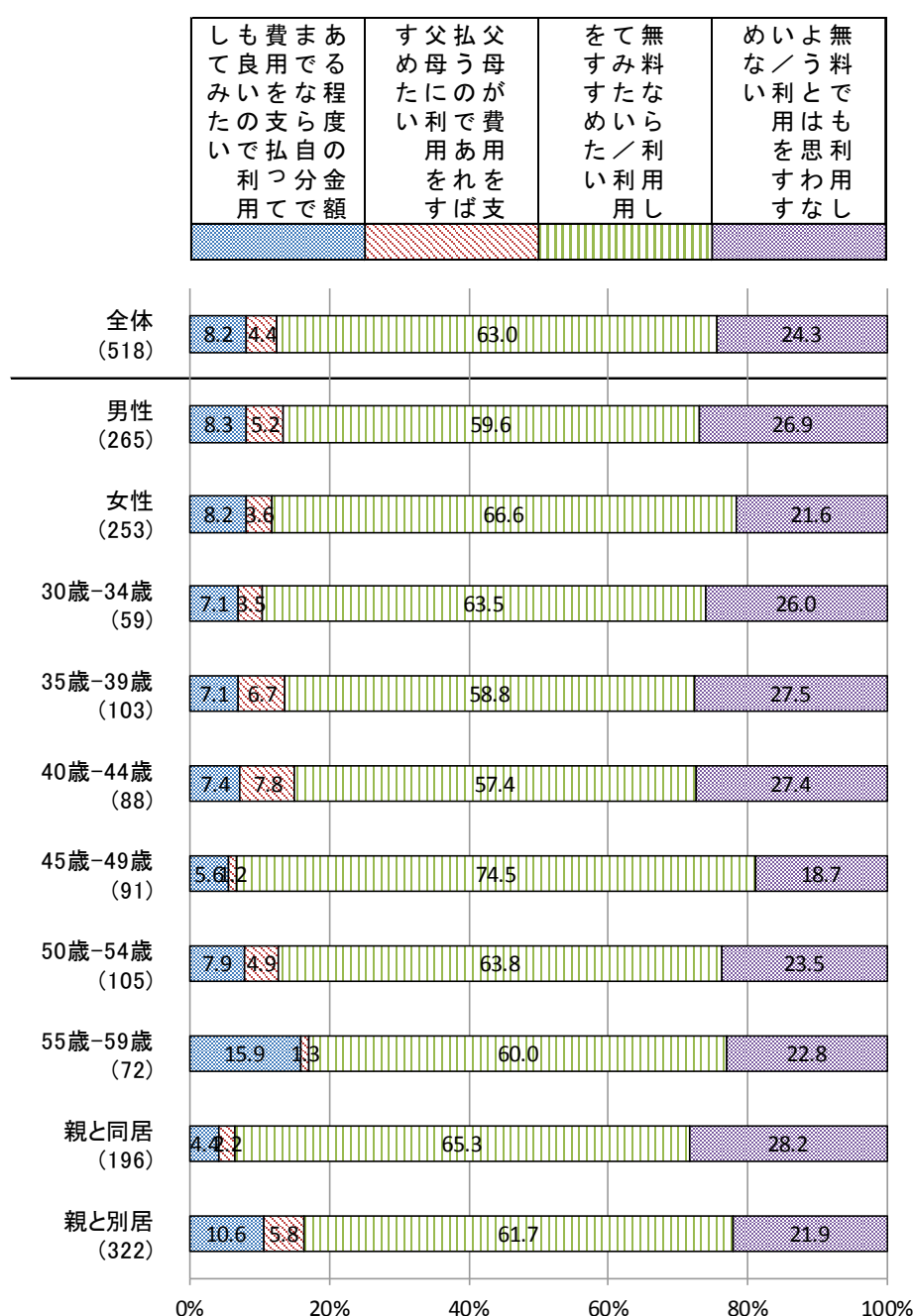
民間企業から電話による詐欺被害を防止するサービスが提供された場合の利用意向について、「無料なら利用してみたい／利用をすすめたい」までを含めた利用意向層の割合は 75.6%となっている。さらに有料利用の意向層に絞ると、「自分で費用を支払っても良い」と回答した割合は 8.2%、「父母が費用を支払うのであれば父母に利用をすすめたい」の割合は 4.4%であり、有料での利用意向層はあわせて 12.6%となっている。

男女別で見ると、無料までを含めた利用意向層の割合は女性の方がやや高くなっている(男性 59.6%、女性 66.6%)が、有料での利用意向層は逆に男性の方がわずかに高くなっている(男性 13.5%、女性 11.8%)。

また年齢別では、無料までを含めた利用意向層の割合は 45～49 歳(74.5%)が最も高いが、有料での利用意向層は 55～59 歳(17.2%)が最も高くなっている。

図84 民間企業のサービス提供に対する利用意向(単一回答、WBあり)

(n=518)

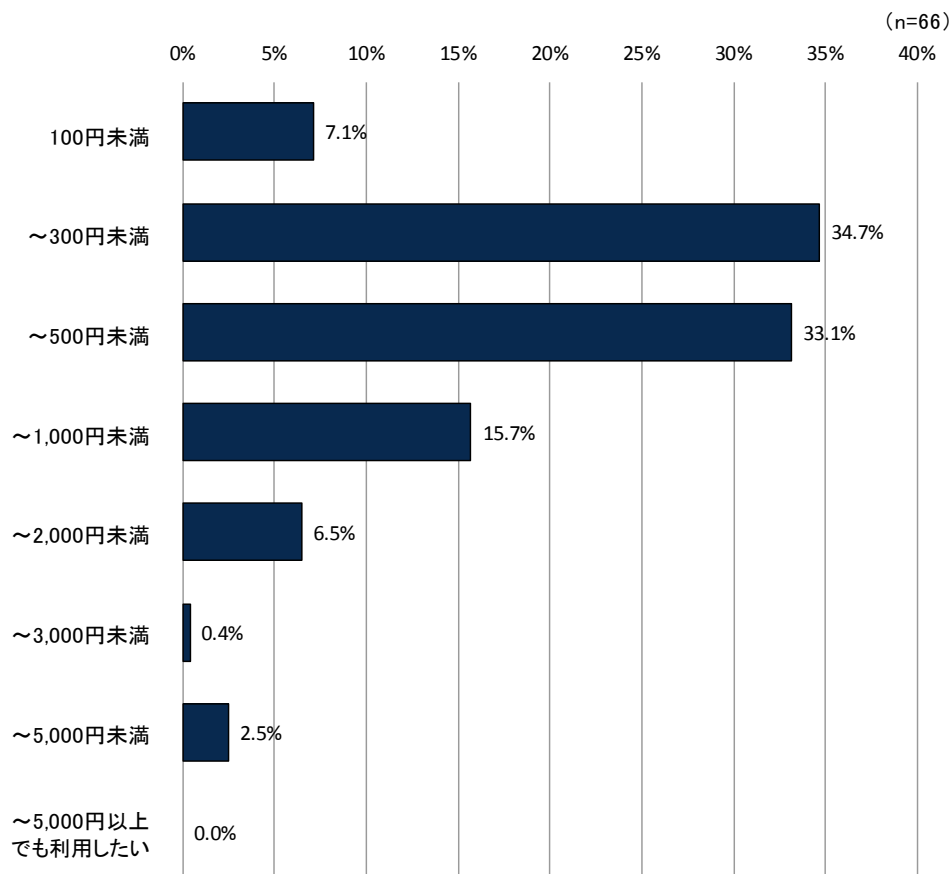


(2) 民間企業のサービスに対するコスト許容額

前問で民間企業による詐欺被害防止サービスを有料でも利用したい・親にすすめたいと回答した人に対して、月あたりどの程度の費用まで許容できるかを聴取したところ、最も割合が高かったのは「100 円～300 円未満」(34.7%)であり、僅差で「300～500 円未満」(33.1%)が続いている。

また、有料での利用意向層のうち、500 円以上でも利用したい・利用をすすめたいと回答した割合の合計は 25.1%となっている。

図85 民間企業によるサービスに対するコスト許容額(単一回答、WBあり)



4-4. 対策行動実施者・未実施者の差異分析

(1) 外的要因・環境要因

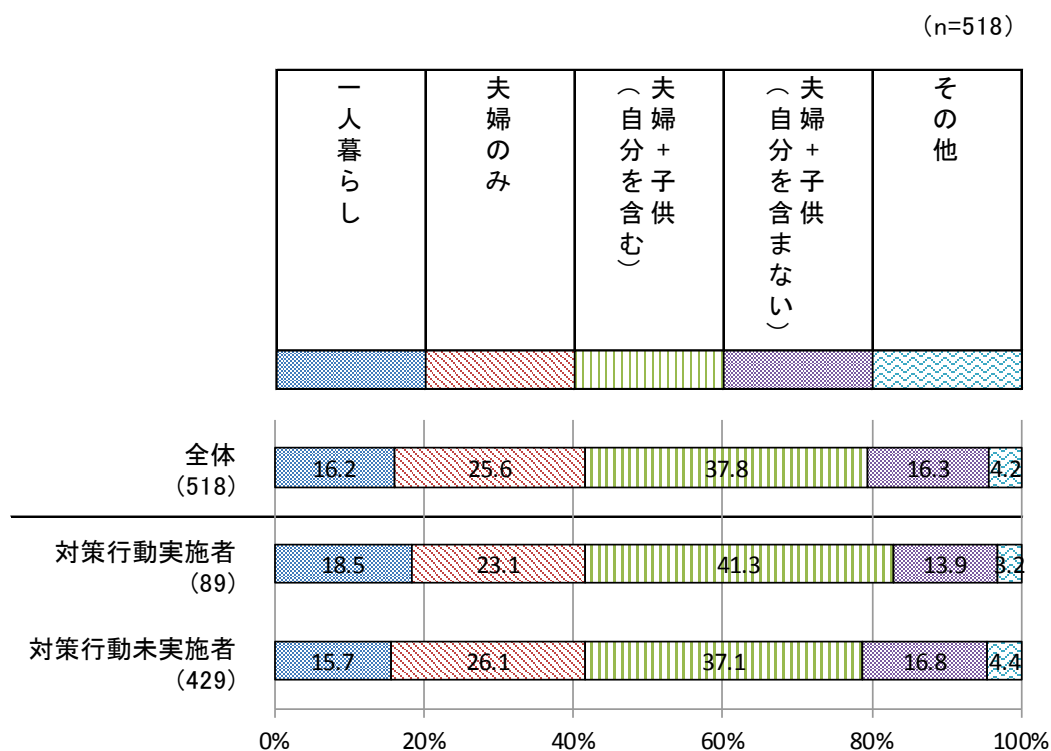
① 親の同居家族構成

ここからは、高齢者ジュニア層を親の詐欺被害防止に関する「対策行動実施者」と「対策行動未実施者」に分類し、2グループ間にどのような差異があるかを分析した。

まず、高齢者ジュニア層本人以外の要因である、外部要因における差異を比較している。

外部要因のひとつである、親の同居家族構成での差異を比較したところ、対策行動実施者は「夫婦＋子供（自分を含む）」の割合が未実施者に比べて若干高くなっており（実施者 41.3%、未実施者 37.1%）、親と同居していることで対策の相談や行動をとりやすいことが影響している可能性が考えられる。

図86 親の同居家族構成（単一回答、WBあり）

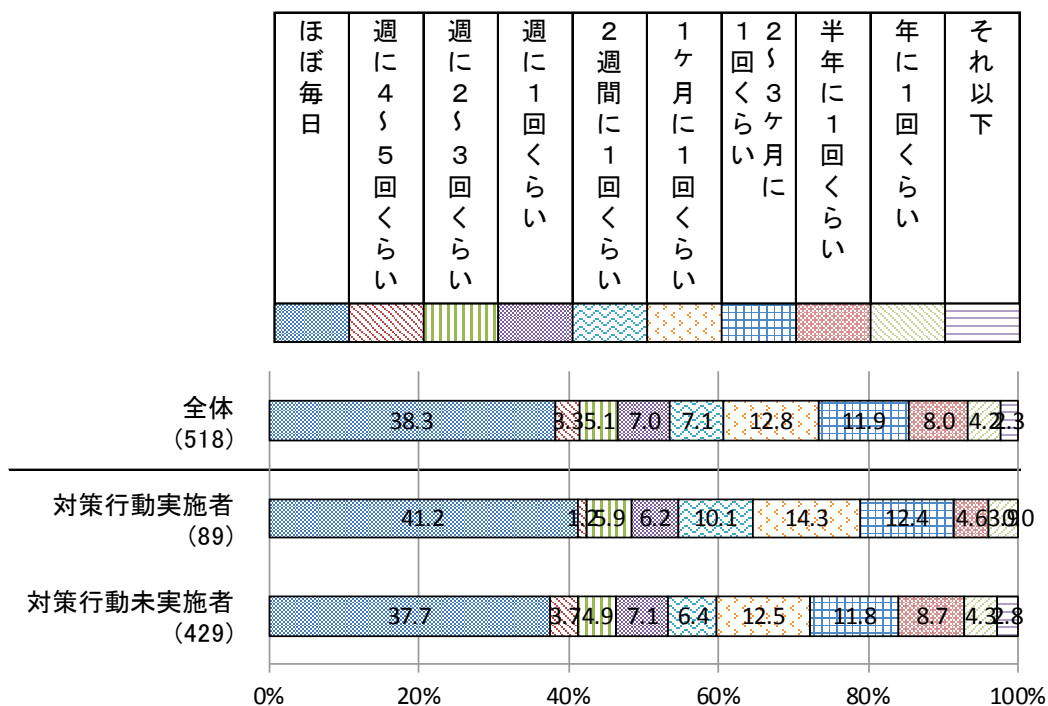


② 親とのコミュニケーション(直接会う頻度)

親と直接会う頻度について、対策行動実施者は月1回以上の割合が約80%に対し、未実施者は約70%となっている。

図87 親とのコミュニケーション(直接会う)頻度(単一回答、WBあり)

(n=518)



③ 親とのコミュニケーション(電話の頻度)

親と電話をする頻度について、月1回以上の割合は「父親」では対策行動実施者・未実施者ともほぼ同じであり、「母親」では対策行動実施者のほうがやや高くなっている。

図88-1 父親とのコミュニケーション(電話)頻度(単一回答、WBあり)

(n=185)

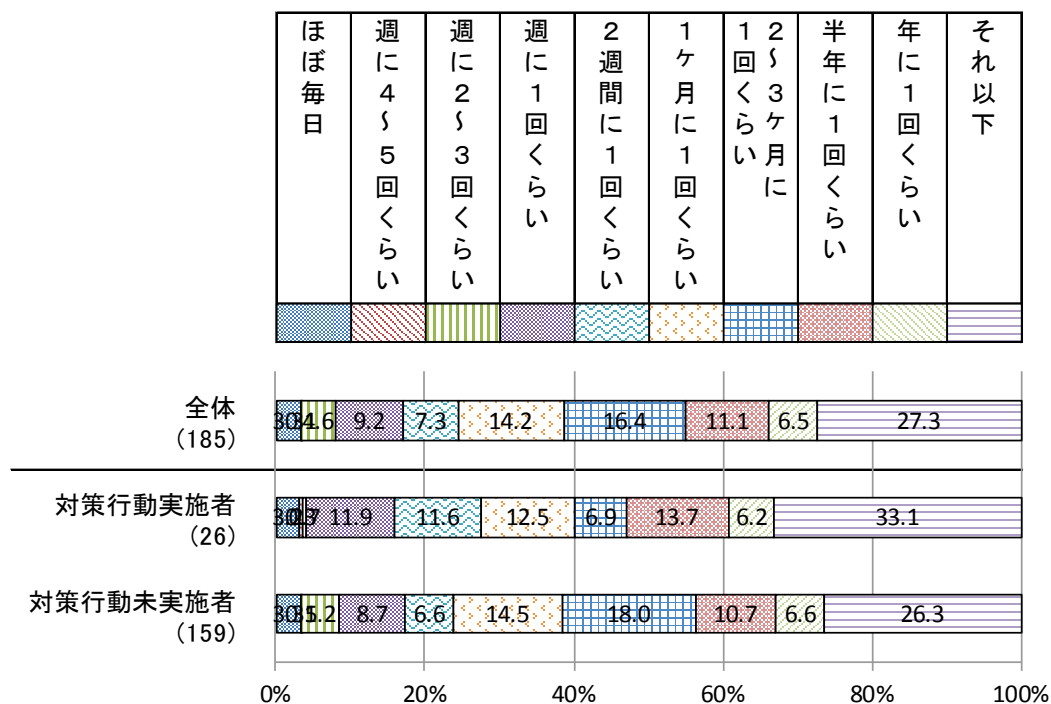
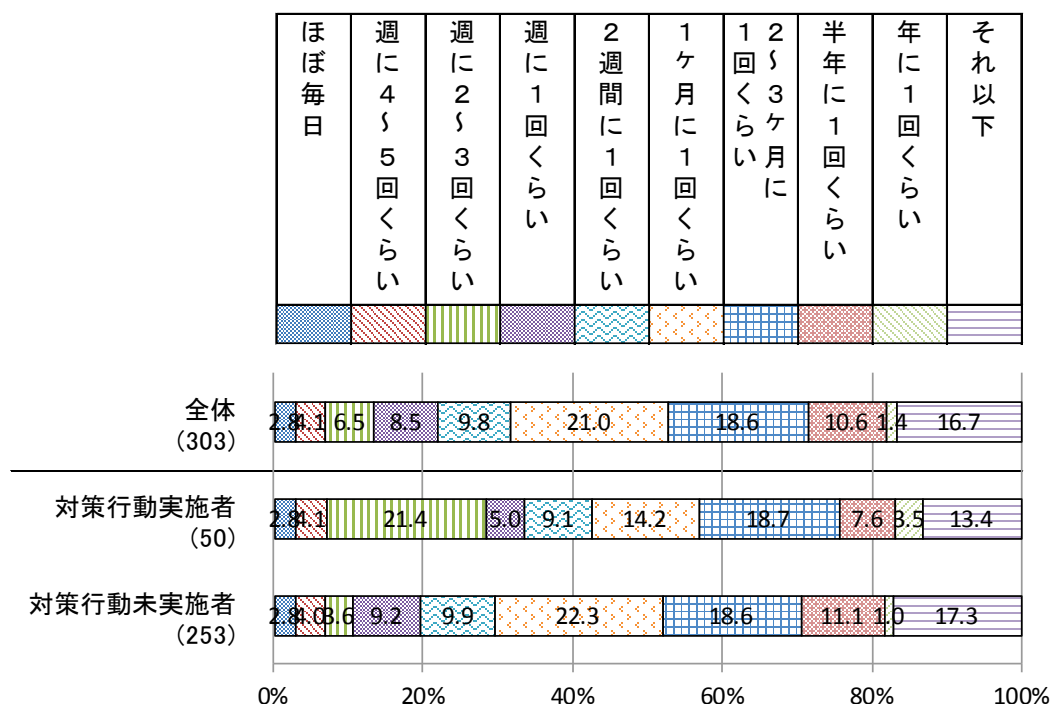


図82-2 母親とのコミュニケーション(電話)頻度(単一回答、WBあり)

(n=303)



④ 親とのコミュニケーション(メール・SNSの頻度)

親とメール・SNSをする頻度について、月1回以上の割合は「父親」では対策行動実施者・未実施者の間にあまり差がないが、「母親」では対策行動実施者のほうがやや高くなっている。

図89-1 父親とのコミュニケーション(メール・SNS)頻度(単一回答、WBあり)

(n=185)

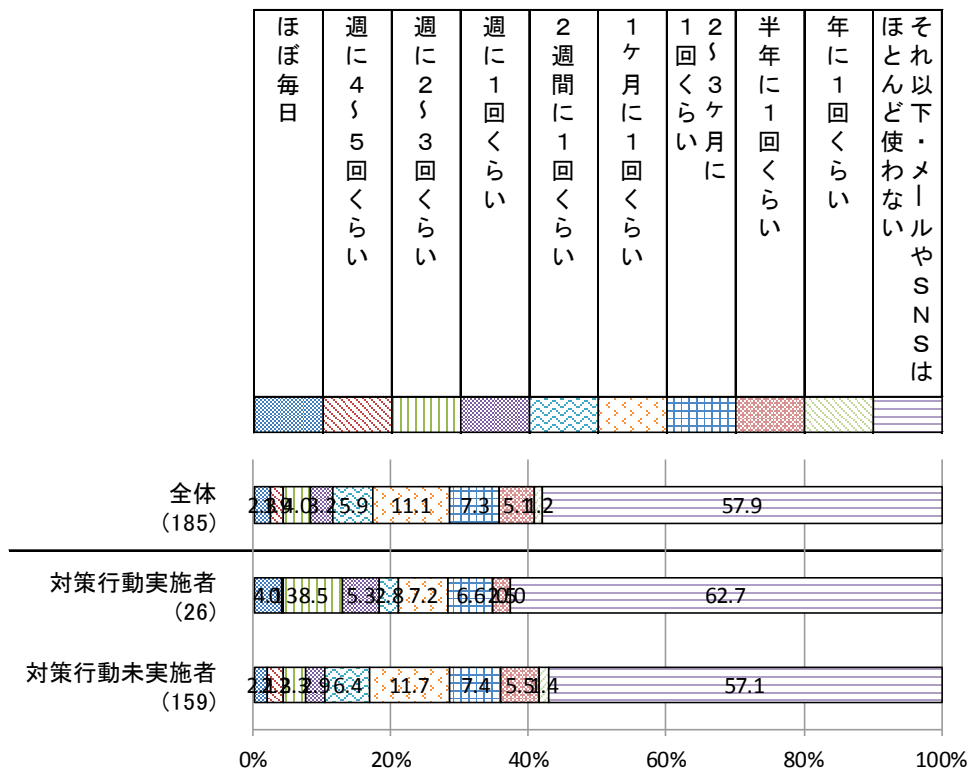
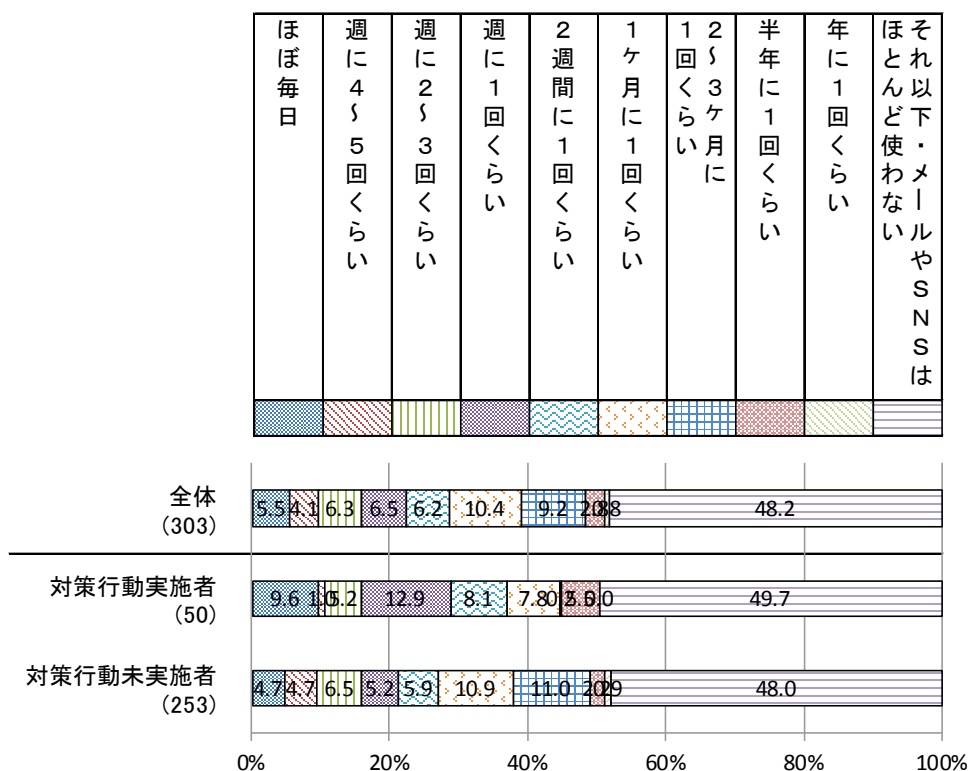


図83-2 母親とのコミュニケーション(メール・SNS)頻度(単一回答、WBあり)

(n=303)



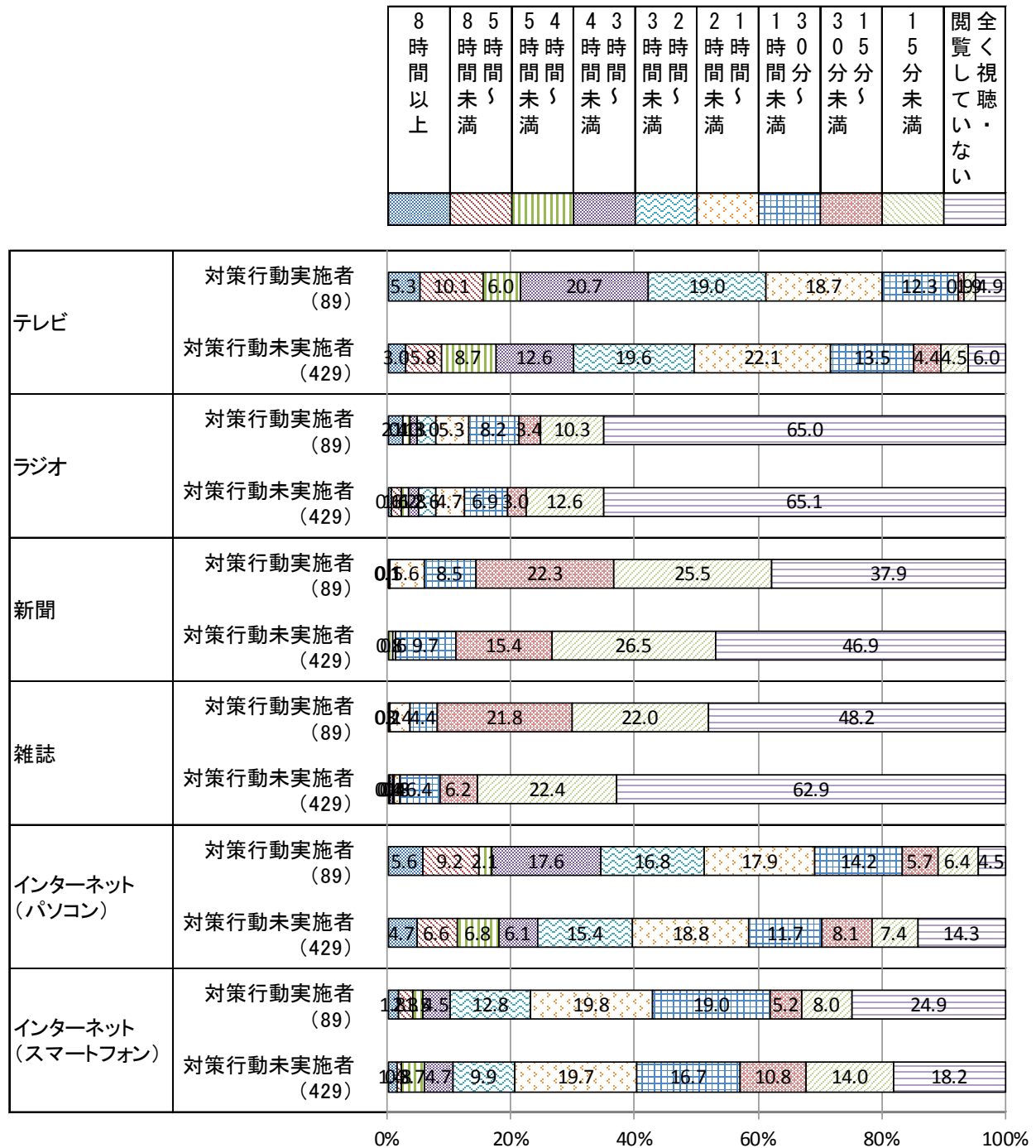
(2) 内的要因および詐欺に対する意識

① メディアの接触頻度

ここからは、高齢者ジュニア層の本人に起因する要因である、内的要因における差異を比較している。

まず、各メディア(情報媒体)の1日あたりの平均視聴・閲覧時間について、それぞれ1日に3時間以上視聴・閲覧している人の割合は「テレビ」と「インターネット(PC)」で対策行動実施者がいずれも10ポイント以上高くなっている。

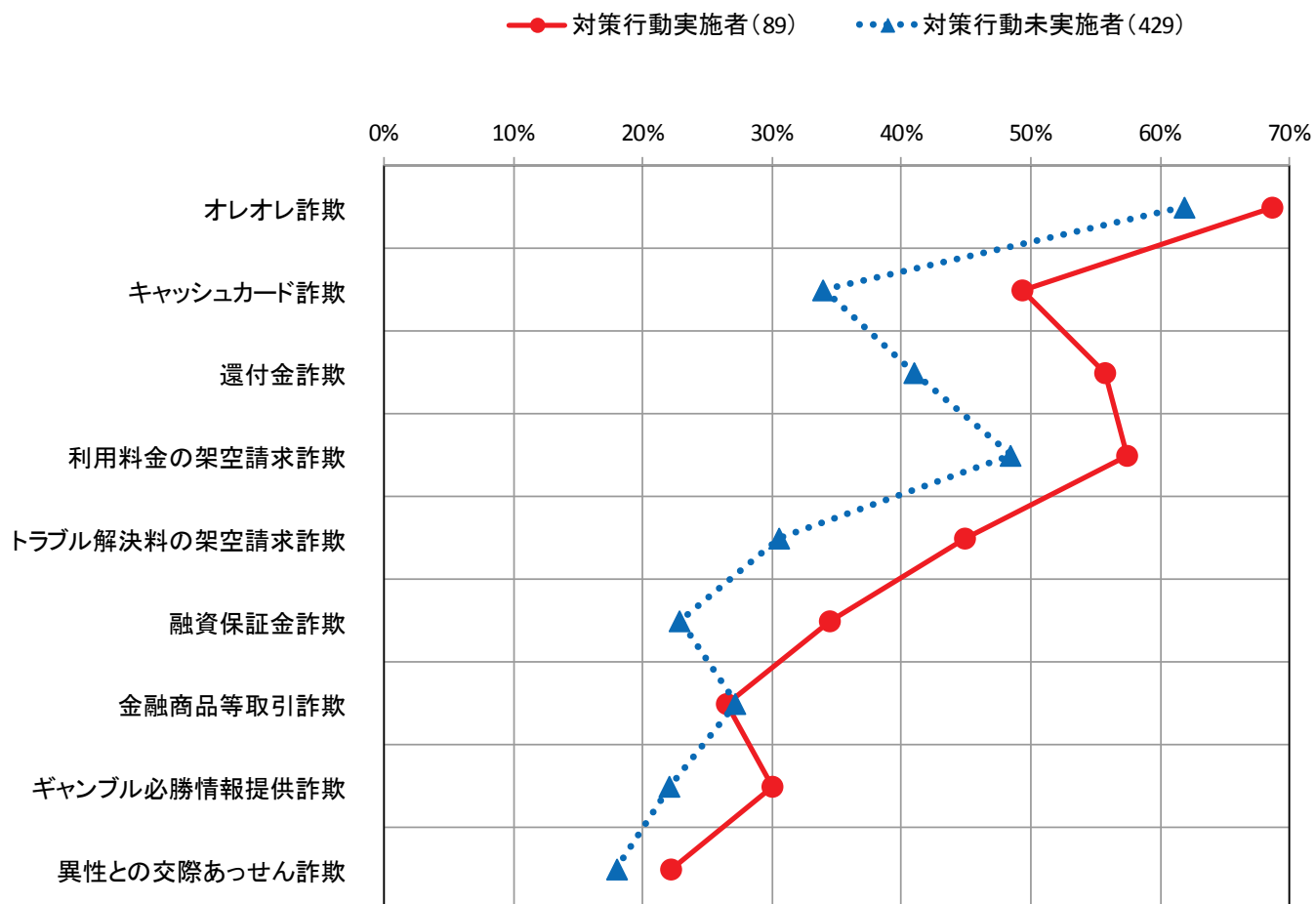
図90 各メディアの接触頻度(単一回答、WBあり)



② 詐欺の手口別の認知状況

電話による詐欺の手口類型別での認知度について、「犯行の手口まで細かく知っている」と回答した詳細認知度を比較したところ、「金融商品等取引詐欺」を除く全ての手口類型において、対策行動実施者の方が約 10 ポイント以上も数値が高くなっている。このことから、詐欺手口の詳細を認知することが対策行動実施への喚起につながっていることがうかがわれる。

図91 詐欺の手口別の詳細認知度(単一回答、WBあり)

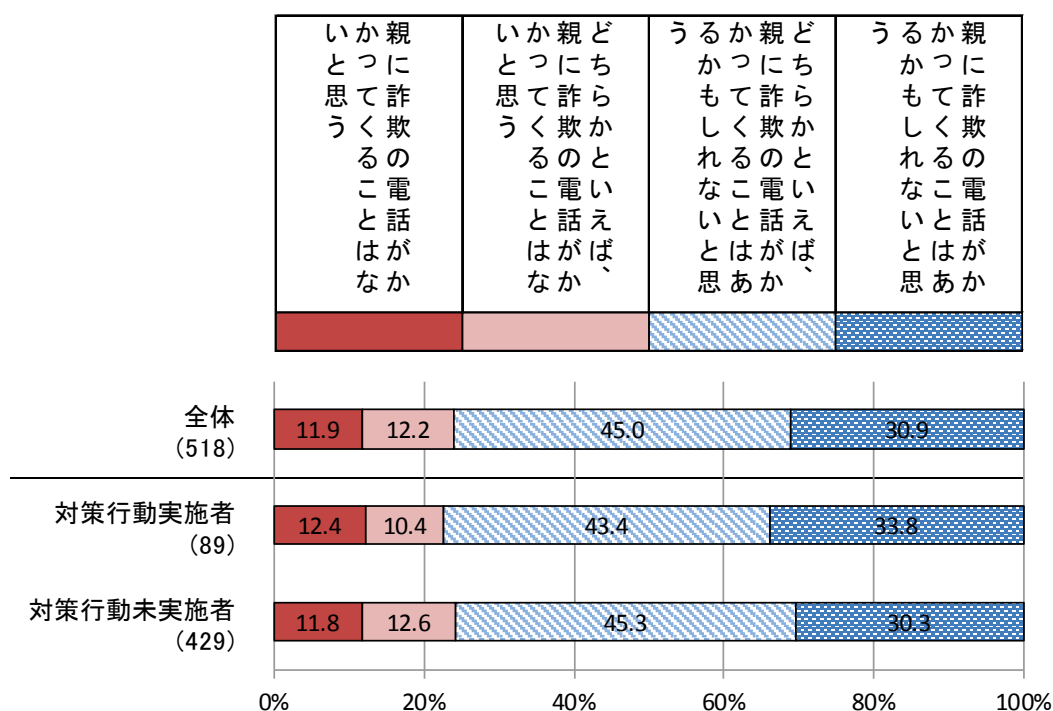


③ 親の詐欺接触の可能性についての意識

親に詐欺の接触があると思うかという詐欺への意識について、「親に詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」「どちらかといえば、親に詐欺の電話がかかってくることはあるかもしれないと思う」と答えた割合の合計は対策行動実施者で 77.2%、対策行動未実施者で 75.6%となっており、差異はわずかとなっている。対策行動実施者だけでなく、未実施者についても多くの人が親に詐欺接触の可能性があると考えていることがうかがわれる。

図92 親の詐欺接触の可能性についての意識(単一回答、WBあり)

(n=518)



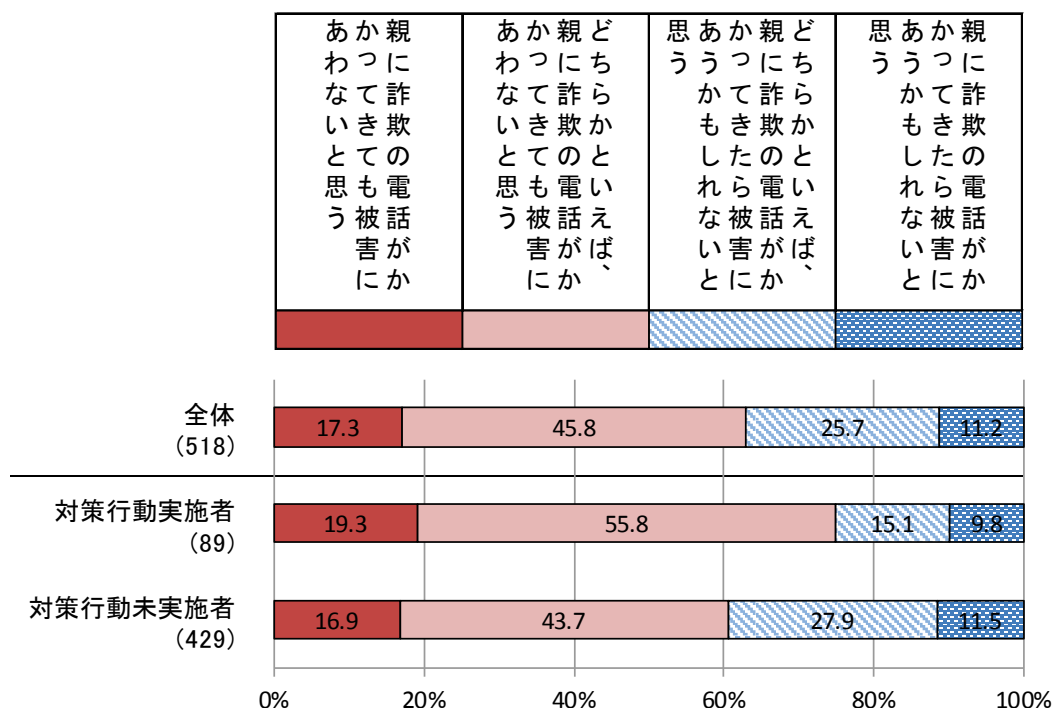
④ 親の詐欺被害の可能性についての意識

親に詐欺の電話があった場合の被害可能性の意識について、「親に詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思う」「どちらかといえば、親に詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思う」と答えた割合の合計は対策行動実施者で75.1%、未実施者で60.6%と、対策行動実施者のほうが高くなっている。

これは、対策行動実施者はすでに詐欺被害防止の対策を実施していることから、ある程度自信を持っている人が多いためと考えられる。

図93 親の詐欺被害の可能性についての意識(単一回答、WBあり)

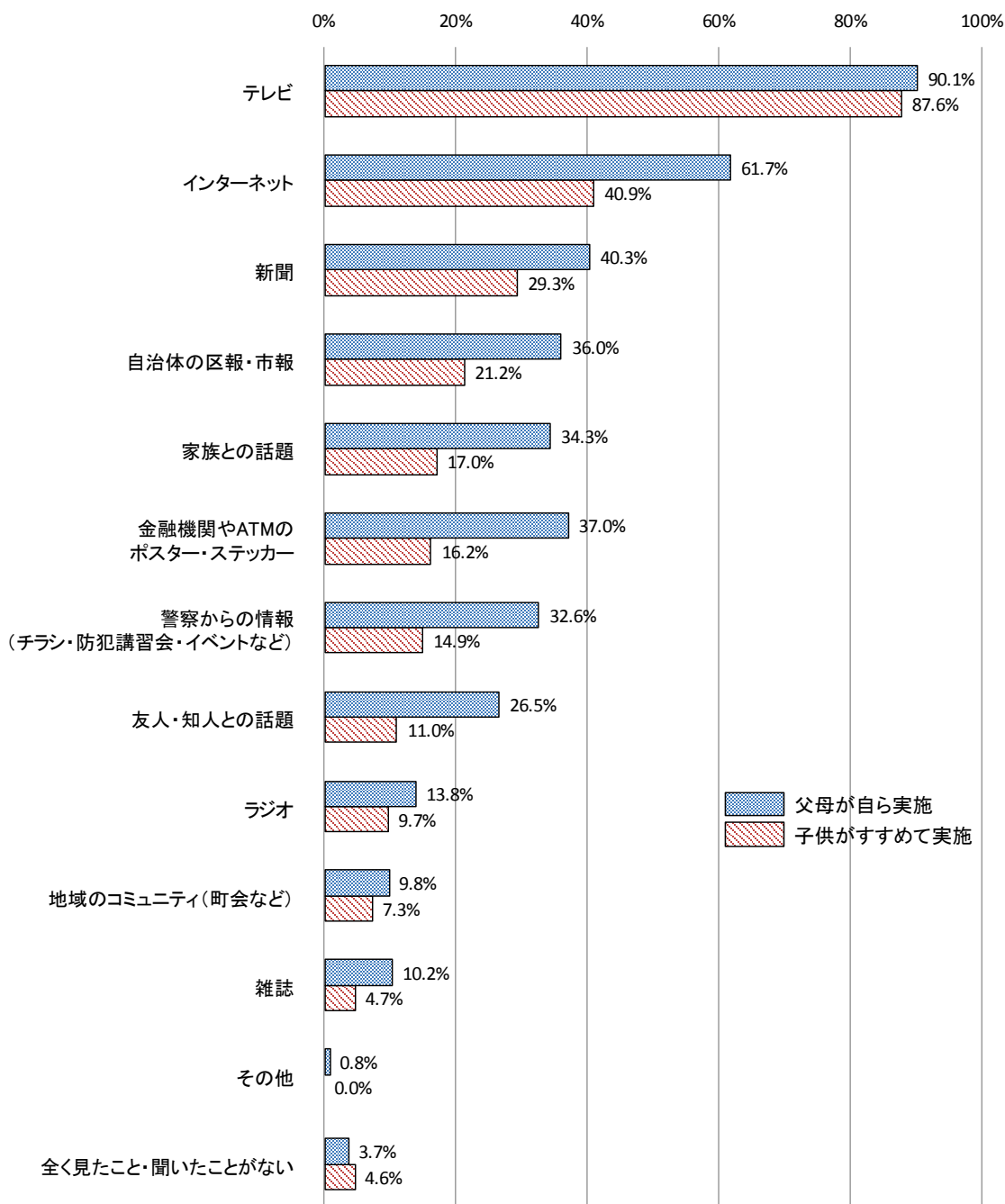
(n=518)



⑤ 詐欺の情報受容手段

詐欺の情報受容手段について、全体で最も回答率の高いテレビでは対策行動実施者、未実施者とも回答率に大きな差はなかったが、その他の「インターネット」「新聞」「自治体の区報・市報」「金融機関やATMのポスター・ステッカー」「警察からの情報」など、多くの情報手段で対策行動実施者が未実施者よりも高い数値となっており、対策行動実施者は情報受容手段をより広く活用し、詐欺の情報を受容していることがうかがわれる。

図94 詐欺の情報受容手段(複数回答、WBあり)

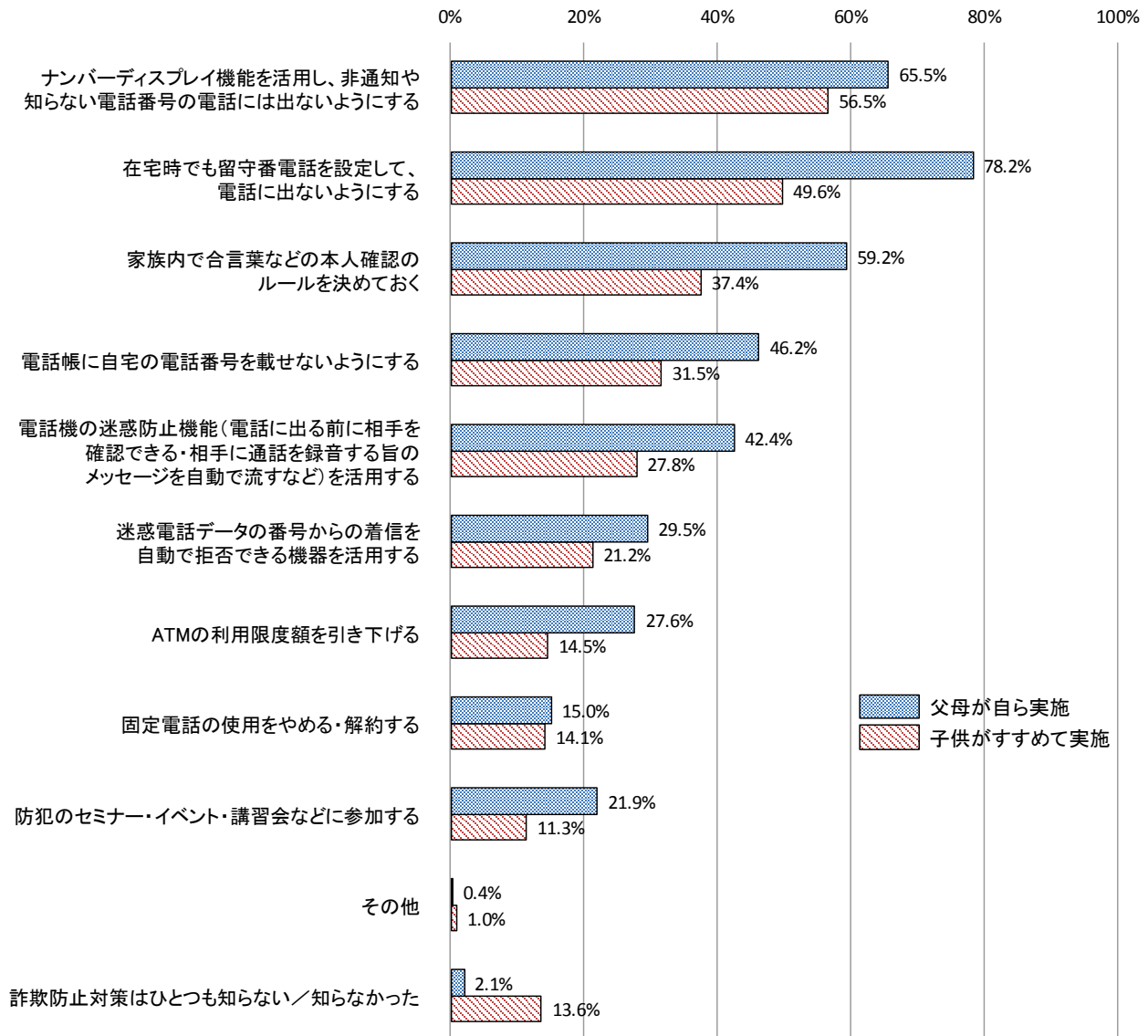


(3) 被害防止対策の認知・関与状況

① 被害防止対策の認知状況

詐欺被害防止対策の認知状況について、対策行動実施者はほとんどの対策で未実施者よりも認知度が高くなっており、特に「在宅時でも留守番電話を設定して、電話には出ないようにする」は78.2%と、未実施者(49.6%)よりも約29ポイント高くなっている。

図95 認知している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)



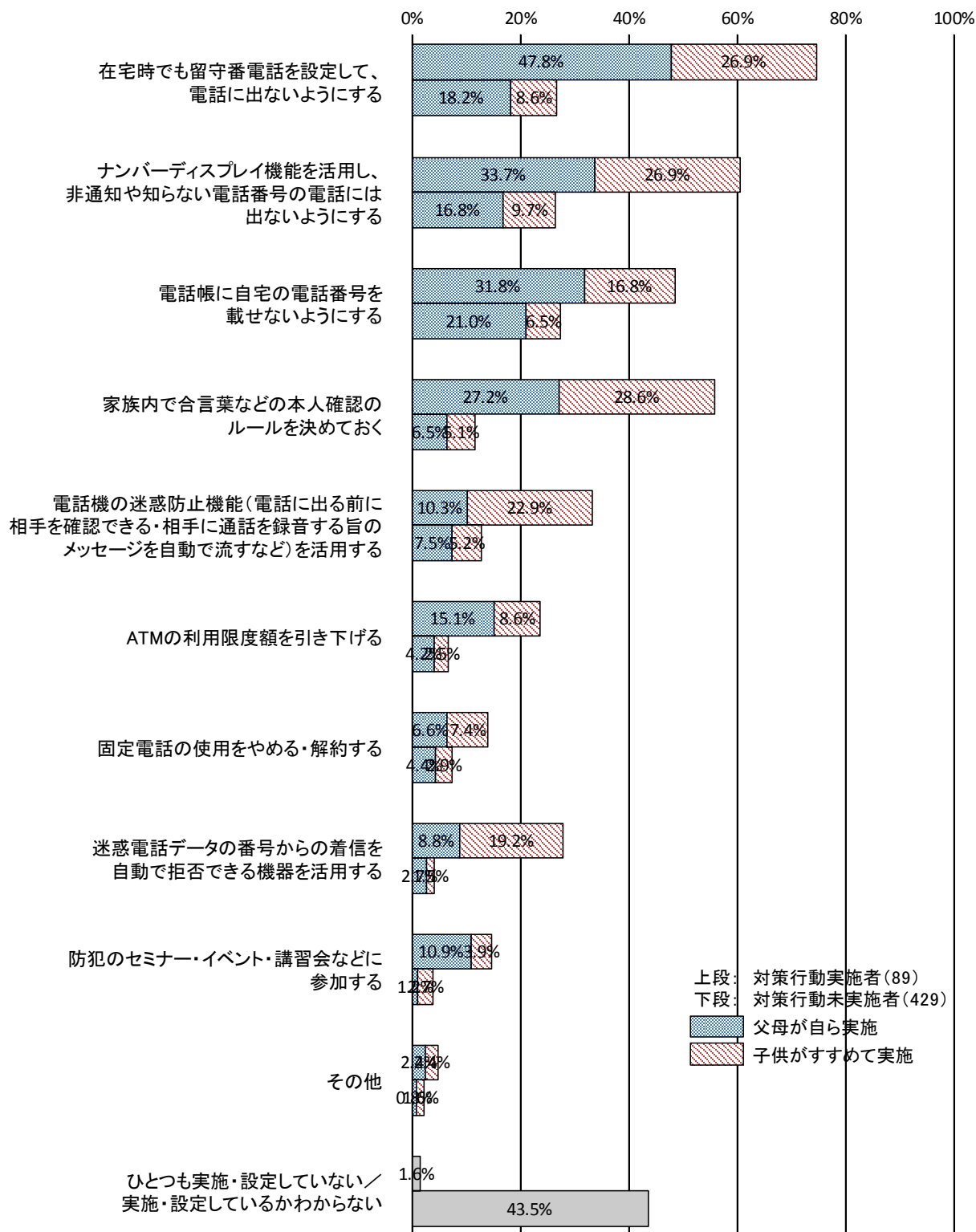
② 親の被害防止対策の実施状況

詐欺被害防止対策の実施状況について、対策行動実施者は全ての対策で未実施者よりも実施度が高くなっており、特に「在宅時でも留守番電話を設定して、電話には出ないようにする」「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」などは実施度に大きなポイント差がついている。

これらの結果から、高齢者ジュニア層の対策行動が親の被害防止対策に大きく影響していることがうかがわれる。

図96 親が実施している詐欺の被害防止対策(複数回答、WBあり)

(n=518)



4-5. 高齢者ジュニア層向け調査結果のまとめ

高齢者ジュニア層の調査結果について、下表の通りまとめた。

表31 高齢者ジュニア層の調査分析まとめ

高齢者対象の詐欺 に対する意識	詐欺の手口別の認知状況	・詐欺名称認知率は「オレオレ詐欺」98%、「キャッシュカード詐欺」89%、「還付金詐欺」93% ・詳細認知率は「オレオレ詐欺」63%、「還付金詐欺」44%、「キャッシュカード詐欺」37%であり、名称認知率との乖離は大きい
	親への詐欺接触の可能性についての意識	・親に詐欺の電話がかかってくるかもしれないと回答した割合は76%、詐欺接触の可能性に対する意識の回答は高齢者自身よりもジュニア層のほうが若干高い ・男女別では「詐欺の電話がかかってくることはない」の合計の割合は男性が女性に比べて若干高く、年齢別では40歳～44歳が最も高い
	親の詐欺被害の可能性についての意識	・親に詐欺の電話がかかってくるまでも被害にあわないと思う割合は6割を超えており、詐欺接触の可能性の割合とは大きく異なっている ・男女別では大きな差異は見られないが、年齢別で見ると40歳～44歳が被害にあわないと思う割合が最も高い
	親が電話の声で本人の声を聞き分けられると思うか	・親は聞き分けられると思うと回答した割合は72% ・男女別では大きな差異は見られないが、年齢別で見ると30～34歳が「親は聞き分けられると思う」の割合が最も高い
	詐欺の情報受容手段	・「テレビ」88%、「インターネット」45%、「新聞」31% ・高齢者に比べて「新聞」「警察からの情報」などが低く、「インターネット」が高い
被害防止対策の 認知・実施状況	被害防止対策の認知状況	・認知率が高いのは「ナンバーディスプレイ機能の活用」58%、「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」55%、「家族内で合言葉などの本人確認ルールを決めておく」41%⇒高齢者と同様に最も認知率の高い対策でも6割弱にとどまる ・「詐欺防止対策はひとつも知らない」は12%
	被害防止対策の実施状況	・ジュニア層からすすめて実施している割合が高いのは「ナンバーディスプレイ機能の活用」13%、「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」12%、「家族内で合言葉などの本人確認ルールを決めておく」9% ・聴取した全ての対策でジュニア層からすすめて実施している割合が存在⇒詐欺被害防止対策の実施に高齢者ジュニア層が関与している
	親との被害防止対策の相談状況	親と相談したことがある割合は36%、しかし具体的な防止対策まで実施している割合は17%にとどまる 男女別では相談したことがある割合は女性の方が高く、年齢別では40代以上で高くなる傾向
	親と相談したが対策を実施できていない理由	・「どのような対策をすれば良いかわからなかったから」44%、「具体的な対策までは必要ないだろうという結論になったから」40% ・男女別では「具体的な対策を実施するのは手間がかかるから・面倒そうだから」男性16%、女性4%で差が大きく、親との同居・別居別では「具体的な対策までは必要ないだろうという結論になったから」が別居で高く、「具体的な対策に新たな電話機を買うなどのお金をかけたくなかったから」は同居が高い
	親と被害防止対策を相談していない理由	・「親に詐欺の接触があってもだまされないだろうと思うから」26%、「親は詐欺について十分知識があるだろうと思うから」18% ・年齢別で見ると、年齢が若いほどこの2項目の割合が高く、逆に55～59歳では「特に理由がない」が最も高い
	ジュニア層からすすめて決めている詐欺遭遇時の対応策	・ジュニア層からのすすめで何らかの対策を決めている割合は約4割 ・特に高いのは「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めている」21%、「一度電話を切って家族で相談するように決めている」20%、「相手が家族本人かを確認するために電話をかけ直すようにしている」19%

表32 高齢者ジュニア層の調査分析まとめ(続き)

被害防止対策の認知・実施状況	今後親にすすめたい被害防止対策	・「家族内で合言葉などの本人確認のルールを決めておく」26%、「電話機の迷惑防止機能を活用する」18%、「迷惑電話データの番号からの着信を自動で拒否できる機器を活用する」16% ・男女別では、男性は女性に比べて各対策の回答率が低く、親との同居・別居別では同居している方が多くの項目で回答率が低い
民間企業のサービスに対する意識	民間企業のサービス提供に対する利用意向	・無料までを含めた利用意向層の割合は76%、しかし有料の利用意向層に絞ると自己の費用負担での意向率は8%、父母の費用負担での意向率は4%、有料での利用意向層はあわせて12% ・男女別で見ると、無料を含めた利用意向層の割合は女性の方がやや高いが、有料での利用意向層は逆に男性の方が若干高い ・年齢別では、無料を含めた利用意向層の割合は45～49歳が最も高いが、有料での利用意向層は55～59歳が最も高い
	民間企業のサービスに対するコスト許容額	・有料の利用意向層における月あたり費用許容額は「100円～300円未満」が最も高く（35%）、「300～500円未満」が続く（33%） ・有料の利用意向層のうち、500円以上でも利用したい・利用をすすめたいと回答した割合は25%
対策行動実施者・未実施者の差異分析	親の同居家族構成	対策行動実施者・未実施者で大きな差異は見られない
	親とのコミュニケーション	・直接会うコミュニケーション⇒月1回以上の割合が対策行動実施者は約8割、未実施者は約7割 ・電話・メール・SNSでのコミュニケーション⇒父親との間ではほとんど差異は見られないが、母親の間では実施者のほうがコミュニケーション頻度が高い傾向
	メディアの接触頻度	対策行動実施者のほうが「テレビ」「インターネット（PC）」で1日3時間以上視聴・閲覧している割合が高い
	詐欺の手口別の認知状況	詳細認知度ではほとんどの手口類型で対策行動実施者のほうが約10ポイント以上も認知率が高い⇒詐欺手口の詳細を認知することが対策行動実施への喚起につながっていると考えられる
	親への詐欺接触の可能性についての意識	親に詐欺の電話がかかってくるかもしれないと思う割合は対策行動実施者78%、未実施者76%⇒対策行動実施者だけでなく未実施者も多くの方が親に詐欺接触の可能性があると考えている
	親の詐欺被害の可能性についての意識	・親に詐欺の電話がかかってきても被害にあわないと思う割合は対策行動実施者75%、未実施者61%と、対策行動実施者のほうが高い ・対策行動実施者はすでに被害防止対策を実施していることから、ある程度自信を持っていると考えられる
	詐欺の情報受容手段	最も回答率の高いテレビでは対策行動実施者、未実施者とも大きな差はないが、「インターネット」「新聞」「自治体の区報・市報」など多くの情報手段で対策行動実施者が未実施者よりも高い⇒対策行動実施者は情報受容手段をより広く活用し、詐欺の情報を受容している
	被害防止対策の認知状況	対策行動実施者はほとんどの対策で未実施者よりも認知度が高く、特に「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」で大きな差異が見られる
	被害防止対策の実施状況	対策行動実施者は全ての対策で未実施者よりも実施度が高く、特に「在宅時も留守番電話を設定して電話に出ない」「家族内で合言葉などの本人確認ルールを決めておく」は実施度に大きな差がついている⇒高齢者ジュニア層の対策行動が親の被害防止対策に大きく影響している

前ページのまとめの結果から、高齢者ジュニア層における詐欺に対するさまざまな状況および課題を下記の通り要約した。

■ 高齢者の被害防止対策の実施にあたってはジュニア層からの働きかけが重要

ジュニア層への調査の結果、すでに3割以上のジュニア層は親に対して相談するなどの対策行動を実施しており、さらにそのうちの半数近くは実際に具体的な被害防止対策まで実施していることから、高齢者の被害防止対策の実施においてジュニア層からの働きかけの重要性が改めて明らかになった。

■ ジュニア層からの働きかけに対して親のアクションに結び付かない課題が顕在化

しかしながら、ジュニア層で親と相談した人のうち5割程度は具体的な被害防止対策の実施に至っていない。この理由として、どのような対策をすれば良いかよくわからなかったという回答が最も多く、被害防止行動のプロセスとして、危機意識の向上段階までは到達しても、次の対策検討プロセスで止まっていることが課題となっていることがわかった。

■ 被害防止行動プロセスを円滑に進めるための対策検討が必要

上述した課題のほか、ジュニア層においても詐欺手口の詳細認知率が名称認知率に比べて大きく乖離しており、この詳細認知率を高めることで現在危機意識の低い人々においても意識を向上させ、対策行動の実施に結び付けていくように促すことが必要。

これらの課題に対して、高齢者だけでなくジュニア層においても被害防止行動プロセスを整理することにより、この行動プロセスのステップを円滑に進行させるための個別対策を検討することが必要と考える。

そこでジュニア層においても、親の詐欺被害防止行動プロセスを次ページの図にて整理した。

図97 高齢者ジュニア層の詐欺被害防止行動プロセス

